
仮面ライダーダークキバViVid-Re/birth-

バース

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

仮面ライダーダークキバVivid - Re/birth -

【Nコード】

N3544V

【作者名】

バース

【あらすじ】

ミッドチルダに出現した謎の怪人『ネオファンガイア』

人の『負』を糧とし、人々のライフエナジーを喰らい尽くす怪物…

そのネオと戦う…1人の仮面ライダー…

仮面ライダーダークキバこと登オトヤ。

かつての英雄 ワタルとなのはの息子にし、『牙の帝王』たる彼を待ち構えていたのは悲しい過去の宿命…、

『仮面ライダーダークキバVivid - JOKER - 聖王、霸王、

帝王『改め、仮面ライダーダークキバVivid-Rebirth』…ここに始動

ウェイクアップ1 初恋(前書き)

アインハルト「前の話し復活です!」
ヴィヴィオ「やったー!」

ワタル「orz」
なのは「orz」
カズマ「orz」
フェイト「orz」
はやて「orz」
アスム「orz」
ケイスケ「orz」
ティアナ「orz」
スバル「orz」

アインハルト「この人達は気にしなくていいですよ。」
ヴィヴィオ「いや、すごい気になる!!とりあえず…ダキバ本当
の第1話、お楽しみ下さい!」

ウェイクアップ1 初恋

ジリジリジリ！

何かが鳴っている音がする。

妙にうるさい…でも聞き覚えのある音。

ベッドで寝ている少年…登オトヤはその音源であると思われる自身の携帯電話を掴み、画面を開く。

どうやらコレは着信音の様だ…掛けて来ている相手は…、

『母』

ピッ！

「……母さん、今そこ時計ある？」

『あー！おはようオトヤ！元気してる？体壊してない？春先といってもまだまだ寒いからねー…ちゃんと暖かくして寝てた？風邪と引かないでね？あ、そうそう言えばこの前お父さんねー！』

「人の話し聞いとんのかこの馬鹿親。」

『うっ…ゴメン…。』

この午前6時半に電話してきた常識知らずは彼の母親である登なのは。

旧姓、高町なのは。

4年ほど前に『JS事件』を解決に導いた機動六課の『エース・オブ・エース』。

当時ジェイル・スカリエツィに利用されていたオトヤとヴィヴィオを養子として引き取った人物。

1年程前に父親である登ワタルと結婚し、現在は魔導士を引退して

普通の主婦。

親馬鹿（馬鹿親）すぎるのが玉に瑕。

「で、こんな朝早くから何さ？」

『えっと…心配で？』

「なして疑問系？…寮入ってまだ3週間だし、大丈夫…問題無いよ。うん、うん…今度の休みはちゃんと帰るから。じゃあね。」

そこで電話終了。

うん、多分あの人…早起きしてする事無くて暇だから電話して来ただけだ。

だからと言って息子の貴重な安眠を邪魔するのは止めて欲しい。

切実にそう願う。

何にせよ、もう完全に目が覚めてしまった。

いつもいつも遅刻ギリギリなので、今日ぐらいは早く行こうかな？と、思いながら洗面所へと向かう。

『おはようオトヤ、今日は早いな。』

「おお…おはようダキバット…実は母さんが、」

『皆まで言うな。うん、その顔見ればだいたいわかる。』

この黒い蝙蝠の名はダークキバット。

通称ダキバット、オトヤのパートナーたるキバットバット族だ。

彼とはかれこれ3年来の付き合いで、言いたい事は顔見ればだいたいわかる。

オトヤは顔を洗うと、何気なくテレビに目がいった。

リモコンで電源を入れると、そこに映ったのはオレンジ色の髪をした女性と青い髪の女性が握手している映像。

「あ、ティアナさんとスバルさんじゃん。」

『そう言えば、この間の管理局が担当した火災事件の時、特別救助隊が手を貸したそうさ。それだろうな。』

「ケイスケさんも本局の教導官で頑張ってるって話だし、凄いな皆。」

『うむ。』

映像に映っているのはオトヤの恩人ともいえるティアナ・ランスタ―執務官とスバル・ナカジマ防災士長。

襟立ケイスケというのは仮面ライダーイクサに変身するこの2人の同僚で、元六課フワード部隊のフロントアタッカーで現本局特別捜査官及び教導官。

3人ともオトヤの恩人とも言える人物達だ。

そうしてテレビにみはいつていると…、

『ところでオトヤ、時間はいいのか？』

「は？」

現在、8:15。

事業開始時刻、8:30。

。 寮から学校までの凡その目安時間、約20分（オトヤが走った場合）

……。

「遅刻だあああああああああああ！！？！？」

『急げええええええええええええええええええええええええ！…………！』

毎日こんな調子だった。

St・ヒルデ魔法学院中等科…それがオトヤの通う学校の名前。
管理世界『ミッドチルダ』にある私立学校で、小等科から中等科までが存在する。

オトヤは今年からこここの中等科に入学した。

魔法学院といつても、魔法なんて授業の一環で少しするだけで、魔法が使えない生徒もいる。

ちなみにオトヤもその1人だ。

寮から全力全開の全力疾走、でもまだまだ元気一杯。

「いや…どう見ても一杯一杯だぞ、お前…。」

そう言うのはオトヤの親友（というか悪友？）である加藤シン。

彼の言葉通り、オトヤは息が絶え絶えで虫の息。

見ている方からして見れば中々滑稽で笑える。

当の本人からして見れば全く持って笑えないが…。

「なあシン…あのお花畑何？凄く綺麗だよ…。」

「行くなよ！？絶対に行くなよ！？」

死にかけているが、昨日『仮面ライダーアクセル』のDVD見たので多分…死なないだろう？

何せ不死身の刑事が主人公の話した。

と、まあ関係ない話はおいて置いて…、

兎に角、今オトヤは毎日がとても充実している。

「えー……、では登、ここの英文訳してみる。」

「はい、えっと…『私が説明書が好きなのは、自爆装置が悪いからだ』？」

「残念、正解は『悪かったな、俺はマニュアルが大好きなんだ！ア
ンタが研究所を出た時、とっくに自爆装置は外しておいた！！』」
「何そのバース！？」

勉強とか……、

「おいオトヤ、今日俺晩飯無いから『ACE』いかね？」
「おっ、いいね。でもお前から誘ってくるって珍しいなシン？」
「まあな。んじゃ、放課後な。」
「おー。」

友達とか……、

「そろそろ休み時間終わるなー…あ。」
「どした？」
「…ストラトスさんだ…。」

恋とか……、

「あー…ストラトスか？アイツがどうかしたか？」
「うん…別に…。」

彼の意中の相手の名はアインハルト・ストラトス。
同じクラスに在籍する少女だ。

薄い緑色の髪で、ツインテールにしているのが特徴的な物静かな子。
今日も1人で読書をしていた。

「お前、ストラトスのどこがいいんだよ？」

「え？」

「俺アイツと去年も同じクラスだったけどさ、話しかけても逃げるし…すぐにどもるし、あんまりお勧めしないぜ？」
経験者は語る…と、言った所だろうか。

彼の話によると、アインハルトは誰が話しかけても、何をしても反応が薄く…周りからあまり良い印象を持たれていない。

そんな彼女のどこがいいのか？

オトヤにそう問うと、彼はうん、と惚れたままでの経緯を語る。

何でも、オトヤは5年生の時にアインハルトと隣の席になり…勉強で悩んでいるその際に彼女から教えてもらったらしい。

その時の彼女の優しさが忘れられず、かれこれ2年間…ずっと思い続けているらしい。

何と健気な。

『でも単純だよな。』

「ダキバット、握るぞ。」

『握りながら言うん、いたあああああああああ!!!』

ダキバットの煮干(？)完成。

多分、花の肥料にもなりはしない。

死に掛けのダキバットは放って置く事にしよう。

「！ そうだ…おいオトヤ、お前の為に、親友の俺が一肌脱いでやるう。」

「は？」

「ちよっくらストラトスも誘ってくる!!!」

「お、おい！？ちよい待て！！」
この男、いつもいつも人の恋路を面白がっては変な策を張り巡らせる。

正直な話、上手く行った例が無い。

それでも早速行こうとするシン…とりあえず一発ぶん殴ってくべきか？

べきだろう…絶対に。

「おい待てやコラああああ！！！！お前に行かせる位なら自分でいくわああああ！！！！」

「『頑張れ！！』」

「！！ 嵌められた！？」

これがコイツの真の作戦だと気付いた時には…すでに遅かった。

男に二言は無い…でも誘うのは一応放課後になってからにしようと思ひ、オトヤは自分の席に着いて思う存分沈んだ。

そして放課後、帰り支度をしているアインハルトの席までやって来たオトヤ。

全然交流の無い人物の登場で彼女は少し驚いているようだが、すぐに目を反らして帰り支度を続ける。

「何ですか登さん？」

「あの…えっと…す、ストラトスさんこの後何か予定とか…って、あるかな？」

「え？うーん…そうですね…特には…。」

『第一段階クリア！！』とデカデカと書かれたカンペを掲げて教室の隅っこで応援しているシンとダキバット。

ゴメン、とアインハルトの一言謝ると自分の鞆から消しゴムを取り出してシンに投石。

見事にシンの額にゲキレツアタック！！属性効果が良く効いているぞー！！

「何ですかアレ……？」

「気にしないで。でさ、これから夕飯喰いに行くんだけど……男2人って何か寂しくてさ。どうかな？」

「……………」

「あ、だ……ダメなら無理にとは言わないよ！？ハハハ、変な事言つてゴメンなさ、」

「少し両親に電話してきます。先に校門で待ってていただけませんか？」

「あ……うん！分かった！！」

まさかのOK。

まさかの成功。

『オトヤ結婚おめでとう』とかいうカンペを掲げたシンは当然後でぶっ飛ばす事にして、オトヤは異常すぎる程高いテンションで校門へと向かった。

何とか両親からの許可も得て、3人+ダキバットは『ACE』というレストランへやって来た。

ここは今から約半年前に出来た小さなレストランで、従業員はここのおーナーと妻、その居候2名の計4名だけという小規模。

だが味が良いと評判で、休日のお昼時などは結構人が一杯。

幸い今日は月曜日、一番人が少ない日で、すんなり席に座れた。

メニューを広げて食べたいものを決める。
オトヤもシンも、ここで夕飯を食べる時はだいたいメニューを決めている。

だが、アインハルトは初見さんなので彼女が決め終わるまで待つてあげる事に。

(にしても良かったなあオトヤ！俺のおかげだな！)

(お前何にもして無いだろ？まあ…きっかけぐらいなら…、)

「あの…登さん…。」

「へ？あ、な、何？ストラトスさん？」

「その…このお店、お勧めとかあるんですか？私、外食とかあまりしないので…。」

「あ…お勧めかあ…。そうだな…えーつと…？」

いつも通っているくせに、いざこう聞かれると返答に困る。

そりゃそうだ、いつもカレーしか食べないのだから。

カレー、と応えれば楽だろうが…：…そういえば彼女、辛いものは苦手とどこかで聞いた事がある。

『ACE』のカレーは少し辛目の味付けなのだ。

その時…、

「どれも美味しいよ」

「あ、フェイトさん…。」

お冷を持って来た金髪の女性が、アインハルトにそう言った。

彼女はフェイト・T・H・剣立。

長すぎるので通称は剣立フェイト。

この店のオーナーの妻であり、副店長兼レジ担当。オトヤの両親の親友でもある。

彼女が包容力のある優しい笑みを浮かべると、アインハルトは顔を赤くして俯いた。

「ねえ、君何が好きなの？何でも言ってごらん？」

「あの…その…。」

「ん？」

「はい」

さすがはフェイト…子供の扱いに長けている…。

そう言えば自分も昔はこの人にだいぶお世話になったなあ…と思いながらうんうんと腕を組んで感傷に浸るオトヤであった。

いつも来ているのでオトヤとシンの注文は取るまでも無く、フェイトはアインハルトの注文だけを書く厨房の方へ。

そこにいる自分の旦那兼オーナーにオーダーを入れた。

「カズマー！オムライスといつもものねー！」

「あいよー！」

中華鍋を振りながら笑顔で言う男が1人。

彼の名は剣立カズマ…又の名を仮面ライダーブレイド。

【ブレイドの世界】の『もう1人のブレイド』である剣崎一真のイメージネーションのライダーであり、元『株式会社BORDE』のエース社員。

とある事情からこの【キバの世界】に来てフェイトと知り合い、そのまま彼女やワタル達と一緒に『JS事件』に立ち向かい、解決へと導いた。

その後は彼女と結婚し、このレストランを経営。

「おっ、オトヤ今日は可愛い娘連れてるな！やるねえ色男！」

「カズマさん……。」

「カズマ、あんまりオトヤからかうとなのは達には怒られるよ？あ、アインハルトももう少し待ってね？」

「あ、はい。」

それから数分後…カズマの作ったオムライスが真っ先にアインハルトへと届けられた。

立ち上る湯気とトロトロの半熟玉子が圧倒的に食欲を誘う。

恐る恐るスプーンを手に取りまずは一口、ソレを口に運んだ。

「どっ？」

「……美味しい…コレ美味しいです！こんなの食べた事無いです！」

「よかったあ、カズマ、グッジョブ！」

「おう！」

お互いにサムズアップしあうカズマとフェイト。

おかげでオトヤとシンの注文（カレーとAランチ）の事をすっかり忘れてるのは内緒だ。

結局、御代はアインハルトの分は剣立夫妻が持ってくれた。

代わりに『これからもご贖員に』と言ってくれた…本当に良い人達だった。

すでにシンは帰宅しており、フェイトに一礼してからオトヤとアインハルトも帰路につく。

「登さん、今日はありがとうございました。」

「楽しんでくれたなら良かったよ。また、暇があったら来ようね！」

「はい…是非…。」

どうやら彼女もここが気に入ったようだ。

本当に良かった…そう思いながらオトヤは帰っていくアインハルト

を見送る。

どうして『送っていくよ!』というその一言が言えないのか…オトヤは改めて自分のヘタレさを恨んだ。

『どうして送ってくつて言えないのかねえ…お前は…。』

「ダキバット、食べるぞ。」

『どうやって!?!』

最近ダキバットの扱いが酷すぎる件について。

確かに送ってあげられなかったのは痛かったが…実は、彼には彼女を送って行けない理由がある。

それは…、

『オトヤ、ネオの気配だ…近いぞ!…!』

「わかった…行こう!…」

近くの公園で…サラリーマンの中年の男がある物から逃げ回っていた。

息を切らしながらも必死に走り…とうとう彼は壁に追い詰められる。彼を襲っているのは…クワガタの様な外見に、トラの様な爪がついてある強靱な腕を持つ怪人。

この怪人の名は『ネオファンガイア』。

通称『ネオ』。

約半年程前に出現した、ファンガイアとはまた別の怪人。

2種類の生き物の力を持っており、その正体は謎のまま。

一つだけ分かるのは、彼らにとっては人間もファンガイアもただの

「変身！！！！」

パライイイイイイイイイイイイイイイイイ！！！！！！

激しい炸裂音と共に、登オトヤはその姿を変えた。

ワインレッドとつや消し黒のカラーリングのボディ…灰色のマント。頭部には蝙蝠の羽の様な飾りを身につけており、全体的に禍々しい形状。

しかしそれでもその緑色の複眼には、正義の魂が確かに宿っていた。吸血鬼の様な蝙蝠の様な……とにかく『吸血』をイメージさせる、黒き戦士。

「『光栄に思え！！絶滅タイムだ！！！！』」

戦士…仮面ライダーダークキバはクワガネオにそう言い渡すと、ザンバットソードを構えて走り出した。

ウェイクアップ1 初恋（後書き）

この小説の正しい楽しみ方

- 1：前の話との間違い探し
- 2：オトヤとアインハルト見ながらニタニタ
- 3：セルバースト

という具合でお楽しみ下さい。

ウェイクアップ2 天と星に誓って(前書き)

ヴィヴィオ「今回は何と！前ダキバよりもボリュームアップ！前にはぶった話を追加だよー！」

後藤「今回は特別に！！俺が登場だ！！！」

ウェイクアップ2 天と星に誓って

会員の男を襲っていた怪人…クワガネオ。

しかし、その前に現れた黒い鎧に身を包んだ戦士。

金色の蝙蝠を装着した剣を手にしたその戦士は、流れる様な動きでクワガネオを翻弄していく。

その名はキバ…。

『仮面ライダーダークキバ』

登オトヤが相棒 ダキバットの力を借りて変身した仮面ライダーだ。彼は剣：『ザンバットソード』を片手で振り上げながら、クワガネオの攻撃をかわしていき、的確にダメージを与えていく。

頭の顎でダークキバへ突進してくるクワガネオだが、ダークキバは顎にザンバットソードを挟み込んでそれを防いだ。

「なに…!?!」

「お前の攻撃…単純すぎて防ぎやすいんだよ!!」

そのままクワガネオを蹴り飛ばすと、ダークキバは剣を腰に提げて拳で追撃。

公園の滑り台の辺りまで追い込まれたクワガネオは、渾身の力でダークキバに襲い掛かってきた。

『オトヤかわせ!!』

「わかってるって!!」

というが、案外早いのでかわせない。

仕方ないので両手で顎を受け止めると、拳に力を込めてそれを砕いた。

「行くぞ…絶滅タイムだ!!」

『ウェイクアップ!4!!』

でもネオが落とした物なので放置するわけにもいかず、一応回収。クワガネオに襲われていた男を助けようと探すが…見当たらない。恐らく逃げたのだろう…逃げ足だけは速かった。

とりあえずダークキバはダキバットをベルトから取り外し、オトヤの姿に変身解除。

「ふう…何とか倒せたなダキバット。」

『うむ、そうだな。だが油断は禁物だ。』

「へーへー。あ…そういや明日小テストじゃん…どうしょ？」

『良い手があるぞ。ストラトス嬢に電話で相談するのだ。確か連絡網に電話番号が…、』

「お前あとで消し飛ばす。」

『調子こいてすいません。』

戦っている時は真剣だが、戦いが終わればいつもの2人。

半年前から現れたネオファンガイア…その出現場面に偶然居合わせたオトヤはそのまま成り行きでネオと戦う事となった。

本来ならば管理局の仕事であるが、見つかるのと色々と厄介なのでオトヤはあえて管理局には言わず、見つかる前にネオを倒してきた。

当然、父と母には内緒。

「さてと…んじゃ、帰ろつかダキバット？」

『うむ。私は腹が減った。』

「さっき喰ったばかりだろうが。」

まあ、そんな感じで彼には夜も何も無いわけで…。

当然、勉強する時間なんてないわけで…あってもしないわけで…。

そうなれば、当然テストの結果も…、

「38点…だと…!?!?」

「素晴らしい点数だな。どうやったら取れるんだ!?!?」

英語の小テストは何と脅威の38点。

今まで何とか40点越えて首の皮一枚で繋がっていたオトヤの成績も、とうとう赤点に突入したというわけだ。

40点…それは学生にとって最大の壁にして、最強の敵。

この点数を超えるか超えないかで、彼らの放課後ライフの過ごし方が大きく変わる。

超えた者は自由な世界へ羽ばたき、超えられなかった者は『補習』という名の地獄へと叩きおされる…。

ちなみに英語の補習はオトヤだけ…どんまいとしか言い用が無い。

「何だよこの問題!?!この英文の訳…『伊達さんを死なせないってのは、ただ命の心配をするんじゃない!俺が…俺の知っている伊達さんのバースを引き継ぐ!!それが伊達さんを死なせないって事です…!!』って、長いわ!!!!本当にバース好きだなうちの英語教師!!!!授業中も『俺がバースだ』ってうるさいし!!!!その前に何だバースって!?!?」

「オトヤオトヤ、知ってるかまだ授業中なんだぜ?」

当然この後教師に怒られました何が?

英語教師のくせにブレストキャノンぶっ放して来ましたが何か?

休み時間になる頃にはオトヤはすでに黒ずみと化しており、シンとダキバットが力を合わせて彼を元に戻した。

原型だけは元に戻ったので後は気合でカバーしろ。

「おいオトヤ、お前マジで補習どうすんだよ?…おっ、そつだそつだ…俺に良い提案があるぞ。」

「え…?」

「おいストラトスー！オトヤに勉強教えてやってくれー！」
「はあ！？」

そう言いながらアインハルトの席へと行くシン。
それを止めるべくオトヤもアインハルトの席へ。
バンツ！！と、彼女の机を叩き、シンはアインハルトをオトヤの前に連れて来た。

「えつと…あの…。」

「シン…てめえなあ…。」
とりあえずシンを殴る事決定。

拳を振り上げたところで…オトヤは後ろにあつた壁に思いつきり振り上げた拳をぶつけてしまい、痛みでのた打ち回る。

「ったああああ！！！！いつってええええええ！！！！」

ブンブン腕を振り回しながら痛がるオトヤ。

そして振り回した腕が…何と、アインハルトの手にそつと触れた。

「！！？…きゃ…きゃあああああああ！！！！！！！！」

「…はっ！？」

見事なボディブロー。

アインハルトの拳が完璧にオトヤに決まり、彼女は脱兎の如く去っていく。

「おいオトヤー…生きてるかー？」

『シン、今はコイツに触れないで上げてくれ。』

放課後…今日はオトヤはいつもとは違う帰路についた。
それもそのはず…彼は今日、何週間か振りに実家に帰るのだ。
何故ならば今日は彼の妹の誕生日。

特別な日、絶対に家族で祝わなければ。

彼の実家はミッド住宅街にある、そこそこ大きな赤い屋根の家。
久しぶりの我が家の前に立つと、オトヤはスウと息を吸い込む。

「久々だな…うちの空気。」

「入るか。」

「おう。」

玄関前に立ち、ドアノブを握るオトヤ。

ガチャツとそれを回し、家の扉を開けると……、

「オトヤおかえり……！！！！！！」

「ぶほっ！？」

いきなり謎の女が…オトヤに飛び掛ってきた。

彼女に押し潰され、オトヤは地面に後ろから倒れる。

その音を聞きつけ家の奥からやって来た男が、彼に飛び掛ってきた
女を引き上げた。

「おい、母さん…こんなところで自分の息子押し倒して何やってるんだ？」

「あ、パパ。にやはは…いやあ…久しぶりでつい…。」

「た…ただいま父さん…母さん…。」

まず、この謎の女は登なのは。

旧姓高町なのは…オトヤの母親にして元管理局員。

現在は普通の主婦。

家から出てきた男は登ワタル。

別名『仮面ライダーキバ』…管理局エース級のライダーだ。

久々の再会がムチャクチャだ…主にこの母親のせいだ。

2人を引き上げたら、ワタルはオトヤの頭を軽くなでる。

「おっ？また背伸びたか？」

「あのね…そんなすぐに背伸びるわけ無いでしょ…。そっいやヴィ
ヴィオは？」

「そろそろ帰ってくると思うよ？」

そう玄関の中で話す親子3人。

ん？と、何かの違和感に気付いたダキバットがドアの近くへ。

そして…、

「ただいまー！」

勢い良く開かれたドアに…ダキバットは挟まれた…。

『痛い…痛いぞヴィヴィオ嬢…。』

「オト兄、おかえり！…ダキバットごめん…。」

「おかえりヴィヴィオ。」

入ってきた少女は登ヴィヴィオ。

オトヤの妹にして、オトヤと同じ学校の初等科4年生。

紅と翠のオッドアイと、栗毛色の綺麗な髪が特徴的な少女だ。

今日は彼女の10回目の誕生日。

ようやく家族全員が揃ったところで、早速パーティー開始だ。

全員いつもの定位置に座ると、なのはが自慢の手料理を並べる。

どれも良い匂いで、圧倒的に食欲をそそられる。

『よう、久しぶりダキバット!』

『キバット殿、うむ、久しぶりだな。』

ワタルの相棒であるキバットバットIEEE世も勿論参加。

パーティーと言っても形だけで…食事風景自体は普通の夕食だが…それでも十分に楽しかった。

「おつ、そうだったそうだった…はいヴィヴィオ、誕生日おめでと。

」

「うわぁ！ありがとオト兄！」

ゴソゴソと鞆をあさくり、オトヤがヴィヴィオに渡したのは長細い箱。

開けて見ると、そこに入ってたのはヴィヴィオの瞳と同じ赤と緑色の宝石であしらった可愛いネックレスが入っていた。

早速それを付けてみて、ウキウキ気分になるヴィヴィオ。

「似合う?」

『よく似合うぜえ！なあ、ワタル!』

「ああ。オトヤ、コレどうした?」

「ケイスケさんに作ってもらった。あの人、こういうの得意じゃない?」

「可愛いよヴィヴィオ」

「えへへ」

『チキンうまつ!!!』

空気読めずにチキン貪っているダキバットはとりあえず絶滅決定。

ワタルとなのは互いに顔を合わせると、2人はヴィヴィオに向き合った。

「ねえヴィヴィオ?ヴィヴィオも今日で10歳だよな?」

「? そーですが?」

「ヴィヴィオはもう魔法の基礎もだいぶ出来てきたし、しっかりとってきた!だから…そろそろ自分の愛機デバイスを持ってもいいんじゃないかな?」

「本当!?!」

実は、クラスの中でデバイスを持っていない生徒は本当にごく僅か。簡易デバイスがほとんどだが、持っていない人から見ると全然マシだろう。

だから彼女はいつも母に、『いつになったらデバイス持って良いの？』と聞いては『まだありません』と返されてきた。

「実は今日、俺がマリーさんのところから貰ってきたよ。」
そう言っつてワタルが渡したのは少し大きめの箱。

『DX プリズムビット』と同じくらいの大きさの箱だ。
ドキドキしながらそれを受け取り、少しずつ開いていく。

そして…箱を開けたそこにあつたのは…、

「『うさぎ？』」

可愛らしい、白いウサギのぬいぐるみだった。

予想外すぎる中身に、ヴィヴィオもオトヤマもダキバットも口をポカーンと開けている。

「そのウサギは外装と言うか…アクセサリだって。」

「本体はレイジングハート見たいなクリスタルタイプだよ。」

両親がそう言っつと、同時に…ヴィヴィオのデバイスはむくりと起き上がり、そしてダキバットとほぼ同じ位置まで飛んで来た。

子供組みはそれにたいそう驚くが、何でも『おまけ機能』らしい。

「色々トリサーチしてくれたヴィヴィオに合わせた最新型だけど…」

中身はまだまだまつさらな状態何だつて。」

「名前もまだ付いてないからつけてあげなさい。」

「う、うん…あ、そうだママ！リサーチしてくれたって事は『アレ』出来る！？」

「勿論！セツトアップしてみて！」

「『『『？？』』』」

随分と盛り上がる女組みに対して男組み（キバット&ダキバット含む）は何の事かさっぱり。

そんな事は気にせず、ヴィヴィオはデバイスを連れて庭へと出た。

「マスター認証、登ヴィヴィオ…、」

デバイスにより生まれた魔法陣がヴィヴィオの足元に出現。彼女が唱える度に魔法陣は大きくなっていき、光が増す。

「術式はミッド混合近代ベルカハイブリッド…愛称は『クリス』、正式名称は『セイクリッド・ハート』…。」

『セイクリッド・ハート』

ずっと決めていた…自分の愛機にはこの名を付けよう…。

母の愛機『レイジング・ハート』と自分のオリジナル『オリヴィエ聖王女』の名を掛け合わせた名前だ。

「行くよクリス…！」

クリスを手に取ると、ヴィヴィオをそれを高らかに天へと突き上げる。

「セイクリッド・ハート！セツトア—ーップ…！」

カツ!!と、眩い光がヴィヴィオを包んだ。
すると…彼女の体が変わっていく。

まず体格は16から19歳程度まで成長。

ナンバーズ達の戦闘服を改造した様なスーツを身に纏い、母親と同
デザインのジャケットを羽織る。

髪型はサイドポニーに、目を少し釣りあげらせると…ヴィヴィオは
ついに、自身のバリアジャケット態に変身を完了させた。

自分の体を見回すと、ヴィヴィオはプルプルと振るえて『宇宙キタ
ーーーー!!!』とでも叫びそうな感じで大万歳。

「やったー出来たー!!!ありがとママー!」

「あー、上手くいったねー!」

「(OAO)」

『(W)』

「あれ?パパとオト兄どーしたの?」

「あゝ!?!」

「ママ?」

何故かワタルとオトヤを見るなり、顔が青ざめるのは。

するとワタルがスタスタと歩いてきてなのはに近寄ると…彼女の肩
を掴んで…、

「母さああああん!!!!ヴィヴィオが!!!!ヴィヴィオが聖王
に!!!!!!!」

グワングワンとカー杯揺らした。

揺らされる度に壁に頭がぶつかるのでなののはの頭には大きなコブが。

「あ、あのねパパ？これには事情が…、」

「ちよっ！？ママ、どうして2人に説明して無いの！？」

「いやあ…っいつっかり…。」

「うっかりってー！ー！！？？」

「(OAO)」

とりあえず2人には講師ヴィヴィオからの緊急説明会実施。

どうやらこの形態自体は聖王化でも何でも無く、魔法の勉強する時に便利だからちゃんと練習してただけらしい。

今日まではこの『大人モード』に変身すると結構疲労が強かったが、クリスのおかげでそんな事はもう無い様だ。

ようやく納得してくれた様で、ワタルはホッと胸を撫で下ろした。

「それに变身しても、ヴィヴィオはヴィヴィオだよ！もう『ゆりかご』もレリックも無いんだし！」

「お前前向きだなあ…。」

ダキバットを弄りながらポツリと呟くオトヤ。

まあまあと、そんな彼の頭をなのはが軽く撫でる。

「そんなわけで！今から魔法の練習行つて来たいと思います！」

「あ、1人じゃ危ないから私も行くね。パパとオトヤはもうお風呂入って寝ときなさい。いいわね？」

「へいへい。」

『お気をつけて。』

と、言い残してヴィヴィオ(大人モード)はなのはと共に行ってしまった。

彼女等の姿が見えなくなるとワタルは冷蔵庫からジュースとワイン

を取り出し、オトヤと一緒に開ける。

「一杯やるつか…息子よ。」

「そうだね、父さん…。」

「やっぱいいなー 大人モード！」

今頃兄と父がやけくそになって自棄酒orジューズやっているその頃、ヴィヴィオは大人モード絶賛堪能中だった。

バリアジャケットだとさすがに目立つので、なのはから洋服を借りて着ている。

着た時にヴィヴィオが『胸元きつい』と言って、なのはが『orz』とした事実は現時点ではこの2人しか知らない。

というか、変身後の外見年齢もなのはより若いはずなのに彼女より背が高くスタイル良し…思わぬところでライバルを発見した登るのは23歳（笑）。

「ねークリス！いいよねコレー！」

『ピッ！』

「だよねー」

「……ねえ、ヴィヴィオ？」

「はい？」

スキップしながら歩いていると、突然母から声を掛けられた。

ヴィヴィオは足を止め、彼女に向かい合う。

「大人モードはヴィヴィオの魔法で…その魔法とどう付き合っているのかって言うのはヴィヴィオ次第だけど…いくつか約束させて欲しいんだ。」

「はい？」

「大人モードには魔法や武術の練習や実践の時だけ使うこと、遊び

や悪戯で絶対に使ったりしない事…ママと約束、出来る？」

「うん、絶対に遊びで使ったりしません。」

「天に誓って？」

「天と星に誓って！」

指きりしながらそう言いあう母と娘。

確かにこの魔法は強力で珍しいが、遊びで使ったりする様な物ではない。

これも全て…自分を救ってくれた人達を助ける為の力。

その為に、ヴィヴィオもオトヤも『力』を手にしたのだから。

「それにねママ。」

「ん？」

「魔法でママより大きくなったって、心まで大人になるわけじゃないよ！私はまだまだ子供で、順を追ってちゃんとこの姿になるよ。」

その時に…自分に恥ずかしく無い様に…、

「自分の生まれとママとパパの娘でオト兄の妹だって事にえへんと胸を晴れるように！」

「ね？」

「……ヴィヴィオ……。」

「ん？」

「…ちよつと生意気！」
「ええ〜！も〜折角良い事言ったのに〜！」
「あはは」

その頃…ナカジマ家

「…」連続障害事件？「…」

姉であるギンガからそんな事を通信で言われ、ノーヴェ、ディエチ、ウエンディ、チンクは声を揃えてそう聞き返した。

何でも最近、夜中にいきなり現れて人を襲う変質者がいるらしい。

『ああ、いやまだ『事件』じゃないの。』

「どゆこと？」

『うん、名のある格闘家達に勝負を挑んでは…、』

「フルボッコ？」

『その通り。』

何それ？

姉妹は全員纏めてそう思った。

いや…思っていない能天気がここに1人だけいた…。

「あたし知ってるツス！ストリートファイターっすよね！！」

ウエンディだ。

彼女はゲームとかテレビとか大好きなのでこういう回答しか出来な

い。
だが、

『ウエンディ正解。そういう人達の間では噂になってるんだって。』

まさかの正解ww

ガッツポーズを取る残念姉を痛々しそうに見つめるこの場最年少のノーヴェ。

『被害届けが出てないからまだいいけど…皆も教われない様に気を付けてね?』

「ああ、気をつける。つーか出てきたら逆ボッコだ。」

「コラ、女の子がそう言う言葉使わないのノーヴェ。」
残念姉の隣にいたしっかり姉ディエチに怒られ、ノーヴェはそれから何も言わなくなった。

とりあえず気をつける為にギンガから写真が転送。

どうやら犯人の犯行現場(?)を抑えた写真のようだ。

暗くて良く見えないが…これはどう見ても…、

「女?」

『自称『霸王イングヴァルト』。古代ベルカの『霸王クラウス・イングヴァルト』と、同じ名を名乗っているわ。』

ウェイクアップ2 天と星に誓って（後書き）

今回の楽しみ方

- ・ バースの主題歌を聞きながら読む
- ・ 原作と比べながら読む
- ・ ガチャポンのカプセルカポカポしながら読む
- ・ 感想を書く
- ・ セルバースト

これを読んでいる方の中で、もしも教職に就かれている方…生徒が授業中に騒いだからと言ってくれぐれもブレストキャノンセルバーストしない様にご注意下さい

ウェイクアップ3 霸王イングヴァルト(前書き)

アインハルト「何かコーナー無いと寂しいですね。」

ヴィヴィオ「ですね、というわけで前の話しにはこれから、変なミニドラマつけます!」

アインハルト「本編中で語られなかったショートストーリーです!どうぞ!」

ウェイクアップ3 霸王インクヴァルト

「っはよー！オトヤー！」

「…おう…シンか…」

「って、お前何だかスゲエやつれてるぞ!？」

朝、登校しながら背中を叩いてきたシン。

何故かオトヤの顔はやたらとやつれて、目の下にはクマ……後ついでに、足取りが超不安定。

昨夜、ヴィヴィオの誕生日で色々あって父親と自棄ジュースやった結果だろう…だからといって、ワタルのワインをジュースと勘違いして一気にがぶ飲みするのはどうかと思う…。

それはダキバットも同じで、彼も普段黒い体が…なんでだろうね？どうやったら上から赤、黄、緑なんていうタトバカラーに変わるんだろうね？

「…かくかくしかじかで…まあ、色々あってさあ…昨日は父さんと自棄になった後、すぐ寝たよ…。」

「ふ〜ん…ま、無理はすんなよ？今日もテスト中に寝たりすんなよ？辛くなったら保健室行け。」

「……………は？」

「は？って…どうした？」

「シン、今なんと？」

「辛くなったら保健室行け。」

「その前。」

「テスト中に寝んなよ？」

……………忘れてましたが、何か？

完全に今日からテスト開始なんて頭から抜けていた。

元々テスト前に勉強など（非常に面倒臭い為）しないが、テストがある^と知っているのと知らないのでは、（赤点とって先生に怒られるという）覚悟が違う。

ただでさえ朝から体調悪いのにテストだなんて……今日は絶対碌な日にならない、オトヤはそう確信した。

数時間後…、

この学校は、テストが終わるとその場で採点をして点数をつける。教師の数も多いので、だいたい30分もすれば全教科の採点は終了する。

だから勿論、自分の点数がその場でわかるわけで…、

「……………おお…僕、スゲエ…!!」

「お前悲しくならない？」

自分のテストを高らかに掲げ、目を輝かせるオトヤ。持っているのは苦手だった英語のテスト。

点数は……ジャスト40点。

「うおおおおおお!!!!最後以外記号問題!!先生ありがとうございまあああああす!!!!!!」

「おいちよつと待て、記号だけで40点しか無いのか!?確かほとんど二択だよな!？」

シンのそんな言葉なんか勿論聞こえていない。

ちなみに最後の英訳の答えは『もう何でも1人でやろうとするな!俺達がいる!!俺達の手を掴め!!』という文。

一言言わせて貰うと……誰がわかるかなんな問題。

正解しているシンはきつとアブノーマルなんだろう。
とりあえずコレで補習は無し。

踊る様に軽い足取りで廊下に出て帰ろうとすると、オトヤは廊下を歩いていた女生徒とぶつかった。

「うわっ!?!」

「きゃっ!?!」

2人とも倒れ、女生徒の荷物が廊下にばら撒かれる。

「あっ!?!ご、ゴメン!!今拾うから!!」

「いえ……こちらこそ……。」

急いで散らばったノートを拾い、彼女に渡す。

その相手とは……、

「あ……す、ストラトスさん……。」

「え?ああ……登……さん……。」

アインハルトだった。

ノートを拾って彼女に渡そうとした為、今、オトヤの顔は彼女の顔に近い位置に。

予想外すぎて、オトヤは非常にテンパる。

(あ……ストラトスさんの目って……良く見ると右が紫と左が青で色が微妙に違う……綺麗だなあ……。)

「あ、あの……、」

「へ?」

「………すみません、顔……近いです……。」

「あ、ご、ゴメン!!」

慌てて後ろに下がった為オトヤはバランスを崩して後ろ向きに転倒。彼の後ろにいたダキバットは当然の如くオトヤの頭に豪快に潰され

た。

『痛い…オトヤ、私超痛い…。』

「わりい…ダキバツト…。あっ、す、ストラトスさん…これ、落ちたよ…？」

そう言つてオトヤは最後に拾った、今日のテストをアインハルトに渡した。

その際にチラツと点数が見えてしまう。

なんと…39点…オトヤより低い、っていうか、赤点だった。

点数を見られたと気付くと、アインハルトは耳の先まで真っ赤になり、オトヤからそれを筆取りするように奪い取った。

「うう…！」

「え？あ、あの…ご、ゴメン…。」

「うっ…うええええん！」

と、いきなり泣き出されて逃げられた。

ああ…やっぱり点数見えたのがダメだったか…と思いながら落ち込むオトヤ。

つい昨日、色々あつて彼女に殴られているオトヤ…これで完璧に嫌われたと確信し、膝と手を付いて倒れる。

通りすがった教師から色々と心配されるが、その度に『だ…大丈夫だと…重痛いです…』と言つて誤魔化した。

実際に誤魔化せているかどうかは別にして。

あと、『重痛い』では無く、『思いたい』だと思えます。

「おいオトヤー、帰ろうぜ…って、何やってんだお前…？」

「シン…心が…重痛い…。」

「は…？」

とりあえず今あつた事をシンに泣きながら説明。

彼は呆れ帰り、オトヤの肩に優しく手を置く。

「精神科行ってこい」

「そこまで病んでねえよ!!」

「なら、一階にカウセリングルームあるぜ? レッツゴー! 仮面ライダー!」

「絶滅するぞコラ。」

その時、オトヤのポケットがブルブルと震えた。

手をつ突っ込んでみると、震えているのは彼の携帯電話。
着信相手は… ノーヴェだ。

「はいもしもし…何か用すか…?」

「おお…何かお前、声死んでねえか?」

「そんな事無いよ…うん、そんな事無い…。」

ノーヴェ・ナカジマは元ナンバーズで、オトヤの妹のヴィヴィオの友達。

休日や暇な時なんかは良くヴィヴィオ達と遊んでくれたりする近所の気の良いお姉さんだ。

「今からヴィヴィオ達と練習するけど、お前もどうだ? 少しは気が晴れるだろ?」

「うーん…僕、格闘技苦手だしなあ…でも、行くよ。いつものところでいいんだよね?」

「ああ、じゃあな。」

中央第4区 公民館

というわけで何時もの所にやって来たオトヤ。

何かでっかい体育館だ。

すでに皆来ており、オトヤとダキバットもそつちに行く。

「あ、オト兄こつちこつちー！」

「おいーっす。お待たせー。」

「おっ、来たな来たな！」

今回のメンバーは全部で5人。

オトヤ、ヴィヴィオ、ノーヴェ…それとヴィヴィオの友達2人。

シンはもう帰った。

ヴィヴィオの友達は、1人は大人しそうなツインテールの子、もう1人は活発そうなショートカットの子だ。

「コロナちゃん久しぶり、いつもヴィヴィオと仲良くしてくれてありがとうがとね。」

「はい！お久しぶりですオトヤさん！」

大人しそうな子はコロナ・ティミル。

小学校入学以来からヴィヴィオの親友をしてきている子だ。

「そつちの子は初めましてだよ？僕は登オトヤ、ヴィヴィオの兄貴。こつちの黒いのはダキバットね。」

『ダキバットだ。』

「初めまして！リオ・ウエズリーです！今年からヴィヴィオと同じクラスで友達やらせてもらってます！」

見た目どおり元気な少女だ。

自分もこんだけ活発で素直なら…アインハルトに嫌われたりしなかつたんだろつなあ…と、とても遠い目で明後日の方向を見る。

それを心配するヴィヴィオ達だが、気にするな！！

本日ここに来て来たのは、ヴィヴィオ達のある意味習い事の為。

ここ『ミッドチルダ』で最もメジャーな格闘技…『ストライクアーツ』

ヴィヴィオ達3人はいつもノーヴェからその指導を受けており、そこそこ強い。

オトヤも何度かやった事があるが、あまり向いて無い為ほとんどやらない。

というか、訓練っていうとだいたいワタルかカズマかケイスケが変身して相手してくれる（メチャクチャ容赦無い…主にケイスケが）制服姿ではあまりに場違いだが、元々来る予定では無かったし、体操服ではかつこ悪すぎるのでオトヤは制服姿のまままでヴィヴィオ達を見物する事に。

「はあ！！」

「おっと！うおりゃ！！」

ヴィヴィオがオトヤの全然知らない子と取っ組み合い中、ヴィヴィオ優勢。

コロナガリオと訓練中…リオ優勢。

ノーヴェは巨漢の大男とボクシング対決…ノーヴェ余裕の表情で圧勝。

知り合いの女性達は遅しすぎる…そう考えながらジュースをすすする。

『お前はやらないのか？』

「うん…なんつか、気分のらねえ…。」

『前のダキバではやってたのに？』

「メタい！！！」

ダキバットの頭を掴んで地面に叩きつける…超気持ち良い。

DSに目覚めそうだ。

時間が過ぎるのが早い…そろそろ終わる頃。

ヴィヴィオの大人モードとノーヴェが取っ組み合って終了。

2人の組み手は凄まじく、中々見ごたえはあった。

しかしやはり…妹が自分より背が高くてかつこいいというのは少し気に喰わない。

結果は僅差でノーヴェの勝利に終わり、全員でジュースを買って外へ出た。

「今日楽しかったねー！」

「っていうかびっくりの連続だったよー！」

「また来ようねー！」

『ふむ、子供は無邪気でいいなあ……。』

「ダキバット、親父臭い。」

ヴィヴィオに突っ込まれた後にオトヤに蹴られた為、ダキバットはそれ以降黙った。

ノーヴェとオトヤは帰る方向が同じなので、2人で帰る事に。

もう今日は早く帰って寝たい…そう思うが、どうやらオトヤにはそれすら許されないらしい。

『オトヤ…ネオの気配だ!!』

「……マジかよおい……。」

「何だ？あの怪物まだいたのか？」

事情を知っている様に首を傾げるノーヴェ。

それもそのはず…ネオ初出現の時は、実はノーヴェと一緒にいた時間なのだ。

救助隊に勤めているノーヴェのところにスバルから頼まれた忘れ物を届けに行った時…その時、最初のネオ『ウマネオ』が現れた。

最初はほとんど使わなかったダークキバを初めてフル活用したのであたふたした戦い方だったが、今では少し慣れた。

「で、どこにいるの？」

『近いな……この先の公道だ!!ゆくぞ!!』

「あつ、待てあたしも行く!!」

『ライフエナジー……ライフエナジーいいいいいい！！！！』

公道で暴れているのは、海老の様な尻尾を持ったライオン型の怪人

……『シシネオ』

道行く人達に噛み付いてはライフエナジーを奪い取り、その力を高めていく。

普段は人通りの少ないこの場所……いくら暴れても、基本的にばれる事は無い。

なのでここに知らずに入ってきた人は速攻で殺され、逆にそのおかげで騒ぎは広がり辛い。

まさにちよくちよくライフエナジーを貪るには最適な場所と言うわけだ。

だが……

「絶滅タイムだあああああああ！！！！！！」

それもここまで。

なんと、シシネオの後ろにあったビルの上から黒い影が飛び出してきた、シシネオに強力な蹴りを繰り出してきた。

仮面ライダーダークキバだった。

更に、シシネオの右隣からデバイス『ジェットエッジ』を発動したノーヴェが現れ、シシネオの顔面に飛び膝蹴り。

彼女は華麗に着地すると、ダークキバと共に並び立つ。

『ぐう……き、キバ……貴様……数千年前に封印されたはず……！！』

「残念、もう4年も前にんなモン外れてるっての！！行こうノーヴェー！！！！」

「おう！！ジエツト！！」

『ウェイクアップ！1！！』

『スタートアップ！！』

「はああああああああああ……、」「
お互いに拳に力を込めるダークキバとノーヴェ。
ノーヴェは正面から、ダークキバは飛び上がって上から、それぞれ
必殺パンチを叩き込む。

「ダークネス…ヘルクラッシュ！！！」

「リボルバーブロー！！！」

『ぐあああああああ！！！！！！』

大きな爆発を起こし、砕け散るシシネオ。

2人は着地すると、上からヒラヒラと落ちてくるカードをその手に
掴んだ。

『フラッシュ』と書かれたネオのカード…これで何枚目だろうと変
な溜息をつきながら、ダークキバはそれを仕舞う。

「はい終わり…っと。それじゃあ、ノーヴェ、帰ろうか？」

「だな。じゃあさつさと変身解いて…、」

「『牙の帝王』…仮面ライダーキバとお見受けします。」

その時、ダークキバとノーヴェの耳に、美しい女性の声が響いた。
周りを見ても誰もいない。

ハッ！と何かに気付いたようにノーヴェが上を見上げると…、

「アナタにいくつか伺いたい事と、確かめさせて頂きたい事が…。」

電柱の上に、白いバリアジャケットに身を包んだバイザーをつけた
女性が。

彼女はダークキバとノーヴェを交互に見渡すと、ダークキバに向けて手に持っていた石を投げつける。

しかし、そんなものダークキバに通用するはずが無い…彼はそれを片手で掴むと、思いつき握りつぶした。

「なっ！？何すんのいきなり!?!」

「質問する前に、バイザーを取れ。」

「ノーヴェも何言ってるの!?!」

「お前に言っただんじゃねえ!!アイツに言っただんだ!!」

こんな時でもボケを忘れない馬鹿オトマクオリティ。

女性は失礼しましたと頭を下げると、ゆっくりとバイザーを取り外し、髪を風に揺らす。

その素顔は…ダークキバには何処と無く見覚えのある様な、そんな美しい顔立ち。

紫と青で微妙に色の違うオッドアイが余計に彼女の美しさを引き立てていた。

「カイザーアーツ正統、ハイディ・E・S・イングヴァルト…『霸王』を名乗らせて頂いてます。」

「…噂の通り魔か?」

「否定はしません。」

そう言う女性…イングヴァルトは地面に降りてき、ダークキバを睨みつける。

彼女はダークキバを指差すと、表情を全く変えずに言った。

「アナタに伺いたいのは、アナタの知己である『王』達について…聖王オリヴィエのクローンと、かの『JS事件』を解決に導いた『赤き王と白い魔王』。」

「!?!」

どうしてその事を知っている…?

確かに彼の妹、ヴィヴィオは聖王オリヴィエのクローン。

そして『赤き王と白い魔王』とは、かつての『JS事件』の時…ダ
キバットの力を利用してダークキバへと変身したジェイル・スカリ
エツティの野望を阻止した2人の仮面ライダーの事。

彼の父、登ワタル/仮面ライダーキバ エクシードエンペラーフォ
ームと、襟立ケイスケ/仮面ライダーライジングイクサ バースト
モードの事だ。

勿論全員、今では普通の暮らしをしている。

普通の女の子として…普通の大人として…普通の父親として…。
もう、彼らの事を『王』と知っている者など外部にいないはず。
それに…あの人達を…どうしようかと…？

「アナタは、そのどちらの所在も知って…、」

「知らないね。」

「？」

「聖王のクローンだとか…2つの王だとか…そんな連中と知り合い
になった覚えは無い！！僕が知っているのは…今を生きる、優しい
人達だけだ！！！」

言い切るダークキバ。

今のイングヴァルトの発言…非常にむかついた。

ムカついたと言うか、軽く殺意が芽生えた。

マントをはためかせると、ダークキバは構える。

「なるほど…理解出来ました。その件については他を当たります。」

それと…もう一つ…、」

「アナタの拳と私の拳、どちらが強いですか？」

「はあ？んな事聞いてどうするわけ？」

「強さを知りたいんです。剣の装備をお願いします。」

「知らないよ。僕は女の人を斬るなんて言う趣味持って無い。」

「お、おいオトヤ！お前1人で大丈夫なのか！？」

「うん、平気。ノーヴェは下がってて。」

「…え…？お、オトヤ…？」

何故かオトヤの名を聞いてイングヴァルトが動揺した。

今がチャンス…ダークキバは拳を構え、一気に駆け出す。

「絶滅しろ！！ダキバット、フルパワーだ！！」

『うむ！！了解したぞ！！』

体内を駆け巡る魔皇力を滾らせながらイングヴァルトへと迫っている。

まずは先制…その後はお互いに拳を交えながら、激しい戦いを続ける。

久々の超接近戦…ダークキバはマントを脱ぎ去り、身軽になるとキバの脚でイングヴァルトの顎を蹴り上げる。

「ぐふっ…！」

「よしっ！うおりゃあああ！！！！」

再びマントを羽織って飛び上がると、今度は踵落とし。

だが、イングヴァルトは空中で体勢を立て直し、ダークキバの脚を掴んで地面に投げつけた。

「いっつゝ…！だ、ダキバツト大丈夫か！？」

『フツ…伊達にいつも扱いが悪いと思うなよ…！！』

「今んな事力説すんな！！にしても…あの女、言うだけの事はあるなあ…おい！強さを知りたいって正気か！？」

「正気です。そして、今よりもっと強くなりたい。」

「だったら真面目に練習するなり、プロ目指すなりすればいいだろ！！良いジムとかコーチとか紹介してやるから…関係無い人達を巻き込むな！！」

「ご厚意痛み入ります…ですが、私の目指す強さは…、」
「そこまで言って、イングヴァルトは構える。」

ストライクアーツでもシユートイングアーツでも無い…まったく見た事の新しい型。

「表舞台には無いんです。」

その一瞬、イングヴァルトの姿が消えた。

…と、思うと、いつの間にかダークキバの体は宙に浮いており、更にその上にはイングヴァルトがもつと高く跳んでいる。

魔法ではない…これは、彼女の脚力だ。

イングヴァルトの鋭い蹴りがダークキバを狙う。

だが、ダークキバも、その蹴りを両手で受け止め、反動を利用して体勢を元に戻す。

空中で組み手をすると、2人とも着地。

「列強の王達を全て倒し、ベルカの地に覇を成す事…それが私の成すべき事です!!」

「っざけた事言うな!!昔の王様なんて皆死んでる!!生きてたらその子孫だって普通に生きて、普通に死ぬんだ!!お前の言う王なんて、もつどこにもいやしないんだよ!!」

「……弱い王なら…この手でただ、屠るまで…!」

「……この…馬鹿野郎おおおおおおお!!……!!」

『ウェイクアップ!!2!!!!』

ダキバットにウェイクアップフェッスルを2回吹かせると、ダークキバはイングヴァルトに手をかざす。

すると彼の影がキバの紋章に変わり、それはズズとイングヴァルトの下へ送られると、彼女の動きを完全に封殺。

『波動結界』だ。

「ベルカの戦乱も戦争も!!ベルカっていう国そのものももう終わってるんだ!!いい加減理解しやがれええええええええええええええええええええ!!」

飛び上がるダークキバ。

彼の持つ技の中でも、最も強力な最強の一撃…『キングスバースト

エンド』

仮面ライダーの『ライダーキック』に該当する必殺技だ。
波動結界でジタバタするイングヴァルトへ、ダークキバは容赦なく
その一撃を叩き込んだ。

……………かのように思えた。

「なっ!?!」

「ふう…ふう…!」

なんと、ダークキバの脚を…イングヴァルトが掴んだ。

腕は血だらけ…波動結界を無理やり砕いたのだ。

確かに疲れや精神的ショックでパワーは落ちているが、生身の人間
ではとてもじゃ無いが抜け出せる技じゃない。

「終わってないんです…私にとっては、まだ…何も…!」

「くっ…は、離せ…! 離せコラあ…!」

「霸王…! 断空拳…!…!」

彼女の全身全霊の一撃…『霸王断空拳』がダークキバへ直撃。

ダークキバの体は吹っ飛ばされ、近くの自販機に激突。

自販機は見事に砕け散り、ダークキバに割れたジュースが掛かる。

それでも這い蹲って、彼は何とか立ち上がる。

「弱さは罪です…、」

「はあ…はあ…はあ…！」

「弱い拳では、誰も何も守れないから…。」

「ま…ぐう…！」

とうとうダークキバは力尽き、ネオファンガイア戦でもなった事のない強制変身解除に追い込まれた。

ダキバットは完全に気絶し、彼もオトヤに戻って倒れこむ。

「お、おいオトヤ…！しっかりしろ…！」

「ノーヴェ…つてえ…！」

「…！？ そんな…どうしてアナタがキバに…！？ 何で…登さんが…ああっ…！」

オトヤを見て目を見開くイングヴァルト。

すると突然彼女は苦しみ出し、膝をつく。

恐らく先程の『キングスバーストエンド』…あれはただのキックではなく、体内の魔皇力を両脚に集中させた奥義。

受け止めるにしても、相当な衝撃が伝わっていたはずだ。

「そんな…この体は…間違い無く強いのに…ダメ！こんな所で…かいじょ…は…ああっ…！」

パキンッ！

そんな音を立て、イングヴァルトは倒れた。

どうやら完璧に気絶している様。

すると彼女の体が光りだし…見る見る縮んでいく。

16から19歳程度だった体型は中学生か小学生ぐらいの体系になり、服装も西洋風の物から少しお洒落なワンピースに変わる。

彼女の顔…オトヤはかなり見覚えがある…彼女は…、

「え…？す、ストラトスさん…？」

オトヤのクラスメイト、アインハルト・ストラトスだった…。

ウェイクアップ3 霸王イングヴァルト（後書き）

く霸王イングヴァルトの悩みく

アインハルト「じゃあお父さんお母さん、行ってきまーす。」

父「いいけど…アイン、毎日毎日コンビニ行って何してるんだい？
それに、コンビニ行って朝帰りって…？」

アインハルト「し、心配ないよお父さん！ほら、早くしないと見たいテレビ始まるよ？」

父「おお…そうだな…まあ、気をつけなさい。」

アインハルト「はい。」

悩みその？通り魔する時の言い訳

数分後……、

アインハルト「武装形態！」

カッ！！

アインハルト「さてと…今日こそ見つけるぞ仮面ライダーキバ！ネット
で最近見かけたっていう情報あったものね…この辺で…、」

ガサガサッ！

アインハルト「！！！！！！ な…なに…？今の音…？」

ガサガサガサツ！！

アインハルト「ま…ままママさか…ゆ…ゆゆゆユーレイ…！？」

ガサガサガサ…バサツ！！！！

アインハルト「きゃアアアアアアアアアア！！！！！！！！！！お

化けいやああああああああ！！！！！！！！！！」

ネコ「にゃあ？」 後にネコネオになったネコ

悩みその？夜の道怖い

次回スポットが当たるのは…多分、ヴィヴィオ。

ウェイクアップ4 アインハルト・ストラトス（前書き）

弦太朗「宇宙キター……………」

ほむら「うるさい。」

パンっ！ 弦太朗撃った音

賢吾「如月いいいいいい！！！！？？」

ほむら「『仮面ライダーダークキバVivid』をご覧の皆さん初めまして、曉美ほむらです。この話が復活した頃とだいたい同じ時期に始まった『フォーゼマガカ』、どうかよろしくお願いします。」

賢吾「おい！！如月！！起きろおおおお！！！！ゲホツゲホツ！

！」吐血

弦太朗「て…………天国キター…………ガクツ。」

アインヴィヴィ「ここまで侵入してこないでくださあああああい……………」

ウェイクアップ4 アインハルト・ストラトス

「ん……ん……？」

目を開けると、そこには見慣れない真っ白な天井があった。周りを見渡してみても、やはり見慣れない景色。

それよりも、なぜ自分はベットで寝ているのだろうか……？

困惑しながら、アインハルトはそんな疑問を持った。

確か昨夜はいつも通り夜中に両親の目を盗み自宅を抜け出し、強い相手を探して歩き、そして……仮面ライダーダークキバと出会った。

あの戦いの結末がどうなったのか……それを思い出そうとしていると、彼女はある人物に気付いた。

何故か自分の隣に……誰か寝ている。

彼女は確か、そう……ダークキバと一緒にいた……。

「よう、目覚めたか？」

「あ……あの、ここは……？」

確かノーヴェ・ナカジマ。

ストライクアーツの有段者である女性だ。

一体なんで彼女が隣にいるのか……そう考えていると、今度はベットから約3M離れた紺色の扉が開き、そこから見知らぬ女性が姿を見せた。

「あら、おはようノーヴェ。」

いや、見知らぬと言ったら嘘になるだろう。

確かに面識は無い、だがアインハルトは彼女の顔を『テレビ』で何度も見た事がある。

確か…時空管理局本局勤めの執務官…ティアナ・ランスター。

凶悪事件を主に担当とし、いくつもの功績をあげている若手実力派の局員だ。

よく見ると、ティアナの後ろに彼女よりも少し背の低い少年が顔をのぞかせ、アインハルトの表情は一気に固まった。

登オトヤ…彼女が戦った仮面ライダーダークキバだった。

「の……登さん…!？」

「あー……その、おはよう…ストラトスさん…。」

『気まず!?!』

例のごとく、いらん口をはさんだダキバットにはオトヤがその場で鉄拳制裁。

地面にポトリと落ちたダキバットをポケットの中に無理やりねじ込むと、アハハと愛想の無い作り笑いを浮かべる。

ティアナはふ〜んとでも言いたげな表情でアインハルトの顔を覗き込むと、フツツと笑い彼女の頭を撫でた。

「自称『霸王イングヴァルト』…本名、ハイディ・アインハルト・ストラトス・イングヴァルト。Set・ヒルデ学園中等科1年生でオトヤのクラスメイト。ごめんね？オトヤから聞いたのと、コインロッカーの荷物、全部出させてもらったの。ちゃんと全部持ってきたから安心して?」

モソモソとベットから起き上がり、ティアナが指差した方向へと歩くアインハルト。

荷物が本当に全部あるかどうか確認すると、安心したようにホッと胸を撫で下ろした。

その様子を見て、ノーヴェが『それにしても…、』とニシシと笑う。

「学生証とか教科書持ち歩いてるたあ、ずいぶんとぼけた喧嘩屋だな？」

「が、学校帰りだったんです…それに…」
「クルリとオトヤの方を向く。」

するとオトヤの方は困惑した表情を浮かべ、アインハルトの方はムスツとした顔になった。

「……あんなところで負けるだなんて思ってませんでした……。」

「い、いやあ…あれはどっちかつーと…引き分け…というか僕の方が先に变身解除したんだから僕の負けなんじゃないかな…？」

「私の方は気絶しました…登さんの勝ちです…。」

「え…ええー………。」

正直嬉しいどころか虚しい。

どうしてお互い知らなかったとはいえ、好きな子と殴り合って拳句の果てに相手は気絶、自分は全身打撲なんて状態にならないかならないのか…？

『初恋は実らない』……どこかでそんな言葉聞いたような気がする…。

あの言葉、どうやら本当らしい。

『好き嫌い』以前に、『女の子殴り飛ばした』なんて……男として大問題だ。

「……………どうして…、」

「え？」

「どうして…貴方がキバなんですか…？確かキバは管理局の中に入るって聞いたのに…。」

「……あーっ……。」

オトヤ、ノーヴェ、ティアナは全員で声を揃え、ポンっと手を叩い

た。

アインハルトの言っている『キバ』とは、『仮面ライダーキバ』登ワタルの事だろう。

キバはキバでも彼女が実際に戦ったのはその息子である仮面ライダー『ダーク』キバのオトヤだ。

ポリポリと頭をかきながら、オトヤはなんて言えばいいのかわからずに少し戸惑う。

「多分それうちの父親……まあ、なんでもいいや……。何でって聞かれても…何でだろうねダキバツ？」

『私に聞くな。』

()(いつのまにこの蝙蝠復活したんだろう……。)()

いつも思うが、凄い生命力だ。

きつと前世はゴキブリか『やれるやれるもつと出来る諦めんよそこでお前昔を思い出せよ!!!』な人のご先祖様か何かだったんだろう……。

とりあえず、アインハルトに何故自分が変身できるのかの理由は話したくない。

何故なら自分は初代キバであった『キング・ゲーズブレヒト』の生体クローンであり、純正な生き物ではない。

それをクラスメイト…それも好きな女の子に話すなど……とてもじゃないが無理。

気まずい雰囲気漂うこの部屋に……まるで女神の様な声が聞こえてきた。

「はい！朝ごはんです！今日はベーコンエッグだよー！」

「俺の作った『全自動卵割機』で割った卵で作ったんだぜ！ー！」

「うん、ケイスケそれだけしか手伝いしてないよね。」

朝食の準備を整えたスバルと、友人である襟立ケイスケが部屋に入
って来てくれたのだ。

何故かケイスケはやたらとゴツイ機械に卵を挟みながら満足そうに
笑っているが、きつと気にしたらその時点でゲームオーバー！。

「あ、初めましてだねアインハルト。スバル・ナカジマです。事情
とか色々あるんだろうけど、まずは朝ごはんたべながら。お話聞か
せてくれると嬉しいな？」

ようやく朝食の準備が完全に整い、全員が席に着いた。

いつも朝食抜きにしているオトヤにとってはとてもありがたい。
ひと段落したら、まずはオトヤから全員の自己紹介。

「えっと……じゃあ紹介するね。ここはノーヴェのお姉さん、スバル
さんの家。」

「うん」

「それと本局勤めの執務官のティアナさんに、実践向けの教導官や
つてるケイスケさん、ちなみに仮面ライダーイクサ。僕らを保護し
てくれたのはこの3人。」

「ティアナよ、よろしくね。」

「襟立ケイスケ。俺の可愛い弟分が世話なってるそうで。」

「なっていないしアンタの弟分にもなった覚えねえよ。」

『同意。』

最初の印象は、おそらく『賑やかな人達』に違いないだろう。

ポカんと彼らを眺めていると、突然スバルが軽いチヨップをオトヤ
に与え、少しお説教を始めた。

「でもダメだよオトヤ！同意の上でも、女の子殴ったりしちゃ！」

「は、はい……ごめん、ストラトスさん……。」

「ああ、いえ。私の方こそ知らずにすいません……。知っていたら……ん……。」

「でも、驚いたよ。ストラトスさんすつごく強いんだね！」
「え？」

反省の顔から、次は目を輝かせながらオトヤはそう言った。

いつもの学校のイメージでは、アインハルトはいつも席で本ばかり読んでる『文学少女』

それがヴィヴィオと同じで大人モードが使える上に、仮面ライダーとも渡り合えるなんて予想もしないだろう。

「本当に凄いや！だってキバってもとものスペックがすっげえ高いのにそれを打ち負かすなんてさ！それに投げ飛ばされた時も、『投げられた』っていう感覚ほとんどしなかったし……うん、本当に凄いや！！」

「い、いえ……そんな事……／＼／＼ それを言うなら登さんも凄かったですよ。あの姿で負けたのは初めてですから。」

「……オツホン、えー……お楽しみのとこ悪いんだけど、アインハルト。そろそろ、事件の動機、聞かせてくれる？」

思いの外楽しそうに話していたアインハルトを遮り、ティアナがそう言った。

すると一気に彼女は表情を暗くし、顔をうつむかせてしまう。
そんな彼女に代わり、ノーヴェが簡単に説明した。

「こいつん中jまだ古代ベルカの戦争が終わって無いんだとよ。んで、自分の強さが知りたいんだとさ。」

「それであとは何だっけ……？僕……ってか、王様ぶん殴りたいだっけ？」

「最後のは……少し違います……。古きベルカの王達や、『赤き王と白い魔王』の誰よりもこの霸王の身が強くなること、それを証明したかったんです……。」
それを聞き、オトヤは少しホッとした。

どうやら古代の王達に恨みを持っている訳では無く、単純な力比べがしたかっただけらしい。

胸をなでおろすオトヤとは対照的に、震えてるのは愛すべき馬鹿襟立ケイスケ。

実は彼、今から4年前の『J S事件』の時、ワタルの変身した『白い魔王（仮面ライダーキバ エクシードエンペラー）』と共に『赤き王（仮面ライダーライジングイクサ バーストモード）』へと覚醒している。

スバルとティアナのデバイスが無いと変身不可能で、現在も変身は不可能な幻のライダーではあるが、もしも知ってたら自分も襲われたのだろうか、少し血の気が引いた

「あ、あの……大丈夫ですか…？」

「あーあー、いいのよ気にしないで。こいつただの『馬鹿』だから。」

「おいティア……スバルなんか言ってやって…。」

「ティア、ケイスケ馬鹿じゃないよ！『大馬鹿』だよ！」

「orz」

ケイスケに193のダメージ

ケイスケは倒れた！

スバルとティアナは753の経験値を手に入れた

「あ、アインハルト。冷めないうちにご飯食べちゃって！今日の密かに自信作なんだ〜！」

「…はい…いただきます…。」

「ねえアインハルト。あとで一緒に近くの署に行きましょう？被害届は出てないって話だし、もう路上で喧嘩とかしないって約束してくれたらすぐ帰してくれるはずだから。」

ティアナの言葉に、アインハルトは無言で頷いた。

すぐ帰してくれると言っても…かなり怒られるだろう…。

何せ、彼女のせいで公式試合に出られなかった格闘家も少なからずいるのだ。

顔を伏せて落ち込んでいるアインハルトを見ながら、オトヤが口を開いた。

「あ、あのさティアナさん…今回の件、最初にストラトスさん殴ったの僕なんだ。だから僕も一緒に行くよ。ことういの…何だっけ…？ああ、そうそう、『喧嘩両成敗』ってやつ？にして欲しいんだ。」

「登さん……。」

「わかったわ、アインハルトもそれでいい？」

「はい…ありがとうございます…。」

湾岸第六警防所

ティアナ、スバル、ケイスケ、ノーヴェに連れられ、オトヤとアインハルトはこの『青少年犯罪科』に連れて行かれた。

オトヤの希望通り『喧嘩両成敗』という事で、警官（女性）からかなりの大目玉を食らい、2人と頭を『八代チヨツプ アギトVer』なる物を受けた。

かなりの威力があり、ライダーの必殺技に換算すると『シャイニングライダーパンチ』ぐらい……。

その後アインハルトは解放されたが、オトヤは『女性に手をあげた』という事で更に説教追加、ドアの外にも悲鳴が響く。

オトヤが戻ってくるまでの間暇なので、アインハルトは椅子に腰かけて今までの行いを少し反省。

（何をやってるんだらう私は…やらなきゃならない事沢山あるのに…。）

「……………」

(それに…登さんにも酷い事を…。あの人は優しいから気にしない
って言ってくれたけど…本当は怒ってるに違いない……。)

「……………さん。」

(ノーヴェさんという方にも迷惑かけちゃったし…どうやって謝る
う……。)

「ストラトスさん。」

(ああ……………私はどうしたら……。)

「ストラトスさん!!!!」

「は、はいい!?!」

突然耳元で大声が聞こえ、びつくりしすぎて思わず声を上げてしま
った。

隣を見てみると説教が終わったオトヤ(ライフ0どころかマイナス
状態)とノーヴェが。

冷たい飲み物を買ってきてくれたらしく、アインハルトは一礼して
それを受け取る。

「炭酸大丈夫?」

「はい、大丈夫です…。」

「隙だらけだったぜ霸王様!で、もうすぐ解放だと思っけど…2人
とも学校どうする?今日は休むか?」

「行けるのなら行きます。最近忙しくて碌に勉強できてないですし
…。この前のテストも…途中で眠ってしまって適当な答えしか書け

ませんでしたし……。」

『ああ、成程』と、オトヤは思った。

前にアインハルトとぶつかった時に垣間見えた彼女の最低クラスの点数……あれはそういう事だったのか。

でもあの点数、普段の自分の点数と大して変わらないので笑えない……というか、彼女の適当と同じレベルの自分がことごとく情けなくなる……。

「僕も……ストラトスさん行くなら行くよ。成績悪いし……シンも心配してるだろうし……。」

「真面目で結構。……なあ、アインハルト。うちの姉貴スバルやティアナ、ケイスケは局員の中でも結構すごい連中なんだ。古代ベルカ系に詳しい専門家みたいなやつもいる。お前の言う『戦争』ってのがなんなのかわかんねーけど……協力できる事があんならあたし達が協力する。だから……。」

「聖王達には手を出すな……ですか？」

「ちげーよ。あ、いや違わねーけど……手、出されても困る……。お前とオトヤの試合、近場で見てたからわかるんだけどよ……。」

ニマツと笑い、ノーヴェはアインハルトの頭の上に手を置く。すると優しく言った。

「お前、格闘技ストライク・アーツが好きだろ？」

「あたしもまだ修行中の身だけど……指導者コーチの真似事とかしてるから、才能や気持ちを見る目はあるつもりなんだ。」

「ノーヴェ凄いなだよ、僕の妹とその友達も皆、ノーヴェの事『師匠』って慕ってるし……それ以外の面でもいろいろと面倒見てくれる

んだ。」

『うむ、我々の『お姉さんの存在』だな。』
オトヤもダキバットもノーヴェを絶賛してる…きっと彼女は本当にいい人なんだろう。

だが…この気持ちは『好き』とか『嫌い』の問題じゃない。
そういう事で考えた事は一度も無い。
何故なら…、

「^{カイザーアーツ}霸王流は…私の全てですから…。」

「…なあ、聞かせてくれないか？霸王流の事、それとお前の拘ってる『戦争』の事…。」

「僕も知りたい。たぶん、キバも関係あるだろうから。」

「はい…私は…。」

St・ヒルデ学院 初等科校舎図書室

「あつたあつた！これなんかおススメ！」

オトヤ達が警察にいつている頃、ヴィヴィオ達小学生組は学校の図書館で歴史書をかき集めていた。

それも時代が限定されているもので、集めている書籍全てには共通して『聖王オリヴィエ』と『霸王イングヴァルト』、それと『帝王キバ』が登場している。

「でもヴィヴィオ、急にどうしたの？ シュトゥラの歴史書なんか集めて？」

「うん、ノーヴェに頼まれたんだ。」

「ノーヴェ師匠に？」

リオとコロナが何故か『明日雨だ』みたいな顔をしている。

確かにノーヴェが歴史書なんて……似合わないにも程があるのはわかるが…。

「それでね！ 今日の放課後にね！ オト兄のクラスメイトで格闘技やっつて子と知り合ったから、一緒に練習しないかって！」

ウェイクアップ4 アインハルト・ストラトス（後書き）

（図書室にて）

リオ「シュトゥラの歴史書…シュトゥラの歴史書……お？何だこれ？」

コロナ「リオなんかいいのあったー？」

ヴィヴィオ「どうしたのー？ん？何この本？」

リオ「タイトルは…これ地球の文字じゃない？」

ヴィヴィオ「あ、これなら私読めるよー！えーっとねえ……『仮面

ライダーファイズ正伝 異形の花々』だって！」

コロナ「へー、仮面ライダーの本かー！」

リオ「歴史書か何かなあ？」

ヴィヴィオ「面白そうだから休憩がてらちょっと読もうよ！この文字私しか読めないし！」

リオコロ「賛成ー！」

だいたいこの後ぐらいからヴィヴィオの様子がおかしくなりまして（笑）

レンさんとミホのはある意味、追い打ちです。

これまでの…（前書き）

とうとうダキバ復活！！！！

今回から若干書き方変えました。
といっても、

『・・・』 『…』

に、変えただけです…

ガタツク改めバース作品第一弾！！

『Re/birth』開始！！！！

これまでの…

これまでの…仮面ライダーダークキバVividは…、

「王の判決を言い渡す！！死だ！！！！」

かつての『JS事件』解決の英雄…登ワタルと高町なのは。彼らの活躍により次元の中心世界『ミッドチルダ』には平和が戻り、広域次元犯罪者ジェイル・スカリエツィに利用されていたオトヤ、ヴィヴィオ両名は無事に保護。

この事件から凡そ3年後…ワタルとなのはの結婚式当日。彼らを襲った謎の仮面ライダー…『サイバ』。

ワタルこと仮面ライダーキバによりサイバは撃退されたが、その相棒である『サイバット』は逃走、『洛芦和』と呼ばれる街へと逃げた。

そこで『黒須タイガ』という人物を異世界の能力『機巧魔神』と融合させ『仮面ライダークロス』が誕生。

絶対絶命に思われたその時…彼らの前に2人…いや、4人のライダーが現れた。

「『さあ！お前の罪を数えろ！！』」

「『さあ…科学の光に沈め！！』」

異世界の仮面ライダー…『仮面ライダーダブル』と『仮面ライダー

クロガネ』。
ラクロワタワーと呼ばれるこの塔に出現した『魔界』を舞台に、3
人で5人の仮面ライダーを巡る戦いは無事に終結。
その後、ワタルとなのははめでたく結婚。

それからさらに1年の月日が流れ…、

「『光栄に思え!!!絶滅タイムだ!!!』」

ミッドチルダに再び新たな脅威が現れた。

人の『負』の感情を利用して生まれた謎の怪人…『ネオファンガイ
ア』。

人々のライフエナジーを喰らい続けるその謎の生命体と戦う1人の
少年…。

登オトヤ…ワタルとなのはの息子である。

彼が変身するのは古代の『牙の帝王』…『仮面ライダーダークキバ』
。相棒ダキバットと共に、学校生活とライダー生活を両立させていた
オトヤ…そんな彼にも年頃の悩みがあった。

『恋』だ。

彼が好意を抱くのは同じクラスのアインハルト・ストラトス。

才色兼備だが寡黙な彼女：オトヤはそんな彼女に小学5年の頃に勉強を教えてもらってから好意を抱くように。

初めて自分からアインハルトに声を掛けたオトヤは見事に彼女を夕飯に誘う事に成功し、両親の親友が経営するレストラン『ACE』に親友 加藤シンも連れて行った。

しかしその後から、アインハルトはいつも通り素っ気無い態度に戻ってしまい、落ち込むオトヤ。

そんなどん底の状態の彼を襲った1人の女。

彼女は自ら『霸王イングヴァルト』を名乗り、オトヤことダークキバを攻撃。

見事に勝利：正確には引き分けに追い込んだオトヤを待っていたのは衝撃の真実。

『霸王イングヴァルト』「アインハルト・ストラトスだったのだ。

ノーヴェの手によってスバル邸へと招かれた2人。

そこで彼が聞いたのはアインハルトが戦う悲しい理由。

彼女の先祖『クラウド・イングヴァルト』はかつて、守ると誓った友を守れなかった…。

そんなクラウドが生み出した『霸王流』、それが他の『王』達よりも強い流派である事を証明する事。

アインハルトの涙交じりのその言葉を聞いたオトヤは彼女を妹であるヴィヴィオと戦わせる事を決意。

ぶつかり合う2人の少女の拳：その『勝負』を守る為のオトヤの『戦い』。

結果、アインハルトはヴィヴィオを『戦うべき王』で無く、『競い合うべき友』として認め、オトヤとも和解。

霸王を巡る物は終結した：しかし、その直後…、

「ネオ…カード……よこせ！…！」

ネオとの戦いを続けるオトヤとアインハルトの前に出現した謎の戦士『カリス』。

かつて【ブレイドの世界】に出現した『仮面ライダーカリス』と全く同じ容姿、能力を持った彼は本能のままにネオのカードを求めた。同刻、剣立夫婦…カズマとフェイトは大雨の日、記憶消失の少年『ハジメ』とであう。

世間知らずな所が目立つハジメ…彼こそがカリスの正体だったのだ。カリスの力を制御できずに暴走するハジメ…だが、カズマやフェイトの呼びかけによりとうとうカリスの力を物にする事に成功。

自分を『化物』と畏怖し、カズマ達の下を去るハジメだが…剣立夫妻はそれを許さなかった。

何故なら2人は彼の事を短い間でも『家族』と感じていたから…。空は晴れてもハジメの目から流れる大雨は止まる事無く…かくして彼は剣立家の一員として迎え入れられた。

それから数日し、異世界での合宿当日。

メンバーはかつての六課メンバーとオトヤ達とヴィヴィオの友達。ルーテシア達アルピーノ家が暮らす『無人世界カルナージ』で行った合同模擬戦。

繰り広げられる魔導士対魔導士、仮面ライダー対仮面ライダー、そして仮面ライダー対魔導士。

なのはとティアナの最大砲撃『スターライトブレイカー』の激突の果て、生き残ったのは僅か4人。
ダークキバ、カリス、アインハルト、ヴィヴィオだけ。
青組と赤組のタッグによる激しい肉弾戦…結果は…、

「キングス…バーストエンド!!!」

「うおおおおおおお!!!」

「霸王!!!断空拳!!!」

「リボルバースパイク!!!」

…全員気絶の引き分けに終わった。

こうして魔導士達と仮面ライダーを交えた模擬戦は終了。

この物語はこの続きから始まる。

ダークキバことオトヤの運命…アインハルトの決断…ネオファンガイアとそれを生み出している謎の男、そして剣立ハジメことカリスの正体…いまだその姿を見せぬ新ライダー、仮面ライダーバスター。これらを巡る『運命の鎖の物語』……。

『仮面ライダーダークキバVivid - JOKER - 聖王、霸王、帝王』改め『仮面ライダーダークキバVivid - Rebirth』……
h - - 『……』……
h - - 『……』……

「これまでの…（後書き）」

アインハルト「一時はどうなるかと思いましたがね…。」

ヴィヴィオ「本当本当…でも、コレもいつ消されるか…。」

オトヤ「やったあああああああ…！！！！！僕続投おおおお
おおおおおお…！！！！！」

ダキバツト『私も続投おおおおおお…！！！！！！』

アインハルト「もしも、『アナタ本当にガタツクですか？』という
方…いられましたら感想にどうぞ。」

ヴィヴィオ「絶対に証明します…！！」

次回から前書きと後書きで新コーナー開始…！！

その名も…『ヴィヴィオとアインハルトのお悩み相談…！！』

Re/birth・I インターミドル（前書き）

アインハルト「とうとう今回からダキバ本格スタート!!」

ヴィヴィオ「それに伴い、『なぜなにダキバ直球質問コーナー』を
廃止し、新コーナー『ヴィヴィオとアインハルトのお悩み相談室』
が開始!!」

アインハルト「記念すべき第1回目のゲストはこの方です!!どう
ぞ!」

楓「あ…こんにちわ…/ / /」

Re/birth・I インターミドル

「うおおおおおおおおお!!!!!!」

ボロボロになつたビルや街のど真ん中で戦う4つの人影…。

彼らの戦いは何者も一切近寄れ無い程の気迫に満ちており、他の者達は黙つてそれを見守るだけ。

そんな中、栗毛色の少女の拳が白い服に身を包んだ少女に向かっていった。

だがそれをマントを羽織つた黒と赤の戦士が防ぎ、少女を投げ飛ばす。

栗毛色の少女と黒い螻蛄の様な戦士…白い少女とマントの戦士。4名2組はお互いに肩を揃えると、それぞれの必殺技の体制に。

『ウェイクアップ!!2!!』

『スピニングダンス』

「「「「はあああああああ………!!!!!!」」」」

構える4人。

他の者達は固唾を飲み、自分達の仲間の勝利を祈る……。そして…、

「「「「はあああああああああああああ!!!!!!!!!!!!」」」」

「!!!!!!」

ドオオオオオオオオオオン!!!!!!!!!!!!!!

数時間後…

しばらくして、少年は目を覚ました。

自分が寝ていたのは何故か寝室のベッドの上。

確か自分は戦っていたはず…そう思いながら辺りを見回す。

隣にあるベッドにも誰か寝ていたような痕跡があるが、今は誰もいない。

何があったのか…そう思っていると、彼に話しかける人物が…、

『起きたかオトヤ。』

「…ダキバット…?」

その名はダキバット。

少年のパートナーであるキバットバット族。

そして少年の名は登オトヤ。

『J S 事件』の英雄にして元【キバの世界】ファンガイアの王であった父 登ワタルと、管理局の元『エース・オブ・エース』登なの

はの息子。

息子…といつても血のつながりは無く、その正体は数年前にジェイル・スカリエツティにより生み出された古代の『牙の帝王』キング・ゲーゼブレヒトの生体クローン。

4年前にスカリエツティに『ゆりかご』起動に利用されてしまったが、仮面ライダーキバに変身したワタルと、彼とともに『ゆりかご』までやって来たのはにより救出された。

その後は妹であったヴィヴィオと共に2人に引き取られ、正式に2人の息子として認められた。

相棒であるダキバットの力を借りる事で『牙の帝王』…仮面ライダーダークキバに変身する能力を持つ。

ちなみに『一応』ファンガイア。

半年ほど前より街に出現しだした謎の怪人…『ネオファンガイア』を倒す為にダークキバに変身してひっそり（笑）と戦っている。

今回は異世界での訓練合宿でルーテシアの家に来ており、先程まで彼は合同模擬戦に参加していた。

最後に生き残った4人で同時に必殺技を放った後から…何故か記憶が無い。

「なあ、ダキバット…模擬戦は？」

『ああ、それは…、』

「登、起きたか？」

「ぐっすり眠ってたぜ、お前。」

「シン、ハジメ。」

ガチャツと扉を開け、入ってきた2人の少年。

オトヤの親友である加藤シンと剣立ハジメだった。

シンはオトヤの小等部時代からの親友で、中等部に入った今年も同じクラス。

彼は家族関係で色々と複雑な事情があるが、オトヤはその事を知ら

ない。

剣立ハジメはオトヤの両親の親友である剣立カズマ、フェイト・T・H・剣立の居候。

とは言つても、2人は本当の息子の様に可愛がっている。

【ブレイドの世界】の仮面ライダーカリスと同じ姿、同じ能力を持つ戦士『カリス』に変身出来る能力を持つが理由は不明。

何でもハジメは記憶喪失らしい。

どうしてカリスになれるのか…どうしてネオファンガイアと戦うのか…理由は一切分からない。

ともかくハジメはハジメだ、オトヤやシンの様な彼の友達にしてみればそれ以外の事はどうでもいい。

「僕どうしたんだ？確か模擬戦で…？」

「ああ、全員ライフゼロになって撃墜、引き分けだ。ちなみにお前にとどめさしたのはストラトス。」

「嘘オ！？」

「マジマジ。ストラトスの奴、ヴィヴィオに攻撃しようとしたら外してそのままお前に当たっちゃったんだよ。しかもそのせいでお前落ちてヴィヴィオにぶち当たって気絶。剣立はお前の攻撃喰らって撃墜。」

ハジメ、シンに言われて、そうだ、とオトヤは思い出した。

彼は『同じチームだったアインハルトの攻撃受けて気絶したんだっ』…とようやく思い出す。

そう考えると物凄く情けなくなってきた。

ちなみにオトヤの隣のベッドで寝ていたのはハジメ。

彼も気絶したがすぐに目が覚めて、今までシンとリビングで話していたらしい。

「皆何してんの？」

「フェイトさんはエリオさんやキャロさん達とくつろいでる。カズマさんはお前の両親とメガーヌさんと一緒にキッチンで談笑…いや、お前の父親をキッチンに入れまいと奮闘中。他の連中はくたばって

るよ。」

「父さん…またキッチンに入ろうとしてるのか…。いつか人殺すよあの人…。」

オトヤの父親である登ワタルは料理が大の苦手。

彼がオトヤの母親であるのはと正式に付き合い始めた頃、彼女やオトヤ、ヴィヴィオにカレーを振舞って殺しかけた。

その後、なのはから思いつき怒られてそれ以降は調理関係には一切手出しさせていない。

「とりあえずルー達んとこいかな？ここで男3人で話しても華がねえだろ？」

「おい、私も数に入れるシン。」

その頃、少女組みはルーテシアの部屋で全員ぶっ倒れていた。

ちなみにこの花園には何故か氷室レイヤもいる。

「うう…腕があたりません…。」

「体が…痛い…。」

「助けて…。」

「かゆ…うま…。」

「おかゆは美味しいよね。」

上からアインハルト、ヴィヴィオ、コロナ、リオ、レイヤ。

まずはアインハルト…彼女はオトヤの学校のクラスメイトで彼の初恋の相手。

その正体は霸王クラウドの子孫であり、霸王流正統後継者。

オトヤの変身するダークキバと共に成り行きでネオファンガイアと戦っている。

ヴィヴィオはオトヤの妹。

基本血のつながりの無い登家では唯一のオトヤの血縁。

というのも、彼女のオリジナルである『オリヴィエ・ゲーゼブレヒト』はオトヤのオリジナルであるキングの実妹。

そのクローンである彼女等も当然血縁(?)があるというわけ…らしい…。

相棒デバイスはセイクリッド・ハートことクリス。

コロナとリオはヴィヴィオと同学年の彼女の親友。

それぞれコロナには『ゴーレム創成』^{クリエイト}、リオには『炎熱&雷魔力変換』という魔法が使える。

そして何故かここにいる唯一の少年…名は氷室レイヤ。

仮面ライダーゼロという仮面ライダーに変身できるヴィヴィオのクラスメイトでリオの幼馴染。

彼の変身するゼロは一言で言うなら『怖い』。

もはやコレに尽きる。

何故なら変身した後の彼は性格が180度どころか540度反転して、敵と認識したら本気で殺しに掛かる。

普段はのほほんとした天然系の少年なのだが…。

「皆張り切りすぎるからだよー？」

「なんで…ルーちゃん平気なの…？」

「そこはそれ！ねんてよ、」

「頑丈だからだ。」

「…加藤、アンタ私に何か恨みでもあんの？」

そっけつなのはルーテシア・アルピーノ。

4年前にスカリエッティに利用されて周囲に心を閉ざしていたが、無事に救出されて心を取戻した。

…のだが、何をどこでどう間違えたか、何故か今の彼女の性格は

とんでもない。

妙にいつでもテンション高かったり、変な企画提案したり、新しいライダーシステム作ったり、自宅を改造したり…。とにかくやりたい放題だ。

そして今突っ込んだのはオトヤ達と共に部屋に入ってきたシンだ。

何故か彼はルーテシアと仲が良い…模擬戦で彼が使用した特殊銃『バスタードライバー』を開発したのもルーテシアだ。

なお、この銃は本来『仮面ライダーバスター』と言う対ネオファンガイア用の質量兵器特化型の新ライダーへの変身ツールであるが、彼に渡された物は試作なので変身機構はまだ備わってはいない。

もつとも、シンはバスターの存在をまだルーテシアから知らされてはいないが…。

「年長者なりのペース配分よ！…こんなに可憐でお姫様みたいな私がそんな頑丈なわけ無いでしょ？」

「お前…自分で言っつて悲しくならない…？」

「年上にお前言うな。」

そのままルーテシアの踵落としがシンに直撃。模擬戦後なのに戦闘不能に。

ダキバットは何故かそんなシンに共感できた。

『うんうん（涙）』

「ダキバット、何泣してんの？」

『フツ…この悲しみはお前にはわからんさ…！』

何をかっこつけているんだろうと思いつつもオトヤはアインハルトの隣へ。

起き上がれない彼女を起こしてあげる。

「大丈夫？」

「はい…。」

「そう言えばアイン、こういう『試合』ってはじめたよね？どうだった？」

「そうですね…中々いい勉強になりました。」

「ならよかった。こういうスポーツも中々楽しいでしょ？」

そう言われてアインハルトはコクリと頷いた。

思えば彼女の見てきた世界は狭かった。

今までは『霸王流』を証明する為だけに戦い、オトヤやヴィヴィオに『戦い』を挑んできた。

ネオファンガイアとの戦闘も、本当は『霸王流』が何よりも強い事を証明したい為だけに行っていたのかもしれない。

「あ、ならアインハルト！」

パンツ！と手を叩きルーテシアがそう言った。

彼女はその辺から色んなパンフレットや書類を出し、続いてモニターを展開。

そこに映っているのはミッドにある1つの競技場の映像。

「今日の試合が良かったならこの先こんなのあるんだ。『D S A A (ディメンションスポーツアクティビティアソシエーション)』、公式魔法戦競技会って言うんだけど。10歳〜19歳までの出場可能で限り無く実戦に近いスタイルで行われる公式戦。全国全世界から我こそは！という魔導士が募って覇を競う。その名も…、」
そこでルーテシアは一呼吸置き、そしてアインハルトを指刺して胸を張り言った。

「インターミドルチャンピオンシップ！」

「インター…ミドル…？」

ルーテシアから出る聞き覚えの無い単語に首を傾げるアインハルト。

彼女からその『インターミドル』に関する資料を渡される。

どうやら自らが鍛え上げた魔法を競い合う、公式大会らしい。

「あ、ちなみに今年は私達も出るんですよー！」

「ヴィヴィオさん達も？」

「色んな所から色んな魔法使う人が来るんですよ！数は少ないですけど格闘型の人もいますし！」

ヴィヴィオ、リオがそう言うのとコロナとルーテシアもコクリと頷いた。

なお、妹が参加するのが気になるのか…オトヤはとつても不安な表情。

そんな彼の肩を優しく叩いてあげているのはシンの優しさだ。そうこうしていると、ドアを開けて入ってくる3人の人物が。

「はあい皆、栄養補給の甘いジュースですよー！」

「あ、母さん父さん。」

「ありがとママー！」

登なのは、登ワタル、そしてメガーヌ・アルピーノだった。

なお、ジュースはワタルが頑張つて全員分持っている…いや、正確には2つほど相棒のキバットに持たせてる。

『キバット殿、そっちも大変だな。』

『お前ほどじゃねえよダキバット。』

「あら？インターミドルの話してたの？」

ジュースを皆に配りながらメガーヌがそう聞いた。

それに対してルーテシアはその通り！と何故か胸を張つて答える。

「アインハルトを勧誘してたのー！ちなみに今年は私も出る！」

「懐かしいわねー。昔を思い出すわー…都市決勝の舞台でスバルちゃん達のお母さんのクイントと戦ったりしたものよー。」

メガーヌがそう答えるが…全員、彼女が戦っている姿を想像出来ない。

後でゼストにでも聞いてみよう。

「インターミドルかあ…そう言えば母さん、よくテレビで見てたよ

な？お前も出たかったの？」

「違うよ、いやぁ…皆見所あるなあって。」

ここでも発揮される元教導官魂。

結婚して引退されたのではありませんかと、ワタルは心の中で思
いながらも口に出すと怖いので言わない。

「でもインターミドルで強い子って本当に強いよね？」

「そのままプロに行く子もいるぐらいだからなあ。」

ドクンッ！

何故だろう…？

ドクンッ！

先程まで思う存分戦って…、

ドクンッ！

体もボロボロでヘトヘトのはずなのに…、

ドクンッ！ドクンッ！

心が沸き立つのを止められない…。

ドクドクドクドクッ！

グツと胸の前で拳を握るアインハルト。

戦いたい…もつと戦いたい…。

見知らぬ強敵達と、まだ見ぬライバル達と全力で戦ってみたい。

そして、アインハルトにとどめをさしたのは他ならぬ、ヴィヴィオ

の言葉だった。

「私、公式のステージでアインハルトさんと戦いたいです！今度は負けません…全力で戦って、勝ちます！！」

「…ありがとうございますヴィヴィオさん。私もヴィヴィオさんと戦いたい…インターミドル、私も挑戦させていただきます。」
初めてだった。

霸王流も何も無く、自分の意思で、自分の為の戦いをしようと決意したのは。

その事に、当の本人も驚いている。

『うむ、よかったな。』

「ああ、頑張つてよアイン。」

「はい。」

シンもハジメも、ルーテシアやヴィヴィオ達を応援している。
もっともこの場にいる全員は知る由も無いが、ルーテシアのインターミドル出場には戦いたいとは別に目的がある。

『開発した新システム【仮面ライダーバスター】の装着者を見つける』

ネオファンガイアと戦うのだ…それなりに強い人材でなければ務まらないだろう。

ルールはどうやらメガーヌの時と変わっていない様子。
コーチとセコンドをつけなければならないが、そこはノーヴェを初めとするナカジマ一家が引き受けてくれるし、なんと今回は特別に現役教導官である襟立ケイスケ/仮面ライダーイクサも訓練に付き合ってくれるらしい。

何でも『イクササイズ』なる訓練方法を地球で発見したのだという…聞いた話だと『最高の運動』らしい。

「ノーヴェさんなら安心です。」

「だよ。ノーヴェ、何だかんだでみんなの事一番気に掛けてくれるし。」

「あ、そうそう。」

そこで、メガーヌが何かを思い出した様に切り出した。

「確かコレも変わってないわよね？ほら…、

『参加者は安全の為、クラス3以上のデバイスを有している事』

っていうの」

「え？」

そこで…アインハルトは完全に固まってしまった。

そう、何を隠そう彼女、デバイスを持っていない。

独自の身体強化魔法でバリアジャケットを装備できる為必要無かった。

ネオとの戦いで危険になってもオトヤの変身するダークキバや、ハジメのカリスが守ってくれたりしてたので必要性は感じなかったが…。

「デバイス、持ってないです…。」

「え？アイン、デバイス無かったの？ああ…そっぴや使ってること見た事無いな…。」

ちなみにアインハルトがデバイス未所持という事を何故かここで知ったオトヤ。

「じゃあ、コレを機に作りましょう！！」

「でも…古代ベルカエレンヘントのデバイスは作るの難しいと…昔、両親から聞きました。」

「ウフフフ…私の人脈甘く見てもらっちゃあ困るわねえ！」
と、ここでルーテシアは自信たっぷりな表情に。
もうシンは嫌な予感しかしていない。

「私とゼストの一番古い親友とその保護者さんってば次元世界にその名も高いバリツバリ古代ベルカな大家族！！八神家の皆さんにお願いすればきつとノリノリで組んでくれるわ！！！！」

「私の…デバイス？」

「うん、八神司令とかにお願いしてみるよ！後でメール送っとくからね！」

「はい…ありがとうございます！」

ヴィヴィオのクリスを弄りながらアインハルトはルーテシアにペコリと頭を下げた。

とりあえずあの家族に頼めばなんとかなるだろう。

「八神家かあ…アスム元気かなあ…？」

「あ…最近忙しいって言ってたから連絡取ってなかったねえ。」
古い友人の事を思い出す登夫妻。

今頃『アスム』なる人物は…色々大変だろう…。

「母さん、確かアスムんとこ前に行っただろ？はやてどうしてた？」

「うん、退院したばつかでぐったりしてたよ。後、アスム君のサポートとか行つて響鬼流の人達が何人か来てた。」

実ははやて、数ヶ月前まで入院していた。

その為【響鬼の世界】からカブキを初めとするアスムの弟子達がゾロゾロと…。

と、まあそれは置いておいて…、

「頑張りましょうねアインハルトさん！！」

「八神司令にさいつつここのデバイス頼むから、期待してなさい！」
「はい！」

改めて決意を新たにする参加組み。

するとアインハルトはクルリとオトヤの方を向いた。

「オトヤ君、お互い頑張りましょうね！」

「へ？何言ってるの？」

「はい？」

「僕、出ないよ？」

「(OOA)OO」

何気に本日、一番の衝撃だった…らしい…。

Re/birth・I インターミドル（後書き）

アインハルト「というわけでユートピアさん作『IS>インフィニット・ストラトス<黒き牙と永遠の月』より音梨楓さんです。」

楓「音梨…楓…です。」

ヴィヴィオ「で、今回のご相談は？」

楓「はい、実は…私の通っている学校、女子高同然なんですが…何故か私、色んな女の子に追われたりしてて…。」

ヴィヴィオ「追われる？何か悪い事したの？」

楓「いえ…何故かキスとか、そういう事されるんです。」

アインハルト「キッ!？」

ヴィヴィオ「アインハルトさん、言葉だけで気を失いかけるのやめてください後続きませんので。う〜ん…私から言える事は1つですね。『嫌な事は嫌とはつきり言う!』『コレです!』」

楓「うむ〜…。」

セシリア「楓さん!?!?!」

ラウラ「楓を返せ!!私の嫁だ!?!?!」

鈴「あー!?!?!何か知らない奴増えてる!?!?!」

シャルロット「殺つちゃってもいいよね…?」

楓「来た!?!」

アインヴィヴィ「じゃっ!?!そういう事で!?!」 逃亡

楓「え!?!あつ、ちよっ…私を1人にしないでください!?!?!?!?!」

Re/birth・II 霸王の愛機(前書き)

アインハルト「お悩み相談室のお時間でーす！」
ヴィヴィオ「今回の方は……………こちらー！」

ゆり「どうも、お邪魔するわね。」

アインハルトが受けた本日一番の衝撃。
オトヤがインターミドルに出場しない。

彼の性格を考えれば出場しそうなのに…彼女はその事が物凄く納得
いかなかった。

ダークキバともう一度戦ってみたかったし、何よりつまらないから
だ。

「え！？どうしてですか！？そんな事言わないで出ましようよ！！」

「とは言ってもねえ…まあ、出れるなら出たいけど…。」

「だったら出ればいいじゃないですか！ヴィヴィオさん達も出るみ
たいですし…。」

「ストラトス、ストラトス。」

そこでシンが助け舟。

彼はルーテシアが持っていたチラシを取り上げ、アインハルトに渡
す。

すると彼はチラシのある一部分を指差し、フルフルと頭を横に振る。

「ココ読んでみ。」

「え？ああ、はい…えっと…」なお、安全の為此の大会への出場
は原則として魔導士のみ許可され、物理的攻撃方法しか持たぬ者
の参加出場を禁止する『…って、は？』

つまり、要約するところいう事、

『魔法使わない奴が出場すんじゃないよバーカ』

である。

「(OAO)」

「キバもカリスも物理兵器みたいなもんだし、シンの魔法銃も魔法
入っただけで素材とか普通の弾丸だから…。」

「(OAO)」

「あ、でもちゃんと応援とか行くからさ！他にも練習とか付き合うから！あ、ああ、ネオは僕等でちゃんと倒すし！ね？」

『ダメだオトヤ、アイン嬢完全に固まってる。』

内心物凄くシヨックだった様だ。
何気に、オトヤはアインハルトが本当に心を開ける様になった初めての友達。

出るなら彼やハジメ、シンも一緒にと思っていただけに…その分反動は馬鹿でかい。

ちなみにオトヤは魔法関係は一切使えない…魔力自体はあるが、使い方を知らない。

魔皇力の使い方なら完璧(笑)にわかる『らしい』が…現状はそんなもん一切役に立たない。

「ヴィヴィオちゃん、俺も応援するよ。頑張つてね。」
「ありがとうございます！ハジメさん！」

「ルー、お前対戦相手に変な精神的打撃与えんなよ？」
「加藤、アンタ私を何だと思ってるのかしら？」

一方、他のメンバー達はそれなりに楽しんでいる様だ。
『アイン嬢、ならこうしよう。お前がインターミドルで頑張ったら

1週間、この馬鹿好きオトヤに使っていい。』
「へ？」

「ダキバット、お前…電子レンジの中の部品って電氣流したら電圧何V出るか知ってる？」

どこから用意したのか…オトヤはすでに電子レンジをスタンバっていた。

ちなみ出る電圧は凡そ4000V…普通は死にます。

あとオトヤがこんな事知っているのは、前にやってたテレビの内容そのまま覚えてるから。

『おいヤメ口馬鹿！？……でも、お前も嫌じゃあ無いだろ？そりゃそうだよなあ…お前も男だもんなあ…？』

「ダキバット、お前の体格：大きい扇風機なら動作中でも入れそうだね。」

『どうもすいませんでしたお許し下さい帝王様。』

以上、オトヤとダキバットのダークキバ流コント終了。
普通ならここで終わるが：今回はそうでは無かった。

「好きに使っていい…オトヤ君を…好きに……。」

「ア…アイン？」

『おお、これは思った以上に効果覲面！やったなオトヤ。』

「ハジメー！…風呂場からドライヤー取って来て？」

『何に使う気だあああああ！！？？』

その後、ダキバットが絶滅させられてから数時間後…深夜。

ここは少女組の部屋。

すでに全員寝静まっており、起きていたのはアインハルトだけ。

どうやら寝付けなかったらしい。

目を擦りながら外に出てみる。

夜風が気持ちよかった。

「…そう言えば…」

と、彼女は手に持っていたクラウドの自伝本に目を向ける。

ルーテシアから貰ったそうだ。

「オトヤ君やヴィヴィオさんに会ってから…あんまり悲しい夢、見なくなっただな…。」

今まで彼女はクラウスの記憶を断片的に夢として見ていた。だが、オトヤやヴィヴィオと打ち解けて以来、あまりその夢は見なくなつた。

というか、一切見てない。

代わりにクラウスの楽しい時の記憶や、『アインハルト・ストラトスとしての』夢を見る様に…。

ヴィヴィオ達と稽古する夢、友達と一緒に弁当を食べたりする夢、オトヤ達と遊ぶ夢。

そんな楽しい夢ばかり。

「『真の霸王流』…今まで私はクラウスの様に命を賭けた『戦い』をしなければたどり着けないと思つてたけど…そうじゃないんだ…。ヴィヴィオさん達みたい…楽しく、けれども決して遊びじゃない…そういう『勝負』をすれば良かったんだ…。インターミドル…クラウス。」

アインハルトは目を瞑ると、クラウスの本をギュツと抱きしめた。そして…、

「私は、そこで戦つてきてもいいですか…？」

『いいんじゃないか？』

「へ？」

後ろから声がして、思わず振り返る。

そこにいたのは確か数時間前にオトヤに絶滅させられたダキバット。

「ダキバットさん、起きてたんですね？」

『うむ、傷が異様に疼いてな。』

「それはどう考えても100%確実に絶対アナタが悪いです。」

『むっ…。』

反論できないから困る。

そう言えばこの2人…何気に2人だけになったのは初めてだ。

『クラウスか…奴は強い男だった。』

「あ、そう言えばダキバットさん…古代大戦の時もキングと一緒に…。」

『ああ、奴は本当に強かったが…同時に、中々愉快的な男だった。我々のムードメーカーだった。』

「そうなんですか？」

意外だった。

今までのクラウスの記憶や本から生真面目な人物だとばかり思っていたが…。

『奴が元々格闘技を始めたのは『楽しむ』為だったのだ。だったら正統継承者であるお前が自分が楽しむ為に使わずにどうする？お前はお前の格闘技を思う存分楽しんでくれれば良い。』

「ダキバットさん…。ありがとうございます、少し気が楽になりました。」

『うむ、ならば良かった。私とオトヤはお前達を守る為にネオと戦う、勿論応援もする。だから、お前はお前なりの『霸王流』を証明して来い。』

「…はいっ！」

本当に気が楽になった。

やはり、クラウスと同じ時代を生きたダキバットの言葉には中身が詰まっている。

なんだか気が楽になったら急に眠くなってきた。

明日はルーテシアがはやてに連絡を取ってくれるし…早起きしなければならぬ。

だがその前に一つ聞きたい事が…、

「あ、そう言えばインターミドル頑張ったらオトヤ君好きに使って

いいんですよね?」
『うむ、煮るなり焼くなり好きにしる。』

翌朝

他のメンバーはすでに朝の散歩に出かけた。

オトヤ、ダキバット、アインハルト、ルーテシアはそれに付き合わず、ルーテシアの研究室へ。

はやてと連絡を取る為だ。

今、ルーテシアが番号を入力している…いいよだ。

「あの、八神司令ってどんな方なんでしょうか?」

「はやてさん?…ん…何て言えばいいかな?」

『喰えない奴…と、でも言っておこうか?』

「怖い人とかかな…?」

「いや、そこまで心配しなくてもいいよ。」

そうこうしていると、ようやく通信が繋がった。

まず、最初にモニターに出てきたのは…、

『おいーっすルーラー!』

「おいーっすアギト!」

どうやらミガワリボウギヨは発動しなかったらしい。

『ああ、ああ！泣き止んでえなあ、響！』

『はやてさん、僕が。』

『お願いなあ。』

画面に映っていたのは良く見ると赤ん坊。

それとそれを抱いていた女性。

彼女の隣にいた男性が赤ん坊を受け取ってあやすと、赤ん坊は徐々に泣き止んでいく。

「み…耳が…耳が死ぬ…！！」

『甘いぞオトヤ…私はもう死んでいる…！！』

「あ…響ちゃん、元気そうで何よりです…はやてさん、アスムさん。」

苦笑しながら女性と男性に言うルーテシア。

そう、何を隠そうこの女性こそが今回アインハルトがお世話になる八神はやてその人。

隣にいるのはその旦那の八神アスムと、最近生まれたばかり娘 八神響だ。

『そちらも元気そうでなによりですルーテシア。ほら響、ルーお姉ちゃんに挨拶。』

と、響の小さい手を振らせながらアスムが挨拶。

ちなみにまだアインハルトは固まったまま。

「(OAO)」

「アイン、とりあえずこの世に戻ってこようか？」

『黄泉帰りのツボ！！』

「はうつ！？」

ダキバットがアインハルトの後頭部を刺激し、ようやく彼女は元に戻った。

それ程響の鳴き声が効いていたらしい。

「あ、はやてさん！この子が…、」

『うん、聞いとるよー！霸王イングヴァルトの子孫、ハイディ・ア

インハルト・ストラトス・イングヴァルト。霸王流を継承しててちよつと前までやんちゃしとったけど今はノーヴェ師匠や友達と一生懸命頑張る真面目なええ子やって。そんな子の為ならいくらでも協力するよー!」

昔から努力家好きなはやて。

勿論、努力して仮面ライダー響鬼の座を手に入れたアスムもそんな子が大好きだ。

2人だけじゃなく、先程のアギトや…その他の八神家の面々もインハルトの様な子の為ならいくらでも協力してくれるだろう。

「で、公式戦用のデバイス…どんなんがええか決まっとする?」

「どんな物でも相談に乗りますよ。」

「はい…出来れば武器型じゃない方が好ましいです…。格闘技1本で行きたいですし。」

「格闘家屋さんやもんねー。ほんなら、動きを阻害する装着型もよくないな?」

「ですね、スバルのデバイスもワタルの…ああ、今はオトヤのですが、ザンバットソードとかもそれなりに重いですし。」

スバルのリボルバーナックルはとりあえずはやての力では持てないあとザンバットソードが重いのは、アレ…選ばれたファンガイアしか使えないのでそう感じるだけでオトヤとかワタルとかからしてみたらメチャクチャ軽い。

「ですから、ヴィヴィオさんのクリスの様な補助・制御型がいいなと。」

「成る程、確かにそれが一番君に向いているかもしれないね。それに、それだけなら機体はすぐに作れそうです。」

「せやなあ。よっしゃ!ほんなら霸王の愛機…この八神はやてとりイン&アギトがノリノリで組んであげよ!」

「はやてさん、病み上がりなんですから無理はされないように。」

「ややなあアスム君、もう2ヶ月前の話やないかあ。もう大丈夫や、響の面倒お願いなあ。」

『お任せを。あ、オトヤ。今度アインハルトさんを連れて一度うちに来てください。彼女の能力検査とかもしないといけませんので。』

「了解つす。んじゃ、2人ともお元気でー。」

オトヤのその言葉を最後に、通信は終了。

これでアインハルトのデバイスも用意出来たも同然だ。

後は…それまでの間、訓練あるのみ。

消えた画面にもう一度お礼をすると、アインハルトはスクッと立ち上がった。

その目には…闘志の炎が。

「オトヤ君、少しお付き合ってもらえますか？」

「…OK、行こうかダキバット。」

『うむ。さらばだルー嬢。』

と、部屋を出て行く3人。

粗方の予想はつく…訓練だろう。

今の彼女とならオトヤも遠慮無しで戦ってくれるはずだ。

「…………さて…っと。」

ならば自分もやるべき事をやらねば。

オトヤ達から見えない位置に置いてあったカプセル。

その中には『仮面ライダーバスター』のツールが眠っている。

時期はもうすぐだ。

「もうすぐ、アナタの主が決まるわよ…バスター。」

ヴィヴィオ「キュアノアさんの各作品に登場するキュアムーンライ
ト/月影ゆりさんです！」

アインハルト「ちなみにうちの作者の書いている『ダブルクライ
改め『ダブルクライン』鐵』の登場人物である左翔太郎さんと
黒崎朱湮さんとは仲良しです！」

ゆり「……その事なんだけどね……？」

アインヴィヴィ「？」

ゆり「あの2人のスキンシップ……ちょっと度が過ぎているという
か何と言うか……あ、別に嫌じゃ無いのよ？でも……少し恥ずかしいとい
うか……。」

アインハルト「成る程ですね……どうしましょうヴィヴィオさん？
ヴィヴィオ「やっぱりあの2人に言うしか無いんじゃないんですか
ね？」

アインハルト「しかし、厚意でやっている事ですし……。」
ヴィヴィオ「アインハルトさん、厚意は時として人を無意識のうち
に傷付けたり、悲しませたりするんです。厚意が全て『良い事』と
いうわけでは無いのです。」

アインハルト「うっ……年下から何か凄い事言われてる私……。」
ゆり「どうしたらいいのかしら？」

ヴィヴィオ「私から一言言いたいところですが、ゆりさん……やはり、
この問題の解決策としてはアナタ自身からその旨を翔太郎さんと朱
湮さんに伝えていただく他ありません。辛いとは思いますが……それ
しか無いでしょう。」

ゆり「……わかったわ、今度言ってみる。ありがとう2人とも。お
いくらかしら？」

ヴィヴィオ「いえいえお金は頂きません。相談者さん達の幸せ……そ
れが私にとって一番の報酬なのです。」

アインハルト（アレ？私なんだがはぶられてる？）

Re/birth・IIII 帰宅（前書き）

アインハルト「お悩み相談室ー！」

ヴィヴィオ「今回は…この人ですー！」

紗耶香「どうもー。」

「とうちやーく！」

4日間という長いようで短い合宿期間を終え、とうとうオトヤ達一
向はミッドチルダに到着。

ティアナやケイスケの様な本局勤めのメンバーはすでにいくつか前
の世界で別れており、いくらかメンバーも減っている。

いるのは登家、剣立家とその友達数名とノーヴェだけだ。

ちなみに今はノーヴェとリオ達が写真交換中、フェイトとなのはは
自分の車を取りに駐車場へ。

「んじゃ、そろそろ俺は帰るぜ？こつからなら電車が早いしよ。」

「ああ、また明日学校でなシン。」

「遅刻はするなよ。」

「わーってる。そんじゃな。あ、後オトヤ…。」

チヨイチヨイと手を振り、オトヤを呼ぶシン。

オトヤが近くまでいくと、シンは彼の首をガシッと掴んだ。

「な、なんだよ？」

「さあ、こつからがチャンスだぜ…ストラトスの奴を自宅まで送る
んだ！…そうすれば最後に『ありがとうオトヤ君大好き』って事に

…、」

「ダキバットー、絶滅タイムするぞー。」

「やめて!?!」

帰る最中に暗い顔をしていたが、どうやらシンはいつも通りらしい。

何故か学校が終わった時とかも『帰る』と言いながらも帰りたくない様な顔しているので、本当は帰りたくないんじゃないかと思ったりもしたが、どうやら大丈夫そうだ。

最後に拳をコツンと合わせ、シンは電車のホームへと消えて行った。そうこうしているとフェイトとなのはが運転する2台の車がやって来た。

登家とリオ、レイヤ、コロナはなのはの車へ、剣立家とノーヴェはフェイトの車へ。

ただしオトヤとアインハルトの2人は乗らない。

「オトヤ、お前帰らないのか？」

「ココからなら寮のが近いよ。」

「私は少し歩きたいので。皆さん、お世話になりました。」

アインハルトがペコリと頭を下げるとワタルも『わかった』と言いなのはに車を出す様に促した。

エンジンを吹かして去っていく2台の車。

その場にはオトヤとアインハルト、そしてダキバットだけが取り残される。

今日は良い天気…絶好の散歩日和。

「じゃあ、帰ろうか？」

「はい。」

『うむ。』

「…。」

自宅の前で、シンは足を止めてしまった。

目の前には玄関があるのに：何故か足がそちらへ向かない。いや、何故かという表現は正しくないだろう。

何故なら彼には、その理由が痛いほどわかるから。

彼の父親はそれなりに名の知れた議員。

成績優秀な兄 ヤマトに注目している為、彼はシンの事など見向きもしない。

その癖シンの行動を何かと制限してしまう。

その時の言葉は決まって『ヤマトを見習え』だ。

今回、彼はその父に黙って出掛けてしまった。

……何を言われるか……？

「って、何ビビッてんだ俺？親父は関係ねーっの。」

フウと溜息をつくと、覚悟を決めて彼はドアを開けた。

中に入ると、靴が…2人分だけ。

1つは兄であるヤマトの物だ。

「…んだよ、親父達出掛けてんのかよ…ただいまー。」

一応兄にそう言うと、上からドタドタという音が。

上の階からヤマトが降りてくる音だった。

「シン！おかえり、楽しかったか？」

「…ああ、まあな。」

「なら良かったよ。おっ、そっだそっだ…今懐かしい顔が来てるぜ

？誰だかわかるかぁ？」

「大体の予想はつく。この時期に懐かしい顔つつたら…アイツだる？」

「年上に『アイツ』呼ばわりよくないんやないん？」

「…やっぱり。」

シンとヤマトの会話を聞きつけたのか、上の階から更に人がジャージを着た少女だった。

歳はシンより上、ヤマトより下に見える若い少女。

ぼさぼさの髪の毛を無理やりツインテールに縛っている。

「ジーク姉、久しぶり。」

「うん、元気そうやね！」

彼女の名はジークリンデ・エレミア。

シンやヤマトの幼馴染で…前回インターミドル世界大会優勝者。通称ジーク。

ヤマトの妹分でシンの姉貴分という立ち位置にいる。

「久々におじさんやおばさんにも挨拶したかったけど、出かけちゃつてるみたいで残念。」

「いいよあんなのに挨拶しなくて。お邪魔になる様なら俺もう部屋戻るよ。」

「おいおい、折角ジーク来てるんだからもっと遊ぼうぜシン？ほらほら！」

「ヤマトく、私もそろそろ練習したいんやけど…」

「ええ！？お前まで何言っちゃつてるの！？お前そんな真面目な子じゃ無かったじゃん！！ああ…俺の方向音痴で泣き虫だった可愛い

ジークと素直で可愛かった頃のシンは一体何処へ…？」

このヤマトと言う男…実は遊ぶの凄く大好き。

特におにごつことかかくれんぼとか…。

というか見ているこっちがなんだか悪者に見えて来た。

「…仕方ないよシン、少し遊んであげよ？」

「俺…疲れてるのに…もうヤダこの馬鹿兄貴…orz」

「すいませーん、ハンバーガー3つ。」

とりあえずお昼食べないといけないのでオトヤとアインハルトは近場のハンバーガーショップに立ち寄った。

いつも『ACE』の栄養たっぷりな食事や母の料理を食べていたが…やはり若者、時々こういうジャンクフードが無性に食べたくなる。オトヤの小遣いでハンバーガー3つとジュース2つを購入すると2人とダキバットは近くの公園のベンチへ。

「はい、どうぞ。」

「あの…その…本当いいんですか？お金…。」

『気にするな。どうせコイツの金だ。』

「足りなかつたらダキバットの分食べて良いよ。」

『お前つて地味にDSだよ…。』
どうしてだろう…ダキバットとやり取りする時のオトヤってメチャクチャ怖い。

いや、まあ…原因はどう考えてもダキバットにあるが…。
ハンバーガーを食べながらオトヤは考える。

(そついやここまでのんびりとくつろぐの久々だなあ…。ネオも出ないし…僕はインターミドル出ないし…)。

ここまで脱力するのは本当に久しぶりだ。

思えば最近、色々とありすぎてゆったりと休んでなかった。

いやはや本当に平和だ…今の勢いならこのまま寝れる。

(…って、寝れるかあああああああ…!!!…!!!)

ウトウトしていたのが急に目が覚め、オトヤは勢い良く立ち上がる。

そう、寝ている場合じゃない。

何と言つて現在、アインハルトと2人きり（ダキバット？何それ美味しいの？）

無意識で出来たシチュエーションだが：コレほどのチャンスは無い。ちなみに当の彼女は隣でハンバーガーをモソモソと食べている。

『オトヤ…焦らずいけよ？』

「その前にお前を絶滅タイム。」

『とりあえずザンバットソードはしまえ。』

意味不明な喧嘩をしている間にアインハルトの方はすでにハンバーガーを食べ終わった様だ。

待たせるのも何なので、とりあえずオトヤとダキバットも絶滅タイムの前に昼食タイム。

「ありがとうございました。美味しかったです。」

「うん、どういたしまして。そろそろ帰る？」

「そうですね。」

「アレが現代のキバが…。」

仲睦まじい2人の様子を、高い建物の上から覗くスーツの男がいた。天然パーマの様なボサボサの銀髪に黒いスーツ、口には煙草を加えている。

更に彼の隣には同じく黒スーツの黒髪長髪の女。

中々綺麗な顔立ちだが、目だけはやたらと濁っており、感情が籠も

つている様には見えない。

2人とも腰にカードポケットがついたベルトを巻きつけている。

「キングのクローン…か？似ても似つかないな…。」

「でも、持っている魔皇力はキングそのものよ。ホント…イライラするぐらいアイツの写し身…。」

「隣にいる少女…それなりに魔力を持っている。いいライフエナジ―だ…。」

ペロリと舌なめずりをする男。

左手をゴキゴキと鳴らすと…掌から血の様に赤黒い刃が出現。

『手刀』だ。

「ダメよ。あの子、『霸王』だわ。彼女のライフエナジーはネオフアンガイアに与えましよう？そうしないと…。」

「わかっている。『レジエンドルガ』存続の為…だろ？」

そう言つと、男は腰からカードを一枚引き抜いた。

辺りをキョロキョロと見回すと、彼は1人の男に目を付ける。

どうやら会社を首になつたらしく…昼間から自棄酒を飲んでいる。

「畜生…なんで俺がリストラなんかされるんだ…？かれこれ37年…会社の為に汗水流して営業頑張つたつて言うのによ…！！」

そんな事を呟く中年男性に、男は持っているカードを投げつけた。

カードは男の体に張り付くと、徐々に色を変えていく。

そしてそのままカードは一人で動き出し…近くの電柱に。

そこにいたのはダンボールの中に捨てられていた子猫…その子猫に、カードはズブズブと入っていく。

「にやつ！？」

「…人の『負』の感情をネオカードに吸い取り、動物に寄生させた怪人…『ネオ』、さて…コイツはどんなショーを見せてくれるかな？」

「明日から学校か…なんか憂鬱だなあ…。」

「私はインターミドル頑張りますので、オトヤ君は勉強頑張ってくださいね。でないと怒りますよ。」

「精進…させていただきます…。」

ペコペコとしているオトヤが面白いのか、アインハルトは思わずクスリと笑ってしまった。

思えば彼女のこんな顔を、今まで見た事が無い。

それだけ周囲に心を開いてきた証拠だろう。

それに何故か今日の彼女は妙に機嫌が良い…何か良い事でもあったのだろうか？

「アイン…。」

「はい？」

「インターミドル…頑張ってるね。」

「…はい！」

『お前等はいいよなあ…仲が良くてさあ…?』

「「?」」

いきなり声をかけられ、振り返る2人。

そこにいたのは蟹の様な大きな鋏を両手に取り付けた猫の様な怪人…『ネコネオ』

物凄く濁った瞳でネコネオはオトヤ達を睨み、ゆらゆらと近寄ってくる。

はつきり言つてスツごく気持ち悪い。

リ・バスして最初に出たネオがコレつて…ゲフンツゲフンツ、何でもありません。

「ネオ…何か久々だな…ダキバット!!」

『うむ!久しぶりにキバつて行くぞ!!』

「あ、私も…!」

『ガブリ!!』

ネオを前にしたオトヤは自らの手にダキバットを噛ませた。

すると彼の顔には奇妙な模様が浮かび上がり、腰には黒いベルトが。その隣ではアインハルトが持っていた鞆を投げ捨て、拳を構える。

そして…、

「変身!!」

「武装形態!!」

『絶滅タイムだ!!』

オトヤはダキバットをベルトに装着、アインハルトは体内の魔力を循環させて身体能力を強化していく。

2人の体がカツ！！と光ると、そこに今までのオトヤとアインハルトの姿は無かった。

代わりにそこにいたのはマントをはためかせた黒い戦士と、白い女性。

「光栄に思え、絶滅タイムだ！！」

「行きましよう！！」

戦士の方はキバ。

仮面ライダーダークキバ。

女性のほうは霸王イングヴァルト。

アインハルトの身体強化形魔法の一種で、『霸王モード』とも『大人モード』とも呼ばれるが…本人は『武装形態』と呼んでいる。

2人は並び立つと真っ直ぐにネコネオを見据えた。

「にやあああああ！！！！」

「うう…なんですかあのネオ…気持ち悪いです…。」

「確かに…今までに無くキモイな…。よし、行くぞダキバット！！」
『了解だ！！！！』

『ガルル！フェイク！！』

青いフェッスルをダキバットに吹かせるとダークキバはその手に専用剣『ダキバルルセイバー』を装備。

これを装備している間、ダークキバはいつもの1.5倍のスピードで動ける。

更にザンバットソードとの二刀流で構え、ネコネオへと斬りかかって行った。

だがネコネオもすばやい…ダークキバの攻撃を腕の鉄で次々に受け止めていく。

「キモイクせに強い!?!」

「オトヤ君…今いきます!?!」

はああ…と拳に力を込めるアインハルト。

彼女は飛び上がり、ネコネオの真上に。

そして…、

「霸王!弾空弾!?!」

彼女の数少ない飛び技の一つ『霸王弾空弾』。

拳に溜めた魔力を一気に相手に放つ技。

放たれた緑色の閃光弾はネコネオに命中し、一瞬だけ動きを止める。その隙にダークキバはネコネオを蹴り飛ばし、ザンバットソードのフェッスルをダキバットに吹かせた。

『ウェイクアップ!4!?!!』

「はあああああ………」

よろめくネコネオに向け、勢い良く走り出すダークキバ。

ザンバットソードを両手で握り…そして…、

ズバツ!?!!

切り裂いた。

「にゃ…におお…!?!」

「ファイナルザンバット……、」
ザンバットソードのザンバットバットを正位置に戻す。
そして、それを腰に提げながら、ダークキバはネコネオに言い渡した。
そう……、

「斬…ッ！！」

死刑宣告を。

ドカアアアアアアアアン！！！！

ダークキバが呟くと同時に爆散するネコネオ。

その場にはカードが一枚だけ残り、ダークキバはそれを拾い上げる。

「うん、久しぶりでも絶好調！」

「やりましたね。」

『上々だ！』

「現代のキバだと…やはりあの程度か…。」

「霸王もだいぶ弱くなってらね。コレは…チャンス？」

「レジエンドルガ…そして『ネオ帝国』復活の邪魔にはならなさそうだ、放置しておいても問題無いだろうが…やはり、念には念を入

れるべきだろう。」

数時間後…オトヤは無事にアインハルトを自宅まで送り届けた。

彼はアインハルトの姿が見えなくなるまで手を振っており、それに応える様に彼女もまた手を大きく振る。

どうせまた明日会えるのに…それでも、手を振らずにはいられなかつた様だ。

家の玄関を開け、アインハルトは自宅に入る。

「ただいま。」

「おお、おかえりアイン。そういえば帰るの今日だったね？」

丁度玄関先でゴルフの練習やってた父が笑顔で出迎えてくれた。

この男…いつも庭でやれ言っているのに…。

「アインお帰りなさい、お風呂沸いてるわよ。」

「うん、ただいまお母さん、お父さん。あとお父さん、練習は庭で

上に照明あるから。」

「大丈夫大丈夫、お父さん…こう見えても接着剤使うの上手いから

！！」

「それで直せるもんなら直してみて。」

ちなみに直りません、絶対に。

いつも敬語で話すアインハルトだが、家族の前だと気が抜けるのか

…敬語はあまり使わない。

というかいつもが気を使いすぎている。

夕食まではまだまだ時間がある、その間に両親にインターミドルの事を話して見た。

もしかしたら反対されるかもしれないが、それでも話さないといけない気がしたので。

「……。」

「ど…どうでしょう…?」

不安がるアインハルトを前にし、彼女の父も母もニコリと笑った。父は煙草を灰皿につぶすと、彼女に言う。

「お前が自分で決めた事なら、やってみなさい。霸王の家とかそういうの関係無く、『アインハルト』として…戦ってきなさい。」

「そうね、頑張りなさいアイン。」

「あ…ありがとう!」

思わず万歳してしまった。

もはや普段の彼女からは想像もつかないはしゃぎよう。

それを見て両親もキョトンとしてしまっている。

「アイン、最近良い事あっただろう?」

「へ?」

「ココ最近、アナタ良く笑うようになったわよ?気付かなかった?」

「あ…。」

そう言えばそうかもしれない。

先程オトヤといた時は顔に出して笑ってしまったが、軽く笑う事なら最近よくあった。

これも全部、あの通り魔事件の後からだ。

それをダークキバことオトヤに止められて…ヴィヴィオと戦って…それからだろう。

「うん…実は…」

昔だったら言えなかったかもしれない。

だが、今は自信を持って言える。

恥ずかしがらずに、こう…、

「大好きな友達が、沢山できたの!」

Re / birth · I I I 帰宅（後書き）

アインハルト「郡司侑輝さんの【仮面ライダークウガ！のごとく！】から芦河紗耶香さんです。」

ヴィヴィオ「ちなみにアシカワと言ってもどごその三十路とは一切関係ありません！」

紗耶香「実は私…好きな人がいるんですけど、彼鈍感すぎて…どうしたらいいか…。」

アインハルト「それは酷いですね！女の敵ですよ！」

ヴィヴィオ「アンタが言うな。」

紗耶香「どうすればいいのか…友樹…。」

ヴィヴィオ「それが彼の名前？」

紗耶香「はい、小野寺友樹と言つて…幼馴染なんです…。」

ヴィヴィオ「だったらまずは行動あるのみですね。鈍感ならどんどん圧していきましょう！それでもダメならひいてみるのも一つの手、大丈夫…アナタの魅力はいつか絶対に彼に伝わりますから。」

紗耶香「ヴィヴィオちゃん…。」

ヴィヴィオ「まあ、母の友人の受け売りですが…紗耶香さん、自分に自信を持ってください！あなたは十分魅力的です！この私が保証します！」

紗耶香「あ、ありがとうございます…！」

アインハルト（あら…？私、悩み相談で何か喋ったつけ…？喋って無いよね…？あれ？あるえー？）

Re/birth・IV トリバード(前書き)

アインハルト「……お悩み相談室だよー……はあ……。」

ヴィヴィオ「って、何でそんなに元気ないの!? 口調も変になつて
るから!」

アインハルト「だって私……ここ役立たずだもん……いらないうちだもん
……あ、そろそろ地獄兄弟決起集会の時間だ……。」

ヴィヴィオ「行くなああああああ!……!」

「辰巳シンジ」……えっと、いいかな?」

Re/birth・I V トリバード

いよいよ今日から学校再開。

再開と言っても休んだのは4日間だけだが…それでも長い休みが明けた1日目の朝と言うのは気だるい物。

それはオトヤも例外ではなかった。

時間は始業まで残り15分を切っている…それなのに…、

「ギヤアアアアア!!!間に合わない!!!ぜってえ間に合わない!!!」

「だから昨日はすぐ寝ると言っただろう!!!」

「仕方ないだろ!!!アインから借りた『真・仮面ライダー』、思いの外面白かったんだから!!!」

「だからって3回も見直す馬鹿がどこにおるか大馬鹿者おおおおおお!!!」

未だに着替えている途中だった。

何でも昨日、アインハルトを家まで送ったら彼女から『お勧め』と言われて借りたDVDがあまりにも面白かったらしく…3回もリピートしてしまったそうだ。

そのせいでほとんど寝ておらず、現在に至る。

ちなみにこのDVD渡す時にアインハルトが何かこのパッケージ直視していなかったが…何、気にすることは無い。

「着替え完了!学校まで振り切るぜ!!!」

「遅刻がお前のゴールだ!!!」

「オトヤ君遅いなあ…。」

自分の席で背筋を伸ばしながら、アインハルトは1人そう呟いた。別に彼がいないからといっても、何の問題も無いが…一応休みかな？と心配にはなる。

最近ではそんな彼女をからかうのがシンとハジメの学校での楽しみになってきた。

「熱いねえ…まだ夏休み前だつていうのに…いやあ、熱い熱い…。」

「ストラトス、お前地味に登に対して残酷だよな。」

「どういう意味ですか!？」

ちなみにこのやり取り、最近では日常茶飯事。

ついでにオトヤ達と打ち解けた事により、無表情だったアインハルトを避けていた学校の女子達も彼女に寄り付く様になったので最近ではクラス全体でからかわれる。

「むう…。」

「あ、そついや今日からインターミドルの練習だろ？残念だったなあ…オトヤと一緒に帰れないで。」

数分後…、

「加藤、保健室連れて行ってやるつか？」

「それよりも…病院へ…。」

自業自得である。

ちなみにオトヤが来たのはまさにシンが絶滅させられた時だった。

来て早々シンがアインハルトにボコられていたので慌ててハジメと一緒に止めた。

シンも言っていたが、今日からアインハルトやヴィヴィオ達は本格的にインターミドルに向かっの練習を開始するそうだ。

その為ネオとの戦いにはオトヤとハジメの2人だけで挑まなければいけないが…とりあえず現状は問題無い。

その事についてアインハルトは本当に申し訳無さそうに何回も頭を下げてきた。

「本当にすみません…。」

「気にしなくてもいいよ。あ、そうだそうだ…はい、コレ面白かったよ！ありがとう！」

と言いながらオトヤは鞆から『真・仮面ライダー』のDVDを取り出してアインハルトに渡した。

すると彼女はウツ、と少し嫌そうな顔になり…それに堪えながら無理やりぎこちない笑顔を作る。

「あ…あーあー…そ、そうですか良かったです！よければ差し上げますよ遠慮せずにどうぞ！」

「え？いやそんなの悪いよ。はい。」

「いいいいいやややややホント！！！！ホント~~~~ウにいいですから！！ほらほら！！」

「…じゃあ、貰うよ？」

ちなみにオトヤにこのDVD貸した理由は『怖いから』だ。

途中までは普通に見れていたが…戦闘シーン突入に加えて脊髄ぶっこ抜きのシーンで完全にアウト。

見ている途中で悲鳴を上げて両親に『もう見るな』と本気で言われた。

でも面白いと言えば面白いのでコレを機に上げてしまおう…そう考えた。

話がそれたがとりあえず今後はアインハルトは戦闘には参加できない。

最近はネオも強くなって来ているので戦力低下は痛いところだが…仕方が無いだろう。

「フフフ…お3方、誰か忘れちゃあいませんか？」

「「あん？」」

「はい？」

そう偉そうに言ってくるのは先程まで死に掛けていた男…加藤シン。彼は起き上がるとアインハルトを押しつけて彼女の席にふんぞりかえる。

「俺もその戦い、参加させてもらおうか!!」

「「『はあっ!?!』」」

「…予想通りすぎるだろうお前…。」

驚くオトヤ、アインハルト、ダキバット。

冷静にツツコむハジメ。

確かにシンにはルーテシアの口からネオの事は告げたと聞いたが…
そう来るとは。

何かいつも忙しそうなので予想しなかった…ハジメ以外。

シンは鞆の中から魔法銃を取り出し、それをオトヤ達に見せ付けた。

「コレで俺も戦う！射撃は得意なんだからな！」

「お前なあ…遊びじゃないんだぞ？」

「俺だって遊びじゃねえよ。そうだ、今夜ルーがインターミドル備えてこつち来るそうだから教えてやろう！」

「あ、おい…アイツ…。」

それなりウキウキしながら、シンはトイレに行く為に教室を出て行った。

「ふふん ミッドも久々ねえ。」

呑気に鼻歌を歌いながら、ルーテシアは単身ミッドチルダの地に降り立った。

今回はゼストもメガーヌもない…初めての単独旅行。

不安もいっばいだが、それ以上に楽しみの方が大きい様だ。

とりあえずまずはどこへ行こうか……？

「やっぱまずはなのはさん達に挨拶かなあ…？あ、でも『ACE』も行きたいし…加藤ん家は確か、行かない方が良かったのよね？」正直、一番行って見たいのはシンの家。

彼から聞いた兄である『加藤ヤマト』というのがどういう人物か見てみたいのだ。

聞いた話では勉強運動何でも出来る嫌な奴…という印象だが、実際は案外子供っぽい心優しい青年である事はこの時はまだ知る由もない。

彼女の手に提げられたスーツケースの中には彼女の生活用品に加え、『バスタードライバー』と『バスターバックル』も入っている。

願わくばコレの持ち主が見つかる事を祈りながらルーテシアは空港お軽い足取りで出て行く。

久しぶりのミッドの空気を満喫すると、彼女が最初に定めた行き先は…、

「やっぱ『ACE』かしらね…お腹すいたし！」

レストラン『ACE』こと創立家だった。

夏の日差しを日傘で遮りながら、歩くルーテシア。

彼女は知らない事だが、実は『ACE』…空港からかなりの距離がある。

ついでに言つとルーテシアはタクシーに乗る為のお金を持ち合わせていない。

そんな調子だといつか…、

「つ…疲れた…お腹すいた…（涙）」

こうなる。

ミッドのタクシーは地球や他の世界よりも単価が高い。

一度乗つたら…当分色々我慢しないとこの先やっていけない。

体力が限界寸前のルーテシア…その時だった。

彼女の元に学ランを来た長身の男が駆け寄り、更に鞆からパンを一つ取り出すとルーテシアに差し出してきたのだ。

「…ふえ…？」

「君、大丈夫！？ほら、コレ喰つて元気出して！どこかいくつもりだったのか？俺送つていくよ？」

この何とも馴れ馴れしい善人っぽい男が差し出してきた焼きそばパン。

何という香ばしい香り…いやいや、と頭を振るう。

（ダメダメ、知らない人に着いて行つちゃ行けませんってゼストやママ言つてた！！うん、ダメダメ。）

「あ、まだ名乗ってなかったっけ？俺、加藤ヤマト…って、君どしたの？」

「ナンパね!!」

「は？」

「フフフ…残念だけど…私の御眼鏡に適う人材なんてそうそういないのよ!!ほら、彼女が欲しけりゃとつと他当たりなさい？」

(…うわあ…めんどくせーのに関わっちゃったなあ…。)

その頃、スーツの男は某所で新たなネオを生み出していた。

オウムのような…はたまたインコの様な…いや、クジヤクの様なの？

とりあえず鳥っぽい姿にゴリラの腕を持った怪人『トリネオ』。

スーツの男が煙草を吸っている間に何人も人間やファンガイアを殺害し、ライフエナジーを大量に集めていた。

ライフエナジーを吸収するたびに背中の中翼が大きくなり、それに伴いゴリラの腕が収縮していつている。

「もうすぐ『進化』か…おいトリ、次はコイツ狙え。」

そう言つて男はスーツのポケットから写真を取り出すと、それをトリネオに渡した。

そこに映っているのは……、

「ルーテシア・アルピーノ。それなりに魔力のある魔導士だ。そいつのライフエナジー喰らえば一気に2段階は進化できるかもな？」

ようやく『ACE』に辿りついたルーテシア。

ちなみに来るまでの間ヤマトに負ぶってもらった。

そのせいで現在、ヤマトはテーブルの上で死に掛けている。

「ったくアンタ、加藤の兄貴ならさっさと言いなさいよねえ。」

「へへ…俺…とりあえず今日生きて帰れたら宿題するんだあ…。」

そんな無駄な死亡フラグ立てないで下さいと言いたい気持ちをグツと堪え、厨房からセツテが出てきた。

彼女はトーレと共にここ『ACE』で住み込みで厄介になっている…ちなみにフェイトの誘い。

2人でここでウエイトレスとして働いているが、今日はトーレの方は別のバイトがある為彼女1人。

「それにしてもルーお嬢様、お久しぶりですね。」

「おっすセツテ！今日トーレはいないんだ？」

「ええ、毎週水曜日だけ保育園の保母さんやってますからね。ご注文は？」

「うーん…じゃ、スパゲッティ！加藤兄、お礼に何か奢るわよ？」

「タクシーにも乗れない子に奢ってもらうのはさすがに…寧ろ俺奢るぜ？とりあえず俺コーラで。」

「かしこまります…あ、ハジメお帰りなさい。」

注文をとっている最中にハジメが帰宅。

オトヤ、アインハルト、シンも一緒だった。

ヤマトの顔を見て、シンの表情が固まる。

「ルーさん、案外早かったすね？ん？こっちのイケメンのお兄さん誰？」

「兄貴…なんでいんだよ…？」

「兄貴？」

その言葉に首を傾げたオトアインハジ。

実はシン、自分の家族の事とか一切オトヤ達に話した事が無い。動揺するシンとは対象的に、ヤマトは笑顔で手を振ってきた。

「おーシン！奇遇だな！お前も飯？今日お袋達いねえからなあ…お、そっちの子がオトヤ君だね？」

随分と馴れ馴れしくて、でも爽やかな人だなあと思いつつながら中等3人組はヤマトの顔を見回す。

とりあえずでかい…どう見ても180センチ以上は身長ある。

「弟から話し聞いているよ。俺、加藤ヤマト。シンの兄貴で空港とこにある高校の3年ね。趣味はかくれんぼだ！！」

「『すげえ趣味！！』」

思わず突っ込んでしまったオトヤとダキバツト。

後ろではセツテが『先越されたorz』と呟いているのは内緒だ。

「兄貴…なんでルーといえるの？」

「おお、下校途中に腹空かせて倒れてるルーちゃん見つけて、それから浦島太郎は乙姫様を担いで竜宮城までやってきましたとき、めでたしめでたし。」

「色々混じってねえかソレ!？」

ヤマトを見ると機嫌を悪くしたシンだが、オトヤは今のやりとりで十分分かった。

この2人、仲良いな、と。

自分もヴィヴィオとたまに変な事で喧嘩したり、ちょっと気に喰わ

ないなと思うところがあっても基本は仲が良い。

この2人も同じ様なものだ。

それにヤマトという男、凄く良い人っぽい。

「何か、嬉しいです。」

「ん？何が？」

突然アインハルトがそう言い出したので、テーブルに座りながらオトヤはたずねた。

同じ様に彼女も席に座ると、セツテが持ってきてくれた水を一口飲み、言う。

「少し前まで私の周り、誰もいなかったのに…今ではこんなに沢山の友達がいるなんて…。」

「コレだけじゃないよ。コレからも沢山増える…人生まだまだ長いしね！」「

「…うん。」

「？」

気のせいかな。

いつもなら『はい』と言うはずなのだが…今彼女、『うん』と言ったか？

そういえば前に比べると最近、会話が少し砕けてきたなと思う。

それだけ『友達』に慣れたのだろう。

これは喜ぶべき事だった。

「勘定。」

そう思っているとオトヤ達から少し離れた席にいたスーツの男が立ち上がり、レジを済ませて外へと出て行った。

彼はネクタイを少し緩めると、軽く口笛を吹き…そのままどこかへと去っていく。

そして…、

「クオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ!!!!!!!!!!!!!」

「くくくく!!!!!!」

窓を突き破り、トリネオが姿を現した。

赤いオウムの様な…とりあえず鳥。

背中には大きな翼と、体には小さなゴリラの腕が。

「ネオ…またか！ハジメ、ダキバット!!!」

「ああ…ここはこれ以上傷付けさせない!」

『絶滅せよ!!!』

『ガブリ!!!』

ダキバットがオトヤの腕に噛みつき、彼の体に魔皇力を注入させていく。

その隣ではハジメが腰にカリスラウザーを出現させ、カードを構えた。

「変身!!!」

『チエンジ』

ダキバットとカードをそれぞれのベルトに装着させると、2人はその姿を変える。

仮面ライダーダークキバとカリスだ。

2人は拳を構えると、お客さん達に逃げる様に呼びかける。

「アイン！皆を頼む！！」

「は、はい！！」

「行くぞ登…はあああああ！！！！」

まずはカリスのパンチがトリネオを捉えた。

だがトリネオは空へ飛び上がりそれを避けると、口から炎の弾丸を射出。

カリスに当たる寸前で、シンの魔法銃がそれを撃ち落した。

「加藤…感謝する。」

「おつ。」

「おいシン！危ないだろう！！」

と、ここで黙る分けないのがブラコンお兄ちゃんのヤマト。

援護とはいえ、シンが戦っているのが許せないのだろう。

「シン！お前何考えてるんだ！！早く逃げるぞ！！」

「るっせえ！コレは俺が決断してやってる事だ！！兄貴に何か言われる筋合いはねえ！！」

「だからって…お前なあ！！」

「加藤！！加藤兄！！上！！」

「…は？」

ルーテシアに言われて2人は揃って上を見上げる。

そこにはトリネオが…口を開けて2人を狙っていた…。

『バツシャー！フェイク！！』

だがその前にダークキバがダキバツシャーマグナムでトリネオを撃ち落とし、2人を守った。

武器をマグナムからザンバットソードに持ち変え、カリスと並ぶ。

「観念しろネオ!!」

「お前にもはや勝ち目は無い。さっさと降伏しろ。」

「ぐううう…キバあ…カリスう…!!こうなれば…!!」

よるよると立ち上がり、トリネオが逃げ惑う客の1人に目を付けた。猛スピードで客に取りつくのと、その首筋に噛み付き、ライフエナジ―を根こそぎ吸い出していく。

「なっ!?!や、やめる!!」

慌ててダークキバがザンバットソードを振りかざすが時すでに遅し。客は全てのライフエナジ―を吸い出されて地面に倒れ、トリネオは素早く他の客に噛み付く。

その度に腕が消えていき、代わりに翼が大きくなっていく。

「おおおお!?!何だあのバケモン!?!ムチャクチャだぞ!?!」

「兄貴は黙ってる!!」

プハアと満足したように客を離すと、トリネオの体に徐々に変化が。まず、ゴリラの腕が完全に消滅し、代わりに翼が異様に巨大化。顔もオウムの様な顔からタカのように。

体の赤も更にきつくなり、姿かたちは完全に獣型に変わってしまった。

「何だよ…コレ?」

「さあ…ここからが本番だ…キバ、カリス…!!」

トリネオが進化した新たなネオファンガイア『バードネオ』、誕生。

Re/birth・IV トリバード（後書き）

ヴィヴィオ「今回は辰巳翔さんの『魔法少女リリカルなのは』世界を守りし者達』の辰巳シンジさんです！！」

アインハルト「離してー！ー！ー！私は！ー！私は行かないやああああー！ー！ー！」

ヴィヴィオ「行くなっつってんだろっこの馬鹿先輩がああああああああああ！ー！ー！ー！」

Tシンジ「えっと、抑えるの手伝おうか？」

ヴィヴィオ「是非！ー！ー！」

数分後…、

アインハルト「…。」

ヴィヴィオ「落ち着いた？」

アインハルト「…後悔はしてます、でも反省はしてません！ー！」

ヴィヴィオ「てい。」 聖王チヨップ

Tシンジ「初めて貰っていい？」

ヴィヴィオ「あ、すいません…で、ご相談は？」

Tシンジ「はい、実は俺のところ…ツツコミ不足なんです！ー！」

ヴィヴィオ「は？」

Tシンジ「弟のリユウセイも時々ボケるし…どうすれば…！？」

ヴィヴィオ「オト兄貸してあげます。あと、ついでにフィリップさんも貸してあげます。はい、お悩み解決！。」

Tシンジ「もっとしっかりやれよ！？」

アインハルト「私役立たずでしょうか…？どうなんでしょうか？」

オトヤ「とりあえずもつと積極的に会話に参加しようよ…一応、君
ヒロインなんだからな。」

Re/birth・V トランスフォーム(前書き)

アインハルト「あ…もう相談室の時間か…やんなっちゃうなあ…。
ヴィヴィオ「私の悩みはこの人が地獄兄弟になりかけている事です
！！自信を取戻させる為にも、今回はアインハルトさん1人にやら
せます！！」

アインハルト「ええ…？」

ヴィヴィオ「大丈夫！！アナタはやれば出来る子だから！！それ
は早速、今回の相談者カモン！！！」

Kフェイト(不安しか感じられない……。)

Re/birth・V トランスフォーム

人々のライフエナジーを吸い尽くし、進化したトリネオ…いや、バードネオ。

姿かたちはまだ人型に見えた第1形態に比べると、この第2形態は完全に獣化していた。

突然のネオファンガイアの新たな特性に、ダークキバもカリスもただ驚くしか出来ず…呆然と立ち尽くす。

それはシンやルーテシア達も同じ様だ。

「おいおい…ネオって進化するのかよ…聞いてないぞ!？」

「無駄口叩くな登!…倒せばいいだけの事だ!！」

『ドリル』

カードをカリスラウザーへとラウズすると、カリスはカリスアローを構えて走り出した。

アローを振りかざしバードネオへと攻撃を仕掛けるが、それは簡単に交わされ、逆にその鋭い鍵爪で背中を切り裂かれて地面へと叩きつけられる。

ギシギシという音を立て、カリスの装甲に少しずつ亀裂が…、

「ハジメ!！」

「剣立!!!くそっ!!!」

クルリと振り返ると、シンが目を付けたのは…ルーテシアの鞆。

そこから見えている青と緑のカラーリングの銃だ。

彼はそれを抜き取ると、そこへフェッスルをセットしてバードネオへとセット。

『フル・イグニッション』

「オトヤどけ！！うおおおおお……、」

「シン、お前何するつもりだ！？」

「兄貴は黙ってる！！喰らえ！！」

『ドライブ・シユート』

銃口が光ると、そこから緑色の閃光が真っ直ぐバードネオへと放たれた。

しかしバードネオはカリスをそちらへ投げ飛ばし、自分自信は空へと飛び立ち、そのまま去っていく。

バスタードライブバーの直撃を受けたカリスはハジメの姿に戻り、地面に倒れてしまった。

「ハジメ！！おい、ハジメ！！」

「あ…悪い、剣立…。」

「ちよっと加藤！アンタ勝手に何やってんのよ！？」

「へえ…アイツの作ったネオ、それなりに良い仕事してるわね。」
『ACE』の屋根の上で去っていくバードネオを見つめていた黒服の女。

黒服の男とは『同胞』らしく、彼女も手から手刀を出していた。刀をしまつと、ポケットから『ネオカード』を取り出し、辺りを見回す。

「それじゃ、私もそろそろ仕事しようかしら？ああ、あれなんか良

いわね。」

そう言つて彼女が目を付けたのは、バードネオに恋人を殺されて泣き叫ぶ男。

彼に向かつてカードを投げつけると、カードは彼をすり抜けて近くにいた…ゴキブリへ。

カードとゴキブリが重なると、ゴキブリはその姿を変え始めた。

ゴキブリをベースにカマキリの腕が取り付いた怪人『ゴキブリネオ』だ。

誕生すると同時に、ゴキブリネオは自分の親とも言える男に覆いかぶさり、そのライフエナジーを吸い始める。

「さてと、それじゃ進化はあっちに任せて…こっちはキバとカリスの排除に勤しみましょ。」

ハジメは『ACE』で治療する事にして、オトヤ、シン、アインハルト、ルーテシア…あとついでにヤマトはバードネオの追跡を開始「つて、何で兄貴も来るんだよ!？」

「誰かが傷つくつてわかつてんのに何もせずにいれつて方が無茶な相談だからな！」

そんな感じで着いて来た。

運動神経は良さそうなので別にいいか…いや、良くない。寧ろシンと一緒に帰れと言いたい。

戦うのは自分だけで十分…オトヤはそう考えていた。

アインハルトにもルーテシアにも戦つて欲しくない、戦うのは仮面ライダーである自分だけでいい。

「アイン、あのネオと遭遇したら皆連れて逃げて。その後はそのま

ま帰ってね。」

「え？ネオはどうするんですか？」

『私とオトヤで形をつける。何、心配いらんよ。』

ダキバットがそう言ってくれるが、やはり心配なものは心配。

確かに彼は自分に『もう戦わなくいい』と言ってくれたが、それでも彼と一緒に戦いたかった。

「言つとおりしないと怖い話聞かせるよ？」

「……オトヤ君つて、時々物凄く卑怯ですよね？」

『まあそう言つな。』

「……………」

そんな2人のやり取りを見ていたのはヤマト。

彼は走りながら後ろ向きになり、オトヤ達の前に。

ちなみに後ろ走りやってます。

「ん……ねえ、君等付き合ってるの？」

「「はあっ!?!?」

『うほつ。』

驚きのあまりオトヤもアインハルトも立ち止まり、勢い余って顔から地面へダイブ。

2人とも溢れ出る鼻血を抑えてゆっくりと立ち上がった。

「いやあ、妙に仲良いなと思ってさあ……オトヤ君の時だけ妙に親しそうな話し方するし。」

「兄貴、今それどころじゃない。大真面目にそれどころじゃない。」

「加藤兄、アンタ後でちよっと面貸しなさい。」

「あるえー？」

あまりにもふざけすぎた為、実の弟とルーテシアの2人からボディブロー喰らってしまったヤマト。

ついでにこの後、アインハルトからも一発ビンタ喰らった。

緊張感0……おもにこの馬鹿ヤマトのせいだ……。

その時だった…、

「きゃあああああああああ！……！！！」

「！！！ ネオだ！！！」
遠くで聞こえた女性の悲鳴。

この声……聞き覚えがある……。
トーレと一緒に保育園でアルバイトをしている……。ディエチだ。
急いでそちらの方へ向かうオトヤ達。

アインハルトは彼の指示通りにシン達を逃がそうとするが、そんな
のお構い無しに全員アインハルトを振り切ってしまった。

「あ、あーあー！待ってください皆さーん！！！」

すでに2人の保育士の命を奪ったバードネオはゆっくりとディエチ
とトーレに向き合った。

赤い体はまるで、今まで奪ってきた人々の返り血の様に黒ずんでお
り、それがより一層恐怖心に拍車をかけていた。

デイエチもトーレもバリアジャケットを展開して戦うが、未知の敵に対しては無意味…すぐに弾かれては反撃されてしまう。その証拠に2人ともすでにボロボロだった。

「トーレ…私、もう無理…。」

「立てデイエチ…子供達を守るのは、私達の役目だぞ…!!」

「…せんせー!」

後ろで子供達が叫んでいる。

ここまで言われたら引くわけにもいかない…そう重い、デイエチは再び剣を握った。

同じ様にトーレも拳を構え、バードネオへと殴りかかる。

だが、簡単に弾かれてトーレは地面に。

腹を踏みつけられ、ガハツ!と口から血を吐いた。

「貴様のライフエナジーを貰う…!!」

『ガブリ!!』

「させるかあああああああ!!!!!!!!」

その時、保育園の屋根を飛び越えて黒い影が登場。

その影は手に持つ鋭い爪でバードネオを弾き飛ばし、子供達の前に。ダークキバだ。

同時に駆けつけたアインハルト達もトーレを救出。

「トーレさん!しっかりして下さい!」

「アイン…ハルトか…オトヤは…くっ！」

「オトヤ…。」

全員が見守る中、ダークキバはバードネオとの戦闘を開始。炎熱系ネオファンガイアのバードネオの『炎の羽』が次々とダークキバを襲うが、彼はそれを全て爪で弾き落としていく。

腰に提げたザンバットソードを手に取ると、今度は攻めの体制に。鋼をも切り裂く鋭い刃がバードネオへと襲い掛かるが、例の如くバードネオはそれを飛んで回避。

「その程度の攻撃、当たるわけ無いだろうキバ？」

「つつくしよ…アイツ卑怯だなおい…ダキバット、キバって飛べないの!？」

『キバット殿に言ってくれ。』

ダークキバはキバと違って飛行能力は備わっていない。

空中を飛ぶ敵に有効な攻撃と言えば…もはやあれしかない。

「ならコレだ!!はあ!!」

『波動結界』だ。

キバの紋章を相手に送り込み、張り付け状態にするダークキバの暗黒魔術。

体内のライフエナジーをそのまま具現化して発射しているのであまり多用はしないが、使えば強力すぎる技…なのだが、

「遅い遅い。」

やはりかわされる。

しかも一発一発が重いので、その分ダークキバも体力を消費していく…。

「くそ…ガルルじゃ届かないし…バツシャーじゃ間に合わない…どうすりゃいいんだよ…!!」

一方で避難組の方は順調だった。

ルーテシアが誘導して残った子供達や先生は全て避難完了。

トーレは傷が酷いのでヤマトが負ぶっていく事に。

そんな中、シンはバスタードライバーを構えてダークキバの下へ行こうとしていた。

「加藤さん、何してるんですか!?!」

「オトヤが1人で戦ってるんだ…放って置けるかよ…!」

「ですが!?!」

言い争うアインハルトとシン。

その時、いきなり耳を刺激する激しい音が鳴り響いた。

パ
リ
イ
イ
イ
イ
イ
イ
ン
!?!?!?!?!

ガラスが割れた音だ。

それも思いつきり。

それと同時に足音も聞こえる…その正体は…、

「見つ…けた…!?!」

「「ゲツ!?!」」

「「じっ!?!」」

「「うええ…。」」

黒服の女性を作り出したネオ…『ゴキブリネオ』。

しかもココに来るまでの間に相当殺したのか、進化しかけている。

あと2、3人殺せば進化出来るぐらいのレベルまで来ていた。

「バードの邪魔はさせん…奴は『レジェンドルガ』になる素質を持ったネオファンガイアだ。貴様等はここで排除させてもらう。」

「ゴキブリ嫌ああ…！」

半泣き状態でルーテシアの後ろに隠れるアインハルト。

彼女等の前にはシンとヤマトが出てきて、ゴキゴキと拳を鳴らす。

「さあて、んじゃ一丁行きますか！」

「ぶっ潰してやるぜ！行くぞ兄貴…！」

「おっしやあ…！」

シンはバスタードライバーで、ヤマトは素手で殴りかかっていく。

ゴキブリネオのスピードは、何と第2形態になっているバードネオ以上。

空は飛べないが、陸上では恐らく最速だろう。

バスタードライバーの銃弾を次々に避けながら、ルーテシアとアインハルトへと迫っていく。

「やあああああ…！」

「こつち来んな馬鹿あああああ…！」

「させるかあ…！」

その時、ヤマトが動いた。

彼は地面を一気に蹴りだしてゴキブリネオに近付くと、その体をがっつちりと掴む。

そして…あるう事が、ゴキブリネオをそのまま投げ飛ばして地面に叩きつけた。

するとゴキブリネオはムクリと立ち上がり、今度はヤマトを集中攻

撃。

ヤマトは持ち前の運動神経でそれを全て見切り、隙を見つけてはゴキブリネオへ蹴りを叩き込む。

しかしパワーは足りない…やはり彼は天才といっても普通の人間なのだ。

(この運動神経…この性格…なによりこの戦闘センス…。)

それでもヤマトは諦めず、その辺に落ちている木の棒を使っては殴りかかって、殴り返され、それでも向かっていく。

シンもバスタードライバーで応援するが、やはり明確なダメージは与えられないようだ。

(見つけた…彼なら…!!)

「加藤兄!!」

ルーテシアの叫びに反応したと同時に殴り飛ばされるヤマト。

ズタボロになりながらも地面を張ってやってくる彼はまるでゾンビの様。

アインハルトがメチャクチャ怖がっている。

「な、何ルーちゃん？俺今忙しいんだけど…？」

「コレ、使いなさい!!」

「？」

リュックをあさくり、ルーテシアが彼に渡したのは…シンが使っている物と少しデザインが違うバスタードライバーと、やたらメカメカしいベルト。

ヤマトは見慣れない道具をジロジロと色んな方向から見ながら頭を捻る。

「何コレ？」

「説明はあと!!まずははい!!コレ腰に巻いて…それから横につ

いてるフェッスル…あ、その銀色のね。それをこの銃に入れて引き金弾く！！あとは適当に頑張れ！！」

「すっげえ適当！！嫌いじゃ無いわ！！」

どこのルナ・ドーパントですかとツツコミたいアインハルトはさておき…、言われたとおりヤマトはベルト、『バスターバツクル』を腰に巻きつけた。

続いて左横の銀色のフェッスルを取り外し、それを『変身銃 バスタードライバー（完成品）』へと挿入。

『バスターフェッスル セット』

「おお…。」

ドライバーから電子音声が流れ、銃口の先には何やら設計図の様な物が浮かび上がる。

頭、胴体、両腕、両脚それぞれのデータが載った全面図だ。

バスタードライバーをゴキブリネオに向け、ヤマトは唾を飲む。

そして…、

「変身。」

引き金を弾いた。

『バスターモード トランスフォーム』

再び電子音声流れ、先程まで銃口の先に現れていた設計図の様な物が巨大化。

設計図に載っているそれぞれの部位がヤマトの下まで飛んできて、彼の体の下から順に装着されていく。

両脚、下半身、両腕、胴体、最後に頭部。

ドライバーとバツクルは体に走るラインドライブを伝い連動し、体中に走るエネルギーを制御。

装着された仮面の下に現在のデータと体力ゲージ、バスター残量が表示されると変身完了。

そうして現れたのは誰も見た事の無い新ライダー。

全体的なイメージはキバを彷彿とさせるが、よく見てみるとその姿はイクサの様にメカニカル。

キバと同形状の複眼は良く見てみると、複眼の一つ一つが精密な力メラになっている。

イメージカラーは青と銀、所々の装飾には鮮やかな緑が使用されている。

「何だ…貴様…?」

「あ…兄貴…!?!」

「アレ?お…俺…?」

「さあ、行きなさい加藤兄!いや、『仮面ライダーバスター』!

!」

加藤ヤマトが変身した戦士…仮面ライダーバスターは意味がよくわからないままバスタードライバーを握ってゴキブリネオへ向ける。そうして放たれた銃弾の威力は、シンの持つ試作品のバスタードライバーよりも相当に威力が高い。

「おお、すげっ！」

「ぐう…な、何…！？」

「おい兄貴油断すんな！！まだ生きてるぞこの古代昆虫！！」

「わかつてるわかつてる！んじゃ…一気に決めますか！！」

『セイバーフェッスル セット』

バスタードライバーでは無く、バックルにフェッスルをセットするバスター。

まるでキバやダークキバがキバット族に吹かせるようにフェッスルを装填すると、今度はドライバーでは無く、バックルから電子音声が。

『セイバー・イグニッション』

左腕にあるラインドライブが光ると、バスターのアーマーがその形状を変えていく。

左肘から先を巨大なガントレットで覆うと、更にその先から緑色の刃が。

コレが仮面ライダーバスターのフォームチェンジシステム。

その名も『ウエポンチェンジ』だ。

頭部、胴体、腕、腰、脚…それら全てのアーマーを変形させ、バスタードライバー以外にも様々な武器を出現させる事が出来る。

今のは『セイバーハンド』。

左手専用の『バスターウエポン』の一種だ。
左手でゴキブリネオをなぎ払うと、ゴキブリネオは地面に激突。
その隙にセイバーハンドを解除し、バスタードライバーに『ウエイ
クアップフェッスル』を挿入。

『フル・イグニッション』

「うおおおおおおお………」

『ドライブ・シュート』

「てえええええええええええええええええい！！！！！！」

緑色の砲撃がゴキブリネオを包み、爆発。

そこにはネオのカード一枚が残り、バスターはそれを拾い上げた。

「何じゃこりゃ？」

「兄貴すっげえ……。てか、この銃……あんな事出来るのかよ……」

「ふう……実験まだだったけど、案外上手くいったわね……あ、オトヤ
！！！」

「オトヤ君！！！」

こちらが片付いた途端、急いでダークキバの下へ行くアインハルト。
それに続き、ルーテシア、シン、バスターもダークキバの下へ。

案の定、ダークキバは苦戦を強いられており、すでに体中ボロボロ
だった。

地面で倒れこんでいるダークキバとそれをあざ笑うかのように見下
すバードネオ。

その時、駆けつけたアインハルトが両腕を広げてダークキバを守る
ように立ち塞がった。

「何の真似だ？霸王……」

「これ以上、私の友達に酷い事しないで……！！！」

「…勝てるのか？霸王『如き』がこの俺に…、」

「んじゃ、俺等がやるけど文句ねえよな？」

そう言つてバードネオに銃口を向ける加藤兄弟。

何の情報も持たない新たなライダーに動揺したのか、バードネオは後ろを振り返つて空へと飛び上がる。

「あ、待て!!！」

「運が良かったなキバ、そこの変なライダーに感謝するんだな？」
そう言い残して去つていくバードネオ。

気が抜けたのか、ダキバットが剥がれ落ちてダークキバはオトヤに戻り、バスターもバツクルの電源を切つて変身解除。
ヤマトに戻った。

「オトヤ君！すっかり！酷い…早く病院へ行きましょう！」

「いいよアインハルトちゃん、俺がオトヤ君担ぐから…。この辺でどこが一番病院近かつたっけ？」

オトヤを連れて病院を探す2人。

その様子を、シンは目を細めて見ていた。

「加藤？どうしたの、早く行くわよ？」

(俺にも…あんな(バスター)力があれば……。)

Re/birth・V トランスフォーム（後書き）

アインハルト「えーっと…今回はキュアノアさんの『リリカルキュアライダー学園』のフェイトさんです。」

Kフェイト「私の悩みはね…実はこっちなのはの事んだけど…凄く痛い子すぎて…どうしたらいいんだろうアインハルト？」

アインハルト「いいんじゃないですか別に？」

Kフェイト「ちよっ！？投げやり！？」

アインハルト「だって、それがそっちなのはさんの『個性』なんでしょう？だったらそれは短所であると同時に『長所』なんですから、変に否定するのは良く無いですよ。」

Kフェイト「うっ…一理あるかも…。」

アインハルト「まあ、限度っていうものもありますけど、別に他所から苦情とか来てないですし、何より親友ならそういう面も含めて付き合っついていかないと。」

Kフェイト「…私今、10歳も下の子に凄い事言われた…。」

ヴィヴィオ「アインハルトさんやれば出来るじゃ無いですか！！頭ナデナデしてあげます。」

アインハルト「…。」

ヴィヴィオ「何ですか？」

アインハルト「出来たらその…に、頭なでて欲しいです。」

ウヴァさん「その欲望、解放しろ！！！」

Re/birth・VI 弁当(前書き)

アインハルト「お悩み相談です。むしろ私が相談したいです。聞いてくださいヴィヴィオさん。」

ヴィヴィオ「やだ。」

アインハルト「まあまあそう言わずに…。。」

ヴィヴィオ「やだ。」

Tシヨウイチ(大丈夫なのか!?)

ゆっくり目を覚ますと、オトヤは寮の自室のベッドの上にいる。

何があったのかよく分からず、起き上がってみる事に。

すると、彼の顔を覗きこんでいたアインハルトの額と思いつきりぶつかった。

「いたっ！」

「ああ、だから言っただろうストラトス…もうすぐ目覚ますって。」
見渡してみると、1人暮らし用の狭い部屋の中に…自分とダキバツトを含め、アインハルト、シン、ルーテシア、ヤマト、それと何故かハジメまで。

そう言えば、とオトヤは思い出した。

そうだ…自分は負けたのだ。

トリネオが進化したネオ第2形態、バードネオに。

初めてだった、ネオに敗北したのは。

ダークキバはかなり強力なライダー、負けないという自信があった。だが負けたのだ。

なす術無く、完膚なきまで。

「そっか…僕、負けたんだっ…。」

「お前がやられたと聞いて駆けつけたが、遅かったみたいだな…。悪い。」

「ハジメのせいじゃ無いよ。気にすんなって。」

軽く笑うと、オトヤはベッドから降りた。

すると、彼はある物に目が行った。

ヤマトの腰にあるベルトだ。

『バスターバツクル』だった。

「あれ？ヤマトさん、ソレ…？」

「ん？おお、付けっぱなしだった！コレなあ…ルーちゃんから貰っ

「ただけど…えつと？」

「バスターね。仮面ライダーバスター。」

「あ、それぞれ。というわけで、俺も仮面ライダーになったわけ。これからは俺も協力しようと思うんだけど…。」

「どうやらオトヤが気絶している間にルーテシアとアインハルトでヤマトに現状を説明した様だ。」

「それを聞いたら正義感の強いヤマトの事…黙って見ています、と言うはずが無い。」

「当然の如く協力を申し出てくれた。」

「それはシンも同じ。」

「バスターのサポートでもいいので参加したいと言ってきたのだ。」

「俺はまだ未熟だけどさ、役に立てるんなら…どうかな？」

「嬉しいですけど…いいんですかヤマトさん？シンも…。」

「俺はいつでもOKだぜ。な、一緒にネオとかいいうのと戦おう！」
「予想通り。」

「やはりこの親友は、真相を全て知るところやって頼んでくると思っ
た。」

「確かにアインハルトの抜けた穴に、新たなライダーが加わるのは心
強い。」

「シンの射撃の腕も模擬戦で嫌というほどわかった。」

「悩んでいると、見計らった様なタイミングで彼の携帯が鳴り響いた。
出ている名前は、『八神家』だ。」

「もしもし？」

『お、出た出た。元気そうだなオトヤ！』

「グイータさん！？うわあ、久しぶり！元気だった？」

『おお。実ははやてがアインハルトのデータ取りたいから連れて来て
欲しいって言ってるんだよ。わりいけど今度の休み、うち来てく
れ。交通費は出すから。』

「うん、というわけで…いいよねアイン？」

「あつ、はい。」

『決まりだな。』

電話越しに笑うヴィータ。

向こうの方が先に電話を切った事を確認するとオトヤも携帯をしま
う。

もう良い時間だ、きつとカズマとフェイトも、アインハルトの両親
も心配している頃だろう。

加藤家の父母は……多忙で家を空ける事が多いので別にいいだろう。
一応ルーテシアは今日だけは加藤家に泊まる事にして、今回はここ
でお開きとなった。

帰り道、ヤマトは財布から300円を取り出し、3人分の缶コーヒ
ーを買ってシンとルーテシアに渡す。

3人同時にプルタブを開け、少し口につけた。

疲れた後に、カフェインは良く効く。

「兄貴：あんま無茶とかすんなよ？」

「心配してくれるのか？いつもは『兄貴なんて〜』とか言ってるく
せに…ハッ！！デレ期か！！！」

そう言うヤマトの額目掛けて空になった缶を叩きつけた。

あまりの痛さに額を押さえてヤマトは地面で悶える。

自業自得なのでルーテシアは突っ込まず、自分のとヤマトの空缶を
ゴミ箱へ。

「それにしても、意外と早くバスター装着者見つかって良かった。

これで私もいくらか肩の荷が降りるわ〜。」

「何だよ？だったら俺に言ってくれれば…。」

「アンタじゃ無理よ。」

「ガクッ！」

思わずずっこけてしまった。

そこまで正直に言わずともいいでは無いですか？

何でもバスター装着の為には、普通の人間よりも強い体と、戦闘センスがいるらしい。

確かにシンの射撃の腕には目を瞠る物があるが…バスターを装着するには程遠い。

その点、ヤマトはその条件をクリアしている。

まあ、射撃の腕は……バスターウェポンでカバーする事にしよう。

「ホントはインターミドルで探そうと思ったんだけど…これから頑張んなさいよ加藤兄！」

「おう！で、いうわけだシン。これから忙しくなるぞ！」

「…まつ、いつか。」

久々に兄の言葉に笑うと、シンは2人と共に両親が帰ってこない家へと帰っていった。

それから数日後の終末…いや、週末。

何このどこぞの『やあ めえ ろお』って言う変態研究者が大好きな言葉？

ここはストラトス邸…時間は午前5時。

そこで…アインハルトは目を光らせ、手に刃物を握っていた。

標的は目の前のすでに死んでいる生き物…彼女は今からこれを切り刻むのだ。

「……結構難しいですねコレ……。」

そう、『お弁当』にする為に。

死んだ生き物…魚です。

聞いた話によると、朝家を出たら八神家にはだいたい昼過ぎ頃に着

くらい。

その間絶対お腹が空く。

折角オトヤが厚意で着いて来てくれるのだ…この位の事はしなければと思ったのだ。

作るのは魚のから揚げメインで他に惣菜を加えたシンプルなお弁当。それでも慣れて無いので本を見ながら奮闘中。

「手伝いましょうかアイン？」

「いい。一人でやる。」

母の申し出を断り調理を続けるアインハルト。

魚を切っている間に玉子焼きで焦げているとも知らずに…。

「あ、ああ！？あ…勿体無い…。」

「フフフ…まさかあのアインがねえ…私も歳取るはずだわあ…。」

「？」

「『彼氏』の為にここまで頑張るなんて…うんうん。」

「なっ！？か、彼氏じゃないよ！！友達！！学校の友達だから！！」

「若いうちはだいたいそう言うのよねえ…私もそうだったし…。」

「だ…か…ら…！！」

誰が思っただろう。

まさかこの会話をトイレの為に近寄った父が泣きながら聞いていたなどと…。

それから数時間後…、

とりあえず登家で落ち合った2人はそのまま駅へと向かった。

これから数時間かけて八神家のある街へと向かうのだ。

何でも海が見える観光名所にある家らしく、裏の山ではアスムが野菜を育てているという。

オトヤも行った事が無いが、母から地図を貰ったので大丈夫だろう。地図はダキバットに持たせているので邪魔にはならない。

「アインに合うデバイス、作ってもらえるといいね。」

「はい。…すいません、お付き合いしてもらって…。」
『気にするな。どうせオトヤだ。』

「ダキバット後で滅ぼす。」

『ごめんなさい。』

うん、このテンションなら別に迷惑というわけでも無さそうだ。

最近、オトヤとダキバットのやり取りだけで彼のテンションがわかるようになって来た。

喜ぶべきか忌むべきか？

はやてが送ってきてくれた乗車チケットで電車に乗り込むと、2人は指定された席へ。

携帯にははやてからのメールが来ている…『2時ごろに駅前にシグナム寄越すから』という1文だけ。

それに『了解』の2文字を送ると、久々にゆったりと寛いだ。

「ああ…何か久々あ…。こういうのくんびりしたのって…。」

「私も最近訓練ばかりでしたからね…いいですねこういうの…。」

『なあなあオトヤ、私腹減った。何か食わせる。』

「お前な…まだ11時だぞ？だから朝飯食えって言っただろ。」

『仕方ない。眠かったのだ。』

「威張るな馬鹿。」

「あ、あの…実は私…。」

ここでインハルトの顔がパアと明るくなった。

初めて1人で作った弁当…それを鞆から取り出そうとすると…、

「どっころせつと。」

「え？」

何故か、オトヤも鞆から弁当箱を取り出した。

しかも結構でかい。

彼女の持つて来た普通サイズの弁当箱より1周りほど大きかった。

「オトヤ君…それは？」

「母さんが持たせてくれたんだけど…誰がこんなに喰うかっての。

駅弁で十分だよなあ正直…。ほら、少し早いけど食べよダキバット。

「

』頂きます…!」

そう言うや否や早速おにぎりにかぶりつくダキバット。

ダキバットの好物…なのはの手料理らしい。

何でも、『故郷を思い出す味』そうだ。

幸せそうな表情のダキバットとは対象的に、アインハルトの方は…

完全に意気消沈していた。

「どうしたの？何かこの世の終わりみたいな顔してるけど？」

「いえ…別に…。」

「そう言えばさっき何か言いかけなかった？というかその手に持つてるの何？」

「…何でもありません…おいしそうですね…私も頂きます…。」

「うん、どうぞどうぞ！」

自分の持つて来た弁当箱を鞆にしまうと、アインハルトはその後何も喋らずにモソモソと昼食を始めた。

『ネオダヨ！テキダヨ！ヤバイヨ！』

腕につけてあるバスターの顔を模した変な時計『ネオサーチャー』が鳴ると、ヤマトは友達と別れてすぐさま走り出した。

このネオサーチャー…ネオファンガイアが出現するとこの様に非常にやかましい音が鳴り、ヤマトに知らせる。

ちなみにルーテシア謹製…シンも持っている。

通信機能もついている様で中々便利だ。

「敵は…：はあ？街中あ！？おいおいヤバすぎんぜコレ…。」
文句を垂れるが、そう言っても現状は変わらない。

近くに停めていたバイクに跨ると、ヤマトは急ぎ街へ。

途中でシンを発見し、彼を後ろに乗つける。

「シン、サポート頼むぜ？」

「つたりめえだ。おら、急げよ兄貴！」

「言われなくても…：変身！！」

『バスターフェッスル セット バスターモード トランスフォー
ム』

バスタードライバーの引き金を弾き、ヤマトは仮面ライダーバスターへと変身。

襲われているのは…なんと住宅街。

すでにカリスが交戦しており、それなりに苦戦している様だった。

今回の敵は熊の様な体にライオンの鬣を身につけた『クマネオ』、
とある女性の『嫉妬心』から生まれたネオだ。

どうやら技タイプのカリスは力押しのカマネオは苦手な様だ。

「剣立！！来たぜ！！」

「加藤…ああ、頼む！！」

「っしや！んじゃ、行ってくるぜシン！」

そう言うと、バスターはバツクルヘフェッスルを一つセット。

『ランチャーフェッスル セット』

持ち前の運動神経を利用して飛び上がり、クマネオの後ろを取ると、

バツクルのスイッチを入れる。

『ランチャー・イグニッション』

するとバスターの両脚の足下から膝までが黒い箱の様な物…『ランチャーフット』に覆われた。

箱の中には片足8発、計16発のミサイルが積み重ねられており…バスターは腰を落として同時にバスタードライバーを構える。

「おら喰らえ!!!」

言葉と同時に放たれるミサイル。

それはクマネオに当たり…更に何発かカリスに命中。

「ぐあつ!?!?!?!おい…ヤマトさん…?」

「あ…わりいわりい…。俺、射撃って苦手であ…。」

「おい来るぞ兄貴!!!剣立!!!」

シンの言葉通り、立ち上がるクマネオ。

鋭い爪でバスターを弾き飛ばし、再びカリスへと迫っていく。

カリスはそれをカリスアローで受け止めるが…いつまで持つかはわからない。

せめてネオカードが使えるれば…そう思ったその時…、

『ドライブ・シュート』

「剣立当たるなよ!!!」

「なっ!?!?!か、加藤!?!?!」

何と、至近距離からシンがバスタードライバーを構えていた。

彼が引き金を弾くと、緑色の閃光が真っ直ぐクマネオに飛んでいく。

正確にクマネオだけを撃ち抜くと、カリスは体勢を立て直した。

「感謝するぞ!!!」

「ああ、兄貴!!!行け!!!」

「おお!!!」

『スピニングダンス』

『ブラスト・イグニッション』

カリスはカードをラウズさせて必殺キックの体勢に。

バスターの方は『ブラスト・フェッスル』をセットして肘から肩にかけて赤い大砲『ブラストシヨルダー』を装着。

まさかの飛び道具二発目に驚くカリスとシンだが、当の本人は『今度こそ大丈夫な気がしなくも無くも無い!!』と言い張って退こうとしない。

シンのおかげで足止めされているクマネオ…倒すなら今しかない。

「はああああああああああ!!!!!!」

「行くぜ…パワー全開!!」

『ドライブ・シュート』

「はああああああああああああ!!!!!!」

「てええええええええええええええええい!!!!!!」

まずはバスターの攻撃がクマネオに炸裂。

続いてカリスの『スピニングダンス』がクマネオを完全に消し去った。

その場にはカードが1枚残り、カリスは地面に着地。

『スピリット』と書かれたカードをラウズし、ハジメの姿に戻った。それを確認するとバスターも電源を切つてヤマトに変身解除。

「なあ、それ何なの？」

「俺にもよくは分からない。ネオを倒したら生まれるカードみたいだが…。」

「ふん…まあ、いいや。」

どうやらヤマトはネオカードには全く興味が無い様子。

それでも一応持っておけと言われたので、とりあえずクマネオのカードだけは貰う事に。

「ん？…おい剣立、オトヤからメール来たぞ。」

「何？ふむふむ…」アインが急に何も喋らなくなった。弁当出したら急に機嫌悪くした。助けて』か…」

「「リア充爆発しろ。」」

ここまでハジメとシンの息が合ったのは何気に初めてかもしれない。

何とかアインハルトのご機嫌を取ろうと頑張ったが、結局全て無駄に。

目的地最寄の駅についても、彼女はご機嫌斜めのままだった。

『オトヤ、お前何しでかした？』

「こつちが知りたいよ…。アイン、僕何かした？」

「別に…何でも無いですよ。」
絶対嘘だ。

そう思っていると、オトヤの目にある物が飛び込んできた。

だいたい20メートルぐらい離れた所で車から手を振っているピンク色の髪の女性。

間違いない…彼女は…、

「シグナムさん！」

「久しぶりだなオトヤ、ダキバット、元気そうだな。」

八神シグナム：「はやての守護騎士『ヴォルケンリッター』のリーダーで時空管理局二等空尉。」

フェイトの元部下で、優秀な局員だ。

もう10年以上はやてと一緒に暮らしている彼女達の家族でもある。

「お前がアインハルトだな？私はシグナムだ。よろしく。」

「あ…はい、よろしくお願いします。」

「元気が無い様だな？とりあえず、まずは家へ行こう。車で20分くらいだ。」

シグナムに導かれ、2人と1匹は八神家へ。

一体どんなデバイスを作るのか…楽しみでしようがない筈なのに、アインハルトはやはり暗い表情のままだった。

Re / birth . VI 弁当（後書き）

ヴィヴィオ「今回は辰巳翔さんのところの芦河シヨウイチさんです。

「
アインハルト「この人はウヴァさんウヴァさん言わない『正常なシヨウイチさん』…略してセイイチさんとお呼びしましょう。」

セイイチ「ヲイ！？っていうかもうなってるし！？…まあいいや…俺の悩みは…こちらのソウジと話が噛み合わない事だ…。あいつ、マイペースすぎる…FFRの時も俺は『おい…俺に、なにをおおおおっ！！？？』なのに、アイツは『ん？』だけ何だぞ…？しかも俺はFFR後にユウスケにツッコミを入られたのに…アイツは特に気にせず我が道を行っただぞ？」

アインハルト「まさにカブトですね。」

ヴィヴィオ「うん…今回の相談、かなりムズイですね…。」

アインハルト「そう言うと思って助っ人をお呼びしました！どうぞ！」

伊達「俺がバースだ！」 一億のポーズ

セイイチ「つて、伊達かよ！？」

伊達「おう、んでセイイチ？」

セイイチ「シヨウイチだ！！」

伊達「アレ？まあ、いいやそんなどうでも良い事。」

セイイチ「人の名前をどうでもいいと言っな！！」

伊達「いいか？アイツがお前のペースに合わせるんじゃない。お前がアイツにあわせるんだ！そうすりゃ自然と向こうもお前に合わせしてくれる。歩み寄ってくるのを待つんじゃない、こっちから攻め

るんだ！」

セイイチ「おお…正論っばいな…。」

伊達「まずはアイツの好きなおでんを研究だ！！さあ…いざ、出陣
！！」

セイイチ「何か良くわからんが…とりあえず、おー！！」

アインヴィヴィ（伊達さんの餌食がまた1人…。）

「……………」
「……………」
「……………」

何コレ気まずい。

シグナムの車の中でオトヤが最初に思った言葉がそれだった。

先程電車の中で昼食を摂ってからというものの、アインハルトの機嫌が凄く悪い。

悪いと言うか怖い。

怖いと言うか色んな物を超越して凄い…そんな感じ。

事情を知らないシグナムは勿論だが、当事者であるにも関わらず理由がわからないオトヤとダキバツトはそれ以上に困惑していた。

頑張って理由を聞こうとするが…無理怖い。

何か明るい話題を探そうと、必死に考える。

「あつ、そうだアイン！麦茶n、」

「要りません。」

『アイン嬢、キャンディくうk』

「要りません。」

何コレマジ怖い。

理由が分からないので怖さ倍増。

この空気マジ耐えられない…。

「……………お前等、一応、折角の遠出なんだからもう少し楽しそうにしたらどうだ…？特にアインハルト、お前のその顔は響に見せられないからちゃんと機嫌直しておけ。」

「……了解です。」「」
なんと言うシグナム。
たったコレだけの言葉で3人を完全に黙らせた。
殺気にも似た言葉に、3人も八神家に着くまでの間一言も言葉を
発しなかったという…。

そんなこんなで八神家到着。

そこでオトヤとアインハルトを待ち構えていたのは…、

「……ようこそ八神家へ……！！」「」

パンツ！！

「……。。」「」

やけに明るい人達と、無数のクラッカーの弾ける音だった。

クラッカーの飾りがアインハルトの頭の上ののっかると、彼女はキ
ョトンとした顔で立ち尽くす。

それはオトヤとダキバットも同じ様で、何が何やらさっぱりだ。

「ああ……やはりいきなりコレはまずかったんじゃないんですかねシ
ヤマル？」

「そうかしら……？良い案だと思ったのに……。」

「シヤマル、今の48点。」

「微妙な点数!!」

上から順に、アスム、シヤマル、ヴィータ…んでもってもう一回シヤマル。

その他にもアギト、リイン、ザフィーラ、それにはやてもいた。

久々の再会がこんな形になるとは、オトヤも思っではいなかっただろう。

いや、この家の連中のテンションを考えれば想像出来なくは無いだろうが…。

いきなりの大歓迎に、少し困惑するアインハルト。

アハハと、少し笑いながらオトヤは頬を掻く。

「はやてさん、お久しぶりです。」

「おおーよー来たなー！ゆっくりしてってなあー!!」

「おぎや…おぎやあああああ!!!!おぎやあああああ!!!!」

「ああああ、もう、この子すぐ泣くんやで?」

「元気なお子さんと良かったです。」

これでオトヤが響と会うのは二回目。

出発する時に母も会いたいと言っていたが…何、気にするな!!!

「この子がアインハルトさんですね?直接ははじめまして。八神アスムと申します。」

【響鬼の世界】の仮面ライダー響鬼です。」

「あ、は、はい!初めまして、アインハルト・ストラトスと申します!」

「アイン嬢、そんなに肩に力を入れなくても良いぞ。アスム殿もこの家の者達も皆良い人だからな。」

と、ダキバットがアインハルトの緊張を解そうとするが、やはり彼女は恥ずかしがりや…これだけ多くの初対面の人達に囲まれたらガチガチに緊張してしまう。

どうしたものかと考える八神家…やがて、リインとアギトがある提案をした。

「「だったら、皆で一緒に遊びましょう（ぼっせ）！」「」

「…え？」

「なあー…剣立よ…。」

「何だ、加藤？」

「あいつ等帰ってきたらどーするー？」

「…とりあえず殴つとけ。」

何とも物騒な会話をしながら、ハジメとシン、あとヴィヴィオの学
校仲良し4人組は『ACE』でくつろいでいた。

この時間帯はお客さんもほとんど来ない。

普段なら店でこういう事をしていたら注意しているハジメだが、今
日は一緒にだら〜んとしていた。

カズマは暇を見つけて買出し中、今店にはフェイトだけ。

「ほらほら！子供は元気に外で遊ぶ！こんな所でグダグダしないの
！」

「……はい。」

一応、ヴィヴィオ達に関してはインターミドルの練習をしてて、そ
の休憩で立ち寄っただけ。

つまり本当にただここで寛いでいるのはハジメ、シン、レイヤの3

人だけだ。

今日はネオも出てこないし、ヤマトは学校で部活の助っ人、ルーテシアは1人で散策…つまりとこ超暇。

ヴィヴィオ達のトレーニングにも多少付き合ったりしてたが、ライダーと魔導士じゃまず戦い方の方向性が違うのでいまいち参考にならない。

その時…、

ピリピリピリ！

「加藤、電話だぞ。」

「ん？おお。もしもし？」

『あつ、シン！もしもし！』

「ジーク姉か。何？」

ジークだった。

「誰だ？」

「俺と兄貴の幼馴染のジークリンデ・エレミアだよ。」

「……ジークリンデ！！？」「」「」

その名を聞きつけ、インターミドル参加組が一斉にシンの電話に喰いつく。

さすがは前回の世界大会優勝者…凄い人気っぷりだ。

でも今回はシンに私用なので、そのまま電話続行。

「何さ？」

『うん…実は…道に迷って…。』

「またかい！？今どこ？」

『え〜…っと…白いでつかい学校がある…名前は…s t ・ヒルデ学院？』

「……ああ、わかったわかった…迎えいくからじつとしてて。つか兄貴に言えばいいだろ？」

『いえんよ〜、だって、……………昨日はヤマトに頼んだもん…。』

「昨日もかあああああああ！！！！！！！！」
もう呆れて物が言えない。
だが行かないわけにもいかないの、仕方なくシンは電話を切り、
ジークを迎えに行く為に立ち上がる。
いくら方向音痴といっても、3つ下の弟分にそんな事頼むな…そんな事を考えながら店を出ようとすると…、

「待つて〜！！」

「あたし達もジークリンデ選手会いた〜い！！サイン欲し〜い！！」

「お願いしますシンさん！！」

「だああああ！！！！うっぜえええええ！！！！！！！！」

「……なんだ、お前も登の同類か。」

とりあえず最後までハジメは顔が怖かった。

「……遊んだ遊んだー！！」

夕方頃まで遊んでいたリイン、アギト、ヴィータ、オトヤは八神家の芝生の上に寝そべりそう言った。

チープで単純な遊びばかりしていたが、童心に戻ったみたいで本当に楽しかった。

体力が自慢のインハルトもさすがに疲れている様で、ヘトヘトでもう動けない。

動けるのはほぼ毎日絶滅タイムされて以上に耐久力と持久力と忍耐力和精神力がついたダキバットのみ。

「アイン、楽しかった？」

「はい…でも、もう動けません…。」

「鍛え方がたりねえな。もしもあたしの生徒になったら、びしびし鍛えてやるよ！」

「お気持ちだけうけとつときます…。」

何だかんだでヴィータも疲れている。

このヴィータ…こう見えて管理局の教導官だ。

かつての生徒であった仮面ライダーイクサノ襟立ケイスケが教導官になる時に指導した直属の上司。

こんなにちっちゃくても頑張っているのだ。

「…って、あの…私のデバイスのお話は…？なんだか、ずっと遊んでいた気が…。」

「あ、それなら大丈夫ですよ！」

心配しているアインハルトにリインが笑いかけると、彼女はポケットから携帯電話を取り出した。

実はコレ…携帯型の計測器なのだ。

「ああいう動きの激しい遊びをやれば、アナタの身体データを取るにはばっちりでしたよ！後はこれをはやてちゃんに渡して解析してもらえば、アインハルトにぴったりのデバイス completion です！」

「何時の間に…。」

『言っただであらう。こいつ等は『喰えない』とな。』

「本当ですねえ…。」

ちなみにアギトの方遊んでいる最中にデザイン設計、ヴィータはアインハルトがどんな動きをするかのチェック…といった具合に、役割分担をしていた。

それでオトヤはアインハルトをちゃんと楽しませる係。

とりあえず疲れたので続きは家の中で。

家に入ると、アインハルトは風呂へ、オトヤは…何とアスムに連れられてライダー特訓に連れて行かれた。

「霸王のデバイス……もしそんなのが完成したら、クラウドぐらい強い霸王が生まれるのかしら……？」

黒服の女性は八神家の屋根の上で、そんな言葉を呟いていた。

霸王クラウドと帝王キバ……この2人は彼女達が最も恐れる存在。

ダークキバの方はまだいい……だが、霸王が復活すればそれなりの脅威になるかもしれない。

幸い現代の霸王はか弱い少女だ、消すのは難しい話では無いだろう。

「災いの目は早めに摘むべきね……頼んだわよ、『ライノネオ』。」

「了解しました、サヤカ様……いえ、『メデューサレジェンドルガ』様。」

「いいから行きなさい。必ず始末するのよ。」

『御意。』

黒服の女……サヤカに一礼すると、サイネオから進化した第2形態ネオファンガイアであるライノネオは八神家の庭に着地。

そして……

『ぬおおおおおおおおおお！！！！！！！！！！』

地面を思いつきり殴った。

すると地面に大きな亀裂が生まれる。

食事の準備をしていた八神家の面々や訓練中のオトヤとアスムは慌

てて庭へと飛び出した。

ついでに驚いたアインハルトも急いで着替えて出てきた。

「何事ですか！？つて…ネオ！？何で！？」

「さあ…？しつこいなあいつ等も…。」

予想外の事態にうろたえるアインハルトと呆れるオトヤ。

当然、アスムはやてはネオファンガイアなど知らない為、目の前の謎の怪人に驚くだけ。

だが敵だという事はわかる…アスム、ヴィータ、シグナムは戦闘態勢に。

オトヤも3人に並び、ダキバットを呼んだ。

「オトヤ、何ですかアレは？」

「え！？うーん…ぼ、僕にもわかりませんなあ…アハハ…。」

「そんな事あどーでもいいんだよ。いくぞ、アイゼン…！！」

「そうだな…参るぞ、レヴァンティン…！！」

『ガブリ…！！』

「変身ッ…！！」

「はああああああ…！！…！！」

「「セットアップ…！！」」

オトヤはダキバットをベルトに、アスムは音角を額に、ヴィータとシグナムはそれぞれの相棒を前に突き出した。

すると、全員の姿が徐々に変わる。

オトヤはいわずと知れた『牙の帝王』仮面ライダーダークキバに、ヴィータとシグナムはそれぞれの騎士甲冑を身に纏う。

そして、アスムは体が炎に包まれ…その肉体を強靱に、そして鬼の

様に変えていった。

その名は…『仮面ライダー響鬼』

清めの音で闇を浄化する、『音撃の戦士』だ。

ダークキバ、響鬼、ヴィータ、シグナムは一行に並ぶと、ライノネオに向かつて構えを取る。

「オトヤ…このネオの気配…以前のバードネオと同じだ!!」

「第2形態…って、わけね…。マジかよ…。」

『第2形態』…以前、この段階まで進化したバードネオに、ダークキバは全く歯が立たなかった。

バスターがいたから良かったものの…本来だったら間違いなく敗北していた。

今度こそ負けないと心に誓い、ダークキバはザンバットソードを握り締める。

2人の剣士と2人の闘士…ダークキバはシグナムと、響鬼はヴィータと共に走り出し、ライノネオを囲んだ。

『ウェイクアップ4!!オトヤ、一気に決めるぞ!!』

「おお!!ファイナルザンバット!斬ッ!!」

前からはシグナム、上からはダークキバ…2人は同時にそれぞれの剣で、ライノネオへと斬り込んで行った。

しかし、ライノネオのボディは予想以上に固い。

ザンバットどころか、レヴァンティンすら刺さらない。

ライノネオは2人の剣の刃を軽く握ると、そのまま2人を地面へと叩きつけた。

「ぐあっ!!」

「シグナム!!オトヤ!!」

「やるお…ぶつ潰してやる!!」

今度攻めるのは響鬼とヴィータ。

彼らはダークキバやシグナムの様な剣撃タイプと違い、打撃タイプ。

いくら切裂けないほど固い装甲でも、貫通してダメージを与える事が出来るはず。

ベルトの音撃鼓を取り外し、響鬼はそれをライノネオに装着。

音撃棒・烈火を構え、そのままライノネオへ清めの音を叩き込んだ。

「音撃打・怒涛の型！！はあ！！」

ダンダンダンダン！！！！

連続で撃ち込まれる清めの音。

だが、

「なっ！？」

なんと、ライノネオは何でも無いという表情で音撃棒を掴み取り、響鬼から取り上げた。

それをヴィータに投げつけると、響鬼を掴み、ダークキバの上に叩きつけた。

「くうっ！！」

『お前等はそこで眠ってる。俺の狙いは…、』

「ひっ…！！」

ライノネオが横目で見たのは…アインハルト。

ゆっくりと彼女に歩み寄り、右腕の巨大な角を突きつける。

恐怖のあまり、アインハルトは武装形態をとる事が出来ない。

だが、その時ダークキバがライノネオに突進をしかけ、ライノネオの体にしがみついた。

「やめるおおおお！！！！」

『ぐっ！！キバ…貴様あつ！！』

「お、オトヤ…君…！！」

体の中のライフエナジーを全開で活用し、フルパワーでライノネオ

を投げ飛ばすダークキバ。

腰に取り付けたウエイクアップフェッスルをダキバットに2回吹かせ、ダークキバは腰を落とす。

『ウエイクアップ!! 2!! 絶滅せよ!!』

「シグナムさん!! ヴィータさん!! ヤツにバインドお願いします
!! はあ!!」

ダークキバに言われたとおり、シグナムとヴィータはそれぞれのバインドをライノネオに発動。

同時にダークキバ自身も『波動結界』をライノネオに送り込み、動きを完全に封じる。

そして、ダークキバと響鬼は同時に飛び上がり…、必殺のダブルライダーキックをライノネオに叩きこんだ。

「はあああああああああああああ!!!!!!!!!」

『ぬうおおおおおおお!!!!!!』

ドオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ!!!!!!!!!

闇と炎の蹴りが炸裂し、その場では大きな爆発が発生。

爆風で吹き飛ばされそうになるアインハルトとリインとアギトはシグナムが救出。

徐々に煙が晴れてくると…そこには、ボロボロになったライノネオが…。

「!? まだ生きてたのか!!!」

『……これは警告だ…キバよ…』

「?」

『レジェンドルガはいずれ完全復活する…その時が、全ての生命の
衰退の時だ…。』

「何…？」

『楽しみにしている…サヤカ様やアーク様が…全ての生命を喰らい
尽くすその時を…フハハ…フハハハハハハ！！！！！！！！！！』

バンツ！！！！

それだけ言い残し…ライオネオの体が弾け飛んだ。

肉片は残らず、残ったのはカードだけ。

『プロテクト』と書かれたカードだ。

ダークキバはそれを拾い上げて変身を解くと、首を傾げる。

『レジェンドルガが全ての世界を喰らい尽くす』

どういう意味だろうか？

そもそも…『レジェンドルガ』というのが何かわからない。

ネオファンガイアと何か関係がありそうだが、それ以外の事は一切
不明。

考えているとオトヤはある事に気付く。

それは時間。

明日は学校なのに…終電までもう少ししか時間が無かった。

「やべっ！？は、はやてさんアスムさん！僕等もう帰ります！」
「え？晩御飯食べていけないのですか？アインハルトさんもお疲れ
でしょう？今晚は泊まって行きなさい。明日朝一で送りますよ。」

『ふむ、だがそれではそちらに迷惑である？』

「私はええんよ、アインハルトどうする？」

「私は……お気持ちは嬉しいのですが、両親が心配してると思うの
で帰らせていただきます。」
「というわけだ。」

駅までのはやてが送ってくれる事となった。

車の中で絆創膏を顔中に張りながら、オトヤは先程手に入れたライ
オネオのカードを見つめる。

一体、あのネオは何が言いたかったのか：それだけが謎だ。

駅に到着すると、オトヤとアインハルトは車から降りてはやての一
礼。

「本日は色々とお世話になりました。ありがとうございます。」

「ええよええよ、アンタみたいなエエ子の力になれるんやったら全
然問題無しや。」

「じゃあ、アインのデバイス完成したら教えてくださいね。」

「了解、ほんな気をつけてな。」

そう言うとはやては帰宅。

オトヤとアインハルト、それとダキバットははやてから貰ったお金
で切符を買つと、ギリギリで終電の電車に乗り込んだ。

予想通り、客は彼らぐらいしかいない。

折角なので4人座り用の大きな椅子に向かい合わせに座り、オトヤ
はぐでーっと頭を垂れた。

理由は…、

「あー…くそつ、腹減ったー…。」

『大人しく向こうで食べてくれば良かったもの…。』

メチャクチャお腹空いていたからだ。

あれだけ遊んで、アスムに無理やり訓練させられた拳句ネオとまで戦ったのだ…無理も無い。

持って来た母の弁当はすでに食べつくした…おのれダキバット。

時間が無いので駅弁も買わなかったし、この時間じゃ車内販売もやっつてはいない。

あるとしたら自販機のジュースぐらい。

「しゃーねーな…ジュースで腹膨らますか…。アインも何かいる？」

「あ、あの…。」

「ん？」

席を立とうとするオトヤを、アインハルトが顔を赤らめながら止めた。

バックの中から大きくも小さくも無い箱を取り出すと、それをオトヤに渡す。

「よければ…どうぞ。」

「え？何コレ？」

「……開けて見ればわかります…。」

そう言うので、とりあえず開けて見る。

包んでいる布を解き、上の蓋を開けたそこにあっただのは…弁当。

そう、アインハルトが今朝作ってきた弁当だった。

「こ、これどうしたの!？」

「あ、朝たまたま早起きしたので…ひ、暇なので作りました…。」

お昼に食べようと思ってたら、あんなに沢山のお弁当持ってくると思わなかったの…。よければ、お口に合うかはわかりませんが

…。」

前半は嘘です。

最初からコレ作るつもりで早起きしました。

今日のお礼にオトヤに食べてもらおうと思って。

「い、いいの!？」

「い、嫌なら…食べなくても結構です。」

「いや喰う喰う!!…っていうか食べさせてください!!」

『オトヤ私も欲しい!!何か食わせる!!』

今日一日の疲れが一気にぶっ飛ぶ大イベントだ。

何せ、好きな子の手作り弁当…しかも努力家の彼女だ、冷凍食品は一切無い。

見た目は…焦げたり崩れたり、結構最悪だが…。

それにメチャクチャ腹ペコだ、早速おにぎりを手で掴み、半ぶんこしてダキバットと一緒に口に運んだ。

「…って、ああ!?!?そんなに一気に…初めて作ったので自信無いのに…。」

「…んっ!んまいつ!!」

『うむ!!』

見た目に反して、中々どうして…味は良かった様だ。

ダキバットに至っては『故郷の味だ…』とか言って変な涙流してる。

「ほ、本当ですか!?!」

「うん、すっごく美味しいよ!アイン、料理上手いんだね。っておい、ダキバットお前唐揚げばかり喰うな!!」

『早い者勝ちだ!!ガブリ!!』

「…っのやるう…あ、ゴメン僕等ばかり…はい、アインも食べようよ。」

「…はい。」

オトヤから差し出されたおにぎりを一個、口に入れる。

何か予想してた味よりしょっぱい気がするが…??

でも、確かに美味しかった。

「本当に美味しいよコレ。コレならいつでも食べたいって思うよ。」
「な、ならまた作ります！あ、明日にでも！皆さんの分作ってきたます！！」

『いつも学食だからな、ハジメ以外。シンも喜ぶだろう。』

色々あった今日だが、ダキバット含めた3人が今日一番楽しかった時間と言えば、間違いなく今だろう。

余談だが…、

「リア充滅亡しろ。」

「ゲフツ!？」

翌日、この話をしたオトヤがシンとハジメからダブルパンチを顔面に喰らった事は言うまでも無いだろう。

ちなみにアインハルトの作ってきた弁当、シンとハジメにもそれなりに評判良かったとか何とか。

Re/birth・VII 八神家（後書き）

終「俺は黒谷終、『IS 黒き牙と永遠の月』の登場人物だ。俺の悩みは…とある3人の女性に追われていて…非常に困ってる。別に嫌じゃ無いんだが…。」

映司「アंकク…アंकクうううううううううううううううううううう！！！！！！」

『セルバースト』

バース「わりいな皆。火野は持って帰るぜ。」

アインハルト「どうぞどうぞ。」

ヴィヴィオ「で、終さんですが…はつきり言います、リア充爆発しろ。」

終「どういう意味だ？」

ヴィヴィオ「そのままです。ついでにアインハルトさんとオト兄、他にも色んな人に爆発して欲しいです。」

バース「おいおいヴィヴオオちゃん、そいつあ言いすぎじゃねえか？」

ヴィヴィオ「伊達さんは黙ってて下さい！！！！！！」

バース「…おー、イエー…。」

終「で、俺はどうすればいい？」

ヴィヴィオ「真正面からぶつかってください。そして碎けて下さい。」

終「しばらく見ないうちにだいぶ口悪くなったオトヤの妹…まあ、いいや。んじゃ参考にさせてもらうぜ。」

伊達「なあなあアインハルトちゃん、結局俺何しに来たんだ？」

アインハルト「映司さんの回収…じゃ、ないんですか？」

Re / birth・VIIII いじめ(前書き)

「アインハルト(本編が文字数的に)長い!!!」

「ヴィヴィオ(いきなりそんな事言わないで下さいアインハルトさん。

」

「アインハルト(一体何時になったらインターミドル篇なんですか!

?っていうか私のデバイス!!!」

「ヴィヴィオ(はいはい、それはもう少し待ちましょうね。今はお悩み相談室ですから。」

「ブラカワニ(パパン、参上!!!」

Re/birth・VIIII いじめ

ガタガタガタガタ！

夜中、ヤマトとシンはそんな異音に目を覚ました。

今月は両親は国会会議で別世界に行っている為にはず…なのに、上の部屋から変な音が聞こえる。

何だろう？

そう思いながら2人は寝ていたソファから起き上がり、上の階に続く階段に足をかける。

この家は4人家族…本来ならば今日はシンとヤマト以外いないはずだ。

「シン…あの音…。」

「ああ…ま、まさかな…？」

珍しくビクビクしながら2人とも身構える。

そして、上の階につき、ヤマトがとある部屋のドアノブに手をかけ、思いっきり開けた。

「ルーちゃん五月蠅くて寝れないよ…！」

「おいルー…！テメエ静かにしねえなら外で寝かすぞコラ…！」

「ん…何よ、うっさいわねえ…。」

そこにいたのは…ルーテシア・アルピーノ。

シンの1個上で、オトヤ達の友達であるマッド少女。

彼女は今月、インターミドルに備えてミッドに滞在するにあたり、現在この加藤家でお世話になっている。

借りているのはシンの部屋、勿論シンは追い出されて…最近だと居間で寝てる。

ヤマトがそれに付き合って、彼も最近居間で寝てる事が多い。

と、まあ…関係無い話は置いておき、何やらルーテシア…変な機械みたいなのを弄りながらパソコンを叩いていた。

もうシンの部屋が完全にルーテシア色に染められていたが、一部の少年を除き、気にする事無いだろう。

「何なんだよお前今の音!? うるさくて眠れやしねえ!」

「ルーちゃん何作ってるの?」

「ああ、コレ?」

フンと上機嫌に鼻を鳴らすと、ルーテシアは持っていた機械を見せる。

形状はワタルのタツロットに似ているが、ところどころにカズマのラウズアブソーバーの様な意表がある腕に装着できそうな機械。

フェッスルを嵌める穴と、下の方には何かしら取っ手の様な物があり、そこを引つ張るとカードを装填出来そうなスロットが。

「バスターともう一個、『ネオロット』よ。名前はタツロット+ネオ!」

「またわけのわからんものを…」

と言うが、実際バスターはかなり役に立っているのでこれも…使い方は良く分からないが役に立つんだろう。

だが、それよりもの今は眠気優先。

作業するとかなり良い音が鳴り響く為、ヤマトの説教後にルーテシアは作業を止めた。

翌日、

「おい加藤、そろそろ次の授業始まるぞ。さっさと起きろ。」

「眠い…。」

昨夜の騒音のおかげで、シンは中々寝付けず、学校でもずっとボーンとしていた。

いつも無駄にテンションの高い彼だけに、周囲の者達も心配している様だ。

体育の時間など、もはやいるのかいないのかすら分からないほど。

「加藤さん、何があっただんでしょう?」

「どーせ深夜まで変なお笑い番組でも見てたんだろ。おい、しつかりしろよシン。」

『噛んでいい?』

「…ダメ。」

とりあえず昼休みになると、いつも通りのメンバー4人+ダキバットで屋上に集まってシンから事情を聞きだす。

ルーテシアが騒音…それだけで妙に納得出来てしまうのは良い事なのか悪い事なのか?

『話は変わるがアイン嬢、そのコロッケ喰っていいか?』

「あつ、どうぞどうぞ。」

「ダキバット後で突き落す。」

『場所が場所だけに笑えねえぞ。』

「いや、ダキバットさん飛べるじゃ無いですか…。」

「話し聞けよ!」

珍しくシンから絶滅タイムされたダキバット。

それから話しを引き続き聞き、全員でうんうんと彼に同情。

いや、ルーテシアなんていう爆弾を抱えた時点でこうなる事は容易に想像できたはずだが…。

その時アインハルトが立ち上がり、ジューズ買ってきますと購買へ。今日はヴィヴィオ達と一緒に練習があるのだ、少しでも腹を膨らませようという魂胆らしい。

でも張り切りすぎて持って来た重箱、1段目食べ終わった辺りで顔を青くしてたが…。

「登、この前ストラトスのデバイスの事聞きに行っただんどう？どうだった？」

「現在絶賛開発中だと。インターミドルまでには間に合っつてさ。昨日も連絡があり、うまくいけば来週辺りにでも完成するそうだ。

これでアインハルトは問題無い。

問題あるとすれば…寧ろ自分。

最近出現したネオ第2形態。

オトヤの変身するダークキバでは全く歯が立たず、未だに単独での勝利は無い。

その上以前取り逃がしたバードネオも、あれから一切姿を見せずに勝てていない。

今もまだどこかで人々のライフエナジーを吸収し続けているのだからか？

今一番心配なのはそれだった。

「心配ねえよ。兄貴も剣立もいるし、俺も手伝っし。」

「そうだな。登、何かあったらすぐに呼んでくれ。出来る限り早く行くから。」

「ああ、ありがとシン、ハジメ。」

「た、大変です!!」

「ストラトス？」

「アイン？」

急に血相を変えて、屋上に駆け込んできたアインハルト。彼女は3人の手を引き下へ戻ろうとする。

「ど、どうしたのさいきなり!？」

「し、下で!!早く来てください!!」

結構な緊急事態らしい。

とりあえず言われるがままに急いで下へと行って見る。

そこで見たものは…、

「ようミタニ。お前今日財布、持って来てんだろ？」

「も…もってきて、」

「いくら持って来てるんだ？少し俺達に見せてくれよ？」

いじめの現行犯。

苛められているのはオトヤ達とは別のクラスの気弱な少年、ミタニ。苛めているのはこの学校随一の問題児の集まり…所謂『不良軍団』だ。

いじめというか、カツアゲだろう。

「おいおい、今地球じゃ世は平成だぞ？なんだよあの昭和的不良？」

「ど、どうしたらいいんでしょう…」

どうしてアインハルトが止めなかったのか。

理由はインターミドル…もしも障害事件を起こしたりしてしまうと出場権が剥奪されてしまうのだ。

この状況、どう見ても口で解決出来そうに無い…その為彼女は手が出せないと言うわけだ。

「しゃあねえ、行くぞ剣立、オトヤ。」

「了解だ。」

「え？僕も!？」

シンを先頭に、不良達の所へいく3人。

正直オトヤは気が進まない(喧嘩弱いから)

対してシンとハジメは涼しい顔で向かっていき、ミタニの前に立つ。

「あ？」

「やめるよそういうの、ダセエから。」

「お前等、よくもそんなドラマのやられ役みたいな事実際に言えるな。『厨二』とか言う奴か？ああ、お前等そういうえば2年だったな。」

「ハジメ、それ意味わからん。」

上から順番にシン、ハジメ、オトヤ。

勿論、こんな事言われて黙っている不良じゃない。

頭に血管が大きく浮かび上がり、ブチブチと言っている。

そして、不良の1人がオトヤを掴み上げると、彼を地面に叩き落した。

「あでつ!？」

「登!お前…行くぞ加藤!!」

「おっしゃあ!!」

オトヤがはぶかれてシンとハジメが不良と喧嘩すること約3分…、

見事に撃退完了。

試合には勝ったが勝負には負けたオトヤ…気分が複雑すぎる。

こんな事ならストライクアーツ、ちゃんと習うんだったと反省。

今の間にミタニは逃げ出したらしい。

「いつつ…。」

「オトヤ君大丈夫ですか？確か私絆創膏あつたと思います…あ、あつた。はい、どうぞ。」

「ありがとう、ごめんねカツコ悪いとこ見せて…。ミタニは？」

「さっき行ってしまいました…すいません、止めたんですけど…。」

「別に礼が欲しくてやったわけじゃない。そうだろ加藤？」

「おう！」

どうして自分はこんなにダメなんだろう？

そう考えながらミタニはトボトボと帰路についていた。

思えば小学生の時も中学生になってからも、こうやって休み時間が終わってから帰宅というのも珍しくなくなっていた。

おかげでもう両親も、教師も、彼が帰宅しても誰も何も言わない。

この学校も同じ…自分が帰っても誰も呼び止めない。

さっきのオトヤ達にみたいに助けてくれる人もたまにいたにはいたが、それもそこまで…それ以上の事には関わってこない。

勿論、そんな事で落ち込んだりしない。

もう慣れたから。

自販機で缶ジュースを買うと、ミタニは通学路に掛かっている大きな橋から河を見つめ、ふうと溜息をついた。

「……俺、何で生きてんだろ…？」

「何をしてる？」

「？」

その時、ミタニの横に銀髪スーツの男が煙草を吹かしながら近寄ってきた。

彼はミタニの隣に来ると、一息つく。

「何をしているんだお前は？」

「…別に、何もして無いよ…。」

「何もしていない？何もしてないなんて事は無いだろ？」

「な、何なんですかアナタ…？ほっというて下さい。」

そう言うと、ミタニは缶を河に投げ捨てそのまま帰っていく。

だが男はそれを見てニヤリと笑うと、ポケットからカードを一枚取り出した。

「何もしてない…か…。嘘だな、今のお前は『絶望』している。」

ピッ！とカードを投げると、それはミタニの中にズブズブと入っていった。

カードは彼の体を突き抜けると男の手に戻り、彼はそれを持ってキョロキョロと辺りを見回す。

「コイツはいい『負』だ…。1人2人殺せばすぐレベル2に進化するかもな…。」

「精が出るわね、『アーク』。」

「…サヤカか…。」
いつの間にか男の隣に女性…サヤカがおり、彼女は去っていくミタ
二の姿を見つめる。
「それ、だいぶ『負』が溜まってるわね。下手したらレベル2の状
態で誕生出来るんじゃない？」
「かもなあ…。もしそうになると、あの『親』…ククク、可愛そうだ
な。」
「そうね…。」

それから数時間後…放課後。

今日の練習は、なんと学校で行う事となった。

理由は、本日放課後グラウンド使用予定の野球部が練習試合で他校
に行っている為、グラウンドがから空きだから。

サッカー部は本日は内部練習なので、とても都合がいい。

放課後になるや否やヴィヴィオ達がやって来て、アインハルトを交
えて練習開始。

アインハルトは最近、練習する時でも笑顔が出てきているのでヴィ
ヴィオ達も楽しく練習できる。

「もうすぐ予選かあ…頑張っで欲しいな。」

「大丈夫だろあいつ等なら。あー腹減った。剣立なんか持ってない
？」

「購買行け。」

「私も腹減った。」

頑張る少女組をダラダラと見物するだらしない男子組。

ケータイ弄つたりダキバツト弄つたりと色々呑気だ。

「おつ、ルーからメール。何々？『例のアレ出来たから今からヤマトと一緒に持つて行く。オトヤ捕獲しておくよーに！』だど？」

「例のアレ？」

「僕どうなるの!？」

怪しいメールに不安を隠しきれないオトヤ。

ガタガタと齒から音を立てていると、突然後ろから誰かに肩を掴まれた。

その人物は…、

「…テメエら…さつきはよくもやってくれたな…!!」

先程のいじめっ子のお兄さん達でした

いきなり問答無用で殴りかかってきたので、思わずオトヤはそれを避け、シンとハジメのところまでくる。

今を見ていたヴィヴィオ達も練習をやめ、コーチであるノーヴェが駆け寄ってきた。

「どうした？」

「ああ、ノーヴェ…いや…ちょっとね…」

非常に気が進まない顔で不良達の方を見る。

人数は先程が3人だったのに対し、今度は20人近い。どんだけ不良多いんだこの学校?と思いつつ溜息をついた。

というか、中一3人に対して中三20人というのは人としてどうなんだろう?

「今度は容赦しねえぞ…覚悟しろコラア!!!!」

『うわあああああああああ……！！！！！！！！！！』

バシユ……！

そんな間抜けな音が聞こえ、殴りかかろうとして来た不良が倒れた。見ると首に一筋の赤い線が引かれており、そこから血が溢れ出ている。

そして、その不良の上には紫色の体色の一体の怪人が。

カマキリの様な容姿で、鋸の様にギザギザで鋭利な鎌を両手に持った怪人だ。

『マンティスネオ』：レベル2のネオファンガイアだった。

マンティスネオは咆哮を上げると鎌を振り上げ、次々と不良を襲っていく。

「なっ！？や、止める……！」

「くっ……！変身……！」

『チェンジ』

ネオカード『チェンジ』をカリスラウザーにラウズし、ハジメはマンティスネオと同じカマキリモチーフの戦士 カリスに変身。

不良達が切裂かれる前にカリスアローでマンティスネオの鎌を受け止め、弾き返した。

『うっう……！』

「コイツ…進化形態か…!? 登、行くぞ…!」
「あ、ああ…! ダキバット…!」

『ガブリ…!』

「変身…!」

ダキバットを手に噛ませてベルトに装着。

するとオトヤの体がステンドガラスの様に変わっていき、彼は仮面ライダーダークキバに変身。

変身の際にすでに『ガルル・フェイク』のフェッスルをダキバットに噛ませており、変身直後に黒い獣剣『ダキバルルセイバー』が出現した。

「アイン、ヴィヴィオ達をお願い…!」

「は、はい!」

「ノーヴェさん、この子達を連れて逃げていて下さい。」

「わかった! 行くぞ!」

「オト兄! ハジメさん! 頑張つて!」

アインハルトとノーヴェに手を引かれ、ヴィヴィオ、リオ、コロナは校舎の陰に隠れる。

シンは鞆からバスタードライバーを取り出し、援護を開始。

まず先制はカリス…カリスアローでマンティスネオの鎌を受け止めながら相手を翻弄。

ダークキバが隙を作ると、クワガネオのカードである『プラスマ』をラウズして斬りつけた。

『プラスマ』

「はあ…!」

『ぐうう…!』

よろめくマンティスネオ。

そこへスピード重視のダキバルルセイバーを持ったダークキバが斬りかかって行く。

手ごたえはある…だが…、

「ぜ…ぜんっぜん効いてねえ…。」

『キエエエエエエ！…！！』

逆に斬られ、ダークキバはゴロゴロと地面を転がった。

それを心配し、隠れていたアインハルトとヴィヴィオが駆け寄ってくる。

「オト兄…！！」

「オトヤ君…！！」

「いって…もう少しパワーがあれば…！！」

「皆…！！」

その時、1台のバイクが校内へ侵入してきた。

学ランを羽織ったその姿…加藤ヤマトに間違いなかった。

彼はバイクから降りるとバスターバツクルを巻き、フェッスルをドライバーへとセット。

「変身！」

『バスターフェッスルセット バスターモード トランスフォーム』

パーツを体中に纏い、ヤマトは仮面ライダーバスターへ。

これで3対1。

バスターも加わり、これで優勢になったかのように思えた。だが、相手はレベル2…そう簡単には行かない。

バスターとシンが撃つ弾丸を切裂きながら前に進み、彼を斬り付けていく。

「ぐっ…！やるお…！」

『セイバー・ランチャー・ハンマー・フェッスル セット』

3つのフェッスルを同時にベルトへセットし、バスターの両脚に『ランチャー・フット』、右手に『ハンマー・ハンド』、左手に『セイバー・ハンド』が出現。

まずはランチャーでマンティスネオを弾き飛ばし、そこへ更に両手の武器で殴りかかっていく。

「ヤマトさん、俺も…！」

そこへカリスも加わり、2人でマンティスネオを攻撃。しかし…、

『…なんでだよ…！』

「え…？」

『何で俺はいつもいつも苛められなきゃいけないんだよおおおおおおおお…！！！！！！！！！！』

ズバツ！！！！

という音が響き、カリスとバスターは地面へ倒れ変身解除。

マンティスネオは倒れたハジメの胸元を掴み上げ、彼の首に鎌を持

っていく。

「ガハ…ッ！お前…ミ…タニ…ッ!?」

『昔からそうだ…いつもいつも俺ばっかり苛められて…俺ばっか辛い目にあつて…!なのになのにお前等はそんなにヘラヘラ笑ってられるんだよおおおおお!!…!!…!!』

鎌を振り上げるマンティスネオ。

だが、そこへ大人モードへと変身したヴィヴィオがとび蹴りをしかけ、ハジメを救出。

彼の前に、立ち上がったダークキバと武装形態のアインハルトも立つ。

「ミタニ…どうしてネオがミタニの声で…!?!」

「ミタニさん…ミタニさんですよね!?!」

『うるさい!!お前等死んじまえ…俺を苛める奴全員死んじまえええええええええええ!!…!!…!!』

「あまりに強い『負』を抱えた者を親とした時、稀にレベル2の姿で誕生するネオがいる…。そうなった場合、親の意識は全てネオに持っていかれる…素晴らしいな。」

「でも、私はあんまり好きじゃないわ。人間が混じったネオなんて最悪よ。」

校舎の上からダークキバ達を見ているアークとサヤカ。

上機嫌なアークとは対象的に、サヤカの方は浮かない表情だ。

「…行きましょう。」

「何だ、もう見ないのか?」

「見ても無駄でしょそんな勝負。さよなら。」

突然そんな声が聞こえた。

何があったのかと後ろを振り返ると…そこにいたのは…、

「ルー（ちゃん）！？」「」

「加藤兄！！アンタ何私置いて行くのよ！？後ろに乗っけてよ後ろに！！」

「う、ごめん…。」

「まあ、いいけど…オトヤ！！」

「は、はい！？」

突如現れたルーテシア。

彼女は後ろに背負ったリュックの中からタツロットっぽい機械を取り出すと、それをダークキバに投げ渡した。

しかし今ダークキバは手が放せない。

なので代わりにアインハルトがそれをキャッチした。

「何ですコレ？」

「ナイスよアインハルト！！それをオトヤの左腕に取り付けて！！早く今すぐ早急に！！！！」

「あつ、は、はい！オトヤ君、失礼します！！」

隙を見てダークキバの左側に回り、彼の左腕にタツロットを模した機械：『ネオロット』を当てる。

するとネオロットからベルトが発生しダークキバの腕に完全に装着された。

ダキバルルセイバーで一旦マンティスネオを退けると、ダークキバは少し後ろに下がる。

「…何コレ？」

ネオロットをマジマジと見ながら頭を捻るダークキバ。
本来タツロットのルーレットに相当する部分が引き出し式になっている…そこを引っ張ってみると、そこにはカードが何枚か収まりそうな収納スペースと一枚の紙が。
そこにはこう書かれている。

『ネオロットの使い方　ネオカードを入れて頑張る。』

「何と言う説明書！！？？」

「うわー…とつても分かりやすい…のかな？」

思わずダークキバだけでなくアインハルトまで疑問に思ってしまう。
でも、一応使い方はわかったので早速使ってみる事に。

運良く先程カリスが使った『プラズマ』のカードが…ダークキバはそれを拾い、ネオロットへ挿入。

『プラズマ』

ラウザーと同じ機械的な音声が鳴り、ダークキバのダキバルルセイバーが雷を纏った。

アタフタしながらもそれでマンティスネオを斬りつける…だが、あまり効果が無い。

「ちよっ！？何コレあんまり役立たないよ！？」

折角ネオカードが使えるようになったのに、これでは宝の持ち腐れだ。

だが、ルーテシアはフンと鼻で笑い、ビッ！！とダークキバを指で指す。

「『タイプ』を揃えなさい!!!」

「た、タイプ…?」

「そう!!!オトヤが今使っているカードは『プラズマ』で属性は【雷】。で、使っている武器はダキバルルセイバーで属性は【風】、そのタイプを両方向じに揃えなさい!!!」

「両方向じって言っても…あつ。」

そこでダークキバは思い出したかのようにベルトのフェッスルを1つ外した。

紫の『ドツガ・フェイク』のフェッスル。

これの属性は【雷】…『プラズマ』と同じ属性だ。

「不安だけど…ここはやるしかない!!!行くぞダキバット!!!」

『うむ!!!』

ダキバルルセイバーを解除し、ドツガのフェッスルを構える。

左手のネオロットを胸元まで持つてくると、ダークキバはネオロットの先端のスロットに、ドツガのフェッスルを挿入した。

『ドツガ・プラズマ!!!』

「うおおおおおおお!!!!!!」

ダキバットの声と共に、ダークキバが紫色の雷に包まれる。

巨大な紫の電撃の塊り…しばらくすると、そこから黒いハンマーが顔を見せた。

ダキバツガハンマーに間違いは無い。

だが、それを持ってしている戦士は…いつものダークキバでは無かった。ワインレッドだった部分が全てバイオレットパールへと変わっており、両肩、両脚が石像の様に強固な形状に。

腕も…左腕のネオロットを除いては、キバのドッグフォームと同形状に変わっていた。

『仮面ライダーダークキバ プラズマタイプ』

【雷】属性のカードとアームズ装備の『タイプ』を揃えた時のみ変身できる、超パワー形態。

ダークキバはダキバツガハンマーで地面をドンドンと突きながら、ゆっくりとマンティスネオへと歩み寄る。

『く、くるな…!!』

『はあああああ………、』

『くるな!!くるなああ!!!!』

『ふうふうふうふう………、』

『ウエイクアップ!!プラズマ!!!!』

『くるなあああああああああああああああああ!!!!』

『!!!!!!』

『うおおおおおおおおおおおおおおおお!!!!』

『!!!!!!』

片手でブンブンとハンマーを振り回すダークキバ。

1回転させる毎にハンマーが徐々に大きくなっていき、終いには元の大きさの4倍程度まで。

次の瞬間ダークキバの変身が解け、オトヤに戻る。

そのまま彼はぐったりと、深い眠りに落ちた。

「あー… やっぱタイプ揃えるところなるのかー…。」

「あ、あのルーテシアさん… オトヤ君は…?」

「疲労でぶっ倒れたのよ。タイプ揃えると通常の3倍体力消費するからねえ… これ、とどめ専用かなあ…?」

まるで他人事みたいなテンションで言うルーテシア。

実際他人事なのだが…。

そう言えば、最初にミタニを助けた時にオトヤがこう言っていた。

『ごめんね、カッコ悪いとこ見せて…。』

と。

その事を思い出すとアインハルトはフフッと微笑み、倒れたオトヤに向かって小声でこう言った。

「そんな事ありません、とてもカッコ良かったですよ。」

翌日、

ミタニはいつも通り登校してきた。

昨日の事は一切覚えていないらしい。

相変わらずの苛められているが、昨日までとは違う所が1つだけ。嫌な事に対して、キチンと嫌と言える様になっていたのだ。

何があつたのかは分からないが、とりあえずコレで良し。
また今日もテストがあるんだろつなあと、少し下降気味のテンションで、オトヤは机の上に教科書を揃えた。

Re/birth・VIIII いじめ(後書き)

ヴィヴィオ「今回の相談者さんはハルルさんの『どたばた! オーズ兄弟』からオーズ一家の大黒柱(?)、仮面ライダーオーズ ブラカワニコンボさんです!」

ブラカワニ「愛する息子達の為に頑張るパパンです。」

アインハルト「インド人:さん、ですか:??」

ブラカワニ「ハツハツハ、良く言われる。」

ヴィヴィオ「今回のお悩みは?」

ブラカワニ「実はね……最近、パパンのマイ息子達が冷たいのー!

!特にシャウタ!」

アインハルト「冷たい? どういう風に?」

ブラカワニ「うんとねー: 仕事しないからオクトバニツシュされたり、家の金勝手に使うからプロミネンスドロップされたり?」

ヴィヴィハルト「100パーあなたのせいじゃ無いですか?」

ブラカワニ「最近コンビニでバイトしてるよー!」

ヴィヴィオ「うーん: やはり親の苦労は親じゃ無いとわからないかなあ: というわけで、パパママ召喚!」

なのは「こんなの酷いよ... 酷すぎるよ...。」

ワタル「まともな出番はここが最初なんてあんまりだよ...。」

アインハルト「それじゃあ、親御さん同士話し合って来て下さい。」

数分後...

ワタル「それは酷いですね! 親の心子知らずですよ!」

ブラカワニ「まあ、でも: あんな息子達でも、自分にとってはいつまでも可愛い可愛いマイ息子達ですよ...。」

なのは「ブラカワニさんって人が出来てますねー!」

ブラカワニ「いやいや、なのはちゃんもワタル君も中々いい父母だ

と違いますよ？」

オーズ兄弟「……何やってんだダメ親父iiiiiiiiiiii!!!

「……」

プトレミラ「ぶきゅん？」

Re/birth・IX 心配（前書き）

アインハルト「今日はリ・バース後初めてのヴィヴィオさん回ですね。」

ヴィヴィオ「うん、っていうか最近アインハルトさん出すぎ。少し自重してください。」

アインハルト「ヒロインですから（ドヤツ）！」

ヴィヴィオ「…殴り倒して良い…?」

レイジ「この相談室って、いつも相談者ほっとしてる気がする。」

Re/birth・IX 心配

その日は、本当にいつも通りだった。

「ただいまー！」

「おかえりヴィヴィオー！」

いつも通り、ヴィヴィオは友達とのインターミドルへ向けての特訓を終えて帰宅した。

クリスマスだしぶ汚れており、夕飯の前にお風呂に入るのがいつもの彼女のスタイル。

その間になのはが夕飯の準備をしていると、同じぐらいの時間帯にワタルも仕事を終えて帰ってくるので時間的には丁度良い。

夕飯のロールキャベツを作る為にひき肉を捏ねて丸めながら、なのは軽く鼻歌を歌う。

すると丁度ワタルも帰宅した。

ヴィヴィオが風呂から上がる頃には良いタイミングで食事の準備が整い、家族3人＋キバットを含めて食事開始。

今まではこれにオトヤも加わっていたが、彼は現在寮生活なのでこの場にいる事は滅多に無い。

なのははロールキャベツを食べ安いサイズに切り分けると、それをヴィヴィオの皿に載せてあげた。

「はい、どうぞー。」

「ありがと！あっ、パパ今日ねー！私先生に褒められたよ！『登さんはいつも成績良いですね』って！」

「へー、凄いなヴィヴィオ！」

『ホントだなあ、ワタルも昔成績良かったよな『音楽以外』。』

「い…今それを言うかキバット…。」

「でもパパ、バイオリン『だけ』は紅先生のおかげで上達したよね

」

『ホントだな、バイオリン』だけ』。

「ねえ、泣いて良いの？コレは泣いて良い所なのか？」
いつもと変わらない光景。

今日もこの後皆でテレビ見て、ワタルは自室でちょっと仕事して、
なのはは後片付けして、ヴィヴィオは電話で友達とおしゃべりする
…きっとそうなると思っていた。

だが、そんな思い込みはすぐに壊れた。
何故なら…、

「…うっ…！」

「？ どうした母さん？」

「ママ？」

突然、なのはが腹を抑えて苦しみ出した。

何かあったのだろうかと首を傾げる2人…なのはは苦痛に顔を歪め
ながら、もだえ苦しむ。

「お…お腹…いた…！」

「大丈夫か？ヴィヴィオ、その辺に胃痛薬あったかな？」

「どうだったつけ？見てくるね。」

「い…：…いたたた…ああ…：…！」

痛みに耐え切れないのか、なのはは椅子から転がり落ち、その場で
蹲る。

いつもと違いすぎる彼女の様子に、さすがにワタル達も何かおかし
いと思い始めたようだ。

「お、おい母さん…？母さん！？おい、なのは！！ヴィヴィオ救急
車だ！！オトヤにも電話を！！なのは…：…しっかりしろ！！なのは！
！」

オトヤの部屋

「アタッククライド！！ヤギリ！！」

「むっ… やりますね…。 なら私は、アタッククライド！！エスカレーターです！！」

「残念だったなストラトス、俺はファイナルアタッククライド サ・

サ・サ・3！！」

「ああ！？エスカレーターが裏目に！？」

その頃、オトヤは中等科仲良し4人組＋ルーテシア&ヤマトで集まって、全員で仲良く大富豪をやっていた。

最初のうちには全6人でやってたが、徐々に皆飽きてきたのか別の事やり始め、とうとうオトヤ、アインハルト、ハジメの3人だけにちなみにこれではハジメがあたり、次にアインハルト、ビリっけつはオトヤとなった。

現在夜の8時、加藤家の両親はまだ長期出張から帰って来ておらず、アインハルトの両親も今日は父親の同窓会とやらで不在。

暇なのでオトヤの部屋に皆で集まると、それをメールで知ったハジメが『俺だけ仲間はずれは面白くない』との事で駆けつけた。

「ん…やはりKのカードでマキシマムドライブするべきだったか…それとも革命でスキヤニングチャージ…いやいや、ジョーカーと1のカードでリミットブレイクも捨てがたかったか…？」

「オトヤー、今頃んな事言っても見苦しいだけだぜ？」

ヤマトとチェスしながらそう言うシン。

うっ…と落ち込むオトヤだが、正論なので反論しようが無い。

渋滞に引っかかってしまった為、病院に着くのが少し遅れてしまったオトヤ達一行。

病院に着くや否や、全力で走り出し母のいる病室へと向かう。

一応ワタルからメールで病室を聞いていたので看護婦に聞かなくても真つ直ぐ向かう事が出来た。

彼が院内を走っている為、それを追いかけるヤマトは院関係の人とすれ違つたびに『すいません、ホントすいません』と頭を下げまくる。

「母さん!」

『「」』

「あつ…ごめん…」

病室につくと、そこは父と妹、それとキバットの姿が。

母はいない…本当にこの2人とキバットだけ。

「か、母さんは?」

「今、検査中。とりあえず、ここで待つとけて言われたから待ってる。お前も座れ、焦っても仕方ないだろ?」

「う、うん…」

ワタルもヴィヴィオは非常に浮かない顔をしている。

当然だ。

だが、焦った所でののが助かるといわけでも無いので、待っているしかないという結論に落ち着いたらしく…2人とも無言で座っている。

勿論、キバットも。

少し遅れてアインハルト達も駆けつけてくれ、全員で一斉に…、

「……なのはさん（お母様）は！！！？」「」

「……『』しーっ。『』」「」

「……あつ、すいません。」「」

何このデジャブ？

と、1人思うヤマトだったが、空気を読んでそんなツッコミはしない。

どうやらなのはが病室に運ばれたのはオトヤ達が来る少し前だったらしく、まだ少し検査には時間が掛かるらしい。

待っている間、ワタルが全員にジュースを買い与え、自分も缶コーヒーを持って椅子に座った。

ギリギリと、中身が入っているにも関わらずそれを握りつぶすくらい、強く拳を握る。

しばらくして、自分が怖い顔をしていると気がついたのか、自分を心配そうに見る皆に少し笑いかけると、潰れた缶を椅子に置いて顔を俯かせた。

「皆ありがとっ、こんな時間に……。」

「いえ、大丈夫ですよこんぐらい！なっ、シン。」

「おう。」

「なのはさんにはカズマさんもフェイトさんもお世話になってますから。」

「それにしても心配ですね……。？ ヴィヴィオさん？」

その時、アインハルトがヴィヴィオの様子に気付いた。

彼女は尋常じゃない程顔が薄白になり、ガタガタと震えている。

「……ママ……ママ死んじゃうのかな……！？嫌だ……ヤダヤダ……！！
そんなのって……！！！」

「そ、そんなわけ無いじゃ無いですか！！大丈夫ですよヴィヴィオさん、今は信じて待ちましよう？」

「は…はい…」

ヴィヴィオの肩を優しく抱き、アインハルトが彼女を落ち着かせた。そして…、

ウィーーン

という機械的な音を立て、病室の自動ドアが開かれた。するとそこから現れたのは…、

「ママ…！」

「ヴィヴィオ！」

元気そうなのはだった。

顔色も良く、とてもさつきまで苦しんでいたとは思え無い程すつきりした表情で駆け寄ってきたヴィヴィオを抱きしめる。

一緒に医師も出てきて、彼の方もかなりニコニコしていた。

「なのは大丈夫なのか!？」

「うん、心配かけてゴメンねワタル君。」

「母さん…！」

「あ、オトヤ達も来てくれたの？ありがとー！」

もう本当になんとも無い様だ。

それよりも今はなのはを診察していたこの医者がニコニコしている理由の方が気になる。

医師はトコトコとワタルの前に立つと、彼の肩を掴んで更にニッコ

りと笑った。

「アナタが登さんの旦那さんですか？」

「あ、はい…そうです。あの…妻の容態は…？」

「外面的、内面的にも全く問題無しです。健康そのものですよ。」

「よ…よかったあ…。」

安心しまくった結果、ワタルは全身の力が抜けて床に座り込んだ。

しかし、と…医師が急に言葉を返すので、途端にワタルの表情が再び曇る。

何故かそれと同時になのはが顔を赤らめ、全員で首を傾げた。

「奥様は健康面は正常、魔力値も至って正常。しかし…、」

「し、しかし…？」

「おめでとついでいます。」

「は？」

今度は何故か祝いの言葉。

この医者人舐めてんのかと拳を握る。

そして、医師は誰しも驚く驚愕の事実を突きつけた。

とりあえずあんまり五月蠅いのでワタル達一行は病院から強制排除外に放り出された後、ワタルはなのはをその場で思いっきり抱きしめた。

ここまでテンションが高いワタルなんて見た事が無い……。多分、なのはや、親友のカズマ達ですら見た事無いだろう。

「ママ、赤ちゃんできたの？」

「そっだよ、ヴィヴィオの弟か妹だね。ヴィヴィオお姉ちゃんってわけだ。」

「お姉ちゃん……？」

「良かったですね、ヴィヴィオさん！」

「……う、うん……。」

「……？」

何故だろう、ヴィヴィオにあまり元気が無い。

本来喜ぶべき事のはずなのだが、寧ろほとんど元気が無くなっていつている様だ。

多分気のせいだろうと思い、ワタルは携帯でタクシーを呼ぶ。

「アイン、今日僕実家帰るよ。母さん本調子じゃ無いし、心配だしさ。」

「わかりました。ではまた明日学校で。」

「んじゃなー！」

しばらくは実家通いになりそう、とアインハルト達に伝えると、皆コクリと頷いて帰宅。

浮かない顔のヴィヴィオの手を引くと、オトヤ達はやって来たタクシーに乗って帰路へとついた。

それから帰宅し、次の日はなのはの様子を見る為にオトヤもヴィヴィオも学校を休んだ。

ネオが出現したという連絡がシンからあったが、その後に『兄貴と剣立でやるからお前は休んどけ』というありがたいお言葉を頂き、オトヤは家の掃除に専念。

さすがに妊婦に家事をさせるわけにはいかない。

この中でまともに家事が出来るのはオトヤだけなので、彼は家の中を掃除しながら同時にじっくりと時間をかけて作れる煮物を煮込む。ワタルはなのにはついており、ヴィヴィオはオトヤの手伝いだ。だが、

ガッシャアアアン！！

「な、何だ！？」

『キッチンの方だな。ヴィヴィオ嬢か？』

キッチンの方から大きな炸裂音。

確か今、ヴィヴィオが昨日洗えなかった夕食後の皿を洗っているはずだ。

行ってみると、案の定、ヴィヴィオが皿を割った音だった。

「ヴィヴィオ大丈夫？怪我して無いか？」

「うん…ごめん…。」

「まったく、気をつけるよ。もうすぐお前も『お姉ちゃん』になるんだから。」

「……………うん…。」

コクリと頷くと、ヴィヴィオはそのまま2階へと上がっていく。何であんなにテンションが低いのだろうと思いつつ、オトヤは煮物の事を思い出して鍋の前に。

『なあオトヤ、ヴィヴィオ嬢様子おかしく無いか？』

「思った。いつもは馬鹿みたいにテンション高いのに……。」

『…複雑なんだろ。』

「何が？」

『お前とヴィヴィオ嬢は……言いたくないが、ワタル殿となのは殿の血の繋がった家族ではない。お前はある程度その辺割り切ってるようだが……。』

「当たり前だろ。血なんか繋がって無くても、家族は家族なんだから。」

『だがヴィヴィオ嬢はそう思っていないかもしれない。なにせ、今まで血の関係が無かったこの家に、急に両親と血が繋がった子が生まれるのだ。そうなる……うむ……。』

「なるほどねえ……。」

やはりダキバット、生きている年数が違う。

普段はKYすぎても、こういう時には何気に一番頼れる。

確かに、オトヤは4年前の事件の際に、『血は繋がって無くても家族は家族』という事を十分すぎるほど教えられたが、ヴィヴィオは違う。

もしもワタルとなのはの間に実子が生まれたら……そう思うと不安なんだらう。

オトヤがそんな風に思っていると、上からまた変な音が鳴り、続いてワタルの声が。

何事かと思つて上の階に行つてみると、こけたなのはを支えながらヴィヴィオを叱るワタルの姿が。

「危ないだろヴィヴィオ！余所見してたら！」

「……。」

「ぱ、パパそんなに怒らなくても……ほら、ヴィヴィオも反省してるし……ね？」

どうやらヴィヴィオが余所見してなのはにぶつかつて、彼女をこか

せてしまったらしい。

運動神経抜群の普段のヴィヴィオからしてみれば、相当違和感を感じる事態だった。

「母さんは甘すぎるよ。一度ごういづのはちゃんと叱って…、」

「……………よ…。」

「「え？」」

「もう…ほつといてよ…。」

「ヴィヴィオ…？」

『あちゃー…ついにか…。』

普段からは想像もつかないほど低い声で呟くヴィヴィオ。

ダキバットは想定していた最悪の事態が発生してしまった為、溜息をついてオトヤの肩に止まる。

「ヴィヴィオどうしたの…？もしかしてどこかぶつけて…、」

「もう放っておいてよ！！パパもママも！！もうすぐ2人の本当の子供が生まれるんだよね！？だったら、こんなミスばかりする血も繋がってない娘なんていらんないじゃない！！だったらもう…私の事は放っておいてよ…！！！」

「ヴィヴィオ何を言ってるんだ…？ヴィヴィ、」
「くっ…！」

ワタルの制止も聞かず、ヴィヴィオは走って下へ降り、そのまま家の外へと出て行ってしまった。

なのはが追いかけてようとすが、急に腹部に強烈な痛みを感じ、再びその場に座り込む。

当然、彼女を支えてあげなければならぬワタルもこの場を離れられない…ならば…、

「父さん母さん、僕ヴィヴィオ連れてくるよ。」

「私も行く。」

『だったら俺もいくぜえ！』

「頼むオトヤ、キバット、ダキバット。」

「気をつけてね？」

今までも喧嘩したらこうやってオトヤが追いかけてってヴィヴィオを捕獲、お互いに話し合って和解というスタイルをとっていた。

今回もそれで済むだろうと、オトヤは駆け足で家を飛び出し、ヴィヴィオを探す。

だが、彼女も伊達にインターミドル優勝目指している格闘技選手じゃない…。

めちやくちゃ足が速い為、もうすでに見失っていた。

その後キバット、ダキバットと一緒に探すが見つからず、3人は一旦自宅に集合。

「ダキバット…はあ…はあ…見つかったか…？」

「ダメだ、キバット殿は？」

『全然ダメだぜえ。ヴィヴィオ走るの早すぎ。』

いつもならばすぐに追いついて連れて帰れたが、今日は追いつけなかった様だ。

でも、こういう場合は大抵お昼過ぎたらお腹空いて帰ってくる。
その時になのは達に謝ってご飯食べて、はい解決、というのが本来。
だが、誰が予想しただろう？

この日、朝から消えたヴィヴィオは…夕方になっても帰ってくる事は無かった。

Re/birth・IX 心配(後書き)

本編にあわせ、ヴィヴィオが逃亡中です。

アインハルト「今日の相談者はツリーさんの『仮面ライダーディケイド×電撃学園 Cross of World』からレイジさんです。初めまして。」

レイジ「ご丁寧にも。俺の悩みなんだけど……幼馴染にキズナって奴がいてさ、俺が褒めたり喜ばせたりすると……アイツ逆に怒るんだよ。どうしたいんだろう?」

アインハルト「褒めると怒る……?DM……いやいや……なんででしょう?」

レイジ「ホント、何でかなあ……?アインハルトってそう言う事無い?」

アインハルト「私ですか……?うーん……」

以下妄想

オトヤ「アインって凄く強くて、とっても可愛いよね!」

アインハルト「……エへへえ……」

レイジ「っと、それが普通だよな?何でだろう……アイツ俺の事嫌いなのかな……?」

アインレイ「うーん……?」「」

アंक「ちっ、やっぱ……俺がついて無いと色々まずいか……?」

アインハルト「アंकさん！アナタ活動報告限定じゃ無かつたんで
すか！？」

アंक「以前のブラカワニの辺りから少し見てたが…いい加減耐え
切れなくなってきた。おいレイジ、その褒めるの…もう少し続けて
みる。そうすりゃ、そのキズナって奴の本当の気持ちかわかるはず
だ。」

レイジ「そうなの？じゃあ…やってみようかな？ありがとう2人と
も。」

アंक「ちっ。」

アインハルト「アंकさん、ありがとうございました。」

アंक「ふんっ、礼言づくらいならアイス寄越せ。」

Re/birth・X 本当の家族（前書き）

アインハルト「今日はヴィヴィオさんが諸事情でいないので、私と…そして、アंकクさんで頑張ります!!」

アंकク「活動報告限定だったが、何かあまりにも不安すぎたのでこっちでも出る事になった。俺があんまり活躍できない『オーズクライン』も連載中だ。読みたければ読め、それも欲望だ。」

アインハルト「って、ここで宣伝しないで下さいよ。一応ダキバ何ですから。」

アंकク「うるせえ、800年前からの俺の欲望だ。」

キズナ「もうここがどこなのかわかりません。」

ヴィヴィオが出て行ってから約6時間後の夕方17時…普段ならば、ヴィヴィオは特訓して無い限り16時半には家に帰ってくる。

喧嘩した後でも、いつもなら帰ってくる。

だが今日に限り、彼女は帰ってくる気配を見せない。

近所を探してみても、全く見当たらない。

さすがにワタルもなのはも不安を隠せなくなって来ており、そわそわし始めていた。

「ヴィヴィオの奴遅いな……。」

「もう、パパが怒りすぎたからだよ。」

「……。」

どうしてヴィヴィオが今日に限って帰って来ないのか…オトヤはその理由がわかる。

何せ、自分とヴィヴィオはワタルとなのはの本当の子供では無いから。

それどころか、純正な人間ですらない。

所詮はスカリエッティに生み出された人造生命体……きっとヴィヴィオはその事を気にしているのだ。

表面に出していなかっただけで、きっと今までもそう感じていたはず。

今まで溜めてきた想いが、今回のなのはの妊娠でとうとう爆発したのだ。

もしかしたら……嫌な予感が頭をよぎり、オトヤは玄関へ。

「オトヤ、何処行くの?」

「ヴィヴィオ探してくる。母さんはゆっくりしててよ。行くぞダキバット。」

『了解した。なのは殿、無理はされぬよう。』

「う、うん……気をつけてね。」
「んー。」

何も気にしてませんよ的な淡泊な表情で家を出るが、内心メチャクチャ焦っていた。

友達の家に行ってるかと思ってコロナやリオやレイヤに電話もしてみたが、いない。

ナカジマ家も違う。

少なくとも、オトヤが想定できる場所にはどこにも行っていない様だ。

だったらやる事は一つ……、

「よし、死ぬ気で探すぞダキバット！」

『うむー！』

その頃、ヴィヴィオは一人で川原で座っていた。

もう、かれこれ2時間もここにいる。

しかもここはミッドの郊外からだいぶん離れた位置にある……多分、実家からなら車でほしい40分かかる場所。

一心不乱に走り続けた結果、ヴィヴィオは全く知らない場所まで来てしまったというわけだ。

つまり……、

帰りたくても帰れない（ 帰り方がわからない）

お腹も空き、辺りも暗くなってきた…不安に押し潰されそうになる。今頃、両親は自分の事を心配してくれているのだろうか？
多分している、でも…、

「……………」

帰りたくない。

帰ったら、嫌でも母と顔を合わせる。

自分ともオトヤとも違う、『自分達の子供』を身ごもった母に。

もしもその子が生まれたら…そう考えると、涙が込み上げて来た。

「…ひつく…えう…」

その子が生まれた時、自分やオトヤがどう思われるか？

やはり、養子の自分達よりも血を分けたわが子の方が可愛いに決まっている。

そして段々と、血の繋がらない自分達が疎ましくなってくるかもしれない。

わかっている…そんな事絶対に無いと。

わかっているのに不安になる…ヴィヴィオはそんな自分に無性に腹が立った。

そのせいで余計に涙が止まらない。

「どろりして泣いてる？」

「…え…？」

その時、1人の男がヴィヴィオの後ろに現れた。

銀髪パーマのスーツの男…彼はヴィヴィオの隣に立つと、彼女にハ
ンカチを渡す。

「何があつた？どうして涙を流す？」

「な…何にも無いです…。」

「嘘だろう？何があつたんだ？」

ヴィヴィオがいくら拒否しても、この男はしつこいぐらい聞いてく
る。

そろそろ嫌気が差したので、とつととおっぱらおうと思ひ、ヴィヴ
イオは仕方なく正直に話した。

コクコクと頷きながら男はヴィヴィオの話を興味深そうに聞くと、
煙草を噴かして空を見上げた。

「そうかあ…じゃあ、お前は今『絶望』してるってわけだな…？」

「ぜ、絶望って…別にそんな大げさなことじゃ…。」
「絶望…それは、人が感じる事の出来る『負』の感情の限界点…こ
れ以上無いぐらいまでどん底の状態だ…。」

「ネオファンガイアが好みそうだな。」

「！…？…何…あなた…？」

『ネオファンガイア』…確かにこの男は今そう言った。

管理局ですら知らないこの怪人の名を知っているのは実際にネオと
戦うダークキバとその仲間だけ。

勿論、その他の人間が知るはずも無い。

だが、この男は今、確かにその名を口にした。

「俺はアーク。『ヴァンパイアレジエンドルガ』のアーク。よろしくな、聖王。」

ヒュン！

何か空を切る音がヴィヴィオの耳に響くと、彼女はぐったりと力無く倒れた。

アークはヴィヴィオの足元に落ちていたカード：『セイクリッド』のカードを取り上げると、それを持ってその場を離れる。最後に、クククと不気味そうに笑って。

「オトヤ！！！！」

「登！！」

「オトヤ君、ヴィヴィオさんは！？」

その頃、オトヤは友人5人に連絡を取り、近場の公園に集合していた。

集まったのは勿論何時ものメンバー：シン、ハジメ、ルーテシア、ヤマト、アインハルトだ。

ヴィヴィオとも仲が良いこのメンバーならきつと力になってくれる…そう考えた。

案の定、全員2つ返事で来てくれた。

やはり全員、ヴィヴィオが心配なのだ。

特にアインハルトなど、取り乱し方が半端じゃなく、顔がもう真っ青。

「オトヤ、お前ヴィヴィオが行きそうな所とか検討つかねえのかよ

!？」

「もう全部探した！今リオちゃんとコロナちゃん、ついでにレイヤにも探してもらってる！でも…少なくともこの近辺にはいない！」
「どうしましょう…もしも…もしもヴィヴィオさん、誘拐とかされてたら…！」

「さつさと探した方が良いな。行くぞ。」

「加藤兄、バスターのレーダーフェッスルを使いなさい。あれなら搜索に向いてるわ。」

「わかったよ。よし、変身…！」

『バスターフェッスルセット バスターモード トランスフォーム』
ルーテシアに言われるままにヤマトは仮面ライダーバスターへと変身。

腰のフェッスルを一つ抜き取ると、それをバックルへと挿入。

『レーダーフェッスルセット レーダー・イグニッション』

するとバスターの右の上腕に黒いレーダー…『レーダーアーム』が出現。

予めオトヤに持ってこさせていたヴィヴィオの写真をその中に入れると、腕のモニターにマップが現れた。

これを使えばヴィヴィオの居場所がわかる…と、思ったが…、

「ねえ、ヴィヴィオちゃんって何人いるの？」

何故かマップに出ているポイントの数は凡そ30。

どれが現在地なのか全く検討がつかない。

「あ…しまった…その機能、『その日のうちに対象が行ったところ』だ…。」

「マジかい…でも、全く分からないよりいいや…。じゃあ、プリントするから皆に配ろう。」

なんとこのリーダーアーム…ごく丁寧にプリントアウトの機能まで付いている。

1人一枚ずつマップを配ると、全員顔を見合わせ、コクリと頷く。

「じゃあ…皆、頼む。」

「ああ。」

「行きましょう！」

アインハルトのその言葉を合図に、一斉に走り出すオトヤ達。

皆別々の方向へ向かい、バスターが出した地図を頼りにヴィヴィオの搜索を開始した。

だが、数時間経過した夜10時になっても、ヴィヴィオは結局見つからなかった。

バスターの機能が壊れているのか？

そうも考えたが、実はこのリーダーアーム…自分がいる街中のマップしか表示できないらしい。

便利なのか便利では無いのか、本当に微妙な機能だ…それでも収穫はあった。

ヴィヴィオはもうすでに街の中にはいないという事だ。

登家があるのはミッド郊外の西側…郊外の西側には街など無い。

となれば、全く正反対の東側にいった事になる。

あそこまで行くには、人間の足だったら大体約4時間ぐらい。

まさかヴィヴィオがそんなに歩くなんて…？

しかし彼女もインターミドル選手、そのぐらいやるかもしれない。

もう全員、アインハルトですらヘトヘトだ。

「ありがとう皆、後は僕が探すよ。ゴメン、こんなのにつき合わせちゃって…。」

「いえ、最後まで付き合わせてください。」

「ここで帰っちまったら、何か後味わりいしな。」

「残念だったな登、ココにいる全員、お前と考える事はだいたい一緒だ。」

アインハルト、シン、ハジメの順でそう言ってくれた。

オトヤはありがとう、と一礼すると、再びヴィヴィオの搜索を開始しようとした。

その時…、

『…………ふうふう…………。』

「……！」

突如、オトヤ達の背後に奇妙な影と声が。

振り返ってみると……そこにいたのは……まるで恐竜の様な見た目の怪人……。

白と青と紫を基調とした怪物……『ダイナソーネオ』。

間違いない……レベル2のネオファンガイアだ。

「ネオ……嘘たるこんな時に……!?!」

「先に行け……と、言いたいが、コイツは一筋縄では行かないか……行くぞ登……！」

「ああ、ダキバット……！」

『ガブリ……!』

「「変身……!」」

『チェンジ』

『絶滅タイムだ!』』

突如出現したダイナソーネオを前に、オトヤとハジメはそれぞれのベルトを巻きつけて仮面ライダーダークキバとカリスにそれぞれ変身。

すでに変身しているバスターに並ぶと、3人のライダーは武器を構えた。

その後ろではシンがルーテシアとアインハルトを下がらせ、彼自身もバスタードライバーを準備していた。

「加藤、私ら戦えるわよ?」

「試合前に大怪我したらどうすんだよ?いいから黙って見とけ。」
ルーテシアにそう言うと、シンは戦うライダー組に近寄って援護射撃。

ヤマトが変身する仮面ライダーバスターと違い、彼の射撃は『もうアイツ1人でいいんじゃないかな?』レベル。

正確にダークキバ達の間を縫い、ダイナソーネオだけを攻撃出来ている。

この援護があるからこそ、ダークキバ達は全力で戦えるのだ。

『プラズマ』

『トルネード』

『ランチャー・リーダーフェッスルセット ランチャー・リーダー・イグニッション』

ダークキバはネオロットに『プラズマ』のカードを、カリスはカリスラウザーに『トルネード』をラウズ。

バスターはリーダーアームとランチャーフットの両方を装備した。

リーダーの真骨頂は『ロックオン』…これで、射撃が苦手な彼にも

ランチャーが使いこなせる。

しっかりと狙いを定め、ランチャーをぶっ放すバスター。

よるめくダイナソーネオに、雷を纏ったザンバットソードを構えた
ダークキバと、風を纏ったカリスアローを構えたカリスが斬り込ん
だ。

ダイナソーネオは少し後ずさると、咆哮を上げてダークキバの首を
掴み上げる。

「ぐう…!!」

「登!!」

『何で…どうしてオト兄は平気なの…?』

「!!?? その声…お前…ヴィヴィオ…!?!」

聞きなれた声を発するダイナソーネオ。

そのまま彼女はダークキバを地面に叩きつけた。

更にダークキバを踏みつけ、彼の体を引き千切ろうと力を込める。

「ぐ…ぐうああああ!!!!」

『オトヤ!!くっ!止める!!止めるヴィヴィオ嬢!!』

「やめるおおお!!!!」

そこへランチャーフットを身につけたバスターが蹴り込んで来た。

ダークキバからダイナソーネオが離れると、更にバスターはフェッ
スルを追加。

『セイバー・ハンマー・ブースターフェッスルセット セイバー・
ハンマー・ブースター・イグニッション』

すると彼の右手に『ハンマーハンド』、右腕に加速装置『ブースタ
ーアーム』、左手に『セイバーハンド』が出現。

それを使ってダイナソーネオに接近戦を仕掛け、彼女を殴り飛ばす。
「っしゃー！どんなもんだー！」

「ま、待って下さいヤマトさん！！アイツは…！！！」

「あれは聖王だよ、帝王。」

その時、今度は聞きなれない声が聞こえた。

どこから聞こえるのだろうかとうと辺りを見回してみるが、どこにも見当たらない。

と、思ったら…何時の間にかその声の持ち主はダイナソーネオの隣におり、煙草を踏み潰していた。

彼はダイナソーネオの肩に手を置くと、フツと鼻で笑う。

「なんだ…アイツ…！？」

「……？」

謎の男の出現に、困惑するバスターとカリス。

何故かカリスは男の顔をみるや否や、頭を抑えて少し苦しそうにしている。

「は、ハジメ君…？何やってんの大丈夫…？」

「え…ええ…大丈夫です…。」

「おい！！このネオがヴィヴィオって…どういう事だ！！」

そんな中、ダークキバは男にそう言い放った。

男は次の煙草を取り出そうと、胸ポケットに手をつ込みながら言う。

「俺達が作ったネオファンガイアは人間の『負』の感情を使い生まれる。その『負』が強ければ強い程、その力が増す。いきなりレベル2の状態で生まれた場合は、その『負』を持っていた親の意識をネオに移し変える。いや…奴の場合は『親そのものを取り込んでい』る。どうだ？このネオ…お前に倒せるか？」

「なに…！？お前…何なんだ…！？」

「…俺はアーク。『レジェンドルガ』だ。」

そう言うと男：アークは手から赤い刀を出現させた。

それを片手で握り、アークはダークキバへと切りかかっていく。

咄嗟の事にダークキバは上手く反応できずに、体を斬られてしまった。

だが浅い…彼はザンバットソードを握り、アークの刀にぶつける。

「レジェンドルガ…！？お前が…今までネオを作ってたのか！

！」

「俺だけじゃないがな。帝王、お前と霸王は邪魔だ。ここで死ぬ！」

「誰が死ぬか！！」

刀を弾き飛ばし、アークを突き飛ばした。

一旦身を引くと、ダークキバはネオロットへ『プラズマ』のカードを挿入。

腰からドツガのフェッスルを抜き取り、それをネオロットまで持つて来た。

「それは…？」

「ダキバット…一撃で終わらせるぞ！！」

『了解した！！』

『ドツガ・プラズマ！！』

ネオカードとフェッスル…2つの力が混ざり合い、ダークキバはその体に紫色の装甲を纏う。

形態の変化を完了させると、右手でダキバツガハンマーを握り、ダークキバは『プラズマタイプ』へと変身完了。

片手でハンマーをブンブンと振り回すと、それでアークを狙う。

だが、それを見て隠れていたアインハルトが思わず叫んだ。

「ま、待ってください！！相手は人間ですよ！！？」

「違う！！コイツ…人間どころかファンガイアでも無い…！！なんか、こう…嫌な感じがするんだ！！」

「だからレジェンドルガだって。まあ、知らないのも無理無いか…。」

┌

淡白な表情でそう言うアーク。

それを無視し、ダークキバはハンマーを振り回して攻撃を仕掛けた。プラズマタイプ時の必殺技…『プラズマ・スラップ』だ。

それでアークを狙うが…なんと、アークは刀でそれを受け流し、

ダークキバを一気に切り抜いた。

「ぐあつー!!」

変身が解け、ダークキバはオトヤに戻る。

それを見て、アークはつまらなそうに刀をしまった。

「何だ帝王？その程度か？」

「ぐ…ヴィ、ヴィオ…!!」

「……………ふんつ。」

ダイナソーネオに手を伸ばそうとするオトヤを見て、アークは鼻で笑い、その場から姿を消した。

去る前の彼の目には『こんな奴どうにでもなる』と言った余裕の光が見えた。

悔しい…だが、今はそうも言ってもらえない。

オトヤは再びユラリと立ち上がり、ダキバットを呼ぶ。

『おいオトヤ…大丈夫か!?』

「大丈夫…それよりもヴィヴィオを…!!目を覚ませヴィヴィオ!!僕と一緒に家に帰ろう!!ヴィヴィオ!!」

『やめて…!!どうしてオト兄は平気なの!?私達、パパやママの本当の家族じゃ無いんだよ!?もしも本当の子供が生まれたら…私達どうなるの!?不安じゃないの!?悲しく無いの!?』

「ヴィヴィオそれは違う…!!父さんや母さんがそんな人じゃ無いのはお前が一番良く知っているだろ!?もしもあの2人に本当の子供が生まれたとしても、今と全然変わりは無い!!新しい家族が増える…それだけじゃないか!!」

『違うよ!!きつと……パパやママも、子供が生まれたら変わっちゃう…絶対に!!』

ネオファンガイアに取り込まれた人間はその『負』を何倍にも増幅させる。

そのせいで、今のダイナソーネオ…ヴィヴィオは完全に両親への信用を失っていた。

ボロボロになりながらも、オトヤは彼女へ必死に呼びかけるが、無

駄だった。

カリスも、バスターも、アインハルトもルーテシアも……今のヴィヴィオへ言葉を届かせる事は不可能。
しかし……

「本当にそう思うのか!？」

その時、彼女の元に1人の男が、金色の蝙蝠と共に現れた。
オトヤとヴィヴィオの父親……登ワタル。

その隣には、彼の妻で2人の母……なのはもいた。

少し苦しそうにする彼女を支えながら、彼はゆっくりとダイナソーネオに近寄っていく。

「と……父さん……母さん……!!」

『パパ、ママ……何しに来たの……!!』

「ヴィヴィオ……俺のせい……今、元に戻してやる……。」
「父さんダメだ!!!危ないよ!!!」

必死に父を止めるオトヤ。

だが、ワタルはなのはをゆっくりと地面に降ろすと、ダイナソーネオ目掛けて走ってきた。

ダイナソーネオの襟元を掴むと、彼女に肉弾戦を仕掛ける。

だが、勿論敵うはずもなく、彼はオトヤのところへと投げ飛ばされてしまった。

それでもワタルは立ち上がり、オトヤと並ぶ。

「ヴィヴィオ……俺達は決してお前やオトヤを見捨てたりしない……2人とも、俺と母さんの大事な子供だ……見捨てるなんて、そんなのありえない……」

『嘘だよ……嘘だ嘘だ嘘だ……！そんなの嘘だあああ……！』

「嘘じゃない……！賭けても良い……！俺達は、誰一人としてお前に寂しい思いや、悲しい思いをさせない……！絶対にだ……！」

「父さん、ヴィヴィオのあの思いを加速させてるのはアイツを包んでるあの怪人だよ。アレだけ倒せれば……！」

「成る程、これ以上……俺の娘に……」

「僕の妹に……」

「……苦しい思いはさせない……！……！ダキバット（キバット）……！……」

『久々に……親子でキバっていくぜ……！……！』

『行くぞキバット殿……！ワタル殿……！……！』

『ガブリ……！……！』

『ガブツ!!』

2匹のキバットバット族はそれぞれの主人の手に噛み付いた。するとオトヤとワタルの顔に奇妙な模様が浮かび上がり、同じデザインの色違いのベルトが巻かれる。

ワタルはキバットを前に、オトヤはダキバットを斜め上に突き出し、2人同時に叫んだ。

「「変身!!!」」

『キバって行くぜ!!』

『絶滅せよ!!』

キバットとダキバットの声が重なると、それに合わせてワタルの下にタツロットも飛んで来た。

2人は体をステンドガラスの様に変わると、そこから更に姿を変える。

「王の判決を言い渡す!!死だ!!」

「光栄に思え!!絶滅タイムだ!!」

仮面ライダーキバ エンペラーフォームと仮面ライダーダークキバかつて敵同士だった2人の仮面ライダーに、出会って4年の時を経てとうとう、肩を並べて戦う時が来たのだ。

カリスとバスターは2人の戦いを見守る為、変身を解除してアインハルトとルーテシアの下に。

2人とも結構ポロポロで、彼らの介護はシンとルーテシアが。

何故かハジメは、何か思い耽った様な表情で、頭を抱えている。キバとダークキバは、それぞれのザンバットソードでダイナソーネオを翻弄。

キバが使っている方は、ダークキバに渡したオリジナルの物のレプリカ。

それでもそれなりに威力はあり、ダイナソーネオに的確にダメージを与えていく。

『ぐあっ!?!』

「ヴィヴィオ、絶対に助けてやる。行くぞオトヤ!!」

「ああ!!」

ダイナソーネオを次々と攻撃するキバとダークキバ。

しかし、ダイナソーネオの中にはヴィヴィオがいる…全力の攻撃は出来ない。

苦戦しているダークキバを見かね、ハジメはポケットの中からカードを一枚取り出してアインハルトに渡す。

「これは…?」

「登に投げてやれ…俺はこの通り、ちょっと投げれそうに無いからな…。」

「は、はい!オトヤ君これを!!」

ハジメから受け取ったカードをダークキバへ投げるアインハルト。

ダークキバはそれを右手で受け取ると、ネオロットへと挿入。

『スプラッシュユ』

ネオロットから『スプラッシュユ』の音声が発せられると、腰のフェツスルを1つ取り外す。

『スプラッシュユ』のカードのタイプは【水】…それと同じタイプのフェツスルは『バツシャー・フェイク』。

それをネオロットへと挿入すると、ダキバットから力強く音声が発せられた。

『バツシャー・スプラッシュュ!!』

するとダークキバの体のワインレッドの部分が、エメラルドグリーンへと変わっていく。

右腕に魚をイメージした様な装甲を纏うと、最後に黒い銃…『ダキバツシャーマグナム』を手に取った。

これが『スプラッシュタイプ』。

ダークキバの【水】のタイプ。

敵を正確に狙い撃つ事の出来るこの形態ならば、ダイナソーネオの急所を確実に撃ち抜ける。

『ウエイクアップ!! スプラッシュュ!!』

「ヴィヴィオ!! 今助ける!!」

引き金を弾き、ダイナソーネオを撃つダークキバ。

勢い良く放たれた水流は、ダイナソーネオの体内へと侵入。

水流の流れに任せ…なんと、ダイナソーネオの口より…、

「キヤア!!」

ヴィヴィオが出てきた。

素早くそれをアインハルトが救助しにいき、それと入れ替わりでダークキバとキバのダブルライダーキックが炸裂。

これえヴィヴィオはいない…あとは全力でコイツを屠るだけだ。

再びノーマルフォーム（彼はこの形態を通称『キバタイプ』と呼んでいる）に戻り、ウエイクアップフェッスルをダキバットに。

「ワタル君!! これを!!」

「ああー!!」

キバの方はなのはからレイジングハートを投げ渡されると、それを胸元に押し当てた。

『スタンバイレディ!!!セツトアップ!!!』

カツー!!と白い光に包まれると…キバはその姿を、最強の形態へと変えた。

『仮面ライダーキバ エクシードエンペラー』だ。

かつての『J.S事件』を解決したキバの最強形態であり、ワタルとなのはの力が融合した究極のソーサリーライダーシステム。

ウェイクアップフェッスルをキバットへと噛ませ、ダークキバと共に飛び上がる。

『ウェイクアップ!!!2!!!ゆくぞオトヤ!!!』

『ファイナルウェイクアップ!!!行くぜえワタル!!!』

「うおおおおおおおおおおお!!!!!!!!!!!!!!!
!!!!!!!」

ダークキバ最強必殺『キングスバーストエンド』とキバ最強必殺『エクシードエンペラーブレイク』が同時にダイナソーネオに炸裂。当然、いくらレベル2のネオと言えども『牙の帝王』と『白い魔王』に勝てるはずも無い。

ダイナソーネオは呆気無く爆散し、地面に『セイクリッド』のカードが落ちてきた。

それを拾い上げ、ダークキバとキバは変身を解き、なのはと共にヴ

イヴィオの下へ。

「ヴィヴィオ！！ヴィヴィオ大丈夫か！？」

「どこも痛くない！？怪我してない！？怖かったね…ごめんね、ヴィヴィオ…！」

「…パパ…ママ…どうして泣いてるの…？オト兄…？」

「皆、お前を心配してたんだよ。つたく、お前も案外無茶するな！」

「い、痛い痛い！オト兄手どけて！」

笑顔でワシヤワシヤと乱暴にオトヤはヴィヴィオの頭を撫でる。

それで無理やりヴィヴィオの顔をアインハルト達に向けた。

「ヴィヴィオちゃん、無事で良かったよ。」

「皆心配してたんですよヴィヴィオさん…！」

「アンタ皆に心配かけて…ちゃんと反省しなさよね？」

「まあまあルーちゃん、こうして無事だったんだから良いじゃないか。」

「兄貴甘すぎ。」

「…皆、お前を心配して来てくれたんだぞ？ちゃんとお礼、言っとけよ？」

『リオ嬢達もきつとお前を探してくれているはずだ。彼女等にもお礼をしておけ。』

「…うん。」

まさか、ここまで大騒ぎになっているなんて…そう思ったが、これは予想できない事では決して無い。

何せ、彼女の周りにいるのは…こういう事を放っておけない優しい人達ばかりなのだから。

「ねえ……パパ、ママ…怒らないの…？」

「怒る。」

「…はい…」

「と、いうわけでヴィヴィオは今日、ママの布団をしいてあげなさい。あと、風呂の掃除な。」

「へ？」

それだけ言うと、ワタルはヴィヴィオを担ぎ上げ、なんと肩車。

いきなりの事に困惑するヴィヴィオ…それを見ながらなのはワタルの腕を取った。

「な、なににに！？」

「勝手に出てった罰だよ。今日はこのまま家まで直行だ！」

「私も体調悪いからしつかり支えてねー」

「ちよつ、は、恥ずかしいよー！」

「罰だからねー」

恥ずかしがるヴィヴィオ、笑うワタルとなのは。

このやり取りでヴィヴィオは確信した。

この2人は決して自分を裏切らない。

そう思うと、今まで自分が気にしていた事がつくづく馬鹿らしくなってきた。

どうして自分はこんな事気にしてたのだろうと、心の底から思う。

こうして、ヴィヴィオが持っていた唯一のコンプレックスは消え…

…ようやく、本当の意味で登家は『本当の家族』となれたのだった。

Re/birth・X 本当の家族（後書き）

ヴィヴィオ「私ふつかーっ！」

アंक「よう。」

ヴィヴィオ「って、アंक！？え！？何で！？」

アインハルト「えー、今回の相談者はツリーさんのところのキズナさんです。」

キズナ「春日井キズナよ。ええっと…私の悩みは幼馴染のレイジの事なんだけどね、いざって言う時には頼りになるのに女の子にデリカシーのない事を平気で言うし、突然変な事言うし…鈍感（ボソッ）だし…どうにかならにかなって…。」

ヴィヴィオ「爆発すればいいと思います。」 真顔

アंक「おいヴィヴィオ、少しジツとしてろ。」 セルメダル用意

アインハルト「こんな所でヤミー作らないで下さい。」

アインハルト「で、真面目な話ですけど…この際、正直に言っちゃいましょう。」

キズナ「ええ！？」

アインハルト「大丈夫ですきつと上手く行きます！！」 前回の相談室参照

キズナ「そんな大胆な…。」

アंक「おい馬鹿、それじゃ相談きた意味無いぞ。」

アインハルト「だって…：…聞いてたら何か羨ましくなってきた…。」

アंक「個人的意見本当にありがとうございました。」
キズナ「で、結局私はどうすれば…？」

アंक「どうもこうもあるか。こうなりゃ、お前の魅力見せ付けて奴を振り向かせて見る！！そうすりゃ、奴のお前に対する態度にも

変化があるかもなあ…?」

キズナ「私の魅力か…うん、わかったありがとう。えっと、お代は…?」

アインハルト「あ、勿論無料でいいだ、」

アंक「お前でヤミー作らせる。」セルメダル用意

ヴィヴィハルト「それダメー…!!…!!…!!…!!」

別の世界…、

オーズ「アंकうううううううう…!!…!!…!!…!!」

バース「いきなりどうした火野?」

和葉「映司さん余所見止めて!!ロスト・チャイルドいるから!!」

Re/birth・XI アステイオン（前書き）

アインハルト「最近活動報告の方が本格化してきていますが、元祖はこっちです!!」

ヴィヴィオ「さあ、今日も張り切って行きましょう!!」

アंक「張り切りすぎて体壊さないようにな。とりあえず本番前のホットミルクだ。それでも飲んで気を落ち着かせてだな...。」

スカイライダー「もう本番始まつてるよ!!」

Re / birth . XI アステイオン

ヴィヴィオの騒動から約2週間後…、

あれからヴィヴィオはだいぶ吹っ切れたのか、今までよりも熱心に練習に打ち込む様になった。

ノーヴェとの練習で、その成果は良く表れており、リオとコロナを置いて行く勢이었다。

母の世話の為に最近では料理の勉強もしており（実験台：ダキバット&キバット）、フェイトとカズマが良く手伝ってくれている。そんなヴィヴィオ、今日も練習をする為にリオとコロナ（+レイヤ）と一緒に練習場へと向かっていた。

「そう言えば、アインハルトさんのデバイスって今日完成だよね？」

「うん、ノーヴェとチンクさんと、あとオト兄が付き添うって。」

「オトヤ要らないんじゃない？」

相変わらずオトヤに対しては容赦無い少年…氷室レイヤ。

何故か彼、オトヤとケイスケに対してのみ上から目線で喋る…理由は不明。

あとオトヤが付き添う理由は、アインハルトの希望。

何でもまだ『慣れてないから』らしい。

なので八神家と交流のあるオトヤが付き添う…なお、彼女に誘われた時、ハジメとシンから一発ずつ殴られた。

ついでにルーテシアからも殴られた。

「と、とりあえず明日からついにチーム全員のデバイス4機勢ぞろいだね！」

「うん！あ、リオ、コロナ、氷室君、私ちょっと教会に届け物あるから行って来るね！」

「行ってらっしゃい！」

「お土産よろ〜！」
この後、レイヤモリオから殴られた…。

ミッド南部湾岸道

ノーヴェ、チンクに連れられ、オトヤとアインハルトの2人は再び八神家の暮らすミッド南部へとやって来た。

予定の時間よりまだだいぶ早いのが、遅刻しては失礼なのでこれはコレでよし。

丁度おやつの時間（3時）なので、何か食べてから行っても良いだろう。

「ノーヴェ、あそこにあるのはドーナツ屋では無いか？」

「あー、いいね。美味そうだ。」

チンクがドーナツの屋台を発見するとノーヴェとチンクはそちらへ向かう。

なお、オトヤには『ハバネロドーナツ』を（面白そうという理由でダキバットが勝手に）注文した。

この後きつと世にも恐ろしい光景が繰り広げられるのだろうと思いつつながら、アインハルトは展望台へと向かった。

その彼女に着いていき、オトヤも（ダキバットにタトバ・ダイナミック・スリーを掛けながら）展望台へ。

「何？何か面白いものでも見つけた？」

『おほやはなひへ、ひはい（オトヤ離して、痛い）。』

「あ、いえ…あれ…。」

「ん？」

彼女の指差す先には、一体の藁人形相手にストライクアーツの練習をする女の子の姿が見える。

少し変わった型をしているが、かなりキレている動きで強者だという事が良くわかる。

歳は自分達と変わらないぐらいなのに…そう思うとアインハルトは胸が熱くなった。

そうこうしていると少女は少しは離れた位置から技を打ち込み、藁人形を真つ二つに砕いた。

「あわわまたやっちゃった！？折角師匠とヴィータさんが立ててくれたのに…うう、まだまだ上手いかないなあ…。」

霸王流ともストライクアーツとも違う踏み込み…こんな田舎町にこんな子がいるなんて思いもしなかった。

ドーナツを買ってきたノーヴェとチンクも展望台までやって来て、下で練習をしている子を見る。

「お？誰かと思えばミウラじゃねーか？」

「ノーヴェ、知っているのか？」

「ああ、八神家道場の門下生で、インターミドル出場者。アイツもアインハルトと同じで初出場だ。」

『初出場なのにアレほどか…世界は広いというか狭いと言うか…。』

「だよなあ…。」

確かに世界は広いし狭い。

世界が広いからネオファンガイアなんてものがあるし…世界が狭いからレジエンドルガなんていう連中に遭遇する。

(レジエンドルガ…か…。)

先日のヴィヴィオの騒動の時に突如として姿を現した自らをレジエンドルガと名乗る男。

タイプを取ったダークキバがカリス達と手を組んでも手が届かなかった相手…一体何の目的があったのだろうか？

この前からそればかり考えて、折角アインハルトとまた旅行(？)に来たのに、全く持って楽しめてない。

新しい敵の出現…自分は何時になつたら自由に普通の学生生活を送れるのか…もしかしたらこのまま一生…？

「そんなの嫌だー！」

「？ オトヤどうした？お腹痛いか？ハバネロドーナツ食べるか？」

『チンク殿、それは酷つてもんですぜ？』

相変わらず彼は行動一つ一つがボケてて面白いなと思いつつも、ノーヴェとアインハルトは見て見ぬフリ。

ノーヴェはアインハルトの肩をポンツと叩くと、ミウラを見ながらこう言った。

「どうだアインハルト…アイツを見て、どう思った？」

「はい…インターミドル、今の私のレベルじゃ通用しない事が良く分かりました…。」

「わかつていいるなら結構、それがわかっただけでも、早く着いた収穫があつたつてもんだろ？」

「…もしかしてノーヴェさん、その為に？」

「さあな？」

成る程、多分ノーヴェはここでいつもミウラが練習している事を知つていて、こんな時間に連れて来たのだろう。

こうやって実力の差を見せ付ける事で、彼女の闘争心を駆り立てようという作戦だ。

どうやら成功したようで、アインハルトはしばらく胸の前でギュッと手を握っていた。

某所

「うわあああああ！……！」

「きゃあああああ！……！」

バシャアア！と、鮮血を散らし、辺り一面が真っ赤に染まるとあるビル。

ある者は腕をとられ、ある者は体を引き裂かれ、またある者は首を取られて次々に殺されていく。

殺した人間の衣服を破り、それで自慢の刀を磨くと……アークはカツカツと階段を昇る。

その隣にいる赤い怪人……バードネオと共に……。

「今がだいたい3階か……あと2階しか無いのか……。おいトリ、ライフエナジーはどのくらい溜まった？」

バードネオにそう呼びかけるアークだが、バードネオからの返事は無い。

バードネオはただただ、はああああと息を吐き、アークの後ろをつけては人を殺して、そのライフエナジーを吸うだけだ。

「答えるはずも無いか……もうすぐ進化するだろうな……。」

『グルルルルルルルル……、』

元々赤い体色だったが、ところどころか虹色に染まり……体も更に大きくなったバードネオ。

アークがこの会社を攻めている理由はただ一つ、『バードネオ進化の為』。

街中よりも目立たない建物の中の方がライフエナジーを集めやすいと思っただからだ。

「一気に……というわけにもいかないか……。さすがにこの時期に目立ちすぎるのも問題だから……。と、なると……、」

バードネオに人々を襲わせながら、アークは一枚のチラシを見た。
そこに書かれているのは…『インターミドル・チャンピオンシップ』
…。

「…これ…か…」

八神家

何だかんだで八神家に到着した一行。

出迎えにアスムが走って来てくれた……海岸まで。

どうせなら車で来て欲しかったが、彼は運転免許持ってない……だつたら他の奴に來させるよというツツコミをしたらその時点で負けだ。走ったにも関わらず彼は汗を掻いているだけで息切れは全くしておらず、元氣満々。

家に帰り着くと、そのまま裏の山に筍採りに行ったぐらい。

そんな筋肉馬鹿は放っておき、アインハルトはリビングへと招かれ、その隣にノーヴェ達も座る。

目の前にははやて、リイン、アギト。

彼女等が持っている大きな目の箱…多分、あの中にアインハルトのデバイスが…。

「というわけで、霸王の愛機のお披露目&お渡し会や！」

「…いいーい！」

『アイン嬢、今の感想を一言。』

「えっと…う、嬉しいです！」

「いやアイン、貰う前なんだから無理しなくて良いからね？それと

ダキバットはあとで覚悟しとけ。」

『Oh、ロクンロール!』

最近ダキバットの驚き方にバリエーションが出てきた。

もうこいつ等…お笑い芸人でデビューしていいんじゃないかな…?」

(オトヤ君とダキバットさんがお笑いデビュー……………。)

「……………プツ!」

「いきなりどつたの?」

思わず吹いた。

普段あまり笑わないだけに、もしかしたら笑ったらどこまでも嵌ってしまふタイプかもしれない。

「いやー、中々楽しいデバイス作りでしたよ!」

「お任せされた範囲も広がったし、気に入ってもらえるといいな!」

『2人で作ったのか?』

「ユニットベースはラインが組んで…、」

「はやてちゃんがA Iシステムの仕上げと調整をやってくれたんですよ!」

楽しげに言うラインとアギト。

するとはやてがアギトに抱きつき、彼女の頭を撫でる。

「んで、外装はアギトが作ってくれたんやー」

「そうなの!」

「素晴らしい、まさに真正古代ベルカの特別製エクストラワンですね。」

「あたしなりに、ルールーに聞いたり、本読んだりしてアインハルトにびつたりなの選んだんだー」

自慢げにアギトは胸を張ると、一冊の本をテーブルの上に広げた。

そこに載っているのは、雪原豹と戯れる、クラウスとオリヴィエの肖像画。

「何コレ?」

「雪原豹です。シウトウラ地方では優秀な兵士として活躍してました。」

帝王のクローンの癖に何の知識も無いオトヤに、アインハルトが説明。

そもそも『豹に雪原も何もあんの？』と根本から理解できていない為、帰ったら彼には理科（生物学）を教えてやろうと心に誓う。

「クラウスもオリヴィエも大切にしました。もちろん、キングも。」

「へー、アイン詳しいねー。」

「…ノーヴェさん、帰りに本屋さん寄っていいですか？」

「……OK。」

帰ったら歴史も教えてやらねば。

「そんなわけで！！シウトウラの雪原豹をモチーフにデザインしてみただ！！」

頭が悪すぎるオトヤはとりあえず放置し、アギトは続けた。

だがその言葉を聞いた途端、ノーヴェもチンクも『えッ！？』とでも言いたそうな表情になる。

「ど、動物型！？」

「あまり大きいと、連れて歩くのが大変なのでは…？」

「……豹を連れて歩く霸王…凛々しくてちょっとかっこいいかも…。」

「……。」

うん、本人が満足しているので良い事にしよう。

その前に、子供サイズのラインが両手で持てる程度の大きさに入っているデバイスなので、大きすぎるといふ事は無いだろう。

伸縮自在な特殊素材なら話しは別だが。

その辺はノープロブレムとはやてが自慢げに言つと、リインは箱を
アインハルトの膝の上に置いた。

「アイン、開けてみなよ。」

「は、はい！」

ドキドキしながら、箱に手をかけるアインハルト。

ゆっくり…いきなり飛び出してきたりしないようにソ〜ッと蓋を持
ち上げると…そこにいたのは…、

『……………すう…すう…』

「……………『……………猫?』……………」

黄色い…掌サイズの…寝ている猫。

とても豹には見えない、どう見ても猫にしか見えない。

豹と言うぐらいだからつきり、『ライオン!トラ!チーター!』

的なものを思い浮かべてだけに…これは予想外だ。

「外装はちょっとおちゃめやけど、性能は折り紙つきやで。」

はやてがそう言うので、性能は本当にいいんだろつ。

そうしていると箱の中で猫(豹)がモゾモゾと動いた。

パチツと目を開けると…、

『にゃあ』

「！！！！！！！！」

『おお…完璧に猫だ…』

「あれ？どうしたのアイン？鳩が種子島喰らったみたいな顔して？」

『それを言うなら『豆鉄砲』だろ？種子島てお前…』

猫（豹）が鳴くと同時に、アインハルトは完全に膠着。

もしかして猫アレルギー？

そう思ったが…どうやら違う様だ。

『可愛さにやられて膠着している』だけだ。

デバイスに触れると、まず最初に感じたことは…『温かい』

本当に生き物みたいだった。

その割には体自体はぬいぐるみの様にフカフカモフモフで、手触り抜群。

「こんな可愛らしい子を私が頂いてしまっていていいんでしょうか？」

「勿論！」

「アインハルトの為に生み出したんですからー！」

「マスター認証もまだやから、良かったら名前つけたげてな！」

「認証は庭でやるですよー！」

ラインに誘われ、庭へと出る一同。

デバイスを優しく持ちながら、アインハルトは庭の真ん中へ。

（そういえば、オリヴィエ聖王女殿下が特に気に入ったつがいの雪原豹がいたっけ…気の早い彼女はいつも生まれる前から名前を考えて…でも、彼女の最後の年、結局その子は生まれてくる事は無くて……あの子には何て言う名前を送ろうとしたんだろう…？）

「固体名称…登録…」

(ああ、思い出した。クラウド達が好きだった物語の主人公の名前…どんな困難でも恐れず立ち向かう、勇敢な英雄の名前…)

「あなたの名は『アステイオン』、愛称は『ティオ』。」
『じゃあ!』

「アステイオン、セットアップ。」

いつもの『武装形態』とは違い、デバイスを起動させての霸王モードを発動。

デバイス…アステイオンの力を纏い、まず彼女は元々の武装形態へと変身。

更にそこから衣服のデザインが若干変わっていき、ツインテールになつていた髪型は変身前の彼女独自の髪型へと変化した。

これが彼女の新しい変身形態。
『武装形態』から『バリアジャケット』へと変わった、彼女の強化形態だ。

「……おお〜!」「」「」

「えっと…これでいいんでしょうか?」

めた（実力行使で）

どうしてオトヤ達だけ噛むのか…仮面ライダーは嫌いなのか…どうやら、少し気が難しい子の様だ。

「あ、ちなみにその子、マスター認証したらマスターの記憶とか好き嫌いとか受け継ぐからね。」

「もしかしてオトヤ、アインハルトに嫌われてるですかー？」

「『ガーンツッ！？？』」

「あ、いえ別に…嫌いでは…嫌いじゃ無いと言っか……なんと言うか…。」

「何故そこで顔を赤らめる。」

オトヤにとつてはある意味死活問題だったので、とりあえず軽いノイヴェチヨップがアインハルトに直撃。

あんまり痛くない。

しかし、実際に戦ってみないとどのくらい強いかわからないので、アインハルトはオトヤに頭を下げた。

「すいませんオトヤ君、スパー、お願いできますか？」

「う、うん…。」

『ククク…この猫野郎…人生の大先輩に楯突いたらどうなるか教えてやるうじゃあ無いか…！！ガブリッ！！』

ダキバットを噛ませてオトヤは仮面ライダーダークキバへと姿を変えた。

練習の時みたいにザンバットソードはその辺に立てかけて置き、拳を構える。

「じゃあ…行きますよー！！」

「うん、どこからでもー！！」

とうとうデバイスを手に入れた霸王、アインハルト・ストラトス。初戦の相手は仮面ライダーダークキバ…相手にとつて不足は無い。

拳を構え……彼女は、ダークキバへとこう言い放った。

「あ、帰ったら生物学と歴史と、あと国語の勉強会やりますからね。」

「あれ（鳩が種子島喰らう）聞いてたのかよ!？」

Re/birth・XI アステイオン（後書き）

アインハルト「えー：今日はハルルさんのオーズ兄弟からスイカライダー先生です。」
ヴィヴィオ「スイカライダー先生、こんばんわ。」

スイカライダー「はい、こんばんわ。君達礼儀正しくていいね。」
アंक「ふんっ。」

スイカライダー「逆に君は少し反抗的かな？」

アインハルト「今日のお悩みは？」

スイカライダー「……………色々な意味で…まともな人が欲しいです…
！！」 ツッコミ

アインハルト「シンジさん貸してあげます。」

スイカライダー「って、ええ！？」

アंक「じゃあフィリップ貸してやる。」

スイカライダー「いや、そういう問題じゃあ無いだろう！？ていうか君達、そんな簡単に仲間売って良いのか！？」

アインハルト「うーん…だって…。」
アंक「ふむ…。」

ヴィヴィオ「じゃあオト兄貸してあげます。家族なので問題無し。」

スイカライダー「いや更にダメだろ！？」

アインハルト「ヴィヴィオさん、それは考え直した方が…、」

スイカライダー「って、君も人の事言えないだろ！？自分の友達なら売られるの嫌で、他人なら良いのか！？」

アインハルト「いえ、恋人とか言って無いですよ!?!」
スカイライダー「俺だってそんな事言ってるよ!?!後…、」

スカイライダー「俺『スカイライダー』だよ!?!?!?!」

結論：どこからともなく現れた龍騎がその場を宥めてとりあえず一
杯やりに行きました。

Re/birth・XII 願わくば（前書き）

V3「なあプト介。」

プトティラ「プト介じゃないもん。」

V3「ああ、すまない。ところでプト介。」

プトティラ「プト介じゃないもん。」

アインハルト「お悩み相談室本編始まります！」

アंक「今日の相談者は……コイツだ!!！」

スーパー1「こんにちわ。」

Re/birth・XII 願わくば

「んー：よし！完成」

いつも通り夕飯の支度を済ませ、なのははエプロンを取ってゆつくりと椅子に座った。

ワタルも妻の作ったクリームシチューを皿に盛り付け、それをテーブルに並べていく。

その数何と……脅威の14人前……。

何コレ多いなどというツツコミを入れたらきつと負けなのだろう。

何故なら今日は……、

「「ただいまー。」」

「「「「「お邪魔します！」」」」」

「おつ、来た来た。」

「皆いらつしゃ〜い」

ガチャリと扉を開け……登家の玄関をまたぐ12人の人影……。

1人は訓練終えてきたヴィヴィオ、1人は久々に寮から帰ってきたオトヤ。

あとオトヤに着いて来たアインハルト、シン、ヤマト、ルーテシア。ついでにリオとコロナ。

ワンモアでフェイト、カズマ、ハジメ。

ア〜ンド子供達のお目付け役のノーヴェという計12人。

ワタルとなのはをあわせて計14人……用意した皿の数と同じだ。

2人は全員を快く迎え入れ、それぞれの席に案内。

ちなみに登家はこの辺では一番大きい家なのでこのぐらいの人数入れるのはわけ無い。

当然、こんな大勢意味も無く集まるわけが無い。
今日はある意味パーティーなのだ。
そう…、

「それでは皆さん！」

「明日から始まるインターミドルチャンピオンシップ選考会！」

「張り切つて〜〜！」

「キバつて行きま〜〜す！！」

「が、頑張ります…！」

『ヴィヴィリオコローライン明日頑張れパーティー』だ。

正直『ACE』でやれよと言いたい所だが、やはりお店よりも自宅
でやった方が雰囲気あるという理由でここが選ばれた。

なのはが妊婦なので最初はフェイトとカズマが手伝おうとしたが、
彼女が『やりたい』と言い張るのでワタルがやらせてあげたらしい。
応援パーティーと言っても皆で好き勝手にわいわい言いながらシチ
ューやパンを適当に食べるだけなので普段とそんなに変わりはない
が、やはりパーティーという『てい』だけで雰囲気が違う。

多分ハメを外せるのは今日を境に当分無いだろうと言う事で、今日
は皆大いに騒いでいる（主にルーテシアとかルーテシアとかヤマト
とかルーテシアとか）。

どうせすぐに皆食べ終わるだろうからという事でカズマがキッチン
へ行って材料を適当に見繕って料理し始め…ワタルが例の如く手伝
いに行き…そして何も言わずカズマに殴られて出てきた。

『お前そろそろ懲りろよワタル。』

「いやだって…何か悪い気するし…。」

「もうパパ！ヴィヴィオ達を明日大会に参加させたく無いの？」

「そこまで言われるか…orz」

「ワタルどんまい。」

「ああ…そう言えばフェイトとカズマ、お前等今日店は？休み？」

「ううん。トーレとセツテが。それと今日ギンガとチンクがお休みだからって手伝いに来てくれた。トーレ達も誘っただけけど…お店休ませるわけにもいかないつて残ってくれたんだ。」

「さすがあたしのお姉達だな。」

世間話に花が咲く大人組みとは対象的に、子供組みは明日からのインターミドルについて大いに盛り上がっていた。

加藤兄弟が世界大会優勝経験のあるジークリンデ・エレミアと幼馴染である事、リオとコロナが先日大会のシード枠に抜擢されているハリー・トライベツカ選手に会ってサインを貰った事、それと同日にヴィヴィオが聖王教会代表選手であるシャンテとスパーをやった事、ついでにハジメが今日学校で計3人の女子から告白された事など色々。

正直ヤマトもシンも小さい頃からの知り合いが世界的有名人という事にピンと来ていない様で、頭の上に『？』を浮かべていた。

「というかヤマトは彼女に対して『可愛い妹分』、シンは『すぐ迷子になる姉貴（笑）分』としか思っていない。」

「へー、ジークってそんなに凄いなーシン。」

「だよなー。一昨年試合見たけど…まあ、かつこよかったよな。」

「シンさんもヤマトさんほとんどでも無い人と知り合いつていう自覚無さ過ぎですよー!!」

「…と、言われましてもー…。」

さすがにヤマトもシンも十年近くの付き合いなのでジークがどれだけ凄くてもあまり実感が湧かない。

それよりも去年参加してない友人が今年は参加してくれる喜びの方が大きい。

去年ジークが出場して無いのでその友人であるハリー選手達とも約2年近くも会って無いので、そちらとの再会も楽しみだ。

とどのつまり…全員明日が楽しみだという事。

「アイン。」

「ん？何ですか？」

「頑張ってね。」

「勿論です。」

「あー！オト兄アインハルトさんばっか応援してるー！」

「私達も頑張りますよー！！」

「登、大人気だな。」

「ハジメお前な……。」

少しばかり騒ぎ、大人組が全員（ノーヴェも含めて）酔いつぶれると後は子供だけの自由時間。

しかし少しばかり騒がしいのに疲れたのか、ハジメは頭を抑えて『すまない』と一言言うつと、ゆっくりと外へと出て行った。

もう夜の10時…元々この辺りは住宅街にしては人通りも少なく、この時間にもなるとすでに辺りには誰もいない。

最初にカズマやフェイトに出会った時はあんなに騒がしい雨の日だったのに…そう思って少し笑うつと、ハジメは少しばかり散歩に出てみた。

何気にこの辺を1人で歩くのは初めてだが、普段オトヤやシン達と歩いているので道に迷う事は無い。

（俺もすっかりここに慣れたな……。）

自分がカズマ達に拾われてから凡そ1ヶ月と半月…その間に友達も出来たし、家族も出来たし、学校にも通わせてもらえる事になった。何で自分に記憶が無いのか…何故カリスに変身できるのか…一切分からないが、それはそれで良いかもしれないと本気で思う。

そんな事を考えながらしばらく歩き、時計を見たらすでにもう30分も経っていた。

大人達が心配する事は（酔いつぶれているので）まず無いだろうが、

多分オトヤ達…特にヴィヴィオ辺りが心配している頃かもしれない。そろそろ戻るう…そう思って振り返ったその時だった。

「どこへ行くのかしら？」

「……………俺に何の用だ？」

突然自分呼び止める声。

振り返った先にいたのは黒スーツの女…サヤカこと『メデューサレジエンドルガ』だ。

当然ハジメはそんな事知る由も無く、ただただ彼女から異様な雰囲気を感じ取った。

彼女は腕を組みながらゆっくりとハジメに近寄ってくる。

「お前…この間の『レジエンドルガ』とかいう男の仲間か？」

「仲間…そうね、『仲間』になるのかしらこの場合？」

「質問を質問で返すな。で、何の用だ？」

少し眉を顰めたハジメの腰にはすでにカリスラウザーが装着されており、手には『チェンジ』のカードが握られている。

それを見たサヤカはハジメを鼻で笑うと、口元に手を持っていくウフフと小さな笑い声を上げた。

「あら怖い。その性格、昔から変わらないわね。」

「!?!?…貴様…!!!」

『昔』

それはハジメにとって最も知りたい事で、最も知りたく無い事。
この女…自分の過去を知っているのか？

もしそうなら…いや、だが相手はレジエンドルガ、ネオの親玉とも
言える存在だ。

何故そんな奴が自分の過去を…？

知りたい…だが、知ってしまったえばカズマやフェイト達と、オトヤ
やシン達と過ごしたあの日々が無くなってしまいそうな気がしてな
らない…。

「お前…俺の事知っているのか…!？」

「その様子だと、アナタは私達の事覚えていない見たいね？どこか
で頭ぶつけた？」

「…ッ!！」

『チェンジ』

とうとう耐え切れずにハジメはカリスへと変身。

カリスアローを振り上げてサヤカへと襲い掛かるが、その一撃は彼
女の手から出現した手刀によって防がれる。

反動を利用して後ろへ飛び下がると、カリスは新たなネオカードを
構えた。

「カリス制御できたの!?よかったわね〜!」

「黙れ!!!」

『トルネード』

『トルネード』のカードをラウスし、風の力を纏った矢をカリスア
ローから放つ。

しかしそれらは全てサヤカに切り落とされ、一瞬の内に彼女はカリ

スの懐へ進入、刀をカリスの首下に突きつけた。

「くっ…！」

「カリス…【ブレイドの世界】の『仮面ライダーカリス』を参考に開発した『対ネオファンガイア用対抗兵器』…反逆したネオを制裁する為に『ネオ帝国のレジエンドルガ達が数世紀前に作った疑似レジェンドルガ』よ。無くなったと思ったらあなたが持っていたのね？」

そう言うとサヤカはカリスを蹴り飛ばし手刀を解除。

カリスのカードケースから『スピリット』のカードを取り出すと、指を艶やかに動かしながらそれをカリスラウザーに通した。

それによりカリスの変身は解かれてハジメに戻る。

殺される……そう思うハジメだが、何とサヤカは彼に背を向け、彼とは逆の方向へと歩き出した。

「何の……真似だ……ッ!？」

「『同胞同士』が争っても仕方ないでしょう？幸いアークは単細胞だからアナタの正体に気付いてないし……黙っててあげる。じゃあね、坊や。」

「ま、待て…！」

最後にそう言い残すと、サヤカは電柱に飛び乗り、そのまま電柱から電柱へ…電柱から屋根へと飛び移って去って行った。

一体何者だったのか……そう考えると少しばかり頭が痛くなってくる。

(アイツ…俺の何を知っているんだ…!?)

サヤカとカリス…これがハジメの記憶を取戻す為の鍵になる事は間違いない。

がりつと唇を噛み締めると、ハジメは電柱を一発殴り…そのまま登家へと戻って行った。

本当に皆馬鹿ばかり……でも、ここにいるのは心地が良い。

出来ればこの日常を失いたく無い……記憶が戻ったら多分、こんな生活送れない……。

根拠は無いが、多分……そうなるだろう。

「……悪い加藤、俺そろそろ2人連れて帰る。」

「え？帰るのか？折角盛り上がったのに？」

「明日も店、開けないといけないからな。カズマさんとフェイトさんあんな調子じゃ自分で帰れないだろ。」

「あー、わーったわーった。おーいオトヤ、剣立帰るってよー。」
「そうなの？」

シンがオトヤと話している間にハジメはカズマとフェイトを起こす。2人とも完全に酔い潰れている……カズマが『ムツキこの野郎……ムニヤムニヤ』と言っている理由は不明。

フェイトを背負ってカズマを引きずりながら彼は玄関まで。

「じゃあな登、今日は楽しかったよ。」

「ああ、じゃあハジメ……『また明日』な。」

「……。」

「？ ハジメ？」

「……あ、……ああ悪い。また明日。」

願わくばもう、二度とあのレジエンドルガとかいうのが自分の目の前に現れる事の無い様に……。

夜の風に当てられオトヤの別れ際の言葉を思い出しながら、ハジメはそう思い剣立家への帰路についた。

いよいよ明日はインターミドル。

ヴィヴィオ達の夢への第1歩にして、レジエンドルガが狙うミッド最大の祭りの日だ。

Re / birth . X I I 願わくば（後書き）

「アインハルト「ハルルさんのオーズ兄弟より、スーパー1先生です。」

「アंक「ちなみにヴィヴィオは『DCD龍騎』の登場人物である羽黒レンと姫路ミホのせいで軽い鬱病になって今療養中だ。」

「プトティラ「ヴィヴィオの看病にはタクミとりよーたるーが付いてるよ！」

「アインハルト「余計に悪化しますよそれ!？」

「スーパー1「聞いていた以上に症状は重いみたいだな。」

「アंक「ああ、最近もう心配で心配で夜も寝れないしアイスも碌に喉を通らない。」

「アインハルト「本当にいいお兄さんです。スーパー1先生のお悩みは？」

「スーパー1「うむ、あれだ。」

「V3「アイス食べるかプト介よ。」

「プトティラ「プト介じゃないもん。でも食べるー！」

「V3「ハツハツハ。チョコレートも食べるかプト介よ。」

「プトティラ「プト介じゃないもん。いただきまーす！」

「V3「今日の夕飯はなんだプト介よ。」 茶碗と箸装備

「プトティラ「プト介じゃないもん。シャウタが今日は『社員みんなやがエーシユランチ』にするって。」

「V3「そうかそうか。それは楽しみだなプト介よ。」

「プトティラ「プト介じゃないもん。」

「スーパー1「あれがテンプレ化しつつあります。」

アインハルト「プうちゃん可愛い！」

アंक「あれは……うん、もうV3に直接言うしか無いだろ。」

V3「でもプト介もトライドに『ベンちゃん』というあだ名つけてるぞ。」

プトティラ「プト介じゃないもん。」

V3「プト介、そう言えばシャウタが『タジャドルに苛められた』って言ってたぞ。」

プトティラ「プト介じゃないもん。タジャ××嫌いだけどシャウタに酷い事はしないよ?」

V3（チツ、軽く流して行ってはくれなかったか…。）

アंकアイン1「『黒い黒い黒い!』」「『黒い黒い黒い!』」

Re/birth・XIII 開幕(前書き)

アインハルト「本家お悩み相談ですー!」

ヴィヴィオ「今日は誰かな?今日は誰かな!」

アंक「12月10日公開予定の『仮面ライダー×仮面ライダー

フォーゼ&OOO MOVIE大戦MEGAMAX』もよろしくな

!」!

テル「どうでもいいからさっさと始めろ。」

Re/birth・XIII 開幕

新暦0079年、5月のある日のミッドチルダの朝。

ここに、ドキドキワクワクが止まらない少女が1人いた。

彼女の名は登ヴィヴィオ…St・ヒルデ魔法学院初等科4年生。

今日は彼女にとっては待ちに待った日の朝…昨日は絶対眠れない！
…と思ったが案外すんなり眠れた。

いつも通り6時頃に目覚ましがり、彼女はデバイスであるクリスマスに起こされて起床。

うぐんと背筋を伸ばし、部屋のカーテンをガバッと開けた。

「いよいよだねクリスマス……。」

『！』

「何と言っても今日は…今日は…！待ちに待ったインターミドルの
S、
」

「ヴィヴィオ、朝ごはんだよ。」

「……………ママ、折角の雰囲気壊さないでよ、もう。」

「あれ？何か悪い事しちゃった？」

そう、今日は彼女がずっと参加する事を夢見ていた『インターミドルチャンピオンシップ』の地区選考会の日だ。

この大会を勝ち抜いて行く為に、ヴィヴィオはずっとずっと頑張ってきた。

途中でネオファンガイアとかいう怪人に邪魔された事もあったりし

たが…それでも以前よりもだいぶ強くなつたはず。

彼女の親友であるコロナ、リオ、アインハルトも試合が始まったら敵同士。

かなり燃えてきた。

オトヤやハジメ達も応援に来てくれるそうだし……予選敗退というみじめな姿だけは見せられないだろう。

「ほら早く朝ごはん食べちゃいなさい、特訓あるんでしょ？パパが先に食べてるから。」

「はい、というかママも身体を大事に！私の妹か弟がいるんだから！」

「はいはいヴィヴィオお姉ちゃん、ありがとね。ほらほら。」

「まず着替えぐらいさせてよー！」

それもそうねと、とりあえず着替えはさせる事に。

いつもの制服ではなくトレーニングウェアに着替えたヴィヴィオは勢いよく階段を駆け下りて素早くテーブルに。

いただきますと叫ぶように言うと、急いで朝食のハムエッグとトーストを口の中に掻き込んだ。

「ヴィヴィオ、そんなに急いで食べると喉に詰まるぞ。」

『ワタルなんか王の仕事あつた時に毎日詰まらせてたんだぞ。』

「キバットいらん事言わんでよろし。」

「むぐっ!？」

「『あーあ。』」

「あーあじゃないでさっさと牛乳ついであげなさいよ!？」

朝っぱらからツッコミに勤しむなのは…母体に優しくくない。

ヴィヴィオのマグカップに牛乳を注いであげると彼女はそれを一気に飲み干し、プハアと一息つく。

ごちそう様と言うと同時にヴィヴィオは席を離れ、急いで洗面所へ。歯を磨いて顔を洗うと、髪をセットせずにゴムでしばりつけて玄関へと向かう。

扉を開いた先ではすでにアインハルト達が待つており、彼女達と一

緒にヴィヴィオはトレーニングへと出かけてしまった。

「はえー……………」

『さすがはヴィヴィオ、ワタルやオトヤや姉御とは比べ物にならない行動力だな。』

「キバット…?」

「というわ私の呼び方、いつの間にか『姉ちゃん』から『姉御』に変わってるんだけど…?」

キバットがこの家のダキバットポジションになる日はきっと近い。
何故かそんな気がする…。

「いいかお前ら、いよいよ今日からインターミドルが始まるわけだが…………心の準備は?」

「…………ばっちりです!」

「だ、大丈夫です!」

「OK、そんだけ元気なら心配ねえ。」

と、ニカツと笑いながら言うノーヴェ。

今までの苦しい練習:アインハルトはともかく、ヴィヴィオ達は本当に良く着いてくれた。

恐らく今の彼女達の実力は当初のアインハルトを軽く超えているだろう。

勿論、アインハルト自身もそれだけ強くなっているのも確か。きつといい試合が出来る。

今回は昨年末出場の一昨年インターミドル世界大会優勝者であるジークリンデ・エレミアも参戦しており、順当に進んで行けばいずれは必ず当たるだろう。

ネオファンガイアの事も気にはなるが、そこら辺はオトヤ達に任せ

ておけばいい…自分達は自分達の青春を精一杯謳歌する、きつとオトヤもハジメもヤマトもそれを望んでいるだろう。

今日だって朝っぱらからヤマトのサーチャーにヒットしたネオを3人+シンで倒しに行った。

本当にご苦労様である。

「あ…それとお前ら、わかっているとは思いがコイツあ全て個人戦だ。チーム同士で当たる場合だって十分にありうる。」

「それはわかってます！スポーツなんだからどっちが勝っても恨みっこ無し！」

「正々堂々戦つていい試合にします！」

「結構。んじゃ、ブロック分け発表だ。」

ヴィヴィオ…予選4組

リオ…予選5組

コロナ…予選1組

アインハルト…予選1組

「リオお嬢様の区画には『砲撃番長』の異名を持つハリー・トライベッカ選手がいますね。」

そう言うのはノーヴェの練習についてきた聖王教会シスターのディード。

ハリーとは額に傷のある少年魔法使いの事では無く、昨年のインターミドルで5位に入賞した実力派選手の少女。

バリバリの接近戦選手で、リオとは戦闘スタイルが似ている。

「彼女を倒さなければ先には進めませんね。」

「倒しますよ〜！」

「それとヴィヴィオ、お前のところにはミウラと…あと、ミカヤちゃんがいるな。」

「ミカヤさん！」

ミカヤとは、ノーヴェの知り合いで18歳の剣道少女。何か物凄い剣術を使うベテラン選手であり、アインハルトも何度かスパーをしてもらった事がある。

アインハルト曰く、『実戦ならその日だけ20回殺された』そうだ。ミウラは説明するまでもなく、夜神家で格闘技を教わっているミウラの事。

ヴィヴィオもリオも、両方とも強敵揃いだ。

しかしそれならまだいい、問題はアインハルトとコロナ。

何と2人とも同じ組、つまりどちらかが必ず選考会で敗退する。

ゼッケン番号が離れているから予選中の予選ともいえる『ノービスクラス』や、その一ランク上の『スパーノービスクラス』にいたる間は当たる事は無いだろうが、その上の『エリートクラス』になると順当にいけば3回戦辺りで当たるだろう。

「2人とも…辛いだろうが…」

「いえ、コロナさん…負けませんよ。」

「こちらこそ！絶対に勝ちます！」

「……覚悟は出来てるって事だな？ならいい、それと1組には一昨年優勝者であるジークリンデ・エレミアっていう奴がいる。敗戦記録は出場辞退だけっつー真正銘『化け物』だ。どっちが勝つにせよ、コイツを倒さなきゃ先には進めないな。」

「はい！」

「つつし、そんじゃ…行くかー！」

「ファイナルザンバット……斬ッ……！」

ズバツツッ！！という鋭い居合斬りにより、町中のパン屋のパンを食い漁るとかいうわけのわからない事件を起こした怪人『パンダネオ』を撃破したダークキバ。

『キュート』といカードを手に入れると、それを腰のカードポケットにしまつて変身解除。

それに合わせてカリスとバスターも変身を解除し、オトヤ、ヤマト、シンの3人はハジメへと駆け寄る。

「どうしたんだよハジメ？なんかお前いつもより動きが鈍かったぞ？」

「体調でも悪いのかい？」

「そついやオメエ、店の手伝い遅くまでやってるんだろ？たまには休んでもいいと思うぜ。」

「……心配無い……すまない…。」

どうもこの前のパーティー以降、ハジメの様子がおかしい。

『ACE』の手伝いにしてもこの間皿を割ったりしたし、授業中も上の空だし、戦闘中もキレが悪い。

以前の鬼の様な強さを誇っていたカリスの姿は無く、そこには体調の優れない普通の少年がいるだけだ。

どうにもハジメらしく無い……今度カズマとフェイトにでも聞いた方が良さそうだ。

「余計な心配はしないでくれ……そろそろ始まる時間だろ、行こう。」

「本当に何でも無いのか？……ヤマトさん、すみませんがコイツだけバイクで送ってもらえないですか？」

「いいよ。」

「おい登！だから余計なマネは…。」

「いいじゃねえか剣立。お前が調子悪そうなのは本当だしよ、今日ぐらい兄貴や俺達を頼っても。んじゃ兄貴頼むわ。俺等ルー迎えに行つてから行くから。」

「おう！ハジメ君、行くよ。」

「……………ありがとう。」
最後にそう呟くと、ハジメはヤマトと共に先に会場へ。
恐らくヴィヴィオ達一行はすでに到着しているであろう。
こちらにも急がねば…そう思いながらシンとオトヤもルーテシアの下へ。
ちなみにまだ寝てる…彼女曰く『寝る子は強く育つ』そうだ。
はつきり言おう、知らんがな。
ハジメの様子を心配しながらも、2人とも時間が迫っている事を思い出して割と本気で走り始めた。

会場

「ノーヴェー！」
「おっ、ザフィーラの旦那！」
会場に着いて手続き中のノーヴェエに話しかけてきた男性が1人。
人間形態になったザフィーラだった。
今回は彼の愛弟子であるミウラも参加する…彼がここにいるのも当たり前なのでノーヴェエは特別驚きはしなかったが、久々の再会自体には心から喜んだ。
「そう言えばミウラは？」
「今はヴィータとシグナムとまだ車の中だろう。そっちこそヴィヴィオ達はどうした？」
「とりあえず緊張ほぐ…れるか知んねえけど、あっちの休憩室でジューズ飲ませてる。連中ガチガチに緊張してしな。」
「そうか？さつき霸王の子がチラツと見えたが…落ち着いている雰囲気だったか…？」
「顔に出して無いだけ。来る途中なんか緊張しすぎて能面で阿弥陀仏唱えてた…。」

「それは……何と言うか…恐ろしいな…。」
「だろ？」

怖いもの苦手なくせに自分が怖いものそのものになってどうするというノーヴェの切れ味鋭いツツコミで何とか元に戻ったそうだ。

彼女の緊張を完全にほぐすにはオトヤとかハジメとかシンとかと一緒に置いとくのが一番だろうが…彼らは彼らなりに忙しいので無理強いはい出来ない。

「そろそろ始まるな…第1試合はミウラとヴィヴィオ、両方参加だったな。もうじきミウラも出てくるだろう。」

「だな、じゃあ旦那…うちのチビ達は、負けねえぜ？」

「フツ、その言葉…そっくりそのままお前に返してやる。」

拳をコツンとぶつけ合うと、2人は別々の方向に姿を消していった。

「おいコラルー…！！！！てめさっさと起きやがれえええええええええ！！！！」

「何よも…朝っぱらからうつさいわねえ…。」

加藤家（現在両親不在。ルーテシア絶賛居候中）のシンの部屋を乗っ取って眠っていたルーテシアを無理やり起こすオトヤとシン。何故か彼女は競技用の服で眠っており…多分寝る前からギリギリまで起きるつもりは無かったんだと思う…。

幸い彼の実家は会場に比較的近い場所にあるので遅刻で出場できませんでしたまた来年という最悪のパターンは無いだろうが、それでもこの時間まで寝ているのは人としてどうなんだろうか？

別に昨日徹夜したわけでも無いのに…。

「あらもう時間？ふあ…よく寝たわ。ほら行くわよ2人とも。」

（（腑に落ちね…。。））

もう彼女のこのマイペースっぷりは前からのので今更どうこう言うつもりは無いが。

オトヤの記憶に微かに残っている大人しかつたルーテシアの記憶……きっとあれは夢か幻想に違いない。

そう言えばと、シンが何かを思い出したかの様にルーテシアに言った。

「なあルー……ちょっと頼みあるんだけどさ……。」

「何？言つとくけど、あんたみたいな男願い下げよ。」

「むしろこつちから全力でお断りだわ馬鹿野郎。そうじゃなくてさ……バスターなんだけど……あれ、ほとんど銃撃戦用みたいな扱いだろ？」

「んー、まあね。セイバーとかハンマーともあるけど、あくまで補助的なもんだし……それがどうしたの？」

「いや……兄貴銃撃苦手で危なっかしいしさ、格闘技専用の装備とかつて作れないかなあ……って。」

「これからインターミドルで頑張りまくる私にそれを作れと？」

「勿論終わってからでいいからよ。あのままじゃ兄貴……いつか絶対人殺す……。」

「それは色々やばいわね……。ま、考えとくわ。」

「サンキュ。」

「おーい、早くしろって2人ともー！」

『そろそろヴィヴィオ嬢達の試合始まるぞー。』

「……ういーす。」

「はあ……！」

「うわっ……！」

3つのクラスに分類されるのだが、初参加選手は選考時点で『スーパーノービス』よりも上のランク行く事は無いのでこれは最高の結果と言える。

あと一回勝てば『エリートクラス』に上がれて最上級選手達と戦えるのだ。

「やったね皆ー！」

「帰ったら早速ママ達に知らせないと！」

「ホッ…。」

大いにはしゃぐチームナカジマ…それを観客席からポップコーン片手に眺めているジャージの少女が1人。

ジークリンデ・エレミアだった。

フードで被っている顔は見えないが、間違いなく彼女。

そしてそんな彼女に背後から忍び寄る金髪の女性が1人…。

「見つけた」

「あ。」

「お久しぶりねジーク。」

「ん？あれ、ヴィクター？」

その女性の名はヴィクトリア・ダールグリユン。

霸王達が活躍した時代の英雄ともいえる『雷帝』の血を（ほんの少しだけ）引く少女、ちなみに17歳。

名家であるダールグリユン家の生粋のお嬢様だ。

しかし実力は本物で、去年のインターミドルでは3位入賞という輝かしい功績を持っている。

彼女は『もっ』とでも言いたそうな顔でジークのフードを取り、彼

女からポップコーンを取り上げた。

「そんなにフード深く被つちゃ見えづらいでしょ！それにまたこんなジャンクフードばかり食べて…ちゃんとしたご飯食べてるの？」

「目立つのややし、ちゃんとしたご飯食べてるよ。それはたまたまなんよ〜返して〜！」

「本当に？じゃあ…はい。」

「あ、ありがと！」

再びポップコーンに抱き着き食べ始めるジーク。

とりあえずリスっぽい。

「でも良かったわ、予選前にあなたに会えて、どう？今年は？」

「うん…去年はゴメンやった…。ヴィクター達と当たる前に欠場しても…。」

「それはいいわ、気にしない。今年は元気に出てくれるんだし、それでいいわ。あなたは私達の目標なんだから。」

「そんな…ウチなんかまだまだ…ヴィクターや番長達のが凄いよ。」

「あなたのそう言うところも好きよ、私もヤマトも。」

そう言いながらジークの頭を撫でるヴィクター。

見た目的にも行動的にも、完全に姉妹状態だ。
そうしていると後ろからまた新たな声が聞こえ、彼女らは後ろを振り返る。

「あー畜生！寝坊したー！」

「…リーダーが悪いつすからねー！」「」

そこにいたのはガラの悪い舎弟の様な連中を従えた1人の少女。
背は高いが童顔で、多分年齢はジークやヴィクターよりも下。

彼女の名はハリー・トライベツカ。

生粋の接近格闘選手であり、去年のインターミドル5位入賞の強者
どうやら寝過ごしたらしく、いくつか試合を見逃したらしいが…先
ほどのアインハルトの試合で『良い物見れた』とご満悦なので良し
としよう。

ちなみに先ほどジークが言っていた『番長』とはこのハリーの事。
ハリーはジークとヴィクターの存在に気付くと、『おっ』と声を上
げ、ヴィクターの方は『げっ』と声を上げる。

「ポンコツ不良娘！どうしてあなたがここに…！？」

「ヘンテコお嬢様じゃねえか？あれ？お前今年選考会から？」

「違うわよ！！シードリストも見てないの！？私は6組のファース
トシード！！」

「あれそうだったっけ？こちららお前の事なんざ鼻から眼中に無か
ったもんだから見落としてたかもー？」

「あ…あなたこそ今年は地区予選で落ちてくれると助かるわ…って
ゆーか負けちゃって？あなたと戦うの面倒くさいから！」

「んだとてめ…？？」

「あ…あのヴィクター…番長…。」

何とか必死に止めようとしているジーク。

この2人、昔から出会い頭には必ず喧嘩が勃発。

基本的には仲は良いのだが…良い…はずなのだが…。

そろそろ本気でこの2人がおっぴじめようとしたその時…、

「はい、喧嘩そこまでー」

いきなり2人の間に割って入る男が1人。

それが加藤ヤマトだと気付くには2人とも数秒掛かり、ヤマトは2人の肩を掴んで自分の腕の長さだけ2人を引き離れた。

どうやら到着してから彼女達を探していた様で、その証拠と一緒に来たはずのハジメがいない。

「ヤマト!」

「お前ら本当に仲良いな、羨ましいくらいだよ。」

「ヤマトあんまり茶化さんとして…この2人怒ると怖いから…。」

「はいはいわかってますわかってますよ。」

「久しぶりねヤマト…1年ぶりくらいかしら?シン君元気?」

「おう元気元気!最近じゃ友達と馬鹿みたいに騒ぎまくってるぜ!」

「そう…良かったわ…。あなたの家庭、大変だから結構心配してたのよ…。」

「心配無いよ。親父も母さんもほとんど家いねえし、いても関わり合いにならないようにするし。お?ハリー相変わらずちゃんちゃだなぁ〜!」

「うるせえよ。そっちこそ相変わらず腑抜けた面だな。」

「カチーン…。」

加藤ヤマト3大怒りのツボ

・腑抜け面

・ガキ

・グリーンピース

「って…あなたまだグリーンピースダメなの？」

そんなどうでもいい話題はともかく、これで仲良し4人組が揃った事になる。

彼女達とヤマトはジークが初めてインターミドルに出場した時にジークの対戦相手として知り合い、以後ちょこちょこ気があって遊んだりした仲だ。

多分ヤマトの高校メンバーよりも仲が良いだろう。

ここにシンもいれば完璧なのだろうが、彼は今ルーテシアとある意味戦っているところ。

「ほら、こんなところで騒いで面倒な事になったらいけないだろ？ お前らどうせ今日は試合無いんだから、今日はひとまず解散しとけ、な？」

「ったく…仕方ねーな…あばよジーク、ヤマト…あとヘンテコ。」

「誰がヘンテコですってこのポンコツ…！！！！！！」

「誰がポンコツだこのヘンテコ…！！！！！！」

「だからやめろって…。」

さすがにそろそろ注目浴びてくるのでヤマトはヴィクターとジークだけ連れて会場の外へ。

ハリーが追いかけてこようとしているがそれは彼女の舎弟を信じる事にしよう。

ようやくの事で2人を外へと連れ出すと、ヤマトはぜえぜえと肩で呼吸。

「だ…大丈夫…？」

「平気だと信じたい…。」

「ジーク、帰るの？ だったら送っていきましようか？」

「ううん、走って帰るからえーよ。」

「今この近くに？」

「割と。」

「時々連絡よこしなさいよ？ 家に来たらあなたの好きなおにぎりでもおでんでもご馳走してあげるから。」

「うん……ヴィクターは優しいね……。」

「あなたの方が優しいわ。それじゃ、気を付けてね、迷子にならないのよ。」

そう言っただけでみると、ジークはヴィクター達にぺこりと頭を下げて走り去っていった。

そこでヤマトは気付く……このままジークを1人にしてはいけない……。

多分、また迷子になる。

慌てて彼はジークを追いかけて行き……その様子をヴィクターは最後まで見送った。

「本当に過保護よね……ま、私もだけど……。でも……幼馴染じゃ敵わないかなあ……。」

「あの金髪の女……狙い目だな……。」

ヤマト達を見送るヴィクターを影から眺めていた男……アーク。

彼の手には『ライトニング』のカードが握られており……それをスツと構える。

「さて、あの女は一体、どういう仲間を生んでくれるのかな？」

そう呟くとアークはネオカードをそつと…ヴィクターの方へと飛ばした。

Re/birth・XIIII 開幕（後書き）

アインハルト「今日の相談者さんはXXさんのところの門河テルさんです。」

アंक「作者が活動報告あさつてた時に見つけた相談だ。」

ヴィヴィオ「結構初期の方からありました…XXさん、遅れてすみません！」

テル「俺の悩みは普通の生活を送れない事だな…。だが俺は、あれが俺の日常なんだと思っている…そう考えれば…あんな生活も悪く無いかもな…。」

ヴィヴィオ「あらまこの人…自分で解決しちゃいましたよ…。」

アंक「てるーん。」

アインハルト「てるーん。」

信吾「てるーん。」

テル「おい、どっから湧いてきた…!?!?」

アंक「信吾の行動力は俺達の概念の遙かに先に行く。」

アインハルト「たとえそれが…『円環の理』と呼ばれる存在だったとしても…!?!?」

テル「…悪いもう一つ悩み出来た…。泉信吾の存在について知りたい。」

全「…無理です。」

結論：信吾さんマジばねえ

Re/birth・XIV 警告（前書き）

アインハルト「お悩み相談室のお時間です。」

ヴィヴィオ「最近批判の感想が多いけど、それにもめげずに頑張るよ！」

アंक『今日の相談者は…コイツだ!!』

龍「どうも。」

Re / birth · XIV 警告

オトヤ達が会場に到着した頃には、すでにアインハルト達の試合は終わっており、ルーテシアの試合を残すのみとなっていた。

結果は全員『スーパードービスクラス』からのスタート…初出場選手では最高のスタートを切れたと言える。

間に合わなかった事について何だが物凄く怒られるオトヤとシン…悪いのはルーテシアなのに…。

当の本人はさつさと試合に出てちゃっかり圧勝していたりする…とりあえず全員で切れるシンを取り押さえた。

妹や友達の晴れの舞台なのに…と、オトヤは肩を落としながらも頑張ったヴィヴィオの頭を撫でた。

「おめでとうヴィヴィオ、次も頑張れよ。」

「うん！頑張るよ！」

「私も頑張るわ！！」

「黙れ寝スケが…あれ？そっぴや剣立。兄貴どうしたんだ？」

ルーテシアに必殺のグリグリ攻撃をしながらシンがハジメに尋ねた。そう言えばと、彼も辺りを見回すが…ヤマトの姿は見えない。

ついでにジーク達の姿も見当たらない。

「さつきチャンピオンとかいう奴が帰って行ったが…それを追いかけたんじゃないのか？仲良さそうだったし。」

「あ…ジーク姉か。なら多分そうだな、あいつ方向音痴だし。」
言われて納得するシン。

他の運中は『チャンピオン』とい響に感動しておりまともに話を聞いてはいないが…。

なにはともあれ、彼女達はもう今日は試合は無く、来週までお休みだ。

ノーヴェが『じゃあ今から美味しいもんでも喰いに行くか！』と言うと皆大いに盛り上がり、そそくさと退散。

そんな中オトヤは…、

「あ、ゴメン…トイレ行って来てもいい？」

「今からですか？早くしてくださいね。」

「うん、先に行っていていいよすぐ追いかけるから。」

アインハルトにそう言っていると彼はダキバットと一緒にトイレに直行。

手早く用を足すと、彼はハンカチで手を拭きながらノーヴェ達を追いかけてよつとする。

その時…、

「御機嫌よう、キバ。」

「！！！」

突如後ろから声が聞こえ、オトヤは思わず振り返った。

そこにいたのは黒髪長髪にスーツの女…レジエンドルガのサヤカ。彼女の瞳は不気味に黒く濁っており、オトヤは思わず身構えた。

「レジエンドルガ…！！ダキバット！！！」

「おっと、待ちなさい……今日は別に戦いに来たわけじゃ無いわ……。警告しに来てあげたのよ。」

「警告……?」

「一体何の警告だというのか?」

「聞いたら何となくまずい気がする……やはりここで戦うべきだろうか?」

「しかしまだこのアリーナには人がたくさんいる……ダークキバに変身して見た目生身のこの女と戦ったら一体どれほどの被害と仮面ライダーに対する批判が生まれるかわかったもんじゃない。」

「サヤカは美しすぎる髪をそつと撫でると、死んだ魚のような目でオトヤを睨み、言った。」

「あの……剣立ハジメという少年と関わるのはやめといた方がいいわよ?」

「な……ハジメ……!?!?」

「ええ、いつもあなた達と一緒にいるあの少年……ハジメ。彼はいずれ、あなた達を滅ぼす事になるわ。」

『“どういう意味だ……?私はむしろ、貴様らが我々を滅ぼそうとしている様に見えるが?”』

「勘違いしないで、私たちは別に人間やファンガイアなんかこれっぽちも興味なんて無いわ。」

「じゃ……じゃあ何でネオなんか作って僕らを襲うんだ!!興味ないなら……、」

「レジエンドルガ繁栄の為よ。」

「は……?」

「多分意味がわからないでしょうね……まあいいわ。今日はそれを言いに来ただけだから……あ、そうそう、あなたのお仲間……バスターだったかしら? 手助けしてあげないとまずい事になるかも?」

「ヤマトさんが……!? お、おい!!」

オトヤがどういう事なのか聞こうとした途端、彼女は目にもとまらぬ速さで姿を消し、その場から消えた。

彼女の言っていた事が一切わからない……。

ネオを作る理由も……レジエンドルガの事も……ハジメの事も。

ただ一つわかるとしたら……それはヤマトに危機が訪れるかもしれないという事。

『どうするオトヤ……?』

「どうするもこうするも……ヤマトさん探さないで……。」

『ハジメは……?』

「……あいつは友達だ……僕はあいつを信じる。」

『言うと思った、それではヤマト殿を探そう。その前に、応援も呼んだ方がいいな……まずはハジメ達だ。』

「おっ!」

「おーい！ジーク！」

「ん？あれ、ヤマト？」

その頃、噂のヤマト。

彼は何か走って帰るジークに追いつき、ぜえぜえと肩で息をしなから彼女の肩を掴んだ。

彼らが今いる場所はアリーナから約4キロ離れた位置……それだけ走ってもジークは息切れしておらず、逆にヤマトはほぼ死にかけ。慌てたあまりバイクで来た事を忘れてたらしく、走って彼女を追いかけてきたのだ。

ジークに背中を撫でられながらその事を指摘され、ヤマトは更に沈む沈む……。

「どーせ俺なんて……。」

「うん、ごめん。でもありがとヤマト……正直ウチ、今ここがどこだかわからんもん。」

「ほらやつぱり……ヴィクターの言ってた事当たったな。とりあえず休憩がてらその辺で飯でも食おうぜ。」

「うん、おでん食べたい！」

「この蒸し暑いのに!？」

ジークは実はおでん大好き。

特に玉子と巾着とコンニャクが。

別におでんが好きだからと言って知り合いの知り合いの買い物袋漁って『おでんの具になりそうな物がないじゃないか……!!!!』とか言ったりしない。

詳しくは『仮面ライダー000/オーズ』の北村君の回参照。

と、まあ……関係無い話は放っておいて……2人はその辺でおでん屋を探す事に。

しかし見当たらないので……仕方なく、おでんが食べられるうどん屋

に入る事となった。

メニユーは豊富でうどんやおでん以外にも丼物やざるそばなんかも食べられる全国チェーンの店。

2人でメニユーを見ている……そして……それを見ている女が1人……。

(あの2人……良い雰囲気じゃない……!!)

帽子を深々とかぶり新聞を大きく広げて顔を隠す……ここではどう考えても場違いだろうと言いたくなるような清楚なドレスに身を包んだ金髪女性。

彼女を知る者ならば、一目見れば彼女がヴィクトーリア・ダールグリユンだとわかるだろう。

実は彼女……ヤマトとジークが心配になって跡を着けてきた……勿論疲れていない。

何せ馬鹿と方向音痴のコラボレーションだ……心配にならない方がおかしいだろう。

シンがいれば別にそんな事心配する必要……ある。

大いにある。

(私がもしも方向音痴なら……今あそこでヤマトと座ってるのは私……いやいやダメダメ何考えてるの私は……ジークは親友……ジークは親友……!!)

「へいつ、大盛りメガ天そばお待ち!!」

「ハッ！あ……どうも。」
自分の世界に入っていたヴィクターはうどん屋の親父の声で引き戻され、こっちに帰って来た。
冷静になってくると徐々に恥ずかしさが込み上げ……ヴィクターは顔を真っ赤にしながら急いでそば（大盛り）を食べ終え、逃げるように店を出て行った。
ちなみに彼女がお金を払うのとほぼ同時に、ジークのおでんとヤマトのざるうどんが運ばれてきた。

「よし！それじゃお前ら何でも好きな物頼んでいいぞー！」
「……わーい！」
そしてこちらはヤマト達とはだいぶ離れた位置にあるレストラン。
ちなみに『ACE』ではない。
今日は全員予選を優秀な成績で突破したご褒美に、ちょっと高いレストランでノーヴェが奮発してくれた。
ハジメとシンは特に何もしていないのであんまり高い物を注文するのは気が引け……2人ともジュースだけ頼む事に。
「気にすんなって2人とも！あたしらが平和に練習できるのもお前らが頑張ってくれてるおかげなんだからそのお礼も含めてって事で、ほら、ハンバーグでもステーキでも焼肉でも好きなもん注文しろ！」
「（肉ばっかじゃねえか！）……いやあ、本当に良いっすよ。剣立はともかく、俺は兄貴のサポートやってるだけっすから。」
「俺もそこまでお腹は空いていませんので。気にしないで下さい。」
「遠慮すんなって言ってんだろ。すいませーん、追加でハンバーグ定食2つ！」

2人が遠慮しているにも関わらずにノーヴェは2人分の食事を注文。

オトヤの分は彼が来てから……と、思っていた矢先、オトヤがレス
トランの扉を思いつきり開け……るつもりが躓いてドアに顔面をぶ
つけ、よろよるとドアを開けてよてよてと入って来た。

「お……おいオトヤ大丈夫か……？」

「オト兄生きてるー？」

「だ……大丈夫……！」

「慌てるからですよもう……それより注文を……」

「やべっ！こんな事してる場合じゃない！！シンとハジメ借りてく
よー！」

「「は？」

『行くぞー！！』

「あ、私も行くー！」

何か無理やり2人を引きずり（あとルーテシアが着いて）オトヤが
再び店を出て行った。

ぽかーんと口を開けている一同……当然だろう。

トイレ行くといって遅れた奴が、何故か3人も攫ってまたどっか行
ったのだから……。

しかしこの2人を呼んだ（余計なオプション付きで）という事は恐
らくはネオ絡み……そうならアインハルトも黙ってはいない。

「あ、じゃあ私も……」

「アインは良いよ。」飯食べてあとはゆっくり休んでて。」

『さらばだ。』

そう言い残すと、オトヤはハジメとシンを引きずって店を出て行った。

その後店の外から拳の音が2つ分聞こえ、続いてオトヤの叫び声が…。

あとその後にルーテシアの笑い声も…。

「あ……………お、オトヤ君……………」

「気にすんなアインハルト、お前を危ない目に合わせたくないっていうあいっなりの気遣いなんだよ。」

「でも…ちよつと寂しいですね…。前は一緒に連れて行ってくれたのに……………」

「アイツ昔から不器用だからなあ……………。ああいう言い方しか出来ないんだろ。今度ちゃんと話し合ってみ。」

「はい…ありがとうございますノーヴェさん。」

『「じゃあ！」』

ヴィクターはジークとヤマトから逃げ出してから30分…彼女は近くの公園のベンチで意気消沈していた。

あれで気付かれていないだろうか…気づかれてたらあの2人はどう思うだろうか…そもそも何でついてきてるだと思われないか…？
そう考えるとどんどんモチベーションが下がる。

自分の試合はまだまだ先だが、こんな調子で戦える筈も無い。
何とかして来週までには調子を取り戻したいが…多分無理っぽい。

「あの……………ポンコツ不良娘にはガツガツ言えるのになあ……………」

「誰がポンコツだ！」

「つめたッ!？」

ヴィクターが下を向いて眩くと、彼女の頬にいきなりひんやりした物が押し当てられた。

驚いて振り向くと、そこにいたのは彼女と犬猿の仲の……ハリー。ニシシと笑うと彼女はヴィクターにジューズを手渡し、隣に座ってブルタブを開けた。

「珍しいな、お前でも落ち込む事あんのか？」

「な、なんであなたがここに居るのよ!？」

「なんでつっても……オレンちこの辺だし……この時間はだいたい散歩してるし……お前の方こそなんでここに居んだよ？家の方向反対だろ?」

「う、うるさいわね!!ちょっと野暮用があっただけで……。」

「ヤマトとジークのストーカーするのが野暮用ねえ……。」

「なっ!？」

「え……?マジで……?当たってんの!?適当に言ったのに!？」

「あなたって人は……あなたって人はああああああああああ……!……!……!……!」

「お、おい!!試合前に戦闘は無しだろ!？あ、痛い!痛い痛い!!」

いきなり泣き出して魔法の槍を作りだし、ハリーを攻撃するヴィクター。

それを拳で弾きながらハリーはどうどうと彼女を宥めていく。

心なしか2人とも笑っており、ヴィクターの先ほどまでの暗い表情はどこかへ消えた様だ。

「まさか……そんな事があるのか……!？」
そしてそれを陰に見ていたのは『ヴァンパイアレジェンドルガ』たるアーク。

彼は蒼くなつた顔中から汗を流し、啞えていたタバコを噛み千切るとグググと拳を握る。

すると彼の隣にフラツとサヤカが姿を現し、彼女は動揺するアークを見ては首をかしげた。

「どうしたの？」

「サヤカか……。あの金髪の女……確かに体内にネオカードを忍ばせて『負』が溜まるのを待っていたが……。どういうわけか全く『負』が溜まらない……それどころか無くなつてるぞ……!？」

「ふう……でしようね。」

「何!? 貴様……何か知っているのか!？」

「アナタは人間を勉強しなさすぎよアーク。人間が持つ感情は『負』だけじゃない……『喜』や『嬉』といった『正』の感情だつてあるわ。それは私達レジェンドルガも同じでしょ? いくら素材が良くても、それに見合つただけの感情が無ければネオは作れない……まだまだ甘いわね坊や。」

「サヤカ……貴様誰に向かって口を聞いている……!？」

「あら? 聞こえなかつたかしら? あなたに言つてるのよ、アークの『ぼ・う・や』。」

「くっ……! もういい……今日は帰るぞ……!」

「見て行かないの？」

「人間同士のくだらない馴れ合いなんぞに興味は無い!!」

それだけ言い残し、アークは目にもとまらぬ速さでその場を立ち去って行った。

相変わらず子供……サヤカはそう呟き髪を撫でると、もうしばらくの間ヴィクターとハリーの監視を続けた。

「はあ……はあ……!あ……あなたって人は……!!」

「ぜえ……ぜえ……ようやく気が済んだかよ……ヘンテコ……」

2人ともかなり激しい喧嘩をした様で、もうボロボロ。

それでも途中から魔法じゃなくて普通の喧嘩になっていたため、周りへの被害は少なめ。

ようやく2人とも落ち着いたのか、髪や服を整えながら……お互いの顔を見てププツと笑った。

「あはは!アナタ顔きつたな〜い!」

「そういうお前こそスス塗れじゃねえか!お嬢様が顔にススって……くははははは!!」

しばらくお互いを笑いあい、すつきりすると、ハリーはヴィクターの肩をポンポンと叩き、ニカツと微笑んだ。

「お前の気持ちは知ってる。でもジークの事も好きなのも知ってる。あの2人をどっちかなんて選べないんだろ、お前。」

「……………」

「だったらどっちも選べばいいじゃねえか!ヤマトはヤマト、ジークはジーク!どっちも好きならどっちも選ぶ!オレならそうするね

「もうちょっとわがままに生きてもいいんじゃないか、お前は？」
「ハリー……。」

「まあ……いつも自分のしたい事ばかり好き勝手やってるオレが言っても説得力ないだろうけどよ……これでも心配してるんだぜ。一応……その……友達だからな……。」
「……うん、ありがとうね。」

照れくさそうに2人とも笑うと、ハリーは照れ隠しなのか顔を隠して勢いよくベンチから飛び降りた。

顔をなるべくヴィクターに見せない様に下を向いたまま走りだし、そのまま公園の外へ。

「おら、先行くぜ！」

「あ、ちよつとハリー！よそ見していると危ないw、」

キイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイ！！！！

！！！！！！

ドンツツツ！！！！！！！！

一瞬だった。

彼女の小さな幸せな時間を奪い去ったのは……。

目の前で宙を舞う親友。

その彼女の後ろ側には……公園のフェンスを突き破ってきた、眠った運転手の乗った大きなトラック。

グシャツという音がヴィクターの耳に届くのと同時に、彼女の親友

の体は地面に倒れ、辺りには赤い液体がまき散らされる。

「は……………ハリー……………？」

ゆらゆらとハリーに近づき、彼女の体を揺らすヴィクター。

しかしそれでもハリーは何の反応もせず……………呼吸はしているもの意識は無い。

「あ……………ああ……………ああ……………！！！！」

ゾワゾワゾワゾワゾワゾワゾワゾワ！！！！

「いやああああああああああああああああああああ！！！！！！！！！！」

そのヴィクターの叫びが轟くのとほぼ同時に……………彼女の中に眠る『ライトニング』のカードが怪しい光を放った……………。

Re/birth・XIV 警告（後書き）

アंक『と、いうわけで今回の相談者はツリーさんとこの雪原龍だ。』

龍『どうも皆さん初めまして。』

ヴィヴィオ『礼儀正しそうな人だね。』

アインハルト『そうですね、今回のお悩みは？』

龍『はい、本来女子高である筈のIS学園にイレギュラーにも入りこんだ僕達ですが正直プライバシーがあまり守られていない様な気がします。女子達が物珍しく様々な視点で見てるのは分からなくもないんですが、正直あんまり落ち着けません。どうしたらいいでしょう？』

アंक『こいつあだいぶ深い悩みだな……確かに女ばかりの環境だと落ち着かないな。俺の場合、周りはガキばかりだが。』

ヴィヴィオ『だったらもつと積極的に女の子たちと関わってみたらどうでしょう！』

龍『積極的？』

アインハルト『友達同士でそこまで深く興味を引くことはありませんよ。んから、友達にさえなれば多分、皆さん自然と落ち着いてきますよ。』

龍『ふむ一理ある……わかりました、さっそく試みましょうか。』

アंक『それと、帰ったら我疏の奴に『映司が世話になった』と伝えておけ。』

龍『伝えましょう。』

アインハルト『相談室はいつでもあなたのお悩み相談受けてます！』

ヴィヴィオ『アナタのお悩み、私達がすばつと解決しちゃいますよー！』

アंक『其れも欲望だー！』

龍「どんどん相談してくださいね！」

Re/birth・XV バトルモード(前書き)

アंक『悩みを解放しろ!!それも欲望だ!!!!』

ヴィヴィオ「お悩み相談室ですよー!」

アインハルト「今日はこちらの方です!」

キルバット『くくく……!』

Re/birth・XV バトルモード

サヤカの警告を受けたオトヤは、ハジメとシン、それとルーテシアに事情を話し、必死にヤマトを探していた。

タイミングの悪い事に、ヤマトは携帯の電源を切っているようで電話が全く繋がらず、ルーテシアお手製のネオ探知機でもヒットしない。

彼はネオじゃないから当然と言えば当然だが…。

敵の言う事を鵜呑みにする訳では無いが、用心するに越したことは無い。

何か起きるにしても、何も起きないにしても、一緒にいる事に損は無いはずだ。

警告……そう、彼女は警告したのだ。

ヤマトが危ない事と……それと……、

「あー畜生あのバカ兄貴……何処行きやがったんだ!？」

「ほんと……バカの兄はやっぱバカね!携帯の電源切ってるって、

そんなのもう携帯電話じゃ無いじゃない!!」

「登、レジエンドルガの女は一体ヤマトさんに何が起ると……登、どうした?」

「……………」

サヤカは警告した。

ヤマトの事と……………」

ハジメの事を。

彼の何がダメなのか……オトヤにはそれが全く分からない。

ハジメは記憶喪失で、何故かカリスになれて、最初は暴走して自分

達の敵になつて、カードを奪つたりして、とにかく出会いは最悪だった。

「……それからは助けられて、一緒に戦つて、一緒に学校に行つて、一緒に弁当食べて、一緒に遊んで……。」

最初の時の思い出なんかより、今ここにいるハジメとの思い出の方がはるかに強い。

だからオトヤはハジメに言った。

「ハジメ……もしも……。」

「？」

「もしもお前の記憶が戻つたとしても……お前の過去に何があつたとしても……僕達はずっと、お前の友達だからな。」

「どうしたんだ登……？いきなり改まつて……？」

「オトヤ？」

「何そんなところで油売つてんのよ男共！さつさと行くわよ！」

少し離れた位置にいたルーテシアにはオトヤの言葉が聞こえていなかったようで、手をブンブン振りながら3人を呼んでいる。

心配そうにオトヤを見ながらも、シンは先にルーテシアの下へと走つて行き、その場にはオトヤとハジメ、それとダキバットだけが取り残された。

「登……。」

「ごめん、いきなりこんな事言つても意味わかん無いよな……とにかく僕らは友達！さ、早くヤマトさん探そう！」

『ゆくぞー！』

「……ああ、ありがとう。」

ヤマトとジークは暇つぶしに、街に遊びに出ている。

どうせ迷子なのだからとことん迷おうというヤマトの電波的発想によるもので、2人はビルが立ち並ぶ都会へ。

ジークは有名人なので比べると色々とまずい……なのでその辺の服屋に立ち寄って適当に動きやすそうな服をヤマトが見繕って髪を下げれば結構雰囲気が変わるので、着たままお金を払ってその勢いで適当にぶらぶら。

久しぶりに遊ぶのが楽しいのか、ジークは笑顔を崩さず、ヤマトの方もまんざらでは無さそうだった。

ここの所ジークは特訓、ヤマトは戦闘でのんびり遊ぶ暇など無かったから……今日は本当に楽しい。

(ヴィクターに感謝せなあかな……。)

「ジークどうしたの？」

「何でも無いよ、今度はシンとかヴィクターとか番長誘って来ようね。」

「そうだな。あ、だったら俺の新しい友達も紹介したいなあ……シンのクラスメイト達だけだよ。」

楽しく談笑している2人。

話しながら歩いていると、彼らは偶然にも電気街へと入る。

そして……そこで偶然、展示品のテレビに流れているニュースを耳にした。

『本日午後15時46分頃、アリーナ駅前公園で、インターミドル出場予定であったハリー・トライベツカ選手(15)が居眠り運転をしていたトラックにはねられ、意識不明の重傷を負うという事故』

がありました。ハリー選手は友人のヴィクトーリア選手と共に…、
』

「……何コレ…？」

ハリーがトラックにはねられた。

ニユースキャスターの言っている言葉が理解できずに、2人ともテ
レビに食いつく。

今日の3時頃…ハリーがトラックにはねられた…？

彼女は砲撃番長の名で知られる程の選手…そんなへマやかすはず
が無い…。

それなのに……

『なお、ヴィクトーリア選手の行方はいまだに分かっておらず、警
察では総力を挙げてヴィクトーリア選手の行方を追っています。続
いてスポーツです。ミッドチルダ代表の野球チーム『ミッダース』
初の快拳です！』

ニユースはハリーの事などおいてどんどん先に行く。

それでも……ヤマトとジークの思考は止まっており、ようやく動き
出すと、2人は急いで公園へと向かって走って行った。

トラックを運転していた男は警察に逮捕され、署で事情聴取を受け
ていた。

何でもここ数日眠れない日が続いたらしく、暖房を掛けて運転していたら急に睡魔が襲い…気づいたらハリーを跳ね飛ばしていたらしい。

男は深く反省しているようで、警察も殺意・悪意があったわけではないという事で現在は病院に運ばれたハリーの状態を医者と確認しながら、この男の事をどうするのかを話し合っていた。

良くて裁判…悪くてそのまま豚箱行きだ。

男は『償うためなら何でもする』と言い椅子でジッと涙を堪えながら肩を震わせていた。

その時……、

『だったらその命……ハリーに返しなさいよ……。』

「うわあああああああ！！！！?????」

突然取調室から男の悲鳴が聞こえ、警察は拳銃を持ち4人ほどで部屋へと向かった。

ドアを開けてみると、そこでは謎の甲冑の騎士が電光の剣を男に突き付け、男は怯えきって壁にへばりついていていた。

警察達は一斉に銃を構えて甲冑を撃つが、甲冑にはそれは全く効かず……剣を振り上げると、警官達の持っていた拳銃を真っ二つに切り裂く。

「あ……ああ……!?!」

『アナタのせいでハリーは……ハリーは……!?!』

「仮面ライダーなんだ!! 変身!!」

『バスターフェッスルセット バスターモード トランスフォーム』

電子音が流れるとヤマトの体中にライダーアーマーが装着されていき、彼はキバとイクサを足したような白銀の戦士 仮面ライダーバスターに変身。

バスタードライバーを腰にしまうと、バスターは拳を構えてナイトネオへと殴りかかった。

硬すぎる甲冑に手を傷めながらも、バスターは何度も何度もラッシュを繰り返し、少しずつ圧していく。

『止めて……やめて!!!!』

「ぐっ……!? そ、その声……!?」

電光の剣で薙ぎ払われ、バスターは少し離れた位置まで飛ばされた。その際にナイトネオの発した声に聞き覚えがあり……バスターもジークも顔を青ざめる。

この声は……、

「お前……… ヴィクター………!?」

『ヤマト邪魔しないでくださる……？私はこの……ハリリーの選手生命を奪ったあの男を許さない……絶対にこの手で潰す……だから邪魔しないで！！』

「そんな…ヴィクターが……ネオに…!？」

前に聞いた話だと、ネオファンガイアは人の『負』の感情にレジエンドルガがネオカードを入れる事で誕生する。

しかもネオにはレベルがあり、レベル2に英名のネオは親の意識を取り込んだり、親そのものを取りこんだりする事があるそうだ。

だとすればこのネオは親友の選手生命を奪った男に対する……ヴィクターの『憎しみと怒り』の象徴。

元々友情には厚い彼女だ、きっとその『負』は計り知れないほど深いだろう…。

しかもナイト……なるほど、雷帝の子孫である彼女にはぴったりだ。

きっとその辺の博物館かどこかの物だろうが……親とネオの相性がここまでぴつたりな敵は見た事が無い。

それに相手はヴィクター…ヤマト達の友達だ。

「邪魔……するよ！！いくらハリリーの為だからって、悪気の無かった犯人殺してそれでハリリーが喜ぶはずが無いだろ！！」

「そうだよヴィクター！！もっと冷静に…、」

『ひるむ……!?!?!』

「のわっ!?!?!」

『プロテクトフェッスルセット　プロテクト・イグニッション』

電光の剣を防ぐ為にバスターはバツクルにフェッスルを挿入し、自分の胸部に防護装甲『プロテクトアーマー』を装備した。

しかしそれでも完全に防ぎきる事は出来ず、ジークにぶつからない様に地面に倒れる。

その際にすでに新しいフェッスルをバツクルに装着しており、立ち上がると同時にそれを発動。

『レーダー・セイバー・イグニッション』

左腕にレーザーハンド、左手首にはセイバーハンドを装備すると、バスターはナイトネオの剣撃を受け止める。

力はほぼ互角…だが敵はレベル2であり持久力では圧倒的に負けている。

ナイトネオが開いている方の手でバスターの首を掴むと、彼の体を宙へと浮かし、彼を地面に叩きつけた。

「ぐあああああ！！！！」

「ヤマト！！ヴィクターもうやめて！！ヴィクター！！」

『だいたい……元はと言えばあなたが悪いのよヤマト……貴方が……貴方がそんなだから！！！！』

「ヴい……く、ター……！！」

再びバスターを掴みあげ、ナイトネオは彼の体を空中へと放り投げた。

宙を舞うバスター……彼に向かって、ナイトネオが電光の剣を向ける。

剣先に電撃が集中していき…それはやがて大きな電撃の塊になると、ナイトネオはそれを思いつき振りかざし、バスターへと放った……。

『バツシャー・スプラッシュュー!!』

だが……、その電撃がバスターにあたる瞬間は永遠に来なかった。何故ならばそれをギリギリで水の塊が妨害し、電撃を消し去ったからだ。

続いて落ちていくバスターの体がフワリと浮かび、彼はゆっくりと地面へと降りていく。

ナイトネオがその妨害した者…仮面ライダーダークキバ スプラッシュタイプ達に気付くと、バスターを地面へと降ろした張本人であるルーテシアとシンがバスターへ駆け寄った。

「兄貴!!しつかりしろ!!」

「シン……か…?助けに来てくれたんだな…サンキュ!!」

「カツコつけてる場合じゃないわよ加藤兄!!オトヤとハジメ!!頼んだわよ!!」

「おう!!」

ルーテシアの一声でダークキバはダキバツシャーマグナムを、カリスはカリスアローを構え、2人掛りでナイトネオへと攻撃を仕掛けた。

遠距離からはダークキバ、近距離からはカリス…しかしナイトネオ

は埋め込まれたカード『ライトニング』の力でそれをもるともせず
に突き進み、まずはダークキバを切り裂いた。

元々タイプはほぼ必殺技専用の形態……ただでさえ体力の消費が半
端じゃないうえに攻撃なんか喰らえば一撃で倒されてしまう。

皆の予想通りダークキバはそれで変身が解け、オトヤに戻りごろご
ろと転がった。

今度はカリスが攻めてみるがそれでもレベル2のネオにはパワーが
及ばずに、変身は解けないものの弾き飛ばされてしまう。

「あのネオの強さ無茶苦茶すぎるだろ……！？兄貴……！！」

「アイツは……アイツはヴィクターなんだ……俺が……止める……！！」

「はっ！？ヴィクター！？アイツが！？」

シンもヴィクターの知り合い……なぜ彼女がと思ったが、実は先ほ
どのニュースをシンも見ていた。

恐らく彼女の目的はハリーを轢いた男への復讐だろう……ジーク、
ルーテシア、シンはそれに言葉も出ずにただただ茫然としてしまっ
た。

だがバスターだけは……加藤ヤマトだけは違う。

彼は立ち上がりバスタードライバーを構えると、顔を上げた。

「ヴィクター……お前あの時現場にいたんだよな……？だったらあれ
が事故だって事ぐらいわかるだろう！？」

「事故じゃすまないわよ……ハリーは……ハリーはあの男のせい
で……もう……もうインターミドルで戦えない……それを『事故』
の一言で済ませられるはずがない……！！」

「だからって復讐して何になる！？ハリーがそれを望むか！？そん
なわけ無いだろう！？アイツは復讐なんか望まない！！それを一番
よく知ってるのは……ヴィクター……親友であるお前のはずだ……！！」

「う、うるさい……！それに……元はと言えばあなたが悪いのよ！
……ヤマト……！！」

大きく剣を振りかぶり、バスターを切り裂くナイトネオ。

何とかバスターはそれをプロテクトアーマーで防ぎ致命傷は逃れるがもうボロボロ。

必殺技を撃とうにも、スーツがそれに耐えられるかわからない。

「お……俺のせい……!?」

「そう……私はあの時、あなたの事をハリーに相談していた……彼女は私を元気づける為に来てくれた……そして、あのトラックに轢かれた……。」

「俺の事を相談？一体何を……!?」

『私の恋は……親友の命を奪ってしまうのよ……ヤマト……。』

「え？」

その言葉を聞いた刹那……ナイトネオの剣がバスターを切り裂いた。装甲が割れ、膝をつくバスター……ナイトネオは剣を振り、バスターの頭を掴みあげる。

彼女は仮面に隠れて見えなくなっている目を潤ませながら、何度も何度もバスターを斬りつけていく。

『アナタが私の気持ちに気づいていれば……こんな事にはならなくて済んだ……ハリーともインターミドルで戦えた……だからあなたのせい……全部全部あなたのせい……!』

「そりゃ違つぞ！！！へんテコ！！！」

「！！！！」

突然後ろから声が聞こえた。

フルフルと体を震わせながら振り向くナイトネオ…そこには、トラツクに轆かれて意識不明になっていたはずのハリーの姿が。恐らくは目が覚めてからすぐに病院を抜け出したのだろう。

彼女は全身に包帯を巻き、松葉杖を使いながらよろよろとナイトネオへと近寄っていく。

「オレがこうなったのは…オレが単に鈍感だったせいだ…ヤマトは関係無い…お前にも…何の責任も無い…」

『う、嘘よ……これは…私とヤマトのせいだ…、』

「だから違つんだよ……ヴィクター…。お前は悪くないし、ヤマトも悪くない……誰も悪くなんかいないだ！！」

『うそ……うそ…うそ…うそ…！！嘘よ！！！！』

「まだわかんないのかよヴィクター!!! ハリーはお前を許してやるって言ってるんだ!!! お前はもう誰も恨まなくていいんだ!!!」

バスターがそう叫んだところで… ナイトネオの動きが止まった。するとナイトネオの体がボロボロと崩れだし… そこからヴィクターの姿が見え始め、彼女はそのままナイトネオから排出されて地面に倒れた。

それと同時に今度はナイトネオが自動的に動き出し、一心不乱、めちゃくちゃに剣を振るい始めた。

しかしオトヤとカリスは戦えず… バスターの装甲も限界に近い。

その時、ルーテシアが懐からある物を取り出し、それをグツと握りしめた。

「お、おいルー!? それは!?!」

「フフン あんたにああ言われる前から作ってたのよ、バスターの格闘専用モード!!!」

「仕事早いな!?!」

ルーテシアが握っているもの… それはフェッスル。

彼女はそれを握りしめるとバスターへ向けて思いつきり投げつけ、バスターはそのフェッスルを何とか掴み取った。

『ぐおおおおおおおおお!!!』

「よ…よし…」

ルーテシアから受け取ったフェッスルをバスターバツクルへと挿入するバスター!。

それを完全に奥まで挿入すると、バツクルが光り、バスターの装甲

の切れ目から赤い光が漏れ始めた。

『バトルフェッスルセット　バトルモード　トランスフォーム』

その音声と共に、バスターの装甲がはじけ飛ぶ。

すると中からはスマートなスタイルをした真紅のボディが顔を出し、それらはナイトネオの電光に照らされてぎらぎらと輝く。

キバの様な仮面も形を変えてイクサの様に變形すると、バスターはバスタードライバーを捨てて両拳を前に突き出した。

『仮面ライダーバスター　バトルモード』

『バスターウエポン』を装着していく事を前提に作られた基本形態

『バスターモード』の装甲をパージしウエポンとの連携システムを完全排除、運動能力と戦闘能力を極限まで引き上げた格闘技専用のバスターの最強形態。

先ほどまでとは全く違う姿をしたバスターにナイトネオは戸惑いを見せる…それが命取りとなった。

その一瞬でバスターはナイトネオの懐まで侵入。

素早くイグニッションフェッスルをバツクルに挿入し、バスターは拳を振り上げた。

『フル・イグニッション　ドライブ・シュート』

「はあああああああああああ……！！！！！！」

「おいコラヘンテコー……！！！！お前誰がリンゴこんな風にむけつつたあああ……！！！！」

「はあ！？何言ってるの完璧に剥いてあげてるじゃない！！何が不満なのよ！？？」

「オレはうさちゃんリンゴにしろつつたろつが……！！」

「どうせ食べればうさぎであろうとなかろうと一緒にでしょ！？？」

「なんだとこのヘンテコお嬢様あああ……！！！！」

「なによこのポンコツ不良娘ええええ……！！！！」

ヴィクターとハリーはいつも通り、ハリーの病室で子供っぽい喧嘩を繰り返していた。

それを花瓶の花を変えながら苦笑して見るヤマトとジーク……何はともあれ、ハリーがここまで回復してくれて安心した。

医者の話だと、近年稀に見ぬ回復力だそうだ。

今年のインターミドルに出場できなくなってしまった分、来年の試合に備えて早く特訓したいのだろう。

今日は午後からは彼女の舎弟や、オトヤ達もお見舞いに来てくれるそう、ハリーが退屈する事はまず無い。

ハハハと笑っているとそろそろ2人が何やらおっぱしめそうだったのでそれはジークが何とか阻止……できたらいいなあ……。

「お前ら本当に仲良いよなあ、あ、そろそろ昼飯だけど……どーする？なんか買ってきてここで喰う？」

「オレ焼きそばパン……！！」

「私クリームパン……！！」

「ウチたこ焼きパン……！！」

「……はいはい。」

呆れたようにそう言うと、ヤマトはまた最後にクスリと笑い、コン

ビニに行く為に病室から姿を消した。

Re/birth・XV バトルモード（後書き）

アインハルト「私の出番——————orz」

アंक「今日の相談者はジュンチエさんとこのキルバットだ。
ヴィヴィオ「初めまして、ヴィヴィオです。」

キルバット「初めまして御嬢さん……わたくし、キルバットと申します。」

アंक「おいヴィヴィオ下がれ、コイツなんか危ない気がする……。
キルバット「あ？男にや用はねえんだよ。」

アंक「知るか、それよりさっさと悩みを言え。」

キルバット「そりゃもちろん、女の子達と触れ合いが少ない事だ！
！こつちの女子は少し近寄りがたいところがある……その点なんだ！
！？ここは美少女の宝庫じゃねえか！！へっへっへ……さあて……ま
ずは……」

アインハルト「orz」

キルバット「あの子に決めた……！！！」

ガチッ！！

アंक（完全態）「いい加減にしろよコラ……？」
キルバット掴んで

ダークキバ「……。」
ザンバットソード仁王立ち
キルバット「用事思い出した、帰る……！！」

ヴィヴィオ（何しに来たんだろう……？）

Re/birth・XVI お祭り（前書き）

ソウジ「パーフェクト三十路講座の時間だ。」

シヨウイチ「さあて……今日の三十路候補は一体誰だ!？」

伊達「なあ天堂ちゃん、おでん…無い？」

お悩み相談室×3「『変なのキターーーー!!!!!!』」

Re/birth・XVI お祭り

『勝者！！アインハルト選手！！』

インターミドルが始まってから早数週間……アインハルトやヴィウイオ達は順当に勝ち進んでいた。

ミウラも強敵ミカヤを倒し、続くアインハルト対コロナの激戦も……コロナの健闘むなくアインハルトの勝利で終わった。

ヴィクターも参加できなくなったハリーの代わりに彼女の分まで全力を尽くして戦い、着々と勝利を手に行っている。

今回の試合はオトヤ達も見る事が出来、ハジメとシンは敗北したコロナの下へ、オトヤは勝利したアインハルトのところに向かつてテイオに咬まれた。

「いててて……アインおめでとぅ、次はいよいよジークさんとだね！」

「はい……ですがコロナさんが……。」

『気に病むなアイン嬢、勝者あるところに敗者あり……当然の事なのだ。コロナ嬢には悪いが、勝負の世界とはそういうものだ。』

「うう……。」

「ダキバット言い過ぎ。確かにコロナちゃんには悪いけど……僕はアインが勝って嬉しいよ、おめでとぅ。」

「……はい、ありがとうございます。」

今日はこのままお開きになり、アインハルトとコロナは直帰でそのまま家に帰る事に。

もしかしたらコロナの『負』を使ってレジエンドルガがネオを作るか……と、思ったが帰り際に彼女の見せていた笑顔は確かに本物なのでその心配は無いだらう……。

明日と明後日は土日なので学校は休み。

コロナの気晴らしとヴィヴィオ達の応援の意味も含めて……どこかへ
パークと遊びに行きたいものだ。
どうせ次の試合まで一週間もあるし、たまには身体を休める事も大
切。

そう考えてオトヤはアインハルトとノーヴェに提案し、2人は喜んで承諾してくれた。

「来週か……………」

その頃アークはバードネオと共に、今は使われていない廃屋で横になっ
ていた。

隣ではサヤカが読書をしており、彼女は本にしおりを挟むと『来週
?』と首をかしげてアークに尋ねる。

「来週……何があるの?」

「コイツの進化だよ。お前……あのインターミドルとかいうの次の
試合、誰が出るか知ってるか?」

「知らないわ、興味も無い。」

「人に勉強不足とか言っておいて、自分もそうなんだなあ。」

人を小馬鹿にするようにアークが笑うと、サヤカは自分の腕から手
刀を出現させて彼の首に突き付ける。

アークは冗談だと刀を下げさせると、ポケットから愛用のスマート
フォンを取り出してサヤカに見せた。

そこに映っているのはアインハルトとジークの顔。

インターミドル……次試合のカードだった。

「霸王と……こっちは?」

「ジークリンデ・エレミア……この大会注目の選手だ。コイツの試

合を見る為に各世界から大勢の人が集まるらしい…。」

「あなたまさか……………」

ニヤリと笑うアーク。

それに呆れた様にサヤカはため息をつく、懐から一枚のカードを取り出してピラピラとアークに見せつける。

記載されている名は『ポイズン』……『毒』のカードだ。

「汚いやり口……………でもレジェンドルガ繁栄の為なら、仕方ないわね。」

「素直で結構。」

翌朝……………この日は朝から皆でナカジマ家に集まり、朝食もここで頂いた。

今日はインターミドル出場メンバーであるヴィヴィオ、リオ、コロナ、ルーテシアと、応援のメンバーのオトヤ、シン、ハジメの7人+保護者としてヤマトとノーヴェの計9人で遊びに行くのだ。

その遊びとは……………、

「よし、皆集まったなー！」

「……………はい。」

「……………ういーす……………」

「それじゃあこれから夕方5時まで町内の清掃活動頑張るぞー！」

何をどこでどう間違ったのか……町内の清掃活動。

何でも毎週、丁毎に代わっているらしく……今週はナカジマ家のある4丁目の番。

ちなみに先週は登家のある3丁目だった。

あれ……？遊びに来たんだよね……？というツツコミをするときっと負けなので突っ込んではいけない。

何となく腑に落ちていないオトヤとアインハルトはごみ取り用の鋏片手に頭の上に『？』の文字を浮かべている。

「ね……ねえノーヴェ……これは一体……？」

「それじゃあたしは5丁目を1人で担当すつから……後は適当に分散して頑張ってくれ。」

『聞くなオトヤ……これでも……一応は立派な休憩なので彼女らにとつてはな……』

『にゃうー……』

ダキバツト、テイオ、クリスの順でオトヤにそう言った後、オトヤの足にテイオが噛みついた。

純粹無垢で素直な小学生3人組と、何でも楽しむ天才であるヤマト、正直なんでもいいやと思っっているハジメは良い返事をしてやる気満々だが……その他のメンバーは納得いかないご様子。

特にルーテシアなんかはこういう地味な作業が大嫌いなので地団駄を踏んでいた。

しかしノーヴェはそんな彼らを見て『チツチツチ！甘いなお前ら！』
と言うと……懐から一枚のチラシを取り出し、全員の前に叩きつける。

それは『八城神社 お祭りのお知らせ』と書かれているチラシ……というかポスター！

八城神社というのは町内の中でも特に町はずれの山の方にある伝統

ある小さな神社で、この町では毎年夏の始まり頃と秋の終わり頃にこうしてお祭りが開催されて、夜店や踊りや花火なんかで盛り上がっている。

そう言えば去年は風邪ひいて行って無いなーと思いつつも、オトヤはそのポスターを見ながら聞いた。

「で……これが？」

「この清掃活動、手伝った未成年者には特別報酬として今夜の祭りで使える夜店のただ券が5枚もらえるんだ！どうだ、やる気になったか！？」

「……わーい！」

「……ふーん。」

「ふーんて！？」

相変わらず中等科3人＋ルーテシアには受けが悪いが……ノーヴェの必死の交渉により渋々4人とも了承。

ちなみにノーヴェがここまで必死になるのは、今日ナカジマ家が全員仕事で家には自分おらず1人だけで参加しなければならぬ………
…という事だったりする。

結局は参加する事になり……全員で街の清掃活動を開始。

この町……割と田舎なのに何故かくそ広い。

別にこの活動は絶対にやらなければならぬ義務と言っわけでは無いので基本的には善意溢れる者しかやらず、ノーヴェ達を含めてもちゃんとやっているのは全部で15人いるかいな。

自分達の町なんだからちゃんと掃除しろと文句をつけたくなるが、かく言う自分も先週は全く参加していないので口にできないオトヤであった。

ダキバットと一緒に黙々とゴミを拾いながら、少し先で冬に残っていた枯葉を片づけているアインハルトをチラッと見る。

『どうした？』

「んー？……いや……不思議だなんて思って……。」

『何がだ？』

「ちよつと前まで、アインの事……数回しか話しないのに勝手に憧れ持って……自分には一生縁の無い高嶺の華なんだなあって思ってたのに……。」

『ふむ？』

「それが今じゃこつやつと一緒に町内のゴミ拾いやつて……普通に遊んだり話したり弁当喰ったりしてさあ……人生何が起きるかわかつたもんじゃ無いよね。話してみると、結構喋りやすいタイプだったし。」

『案外間抜けだからなアイン嬢……だがいきなりどうした？』

「いやさー……何にも考えずに仕事してたら、悟った？って感じ……。」

『お前『悟る』の意味わかって言ってるのか？』

「え、意味違うの？」

「2人とも、口よりも手を動かしてください！」

「登とダキバット、お前らメシ抜くぞ。」

「『どうしてハジメがそう言う事決められるの！？』」

相変わらずな会話を繰り返しているうちにだんだんと時間が経ち……気が付けばもう、辺りはだいぶ夜に近づいており、ビルの向こう側では夕日と夕闇が入り混じったような幻想的な風景を生み出していた。

辺りを見回すがもはや目立つようなゴミは無い……全員で6時頃に一旦公民館に集合すると、そこではすでにノーヴェが待機しており、

戻って来たオトヤ達を見るなり、大きく手を振りながら出迎えてくれた。

ゴミ袋は町内会長が処分してくれるので、彼らはお祭りのただ券をもらってそこでおしまい。

今から家に帰って着替えたら丁度祭りの始まる時間だから丁度いいなと思いつつ。そこで彼らは一旦別れた。

オトヤとヴィヴィオは当然ながら同じ家に帰り、ワタルとなのはに着替えを用意してもらつとオトヤはラフなTシャツ（ちなみに柄は『漢魂』）に、ヴィヴィオはなのはが小学生の頃使ってた浴衣に着替えて、少しながらお小遣いを貰ってから出発準備完了。

「似合ってるよヴィヴィオー」

「わーい！ありがとママ！」

「父さん達本当に行かないの？カズマさん達は出店出すから行くらしいけど…」

「本当は俺達も行きたいんだけどな…なのはの体の事があるし…。来年こそは家族『5人』全員で行きたいな。」

『それではなのは殿、お大事に。』

「ありがとねダキバット。それじゃ、2人ともノーヴェに迷惑かけちゃダメよ？」

「わかってるわかってる。行こうかヴィヴィオ？」

「行つてきまーす！」

クリスとダキバットを引き連れた登兄妹は両親に別れを告げると早速神社へと出発。

途中でシンとヤマト、それとなんかものすごく目立つ服（巫女のコスプレともいう）のルーテシアと合流して、そのまま寄り道も一切せずに神社へ。

は激痛が顔中に走っているので恐らく当分起き上がれない。
と思つたら、ツカツカとルーテシアがオトヤに近づき……なんと、
あるうことかオトヤの腹に鋭いパンチを一発叩き込んだ。
理由は……、

「よーし！これで全身が痛いから顔の痛みなんて気にならないでし
よ！」

「ふざ……けん……な……ガクツ。」

『オトヤあああああああ！……！！……！！』

それでも5分もしたら普通に復活したのはさすがとさえはいいいのか
……？

彼は行く前に家から持って来た絆創膏を自分の鼻に貼ると、若干沈
んだ表情でアインハルトに『こんばんわ……』と挨拶。

すると彼女の方も挨拶してくれたので、オトヤは鼻を押さえながら
顔を上げ……そのまま膠着した。

「オトヤ君？」

「アイン……浴衣？」

「あー、はい……お母さんのお下がりですが。サイズがぴったりだっ
たので……折角のお祭りですし。変でしょうか？」

『良く似合っておるぞ。ほれ、オトヤお前も褒めんか。』

「ダキバツト後でちぎる。」

『何をだよ！？』

『にー……。』

「ほらティオ、ちゃんと謝りなさい……」

『にっ。』

相変わらずテイオはダークキバ組に懐かない……それはもう慣れた。ちなみにアインハルトは浴衣の他にも、髪をいつもと違い卸している。それで結構印象が違う。女の子って髪の毛卸すだけでこんなに大人っぽく見えるんだーと思っっている最中に、シンがオトヤの肩を掴んでハジメのところへと引っ張って行った。

「おらオトヤ！射的やりいこーぜ射的！」

「シんてめ自分に有利な勝負選ぶなよ！？」

「2人とも、誰が一番稼げるか勝負しないか？主にカズマさん達の屋台で。」

「「ぜってーやらん！！」」

「ハジメ君本当にお店想いだよねー。」

『そしてそれは遊びではない。ただの手伝いだ。』

そのままシン達に引っ張られて姿を消すオトヤ。

話している途中に拉致られ、ポカーンとしているアインハルトの下に、ヴィヴィオ達が駆け寄ってきた。

「アインハルトさん、金魚すくい行きましょう！」

「えー、あたしヨーヨーが良いー！」

「ヴィヴィオもリオも揃うゲーム好きだね……。」

「型抜きー！！」

「ルーテシアさん……見かけによらず地味な遊び好きなんですネ……。」

『「こー……。」』

そうしてアインハルトも仲の良い4人組に拉致られ、オトヤ達とは正反対の方向へと連れて行かれた。

一応お腹がすいたらまた落ち合うという事にはなってはいるが……多分、そんな事など忘れて楽しむだろう。

ゲームも沢山やったし、くじ引きもしたし、屋台の定番がタコ焼きか焼き鳥かで議論しあったりもした（結果は『美味けりやどっちでも良くね?』で落ち着いた）。

途中ダキバットが迷子になったり、テイオが迷子になったり、ヤマトが迷子になったり……。

楽しい時間はあっという間に過ぎてしまい、祭りは終盤の盆踊りの時間に。

ようやく解放されたオトヤはただ券を使い切ってしまったので普通にお金を払ってラムネを一本買くと、ダキバットと一緒に神社の階段のところまで降りてきて座り込む。

「あ~~~~~……疲れた……………」

『オトヤ、私が迷子になった時何故探してくれなかった?寂しくて私ちよつと泣きそうだったぞ。』

「同時にヤマトさんまで迷子になったからだよ……………」
「というかお前、焼き鳥屋台のおじさんに沢山焼き鳥ご馳走なってる?」

『美味すぎて私ちよつと泣きそうだったぞ。』

「もぐぞ。」

『何をだ!?!』

「あ、いましました。」

『にゃあ!』

ダキバットといつも通り漫才を繰り広げていると、彼の後ろからア

インハルトとテイオの姿が見えた。

どうやら彼女も人ごみがそんなに得意な方では無いそうで、ヴィヴィオ達が盆踊りに行ってしまったのでオトヤを探していたらしい。彼女も手にはラムネを持っており、オトヤの隣に座るとそれを一口飲んだ。

「アイン、今日はお疲れ様。疲れた？」

「ええ、特訓よりも疲れましたよ。でも、楽しかったです。」

「そりゃ良かったな。やはり1人より大勢の方が楽しいだろ。」

「そうですね、何と言うか……少し前までの自分が嘘みたいです。1人で練習ばかりやってて……あの頃はテイオもいなかったし……。」

「

「確かに、アインってちょっと前まで家に直帰だったよね。」

「最初友達いないのかと思っただぞ。」

「うっ……。」

「ダキバット減らす。」

オトヤが不吉すぎる言葉を言うのと同時に生身ダークネスヘルクラッシュがダキバットに炸裂。

彼は勢いよく神社の真下まで落ちていくと……約1分後にゆらゆらと飛んで戻って来た。

「でも……。」

「『ん？』」

「でも、オトヤ君やヴィヴィオさんに会ってからだいぶ変われました。1人じゃ何にもできないって事もわかりましたし、1人でやってた事も皆でやれば普段よりも何倍も楽しいっていう事も知る事が出来ました。」

「当然だ、人は常に誰かと支えあって生きている。クラウドスもキン

グモオリヴィエもそうだった。勿論、敵国もそうで無い国もな。』

「僕もアインに助けてもらってばかりだったし……宿題とか宿題とか中間テストとか期末テストとか宿題とか……。」

「それは自分の力でやりましょうよ……。」

「まあそれは冗談として……僕、君と友達になれて良かったって思うよ。君だけじゃなくて、シンもヤマトさんもルーさんも、リオちゃんもコロナちゃんも、勿論ヴィヴィオも！それに……。」

『ハジメも』と言いかけた所で、以前のサヤカの忠告がオトヤの頭をよぎった。

しかし彼はフルフルと頭を振ってその考えを振り払い、自信満々に言った。

「ハジメも！皆と友達になれて本当に良かったと思う……！」

「私もです。」

『きつと全員同じ気持ちだろうな。』

「お……いい！オト兄とアインハルトさ……！」

そうしていると、2人を呼びにヴィヴィオが姿を現した。

彼女は2人の服を引っ張ると満面の笑みで2人を連れて行くところ。

「2人も踊ろうよ！今ヤマトさんが太鼓叩いててすごく面白いよ……！」

「あの人がやってんの!?」

「ほらほら早く……！」

「わかりました。わかりましたからヴィヴィオさん、あんまり袖引っ張らないで下さいよ……！」

どうやら格闘技の技量はアインハルトの上でも、力自体はヴィヴィオの方が上らしく……彼女は割とあっさりと2人を引っ張っていく。

困るアインハルトと苦笑するオトヤ。
階段を駆け上がったところでオトヤは自分のズボンに着いた汚れを
パタパタと払うと、アインハルトに言った。

「アイン。」

「ん？」

「来週……頑張ってるね。」

「はい、ありがとうございます！」

そして1週間後……、

「ようやく完成だな……。」

『クオオオオオオオオオ……！！！！』

激闘を繰り広げるアリーナの上空に……赤い大きな怪鳥と、黒スーツ
の男の姿があった。

これから約10分後に始まる試合を見る為に、各世界から大勢に人
が集まる今日この日……それは彼、アークにとっても絶好のチャンス
であった。

決行は今から10分後……胸の高鳴りを押さえつつ、アークは武者
震いする手で握ったライターで、口に咥えた煙草に火をつけた。

「アインハルトさん絶対勝ってねーーーー！！！！！」

「ジークファイトーーーー！！！！！」

「勝ったら私の家でお祝いするわよーーーー！！！！！」

アインハルト側はオトヤやヴィヴィオ達が、ジーク側はヤマトやヴィクター達が応援してくれている。

2人はお互いに歩み寄り握手をすると、その手をギュッと強く握りしめあった。

「一昨年のインターミドル世界大会チャンピオン……ジークリンデ・エレミアさん……正々堂々、お願いします……！」

「良い目やね。油断しとつたらこっちがやられそう……でも、勝つのはウチやからね！」

「私も負けません！霸王流の為に……私の為に……何より、応援してくれている友達の為に……！」

「うん！いい試合にしよう！」

握手をし終えて距離を取る2人……司会の手が上がる。

試合開始まであと10秒……1秒1秒が異常に長く感じる……。

汗が止まらない……武者震いが止まらない……顔がにやけるのが抑えられない……。

そして、試合開始のゴングが今……

カーーーーン！

「今日だ！！今日でまた新たなレジエンドルガが誕生する！！喜べ人間！！お前たちは偉大なる存在…レジエンドルガ誕生の肥料となるんだ！！！！ハハハハハハハハ！！！！！！」

「…レジエンドルガ！！！！！！」

「アーク様、奴ら仮面ライダーです。」

「ああ？知らねーよ今更あんな連中…。それより今はコイツが進化する瞬間を見ようぜ…スパイダー？」

「畏まりました。」

アインハルト達の夢の舞台を粉々に砕きながら、羽ばたく巨大な翼。その羽ばたきは瓦礫と共に、少女達の夢をも無残に消し去っていく。これぞ…アークが育て上げた最強のネオファンガイアにして、『新たなレジエンドルガとなる可能性を持った者』
かつてダークキバが戦い、その結果を敗北で終わらせたバードネオの進化形態…。

レベル3
幻獣ネオファンガイア… 『フェニックスネオ』、降臨。

Re/birth・XVI お祭り（後書き）

アインハルト「うわー……びっくりしましたよ前書き……。」
ヴィヴィオ「ちなみにちゃんと相談室ですよここは！」
アंक「相談者はコイツだ！！」

ゼロ「俺はウルトラマンゼロ。よろしく。」

アंक「キュアノアさんとこのゼロだ。」

ゼロ「俺の相談なんだけど……俺の親父のウルトラセブンが……必要以上に過保護すぎる……orz」

アインハルト「お父様に愛されているんですよ、素敵じゃないですか！」

ヴィヴィオ「そうだよ！私も時々パパの事、ちよつとうつつしいなあって思う時もあるけど、それでも大事な家族だもん！」

アंक「フンツ……映司と似たようなもんか……。まあ、なんだかんだでお前の事心配してるんだ。少しくらい甘えてやってもいいんじゃないか？いくつになっても、親のとつちや子供は子供だ。」
ゼロ「そう……だな。うん、わかったありがとう！」

三十路「……」とここでそのセブンというのは一体おいくつなんでしょう？」「」

「プット！テイラーノ！ヒツサツ！！」

「セルバースト」

Re/birth・XVII ヴァンパイアレジエンドルガ(前書き)

アインハルト「今日はお悩み相談室はお休みです。」

ヴィヴィオ「その代り、『MOVIE大戦MEGAMAX』の宣伝
やります!」

アंक「それも欲望だ!!!」

『ターンアップ エボリューションK』

「……はあああああああああ！！！！！！！！！！」

アークの刀を、3人の仮面ライダーが弾いた。

それはかつての英雄…キバ、ブレイド、響鬼の3人。

彼等は仮面の下で怒りに顔をゆがめ、それぞれの武器を構えた。

「貴様ら……何者だ！！！！」

「よくもミウラ達の夢を……許せません！！！！」

「行こう！！ワタル、アスム！！！！」

『ウエイクアップ！！』

『スピード10 J Q K A ロイヤルストレートフラッシュ』

「ファイナルザンバット斬ッ！！！！」

「うえええええええええええい！！！！」

「音撃刃！！！！鬼神…覚声ッ！！！！」

キバ エンペラーフォームの『ファイナルザンバット斬』、ブレイド キングフォームの『ロイヤルストレートフラッシュ』、装甲響鬼の『鬼神覚声』が同時にアークへと炸裂。

しかし彼はフツと笑うと、まずキバの攻撃を横に避けてかわす。

続いて斬りこんでくるブレイドを刀で受け流して軌道をずらすと、

最後に響鬼の攻撃をフェニックスネオを盾にして防いだ。

大きすぎる翼の前では響鬼の攻撃はまるで意味をなさず、3人は茫然とした表情で立ち尽くす。

その隙にフェニックスネオが翼を動かして3人を突き飛ばし、キバ達は地面を何度も転がって変身解除。

体中に酷いダメージが響き、まともに立つ事すらできなかった。

「あなたあつ……！」

「母さん……！父さん達を連れて逃げて……！」

「そんな……オトヤはどうするの……！」

「いいから……！！ヴィヴィオ、母さん連れて逃げて……！」

「……………」

「ヴィヴィオ……！」

成す術なく倒された父親の代わりに戦おうとするオトヤ。

まずは母親を逃がそうと、近くにいる妹に声を上げた。

だが、ヴィヴィオは全く反応せず……ただ茫然と崩れたアリーナを眺めるだけ。

「インターミドルが……………」

『クオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ……！！！！！！！！！！』

「どうした帝王……かかってこないのか？」

「私達の……夢の舞台が……………」

力無くその場に膝をつき、涙を流すヴィヴィオ。

その彼女に、目を光らせたのはスパイダーネオだった。

彼はサヤカの持つ『ポイズン』のカードにより生み出されたネオフアンガイアであり、彼もまたフェニックスネオの様に進化する事を望んでいる。

そんなスパイダーネオにとって、『ゆりかごの聖王』たるヴィヴィオはまさに郭公の獲物。
毒の槍を構え……ヴィヴィオに向かって走り始めた。

『ドライブ・シュート』

『バトルモード トランスフォーム』

「うおりゃあああああ……!!」
「てえええええええい……!!」

だが、スパイダーネオの攻撃がヴィヴィオに届く事は無かった。

その前に、スパイダーネオを撃ち落としたのは…仮面ライダーバスターとその弟の加藤シン。

バスターはすでに最強形態であるバトルモードへとモードチェンジしており、シンはヴィヴィオの手を引いてなのはごと下がらせる。

「オトヤ!! ヴィヴィオとお前のお袋さんは任せる……!!」
「ああ、頼むシン……!! 行くぞ、ダキバット……!!」

『ガブリ……!!』

「登……!!」

オトヤが腰にダークキバットベルトを取り付けると同時に、ハジメも駆けつけてきてくれた。

彼もすでにフェイトやはやて達を退避させており、腰にはカリスラウザーを装備している。

オトヤとハジメはお互いに頷き合つと、カードとダキバットを構え、叫んだ。

「変身ッ！！」

『絶滅せよ！！』

『チエンジ』

2人はそれぞれの波紋を身に纏い、仮面ライダーダークキバとカリスへ変身。

カリスがバスターの隣に並び、スパイダーネオと戦い始めると、ダークキバは1人アークの下へと走りだし、ザンバットソードを彼の刀へとぶつけた。

ワタルのキバ以上のパワーを秘めた一撃にアークは一瞬顔をゆがめると、一歩下がって刀を撫でる。

「レジェンドルガ……貴様ら……何てことを……！！」

「帝王か……。何をそんなに怒る？別に、お前に損があるわけじゃ無いだろ？」

「ある！！ヴィヴィオの夢を……アインの夢を……よくも……！！」
そう言うと、ダークキバは一枚のカードを取り出した。

馬の様な絵が刻まれているカード……『ソニック』のカード。

彼が初めて遭遇したネオファンガイア『ウマネオ』から手に入れたカードであり、『風』タイプのカードだ。

それをネオロットへと挿入すると、同時に腰に掛けている青いフェッスルをネオロットに装着。

ダキバットの叫びと共に、ダークキバは新たなる変身を遂げた。

『ガルル・ソニック!!』

「うおおおおおおおおお!!!!!!」

獣の様な叫びをあげるダークキバ。

その胸部は獣の様な毛皮で覆われ、身体の左側には野獣の爪の様に刺々しく変わる。

複眼が青に代わりダキバルルセイバーを逆手に構えると、ダークキバは自身の形態の中で『地上最速』の姿へ。

『仮面ライダーダークキバ ソニックタイプ』

蒼き野獣の力を秘めた、ダークキバの超加速形態だ。

獣のように鋭い右手の爪でアークの刀を薙ぎ払うと、目にもとまらぬ速さでアークの刀を真つ二つに。

それにアークが驚いている隙に、ダークキバは拳に力をため、アークの顔面を思いっきり殴り飛ばした。

顔から赤い血液をまき散らし、地面を転がるアーク。

あまりにもあつけないその一撃によりダークキバは疲労し、元のキバタイプへと戻って膝をついた。

「はぁ……………はぁ……………や、やったか……………?」

「オトヤ君!!」

「アイン……………」

彼を心配し、武装形態のままのアインハルトが駆けつけてくれた。彼女の目元は赤く腫れ上がっており、恐らく、先ほどまで泣いていたのだという事が良くわかる。

ダークキバは彼女に起こしてもらうと、ザンバットソードを杖代わりにして何とか立ち上がった。

「大丈夫ですか……………?」

「う、うん……何とか……アイン、怪我は？」
「私は大丈夫です……。でも……会場が……。」

「よくもやってくれたな……キバあ……？」

「……！」

驚いて前を向くダークキバ。

すると、そこではアークが血まみれなのにもかかわらずにムクリと起きあがり、ゴキゴキと首を鳴らした。

はああと息を吐くと、折れた刀を捨て、上着を脱ぎ捨てる。

体中からライフエナジーを解き放つと、アークはその姿を……人ならざる者へと変えていった。

「あれは……！？」

ゴキゴキッ……！

「許さん……。」

メキヨッ……！

「よくも邪魔してくれたな……?」

ゴリツ！バキメキゴキツ！！

「お前は俺がこの手で……潰す!!」

そうして、変化が完了すると……そこには、今までとは一味違う、全く新しい怪人が姿を現した。

頭部の二本の角に赤い瞳、赤黒い体色に筋骨隆々の四肢。

足は偏平足で4本の指はそれぞれ自由自在に動き、マントにも翼にも見える鰭を右と左で別々に動かす。

極めつけに赤い牙をギラリと光らせ、その怪人は両腕から鋭い鉤爪を出現させた。

「お前は……!!?」

「これが『レジエンドルガ』の真の姿……俺の名はアーク、『ヴァンパイアレジェンドルガ』のアークだあああああ!!!!」

アーク……ヴァンパイアレジェンドルガは両腕の爪でダークキバとアインハルトへと襲い掛かって来た。

とっさにダークキバはアインハルトを突き飛ばし、その攻撃を自分だけで受ける。

何とかその場でアークの動きを止めようにも、人間態の時以上の身体能力を持ったアークに対し、タイプの疲労でまともに戦えないダ

ークキバ。

アークの爪はダークキバの鎧を何度も引き裂き、地面に叩きつけては起こしあげて再び引き裂く。

もはやまともにも立つ事すら出来なくなったダークキバの左胸に爪を突き立て、アークはダークキバの頭を踏みつけた。

「あ……………ああ……………ガハツ……………！」

「ふ……………ふ……………後悔しろよキバ……………？この俺を……………レジェンドルガ族を怒らせた事をなあ……………！！！」

「そこまでよ、アーク。」

次の瞬間、アークの首に冷たい物が触れた。

振り返ったその先には、ミイラのような姿をした女性の怪人がアークの首筋に刀を突き立てており、彼女は迷う事無く刃を立てる。

「サヤカ……………何故邪魔をする！？」

「子供相手に何をムキになっているの？もう少し冷静になりなさい。私達の目的はレジェンドルガ繁栄、人間達を苦しめる事では無いわ。」

「同じ事だ！！人間達のライフエナジーが無ければ……………ネオファンガイアは育たない！！！」

「だから少し冷静になりなさい。このやり方は、礼儀を重んじる我ら誇り高いレジェンドルガ族の、掟と秩序に背く事になるわ。」

「知った事か！！レジェンドルガの掟など……………もはやあって無いよ

うなものだろう!？」

「そうね……確かにそうだわ。でもね、私はそれでも掟を破る事は許さない。アナタも男なら、もつと堂々と戦ったらどうなの?」

「サヤカ貴様……第一、俺がこの作戦を立てた時はお前も賛同したはずだ!！」

「私はキバ達の排除には協力したけど、ここまで野蛮な作戦に協力した覚えは無いわ。」

「サヤカあ……!!お前こそ、今でもネオを作り続けているだろう!？」

「あら?何あなた知らなかったの?私の作ったネオ……殺しているのは私達の邪魔をする者だけ。一般人は誰一人として殺して無いわ。その証拠に、私の作ったネオで短期間でレベル2に到達できたのはほんのわずか。アナタが連れて回したあのスパイダーネオぐらいかしらね?」

「そういえば……。だ、だが……」

「諦めなさい坊や。気に喰わないけど、私じゃあのフェニックスネオを止める事は出来ない。今回はあなたの作戦を優先するけど……次同じようなマネをしたら、許さないわよ?」

サヤカと呼ばれた怪人……『メデューサレジェンドルガ』とアークこと『ヴァンパイアレジェンドルガ』は元人間態に戻ると、刀をしまつてダークキバ達に背を向けた。

サヤカの言葉にアークは完全に固まっております、悔しそうな顔で立ち去っていく。

胸を押さえながら立ち上がるダークキバ……それにアインハルトが駆け寄り、彼の体を支えた。

自分も心がどうしようも無いぐらいボロボロなのにもかかわらず……

…。

「はあ……はあ……倒さなきゃ……アイツを……！！」
「オトヤ君……。」

上空を見上げるダークキバ。

そこにはいまだに暴れ回る、巨大な不死鳥の姿。

何としても止める……その決意を胸に、ダークキバはアインハルトを自分から離すとボロボロな体を無理やり動かし、ザンバットソードを再び強く握りしめた。

Rebirth・XVII ヴァンパイアレジェンドルガ（後書き）

アインハルト「今回の映画の目玉は……、」

- ・アंक
- ・なでしこ
- ・ストロングァー

アインハルト「の、3つですよね！」

ライダーマン「いや……最後はどうだろう……？」

フリリップ「でも、アंकは間違いなく見どころだったよね。」

友子「……面白い……。」

ヴィヴィオ（なんでこの3人なんだろう……？）

R e / b i r t h ・ X V I I I 紅蓮の帝王（前書き）

ストロンガー「ストロンガーお悩み相談室だ！！！」

X「今日の相談者は……、」

ライダーマン「この人！！！」

2号「おい、なんか違くないか！？」

「はあああ!!!」

ダークキバがアークとの死闘を繰り広げているその頃……バスターとカリスの2人はスパイダーネオと対峙していた。

すでに会場にいた人たちはほぼ全員逃げ出しており、この場にいるのは後はジーク、ヴィクター、ルーテシアだけ。

なのはとヴィヴィオを避難させたシンも救援に駆けつけ、彼が3人を守りながらカリスとバスターでスパイダーネオを攻める……という戦法だ。

だがスパイダーネオの格闘センスはバスター以上であり、カードを使って巧みに戦うカリスの攻撃をもるともせず受け流し、バスターとの拳対決を繰り広げる。

どうやら相当出来る……バスターもかなりの苦戦を強いられていた。何しろこちらはカリスと合わせても腕が4本、しかし向こうは腕が6本……。

手数が違う。

「つ……つええ……!」

『どうしたバスター? もう終わりか?』

「そんなわけ……あるか!!!」
再び走り出すバスター。

拳を固め、スパイダーネオを殴ろうとするが、スパイダーネオは口から糸を吐き出して上にある建物まで一気に上っていく。

そこからまた更に糸を吐き、バスターを雁字搦めに絡みとった。

「うおつ、やべえ!?!」

「ヤマトさん!!!」

何とかそれを助けようと、駆け寄るカリスだが…その彼も同じ様に

スパイダーネオから放たれた糸を喰らってしまい、身動きが取れず。シンが2人の意図を切るためにバスタードライバーで撃つが、糸そのものがかかり頑丈であり、中々切れない。

逃れようとしてジタバタと暴れるバスター…その拍子に、彼のベルトを覆っていた糸が解けた。

仮面の下でにやりと笑うと、バスターは少し離れた位置にいる弟に向けて叫んだ。

「シン！！！！いまだ、俺のベルトを外せ！！！！」

「は？な、何言ってるんだ兄貴！？」

「俺は動けない！！代わりに戦ってくれ！！！！」

一瞬、ドキツとした。

確かにこの状況を変えるには、其れしか無い。

誰かが戦わなければ全員やられる。

しかし自分にできるのか…？

オトヤやハジメ達と共に戦う…それが彼らの親友である加藤シンの一番の望み。

仮面ライダーバスターの力があれば、彼のその願いが叶う。

確かに何度もヤマトの戦いを見ては、変身したいと思っていた。

だがこんな状況で……………、

「……………いや、まだ手はある！！ルー！！ジーク姉！！あと、ヴィクターさん、3人である蜘蛛野郎の動き止めてくれ！！！！」

「無茶しすぎだぜ、シン。」

「へっ、あんぐらいしねえと……到底アンタにや追いつけねえからな。」

「さすが俺の弟だ！！よし、ハジメ君行くぞ！！！！」

「おおお！！！！」

「はあ……………はあ……………！！！！」

「ダメですオトヤ君！！そんな体じゃ無理です！！！！」

「でも……………アイツを止めないと……………！！ぐう……………ッ！！！！」

上空で暴れ回るフェニックスネオを眺めながら、ダークキバはその場に膝をついた。

それにアインハルトが駆け寄るが、彼は『大丈夫』と彼女を自分から引き離し、ザンバットソードを杖代わりに立ち上がる。

タイプの使用にアークとの戦いのキズ……………とてもまともに戦えるようには見えない。

それでもやるしかない……………このまま放っておけば、必ず奴は街へ行く。あんな巨大なネオファンガイアが街に解き放たれたら最後……………もはや逃げ場など何処にも無い。

絶対にここで倒さなければならぬ。

立ち上がる事すら困難なダークキバは、アインハルトの制止も聞かずにジリジリと少しずつ前へと進み、フェッスルを一つ構えた。

「まさかまたタイプを……………！！？」

「ソニックタイプなら……………脚力もかなり上がってるはず……………。きつと、届く……………！！！！」

「無茶です！！そんな体じゃ死んでしまいます！！！！」

「無茶でも……………やるしかないんだ！！ダキバット！！！！」

『ガールル・ソニック!!』

再びダークキバはソニックタイプへと変身を遂げた。

彼を止めようとダークキバの腕を掴むインハルトだが、彼はそれを優しくどけると、脚に力を込めて思いっきり飛び上がった。

空中でダキバルセイバーを構えると、ウェイクアップフェッスルをネオロットへと挿入し、フェニックスネオへと突撃。

『ウェイクアップ!ソニック!!』

「うらあああああああああ!!!!!!」

全身の力を注いだ『ハウリングスラッシュ』だったが、フェニックスネオはそんなものをもろともせず、翼でダークキバを地面に叩き落とした。

地面に激突したダークキバはすぐさま新たなフェッスルとカードをネオロットに挿入し、再び起き上がる。

『バツシャー・スプラッシュ!!』

今度はスプラッシュタイプ。

ダキバツシャーマグナムの出力ならばフェニックスネオまで届くはずだ。

なるべく近距離から撃つためにダークキバは瓦礫の山を鳶って少しずつ上に上がり、一番高いところから飛び上がって銃口をフェニックスネオにセット。

引き金を弾いた。

『ウェイクアップ!スプラッシュ!!』

「今度はこいつだあああああああ!!!!!!」

『アクアフィールド』がダークキバの周りを囲み、そこから無数の水の銃弾がフェニックスネオへと炸裂。これはかなり効いている様で、暴れていたフェニックスネオの動きが一瞬止まった。

その隙にダークキバはフェニックスネオの上によじ登り、また新たにタイプを変える。

『ドツガ・プラズマ!!』

今度変身したのは重量系パワータイプの『プラズマタイプ』…ダークキバのもつとも得意とする形態だ。

スプラッシュタイプのお蔭で大人しくなったフェニックスネオを倒す絶好のチャンス…彼はダキバツガハンマーを握る手にさらに力を込め、力いっぱいそれを振り下ろした。

強力なプラズマがハンマーを伝ってフェニックスネオへと流れ込み、紫色の電撃が空を赤く染めていく。

『ウェイクアツプ! プラズマ!!』

「ぐ……おおおおおおおおお!!!」

『クオオオオオオオオオオオオオ!!!』
混じり合う紫電と紅焰……パワーの差はほんのわずかだった。

そう……ほんのわずかだけ……ダークキバの方が押されていたのだ……。

やがてフェニックスネオはダークキバを振りほどき、今出せる全力の力で翼を振り、それでダークキバを地面まで叩き落とした。

あまりの痛みに変身が解けてしまい、オトヤは口から大量の血を吐きながら胸を押さえる。

酷い出血で、オトヤがファンガイアでなければ恐らく即死だっただろう。

それでも危険な状態には変わらず、このままでは確実に死に至る…。

「オトヤ君！！しっかりしてください！！死なないで！！！」

「グッ……ダメだ……やつめ強すぎる……！！今のキバでは勝てない……！！！」

「ダキバ……ガハッ！！もう一度……変身だ……！！！」

ベルトは消滅していないため、このままダキバットをベルトに嵌めれば問題なく変身できるだろう。

だが、変身できるからと言って戦えるとは限らない……。

もう一度立ち向かおうとしているオトヤの腕を必死で引っ張るアインハルトだが……、

バタンツ……。

「！！ オトヤ……！！」

「オトヤ君！？そんな……死んじゃダメです！！起きてください！！」

彼女が引っ張った拍子に、オトヤが膝をついて倒れてしまった。

タイプの疲労、何度も喰らった攻撃……倒れない方がおかしい。

それでも彼は倒れながらもダキバットに手を伸ばし、その手で相棒を掴んだ。

一方でスパイダーネオと交戦中のバスターとカリスだが……やはり、戦況は変わらず。

糸の攻撃は見切れるようにはなったが、他の攻撃が追いつかない。

特にバスターはバトルモードに変身している為に遠距離攻撃が一切できず、スパイダーネオの格闘スキルに翻弄されている。

さすがはレベル2のネオファンガイア……以前のナイトネオの時は、敵の攻撃が自分にも反応できる数だったが、今回はさすがに追いつかない。

バスターのパンチがスパイダーネオの顔面をとらえると、スパイダーネオは彼の腕を糸で感じがらめに固め、そして……、

『ヒヒッ!』

「なっ……!?!」

ガブっ……!!

バスターの首元に噛みついた。

「ぐあああああああ!!!!」

体中に回る毒気に、体の中から焼き尽くされる感覚に陥るバスター。そのせいで変身が解除され、ヤマトは地面を転がりながら苦しみまわる。

「ぐうう……がああ……!!」

「あ、兄貴!!ネオ……この野郎ツ!!!!」

「貴様……よくもヤマトさんを!!!!」

バスタードライバーをスパイダーネオに押し当てるシンだが、首根っこをつかまれてすぐに放り投げられてしまう。

その彼をジークがナイスキャッチ。

彼女の後ろからバリアジャケット姿のルーテシアとヴィクターが現れ、2人でスパイダーネオに電撃魔法を放った。

それも簡単にかき消されてしまい、今度は後ろからカリスがスパイダーネオを攻撃。

これはまともに通り、スパイダーネオの腹部からカリスアローの先

端が顔を見せた。

『ぐ……カリス……!!』

「貴様らだけは……絶対に許さん……!!!!」

再びダークキバへと変身したオトヤ。

しかし、壁に手をついてやっと立てるか立てないかの状態であり、それでも彼は行こうとした。

アインハルトが彼の手を必死に引っ張るが、その度に倒れては立ち上がる……。

どうしてそこまでするのだろうか……いや、そんな事はわかっていない。

このどうしようもない馬鹿の事は、彼女が一番良くわかっている。

「もう……やめてください……貴方が死んでしまいます……!!」

「アイツらは……アインの……ヴィヴィオの……皆の夢を壊した……。これからもきつと、人の夢を壊し続ける……止める……絶対ここで!!」

「でも私は!!……オトヤ君やダキバットさんに死んでほしくないんです……!!もう、やめてください!!」

「……ごめん……無理……」

そう言うと、ダークキバはザンバットソードを地面に突き立てた。

父から譲り受けたファンガイア族最強の魔剣『ザンバットソード』

……どんな時でも、ダークキバのピンチを救ってくれたダキバットと同じ彼の相棒。

この剣に斬れない物はない……そう信じている。

この剣を握れるうちは絶対に諦めたくない……何があっても、挫けないのだ。

傍から見れば単なるやせ我慢かもしれない……ただの石頭かもしれない。

でもこれこそが『登オトヤ／仮面ライダーダークキバ』なのだ。

「昔からそんな感じだよ、オト兄ってさ。」

「お前……。」

「お待たせ、オト兄！アインハルトさん！」

その時、ダークキバの肩を誰かが支えた。

それは大人モードのヴィヴィオ……なのは達と一緒に逃げていたはずの彼女が、兄の危機に戻ってきてくれたのだ。それだけじゃない。

「オトヤさん頑張つて!!！」

「私達の夢の仇、討つて下さい!!！」

「オトヤ!!お前負けたら承知しねーぞ!!！」

リオ、コロナ、ノーヴェと言った彼の友人達も駆けつけてくれた。た。

しかも、彼女達だけでは無く……インターミドルに参加していた人たち全員が後ろで応援してくれている。

皆、自分達の夢を壊したフェニックスネオが憎い……だがそれ以上

に、自分達を守るために戦ってくれている仮面ライダーを応援したい。

その一心で、恐怖心を振り切りここまで駆けつけてくれた。

「オト兄、もう1人じゃない……私達がついてる!!」

「ヴィヴィオ……うん、ありがとう……。アイン、君も力……貸してくれるかな……?」

「で、でもそれじゃあオトヤ君が!!」

「大丈夫……僕は死なない。絶対に戻る……!!」

そう言つてダークキバがアインハルトに見せたのは、いつかの『セイクリッド』のカード。

それをネオロットに挿入すると、いつもの様にカード装填時の電子音声が発せられる。

『セイクリッド』

すると、ネオロットが青白く光りだした。

そこヴィヴィオが手を置くと、光は更に増し……ザンバットソードも光りだす。

それを見たアインハルトは戸惑うが、ダークキバが仮面の下で優しく微笑むと、彼女も恐る恐るネオロットの上に手を置いた。

光は更に増し、そのまま光る左手で光るザンバットソードを握る。

それと同時に、ネオロット……いや、ダークキバはインターミドル選手たちも魔力も少しずつ集め始めた。

ライダーキックを放つ要領でフェニックスネオの所まで飛び上がると、ダークキバはザンバットソードをフェニックスネオへと突き立てる。

『ザンバット・フェニックス!!』

「うおおおおおおお!!!!」

まず、身体は刺々しい部分が滑らかに変化し、『翼』をイメージしたようにシャープに。

ワインレッドとメタリックブラックのボディは、色が反転してより『赤』を強調。

最も特徴的だった頭部の蝙蝠の羽は炎と共に形状を『鳳凰の翼』へと変え、背中のマントは6枚の翼が合わさった物へと変化。

これこそが、宿敵『フェニックスネオ』の力を手に入れたダークキバの最強形態。

紅蓮の帝王『仮面ライダーダークキバ フェニックスタイプ』だ。

マントを分離して赤い翼へと変形させると、ダークキバはインハルトとヴィヴィオにサムズアップし、ソニックタイプすら超えるほどのスピードでカリス達の下へ。

ザンバットソードを2本に分離すると、たった5秒でカリス達の下へと到着。

両腕を振り上げ、スパイダーネオの体を下から斬り上げた。

『ぐッ……!!?まさか…キバ!?!』

「の、登なのか!?!」

「ハジメ!!大丈夫か!?!」

空に浮かんだまま、カリスに呼びかけるダークキバ。

カリスは軽くうなずくと、カリスアローをスパイダーネオへと向け

残されたネオカードすらも焼き尽くし、まさに跡形も残らずに消え去った。

撃破を確認すると、ダークキバはフェニックスタイプの変身が解けて続けて変身そのものが解除。

とうとう力尽き、その場に盛大に倒れ込んだ。

カリスは急いで変身を解いて倒れたオトヤを抱き上げる。

意識はまだ飛んでおらず、オトヤは震える手でハジメに向かって親指を立てて見せた。

「登……お前、無茶しやがって……。」

「へへへ……やったぜハジメ……。」

「オト兄！！ハジメさん！！」

「オトヤ君！！加藤さんハジメさん！！」

子供の姿に戻ったヴィヴィオとインハルトが駆け寄ってきた。

それに合わせて、首元を押さえながらシンに肩を貸してもらっているヤマトも合流。

「やったな2人とも！！俺達の勝利だ！！」

「兄貴やられただろ！？」

「ハジメさん、怪我無い？」

「うん、大丈夫だよヴィヴィオちゃん。」

「オトヤ君無茶しすぎです！！今回は良かったものの……次あんな無茶したら本気で怒りますよ！？」

「う……うめんなさい……。」

全員でオトヤの頭を撫でたり肩を叩いたりし、しばし勝利の余韻に浸っていた。

ただその中でオトヤが不安に思う事が一つ。

インハルトとヴィヴィオ……彼女達はインターミドルが無くなっ

てしまった事でどうなるのだろうか……？
崩れ去ったアリーナの下で、オトヤはそんな不安を抱えていた。

3日後……、彼の不安はいい意味で裏切られた。

何しろ、あれから3日……休日明けで彼らが学校に出た時、

「おはようございます！今日も一日、頑張りましょうね」

「あー……うん。」

「……………」

「どうしたんですかオトヤ君ハジメさん？」

「いや……ストラトス、お前、どうも無いのか？インターミドルが
あんな事になって……………」

「僕らそれ心配で、3日間ずっとシンも含めて3人だけで父さん達
に超言い訳考えてただけ……………」

「クヨクヨしてても起きてしまった物は仕方ありませんからね、だ
つたらもう1年分余計に特訓できると考えればちよつとだけお得で
す。」

「「いや、まあ……………うん、ごめんもついいや。」」

いつもよりもテンションの高いインハルトを見て、2人とも体の
芯から脱力してしまった。

笑顔で黒板消し片手に鼻歌を歌いながら日直をこなす彼女の姿を見
てかつてのぼつちだったインハルトを思い出せる人物はまずいな
いだろう。

しかしそんな中でも時折見せる寂しげな表情で、彼女が無理してい
るんだとわかる。

それでもこうして前を向いて明日を生きようと頑張っている…それでいい。

きっと今日からまた、楽しい毎日が待っているに違いないのだから……。

「あ、オトヤ君。前に使った赤いキバのカード……あれ、危なそうなので私が預かりますから。」

「ええ！？そう言えばあの後無いと思った！！」

「当然ですよ、あなたに渡して毎回使われたら見ているこっちが心配しますから！」

「なんと……事でしょう……。」

Re/birth・XVIIII 紅蓮の帝王（後書き）

ストロンガー「今日はハルルさんとの仮面ライダー2号だ。」

ライダーマン「口元にはちゃんとマスクがある仮面ライダーだな！」

X「今日は一体どういう悩みだ？」

2号「ああ……X、お前に関係ある悩みなんだが……、」

X「ふむ？」

2号「Xのモチーフ、もうヤゴでいいと思う。」

ストロンガー「同意。」

ライダーマン「口寒い。」

X「ちょっと待てええええ！？それ悩み！？それお前の悩み！？」

2号「だって……もうヤゴで良いよ。」

X「ヤゴ違ああうー！ー！」

Re/birth・XIX ラブレター（前書き）

突然ですが、『アインハルトとヴィヴィオwithアंकのお悩み相談室』は諸事情により一時中断させていただきました。
楽しみにされていた方、申し訳ございませんでした。

Re/birth・XIX ラブレター

「うおおおおおおおおおおおおお！！！！！！！！」
「く、くるなああああああ！！！！！！」

インターミドルが終わってからおよそ2週間後……オトヤとハジメ、アインハルトの3人は学校から少し離れた場所でネオと交戦していた。

バスターは間に合わずに、今回はカリスとのタッグ。

早朝から出現したレベル1のネオファンガイア……『ナマコネオ』を新必殺技『絶滅・ザンバツ斬』で一刀両断すると……ダークキバは血を拭うように剣を振るつた。

その瞬間ナマコネオは大きな爆発を巻き起こし、その場に『ナマモノ』のネオカードを落として消滅。

さすがにこんなカード要らないので適当にポケットのねじ込むと、ダークキバとカリスは変身を解除し、少し離れた位置から応援をしていたアインハルトが駆け寄っていく。

「お疲れ様でしたお2人とも、怪我とかありませんか？」

「うん、大丈夫。ありがと。」

「ストラトス……お前、危ないから先に学校行っていればいいだろう？もうレベル1なんて俺達だけで十分倒せるんだ。」

「え……でも、心配ですし……。」

「うーん……でも、確かに危ないよね。アイン、もう霸王も帝王も関係無いんだしさ……無理に僕らに付き合わなくてもいいんだよ？怪我でもしたらそれこそ選手生命にかかわるし……。」

「うう……今日2人ともいつになく厳しいですね……。」

「前々から言おうとは思ってた。お前もう別に訓練も戦闘もしなくていいんだから、彼氏でも作ってどっかで遊んでればいいだろ？」

「そ…そんな言い方あんまりです……。」

「お、おいハジメ……。」

「結構気が散るんだ。気に障ったのなら謝る、悪い。」

実は彼らは現在、学校へ行っている真つ最中。

通学路で偶然ネオを見つけたのでここまで追い詰めて、撃破した。

ハジメの言葉に結構シヨックを受けるアインハルトだったが、そこはダキバットとテイオが彼女を宥め、オトヤは素直に『怪我したらいけないから俺達が戦う』と言えない不器用な親友にはあとため息をついた。

学校の校門をくぐると、彼等より遅れてシンが駆け込んできた。

どうやらネオサーチャーに反応があった場所に急いで駆けつけたがすでに後の祭り、そのせいで遅れてしまったらしい。

ヤマトも一緒に来ようとしたそうだが、何故か最近彼の体調がすぐれず……シン1人で向かっていたようだ。

「あの事件の後からだよ……なんか、体調悪いつて言ってよー。」

「そうか……心配だな。」

「でもヤマトさんならきつと大丈夫だよシン！」

「かなあ……？」

下駄箱で靴を履きかえる3馬鹿。

それを見てクスリと笑うと、アインハルトも自分の下駄箱を開けて靴を履きかえようとした。

すると……、

「あれ？何だろコレ……？」

「……ん？」「」

『どうしたのだ？』

『にやつ？』

突然アインハルトが首を傾げた。

見てみると、彼女の下駄箱の中に一通の手紙が。

何だろうと思っっているとシンがいきなりそれを取り上げ、封を開けて読み始めた。

すると彼は何故か膠着し、それを今度はハジメも読むと……こつちは声を押し殺して笑っていた。

「ま……マジかよ……。」

「ぷっ……く、ククク……す、ストラ……ブハツハハ……！！」

「な、何ですか2人とも！？それ私宛なんですよね！？」

今度はシンも笑い始め、2人して盛大に声を上げて笑った。

それに驚くオトヤと、手紙を奪い返そうと奮闘するアインハルト。

何とかハジメの手から手紙をもぎ取ると、彼女は頬を膨らませて1人で教室へと向かって行った。

彼女を追いかける為にオトヤはハジメとシンをとりあえず一発ずつ殴り、2人を黙らせてから教室へ。

自分の席に鞆を置くと、一足早く席について手紙を読んでいるアインハルトのところへと行き、彼女の手紙を覗き込み始めた。

「アイン、その手紙なんて書いてるの？」

「アイン？」

「ハッ！！……あ、ごめんなさい……あの……これ……。」

「？」

恐る恐るアインハルトが手紙をオトヤに差し出してきた。

いだろ、放課後そこに。」

「うう……………緊張します……………」

『私ついて行こうか？』

「……行かんで良い。」

男子3人でダキバットの鼻の辺りに拳を放つと、ダキバットはふらふらと地面に墜落し、その後は起きるまでオトヤのポケットの中にねじ込まれた。

放課後になり、指定された場所へと向かうアインハルトとその跡をつける3馬鹿トリオ+蝙蝠もどき。

この学園の図書館棟は普通の学校の校舎並に大きいので、その裏とこの学園の図書館棟は普通の学校の校舎並に大きいので、その裏と

そして、そこで1人で立ち尽くしている男子生徒が1人。

彼の事は、オトヤ達も知っている。

確か隣のクラスで、毎回テストで学年1位の優等生……………名前は確か隈森だ。

母親が地球人で、父親がファンガイアのハーフファンガイア……………女にかなりもてる。

相手がそんな男だと知ったオトヤはまるで石になったかのように塊り、とりあえずシンに後頭部を殴られた。

恐る恐るアインハルトが顔をだし、少しずつ隈森に近寄っていく。

「あ……………あの……………」

「あ、こ、こんにちわ！アインハルトさん……………ですよね？俺は隈森政人って言います。」

「あ、はい……………知ってます。隣のクラスの方でしたよね……………？」

「うん……えつと…実は俺……、」

隈森が言いかけたところで、これ以上この場においてはオトヤの精神がきつとエクシードチャージの苦しむゾンスマツシユになってしまうと判断し、シンとハジメが彼を引きずって強制退却。

まさにクロックアップ並みのスピードで彼を教室まで連れて行くと、ハジメが思いつきりドアを閉め、シンはオトヤを正気に戻す為に頭のとっぺんをバスタードライバーで殴った。

「いつでえ!？」

「おーい、目え覚めたかー？」

「……………」

「安心しろ登、ストラトスも馬鹿じゃない。見ず知らずの奴の告白なんか受けるわけないだろ?というか……………受けたらアイツはかなりの馬鹿だ。」

「そうそう、気楽に構えとけて!どうせ後10分もすりゃ戻ってくるって。それよりこの後4人でどっか行こうぜ。久々にゲーセン行こうぜゲーセン!」

「お前ら……………」

ガララララッ!

その時、教室のドアが開き…アインハルトが姿を現した。

早速ハジメとシンは彼女の下へと行き、先ほどの結果を聞いてみる。どうせ断ったんだろう?とハジメが聞くと……………何故か彼女はすぐに答えず、少しの間黙ったままだった。

「どうした?」

「えつと……………いや…あの……………」

「お前……………まさか受けたのか!？」

「ち、違います！！そんな……すぐに決められるはずないじゃないですか！！」

「断りゃいいだろ断れば！お前、隈森と話した事あんのかよ？」

「な、無いですけど……。」

「付き合う理由が見当たらん。お前の自由が無くなるだけだぞ、隈森には悪いが断っておけ。」

「でも……確かに話した事も無い人ですけど……ちょっとだけ嬉しかったんです……。こんな私でも、好きって言うってくれる人がいて……。その人の気持ちを無駄にするわけにも……。」

『まあ、気持ちはわかるがな。だが、無理に付き合っても損するのはお前自身だ。隈森殿にも失礼だしな。』

シン、ハジメ、ダキバットの毒舌×3を受け、少し肩をすぼめるアインハルト。

何でも、とりあえず一回隈森とデートする事になっているらしく、その後に決めるらしいが……。シユンとする彼女は目線をハジメ達からオトヤに向け、もじもじしながら彼に聞いてみた。

「あの……オトヤ君はどう思いますか……？」

「……いいんじゃない？」

「『』おい！？」

「へ……？」

「いいじゃん、行っておいでよデート。大丈夫、尾行とかしないから。ネオとか出てきても僕らだけ倒せるしね！あ、もし隈森と付き合うんならフェニックスのカードは僕が貰っていいかな？あれな

いとレジエンドルが相手だときついし……………」。

「あ……………」。

「とにかく、楽しんできなよ。ね？」

にっこりと、曇りの無い笑顔でそう言うオトヤ。

それを見たアインハルトは少し胸が苦しくなると……………」。「はい……………」と
覇気の無い返事をして彼らに背を向けた。

今日はこのまま帰るらしく、『失礼しました…………』という声を漏らし、
その場を立ち去っていく。

彼女が帰ってオトヤも帰り支度をしていると……………」シンとハジメがオ
トヤの肩を掴み……………」、

「「お前いつぺん死んで来い。」」

「へ？」

『絶滅せよ!…………!』

何か窓の外から大空へと投げ出された……………」(もちろんファンガイア
なので生きてました)

「ただいま……………」。

「お?おかえりアイン、今日は友達と遊んで帰るんじゃないの
か?」

「気が変わった……夕飯いいからお風呂入って寝る……。」

「宿題やれよ。」

「今日無いもん……。」

自分より早く帰宅していた父親にそっけなく言うと、アインハルトは夕飯も食わずにまっすぐに自室へと向かった。

鞆をベッドの上に放り投げると、そのまま自分もベッドへダイブ。すり寄って来たティオを掴んで自分の腹の上に乗せると、ティオはそこで1匹で猫じゃらしで遊び始めた。

『にゃー』

「ティオ楽しい？」

『にゃっ！』

「楽しいですか……私は……ちょっと微妙です……。」
ティオを撫でながらアインハルトはベッドから起き上がった。

何故だか、胸がもやもやする。

隈森に告白されたからではない……オトヤやハジメ達と話してからだ。

正直、そっちの方が彼女の頭に強く焼き付いており、隈森の告白など頭の片隅にある程度。

そう言えば例のデートは明日……準備しておかなくてはならないが、そんな事する気も起きない。

それぐらいモヤモヤしていた。

「ティオ……私はどうすればいいんでしょう……？」

『にゃー……』

「……あなたに聞いてもわかんないですよね……。もう寝ましょうか？明日は確か10時からですからゆっくり眠れますね。」

『にゃっ。』

「……おやすみなさい、ティオ。」

「もしもしフェイトさん？俺です、ハジメです。今日、ちょっと遅くなります。すいません。」

「連絡ついたか？」

「ああ、さてと……それじゃ加藤、」

「俺もいるよー」

「加藤兄黙れ。」

「……とりあえず一発ずつ殴ってもいい？」「……」

「さつき散々殴られたわ！！もう100発近く殴られたわ！！！！」
アインハルトが自宅で就寝している頃……シンとハジメ、それとヤマトとルーテシアの4人はオトヤの住む寮に来ていた。

先ほどの出来事をルーテシアとヤマトに話し、彼らが来るまでの間にシンとハジメでオトヤをボコボコに。

死なない程度には加減しているので大丈夫。

「お前……あの言い方はねえだろ？ストラトスの事もっと気遣ってやれよ……」

「登、お前………馬鹿っていうか、大馬鹿っていうか………なんとうかもうエクストリーム馬鹿だろ？」

「なんだよエクストリームって！？ってか………なんで僕がここまで散々言われなきゃならないんだよ！？」

「でさ、シン。結局アインハルトちゃんどうするって？」

「あの後、すげー落ち込みながら帰ってた。一応明日行くみてーだぜ？」

「オトヤ、あんた何であんな言い方したの？」

「何でって……そりゃ……」

理由を言いかけた所で、オトヤは4人の顔を見渡した。
しばらく考えると、彼は4人に背を向け、毛布にくるまる。

「やっぱ言わない!!」

「あ、テメー！言えよこの野郎！」

「ストラトスを巻き込みたくないとか、お前の事だからどうせそう言う事だろ？」

「違う!!」

「じゃあ何だ？言ってみろ？」

「言わない!!」

「強情だな……もういい加藤、帰ろう。俺もうコイツの相手したくない。」

「だなあ……。おいオトヤ、とりあえず明日、気分転換にどっか行こうぜ。そんな時に話聞いてやる。」

「聞かんで良い!!さっさと帰れ!!」

玄関先までシン達を押しつけ、放り出すオトヤ。

全員追い出すと、彼はボタンツ！と思いつり扉を閉めて鍵を掛ける。彼ら4人はしばらくオトヤの部屋の玄関を見つめると……時間も遅いので夕飯を食べる為に『ACE』へと向かった。

「本当にこれで彼女の気が引けるんでしょうか？」

「当然だ。」

隈森はとある建物の裏で、銀髪パーマでスーツの男と話していた。
ヴァンパイアレジェンドルガのアークだ。

彼等の隣にはレベル2のネオファンガイア……『グリブリーネオ』
があり、グルルルと物騒な音を立てている。

強靱な肉体を持つその怪人に触れると、隈森はにやにやと笑みを浮かべる。

「あの子……強い人が好きだと思っんです……。こいつがあれば……！」

「頑張れ、お前なら出来る。」

「ありがとうございます！」

ぺこりとアークにお礼をすると、そのまま機嫌で帰っていく隈森。アークはタバコをふうと噴かすと、後ろを振り向いた。

「で………またなんか文句あるのか？サヤカ？」

「当然よ、またそんなくだらない事にネオを使って……。」

「『欲望』……こいつも見方を変えれば立派な負の感情だ。コイツがあればライフエナジーもがっぽり稼げるだろ？ついでに霸王も仕留められるしな。」

「相変わらず汚いやり方……。もしも、これ以上レジェンドルガの名を汚すようなら、その時は覚悟しなさい？」

「おー怖い怖い。」

サヤカはアークにそれだけ警告すると、再び姿を消した。

グリスリーネオの毛並みを撫でながら、アークも来るべき明日に備えて今夜の寢床を探し始めた。

Re / birth . XX 友達だから

ストラトス家

ラブレター騒動から一晩明けた休日の午前中…アインハルトは朝からバーベル上げに勤しんでいた。

現在は午前9時…昨日告白してきた隈森とのデートの約束は午前11時。

ちなみに場所はこの辺で唯一の遊園地らしいが、ストラトス家からはかなり距離が開いており、電車を使って行くにしても1時間半はかかるだろう。

それなのに彼女はまだトレーニングウェアのままであり、朝食も食べていなかった。

『にゃー…。』

テイオが心配して時計とアインハルトの顔を交互に見渡すが、彼女はそれに気づかない。

一心不乱にバーベルを上げてはおろし、上げてはおろし…を繰り返している。

『にゃー！にゃー！にゃー！！』

「何ですかテイオ…集中できませんよ…。」

『にゃあ！にゃあ！』

「時計…？あ…そう言えば隈森さんと約束してたんでしたね…。そろそろ行きましようか？」

『にゃっ！』

いつもの彼女なら遅刻しそうなら慌てふためいているところだが、何故か今日は妙に落ち着いている……というか冷めている。

用意していた服に着替えると、必要な物だけバックに詰め、玄関まで下りていく。

「行ってきまーす。」

「あ、アイン待ちなさい！コレ持っていきなさい。」

「？ お母さん…何コレ？」

「明太子のおにぎり作ってあげたから。ほら、オトヤ君だっけ？あの子辛い物好きだっけって前言ってたでしょ？」

「は？」

「あら？今日のデートの相手、オトヤ君でしょ？」

「……………違うよ。これお母さん食べて。行ってきます。」

「違うの？まあいつか…行ってらっしゃい。」

本当にあの母親は余計な事をしてくれる。

そんな事を思いながら下を向いたまま約束の場所へと向かうアインハルト。

ゆっくりと歩いているので、多分間に合わない。

何事にも几帳面で時間厳守な彼女からは考えられない程のルーズさだ。

『にゃ〜…………。』

「テイオ、どうしました？」

『にゃにゃにゃ！』

「あんまり乗り気じゃなさそう？……………そんな事無いですよ、多分……………」

『にゃ…………。』

そうは言うが、彼女のテンションは明らかに低い。

今までオトヤとかシンとかヴィヴィオの影響もあり、普段の生活でも少しずつ明るくなっていったが、今日の彼女は数か月前の格闘家狩りをしていていた頃のようなテンション。

昨日、ラブレターを貰って隈森に告白されたところまでは別にここまで気分は沈んではいなかった。

そもそもこのデート自体も断るつもりだった。

彼女が暗い理由は、その後のあの言葉。

『いいんじゃないかな？行ってきなよ、デート。』

あの言葉を聞いた瞬間、彼女の中の何かが崩れ落ちた様な感覚がし、このテンションはそれ以降。

昨日の夜から何も食べていないが、あまり空腹も気にならない……。家を出て2時間弱経過しても、特別空腹という事にもならなかった。

「やーおはよう！アインハルト！」

「……………」

「アインハルト？」

「おはようございます……………」

遊園地に着くとすでに隈森がおり、彼は何故か彼女の事を呼び捨てにしながら手を振っている。

正直、呼び捨てにされてあまりいい気分はしていない。

「あれ？この猫連れてきちゃったの？折角のデートなのに？」

「ティ…ティオは私の大切な相棒です……。置いていくのはいやです……………」

「相棒？まあいいや。それじゃあ行くところか？」

「……………はい。」

『ふ……………！』

ティオが隈森を威嚇中。

オトヤやダキバットに対する時以上の威嚇っぷりだ。

馴れ馴れしく自分の手を握ってくる隈森に対して少し怒りを覚えるが、怒る気にもなれず…アインハルトはそのまま遊園地の中に連れて行かれた。

そして…………、

『行ったか…………では、ワシもそろそろ出るとしよう…………。』

隈森から生まれたネオファンガイア、『グリズリーネオ』も、彼らの跡を追うように姿を消した。

「……………」

「うえ…………ぐすつ…………ひつく…………。」

『…………すまん、昨日お前らが帰ってからずっとこの調子なのだ。』

『

「…………登昨日はすまなかった。だから泣きやめ、な？」

「そうだぜオトヤ…………そうだ今からどつか遊び行こうぜ！な？」

その頃オトヤは…………自室で泣いていた。

それを頑張つて慰めようとしてくれるシンとハジメとダキバツト。

部屋の外からそれを眺めながら呆れるルーテシアと、ハハハと苦笑するヤマト。

中々シユールな光景だった。

ちなみにオトヤが泣いてる理由…………言わなくてもわかるだろうが、アインハルトが原因。

というか隈森が原因…………正確に言えば、アインハルトと隈森がデートしてる事が原因。

『行って来い』と言った彼も彼だが、なんというか今のオトヤは目

を当てるのも辛い。

「お前さあ…泣くほど辛いならなんで行けとか言っただけ？」

「うつせえ…！」

「お前な…まあ、別に人の恋路に余計な茶々入れるほど俺も馬鹿じゃない。登、俺達今日は全員暇だから今から遊びにでも行こう。」

「今日はお前が選べよ…なんか気の毒だしさ…。」

「あ、俺遊園地いきてー」

「私もー」

「『黙れ。』」

ヤマトとルーテシアにシンとハジメとダキバットの鋭いツッコミが炸裂。

一撃でヤマトは黙らせられたが、ルーテシアはかなりしつこかった。その後もオトヤは何処に行きたいかは言わなかった為、結果的にはルーテシアとヤマトの発案である遊園地に決定。

お金はヤマトが負担してくれるので問題無し…入場料高校生以下なら300円だし。

そうと決まれば善は急げ、オトヤがいち早くアインハルトの事を吹っ切れるようにシンとハジメでオトヤを抱え、早速出発。

場所はここからならだいたい1時間半ぐらい…でも今日の目的はあくまでオトヤを元気づける為なのでそう急いで行く必要も無く、電車でのんびりと向かう事に。

電車に乗り込むと同時にシンは思い出したようにヤマトに尋ねた。

「そう言えば兄貴、体大丈夫なのか？」

「ん？何が？」

「昨日の昼ごろまであんなに体調悪そうだったじゃねえか？もう平気なのか？」

「加藤兄どっか悪いの？」

「ん？別に？どこも悪く無いよ。」

「ホントか？具合悪くなったらすぐ言えよ？兄貴結構無茶するからな。」

「わかってるわかってる！」
元気の無いオトヤに体調不良のヤマト。
不安要素を2つも抱えた仲良し5人組は：偶然にもアインハルト達
が行った先と全く同じ遊園地へと向かって行った。

「アインハルト次何乗りたい？」

「どれでもいいです……。」

「それってもしかしてアレ？」「あなたとなら何に乗っても楽しい」
つて奴？」

『「にやっ！にやっ！にやっ！にやっ！」』

「テイオ、やめなさい。めっ。」

『「にゅ〜……。」』

隈森とのデート……正直全く楽しめてない。

というか、元から楽しむ気が無い。

昨日の時点では折角の気持ちが無駄にはいけないという考えだ
つたが、それもオトヤと話してからどうでも良くなった。

何故彼はあんな風に言ったのか……友達なら、もっとこういう事は
ちゃんと考えてくれるものじゃないのか……？

もしかして自分は友達と思われていなかったのだろうか？

そう思うとだんだん悲しくなってくる……彼は自分に出来た真の意
味でわかりあえる初めての本当の友達だと思っていたのに……。

今すぐにも何故あんな事を言ったのか確かめたいが、気まずすぎ
て出来ない。

それに本当に『友達じゃありませんでした』なんて言われたらと思
うと……。

「それにしてもこの猫、俺が喋るたびに鳴くよね？もしかして俺に
懐いた？」

『にやつー!!!』

「そっかー、懐いたかー!」

『にゃー!!にゃー!!!』

実際全く懐いてないどころかむしろ嫌われている。

これは……まるでウエザーを見た時のアクセルの様な目だ。

嫌がるティオを無理やり抱いて頭を撫でている隈森にさすがに腹が立ち、アインハルトはティオを隈森から無理やりもぎ取った。

「……ティオ離してください!」

「おっと…別に無理やりとらなくてもいいでしょ?ソイツ俺に懐いてるし。」

『にゃー……。』

「ごめんねティオ、帰ったらたくさん遊んであげるから……。」

『にゃあ。』

ティオの頭を優しくなでながら謝るアインハルト。

するとその手を隈森が無理やりつかみ、彼はにっこりと笑いながらお化け屋敷を指差した。

「じゃあ今度はアレに行こう!」

「……………」

怖い物嫌いのアインハルトなら、普段は真っ先に断るはず。

なのに今回は断らない…というか断るといふ行動自体したくない。

それ以前に、隈森の話を聞いて無いようにも見えた。

拳をギュッと握ると、アインハルトはうつむきながら『はい……』と呟き、そのまま隈森に連れて行かれる。

その時だった…、

「あれー?アインハルトじゃないー」

「！！」

『にやつ！？』

「……あれって確かアルピーノ選手だよな？インターミドルの？」
突然アインハルトの前に現れた薄い紫色の長髪を持った、お嬢様風の活発な少女。

ルーテシア・アルピーノだった。

見ると彼女の後ろにはシン、ハジメ、ヤマト、それにオトヤの姿もあり……アインハルトは思わず後ろにたじろいでしまう。

笑顔で近寄ってくるルーテシアとヤマト、それに対して『あちゃー……』と顔を抑えるシンとハジメ。

オトヤも多少驚いている様で、ハトが豆鉄砲喰らったような表情に。

「聞いたわよアインハルトー！彼氏出来たんだった？おめでとー」

「実は俺達も遊びに来ててさー。2人つきりで遊びたいんならテイオにゃん預かるけど？」

『にゃー。』

「失せる馬鹿兄貴&馬鹿女！！」

「登風に言うなら……アンタら絶滅しろ。」

ルーテシアとヤマトの耳を引っ張りながらシンとハジメが引っ込んでいく。

シンとハジメが下がったら今度はオトヤがアインハルトの前に出て、作ったような笑顔で彼女に言った。

「アイン、楽しい？」

「え……？あの……。」

「楽しんでるなら良かったよ。隈森良い奴？」

「その……えつと……。」

「登君、悪いけど邪魔しないでくれるかな？今彼女は俺とデート中なんだから。それにその『アイン』って呼び方……やめてくれない？」

なんか、聞いててちょっと不快なんだよねー？」

「あ……あの、隈森さんそれは私がそう呼んでほしいと……、」

「うん、わかった。確かになれなれしかったよね……。じゃあ……また明後日学校でね、ストラトスさん……。」

「あ……オトヤ君……！」

手を振りながらハジメ達と共に去っていくオトヤ。

最後に言った『また明後日』という言葉と、もう今まで通りの呼び方をされなかつた事に激しく動揺し、アインハルトは胸が異常に苦しくなった。

今までなら『また明日』と、休日も遊びに誘ってくれたり、それ以外でもヴィヴィオやハジメやシン達と一緒に自分の傍にいてくれたのに……。

このままでは今までの楽しかった日々が全て失われる。

そう思つて彼を追いかけようとするアインハルトだが、すぐに隈森に捕まつてしまい、そのまま次のアトラクションへと連れて行かれてしまう。

お化け屋敷の裏に連れてこられたアインハルトは隈森により壁に叩きつけられ、彼は怒りの形相で彼女を睨んだ。

「君さ……ふざけてるの？俺とデート中なのに登のとこ行くことするなんてさ……？もしかしてアレ？構って欲しいの？わざとこつこう事して俺に構ってほしいの？」

「ち……ちが……、」

「そうなんだへーそうなんだ……。そこまで俺の事好きなんだね……。そうだよ、俺、登と違って頭良いし……アイツより運動出来るし……顔だってアイツよりいい。それにほら、俺アイツ同じでファンガイアだし、物凄く強いんだよ？あんな屑より俺の方が良いに決まつて

る…そだよねアインハルト…？」
「ッ……………！！！」

バゴンッ！！！！

隈森が言い終わった瞬間、アインハルトの拳が彼の顔面にめり込んだ。

直後に彼女は隈森を押しつけてテイオを抱きかかえると、彼から数メートル離れた位置に逃げる。

「……………いで……………」

「あ？」

「そんな風に言わないで……………！！オトヤ君の事を…そんな風に言わないで……………！！！」

「お前……………」

「彼は確かに……………勉強できないし…空気も読めないし……………時々意味わからない事言ったり、少し自分勝手なところもあるし……………『有能』とは全然言えない人だけど……………でも、あの人は、私に優しくしてくれた！！！」

「……………。」

「1人ぼっちだった私の友達になってくれて……………ヴィヴィオさんとも会わせてくれて……………いくらテイオに噛まれても、それでも笑って流してくれて……………私の事、普通の女の子として見てくれて……………守るって言うてくれた……………。アナタは違う！！アナタは自分の事しか考えてないじゃないですか！！私はあなたが嫌いです……………大嫌いです！！！！！」

「……………もーいいよ……………おい、グリズリー。」

『御呼びかご主人？』

その瞬間、アインハルトは背中に何か違和感を感じた。

恐る恐る振り返ったその先には……………まるで武士の様な甲冑を付けた熊の怪人の姿が…。

隈森から生まれたネオファンガイア…『グリズリーネオ』だ。

「ネオ…！？」

「もういいよアインハルト……………俺の気持ちかわからないなら……………消えて。」

『オトヤ…！ネオの気配だ…！』

「……………。」

『おい…！オトヤ…！』

「あ…ゴメン、何？ダキバット？」

その頃オトヤ達は…とりあえず5人で観覧車に乗っていた。

ヤマトがいるせいでかなり窮屈だが、高い所好きのルーテシアとシオンはかなりテンションをあげており、特にてっぺんにいる今のテンションは最高潮。

そんな中でダキバットが感じ取ったネオの気配…行かないわけにはいかない。

こつこつモヤモヤした気持ちは戦闘で晴らすのが一番だろう。

ダキバット曰く、敵はこの遊園地の中にいるらしい。

観覧車の中から下を見渡すと、確かにお化け屋敷のあたりで人とは思えない程の巨体の武士が1人の女の子を襲おうとしているの見える。

「あ……アレは……!!」

『アイン嬢か……!?馬鹿な……何故彼女がネオに!?!』

「まずいな……登、ヤマトさん。」

「アイン………ダキバット!!」

『ガブリ!!』

ダキバットを手に噛ませ、オトヤはベルトを装着。

観覧車の扉を開けると、彼はそのまま飛び降り……変身と同時にネオロットにガルルのフェッスルと『ソニック』のカードを挿入した。

「変身っ!!!!」

『ガルル・ソニック!!』

「嫌っ!!来ないで下さい!!」

『ご主人の命令でな……個人的にお前に恨みは無いが、消えてもらう事にするよ。』

「ティオ!ティオ!」

「ごめんね」。俺、猫大つつつつ嫌いだし……。」

『にゃあー!にゃあー!』

グリズリーネオに襲われながらティオの名を叫ぶアインハルト。

彼女の相棒は現在隈森が手で掴んでおり、彼女は普段の魔力は全てティオに預けているので…ティオ無しでは以前は変身できた通常形態の霸王モードにもなる事が出来ない。

いくら霸王流正統継承者と言えどもただの中学生の少女が怪人に腕力で敵うはずが無い。

このままオトヤに謝る事も出来ないのか…出来れば最後にもう一度、彼に『アイン』と呼んでほしかった。

あれが最後の別れだったなんて悲しすぎる…そう思い、彼女は力なく両膝をついてしまった。

グリズリーネオの巨大な爪がアインハルトの首元に立てられる。

その時……、

『ウェイクアップ！ソニックー！』

「ソニックスラッシュー！！！」

ズバツ！！！！という音と共に、グリズリーネオの左手の爪が全てへし折られた。

何が起きたのか理解できないまま立ち尽くす隈森の傍に黒い蝙蝠が息をひそめて近づき…彼の手に噛みついた。

痛みによりティオを離し、黒い蝙蝠はティオの背中を掴んでアインハルトの下まで連れて行く。

そのまま黒い蝙蝠…ダキバットはグリズリーネオの爪をへし折った戦士…仮面ライダーダークキバのベルトに収まると、ダークキバはアインハルトを守る様にマントで彼女を隠した。

「アイン無事!？」

「お……オトヤ君……。」

「登だと……!?まさか……世間を騒がせている仮面ライダーの正体が……!?」

「隈森……お前……何故ネオと……!?」

「アークって人から貰ったんだよ。こいつがあれば、強い人が好きなアインハルトは俺の事を好きになってくれるだろう?俺みたいに優秀な者には、彼女の様な子がふさわしい。だけどそれは間違いだつた……屑とつるんでいる彼女もまた……屑だつた……。」

「違う……アインは屑じゃない……!!言わせてもらっけど隈森……僕からみたら屑はお前の方だ……!!力で無理やり勝ち取っても……それは本当の『恋』じゃない……ただのまやかしだ……!!」

「黙れ……!!行けグリズリー……あいつを倒せ……!!」

『了解だ。』

「光栄に思え……絶滅タイムだ……!!」

激しい音を立てぶつかり合うグリズリーネオとダークキバ・ソニックタイプ

激しい火花を散らしながら、ほぼ互角の戦いを繰り広げ始めた。

「こつちだ!リーダーが反応してる!」

「登とストラトスは無事だろうか……急ごう、ヤマトさん。」

「ああ!」

その頃バスターとカリスはルーテシアとシンを引き連れ、リーダーでネオとダークキバの居場所を探索中。

改良を加えた為、以前のヴィヴィオ探しの時よりはいくらかマシになったリーダーハンド……本当にほんの少しだけまともになってい

る。

そう…ほんの少しだけ。

きよるきよると辺りを見回しながらネオを探していると、彼らの前に見慣れぬ吸血鬼の様な怪人が現れ……ゴキゴキと首を鳴らしながらゆっくりとカリス達に歩み寄ってきた。

「あ……アイツ……？」

「よう、お前らも来てたのか？」

「……？」「……？」

「この姿じゃわからんかもなあ……？」

「まさか……！ヤマトさん、アイツ……レジェンドルガだ……！確かアーク……とか言ったな？」

「声でわかったか？さすがだなあカリス……。」

「貴様……何を企んでいる……？」

「この間のフェニックスはお前らに邪魔されたし……気持ちを切り替えて次のネオを育てる事にしたのさ。あのグリズリーはいいぞお……宿主まで腐ってて最高だ……！」

「隈森か……ヤマトさん。」

「おう！行くぜハジメ君……！」

『バトルモード トランスフォーム』

バトルモードへと強化変身を遂げたバスターと、カリスアローを握ったカリスは勢いよくアークへ突撃。

2人の巧みな連係でアークの攻撃を次々にかわし、逆にこちらからは鋭い一撃をピンポイントで与えていく。

特にバスターの打撃は効いている様で、防御力自体はそう大したこ

と無いアークは少し苦戦。

自身の両手の鋭い爪でカリスを切裂くが受け止められてしまい、その隙にバスターが飛び上がった。

『ドライブ・シユート』

「これで決めるぞ……ぐっ!？」

「兄貴!!!」

突然、バスターが地面に倒れ…胸を抑え込んだ。

全身に走る痛みにくらえながらバスターは何とか立ち上がるうとするが体がいう事を聞かず…勝手に変身が解除されてヤマトに戻ってしまった。

急いでシンが駆けつけてルーテシアが治癒魔法を掛けるが…それでもヤマトの状態は変わらない。

「どういう事……加藤兄どうしたの!？」

「この前の大会の後から、時々兄貴こうなるんだ……でも、戦闘中に……!」

「ヤマトさん!!ぐあっ!!」

「戦いの最中によそ見とは余裕だなカリス。今日は別に俺は戦いに来たんじゃない…特別に見逃してやる。」

そう言い残し、翼を広げて消えるアーク。

彼は本当に監視に来ただけの様だ。

カリスは変身を解除してハジメに戻ると、シンと一緒にヤマトの介護に当たった。

「ぐあっ!!」

「オトヤ君!!!」

グリズリーネオの異常に高いパワーに圧され、ダークキバはタイプ

の変身が解けて通常形態であるキバタイプまで戻されてしまった。それでも彼はザンバットソードをギュツと握りしめ、パワーでは格段に上のグリズリーネオに迫っていく。

しかし弾かれ、地面を転がってはまた立ち上がり…を繰り返していた。

「どうしてそこまで立ち上げられる…？アインハルトはただの友達だろ？」

「はあ……！はあ……！」

「たかが友達の為にそこまで頑張れるなんてお前、頭おかしいな？」

……それともあれか？お前も彼女の事、好きなのか？ん？」

隈森のその言葉に、一瞬驚いたのはアインハルトの方。

彼女は悲しそうな顔でダークキバを見つめる…すると彼は仮面の下でゆっくりと口を開き……そして言った。

「ああ……好きだよ……！！！」

「オトヤ……君……？」

「好きだよ！！大好きだよ！！！！だから僕は……アインが一番幸せになれる選択をした……。もう、ネオファンガイアともレジェンドルガとも…それに仮面ライダーとも関わらないで良い、彼女が一番幸せになれる選択肢を……！！本当に好きだったら……本当にその人を想うなら…選ぶ選択肢は『その人と一緒になる事』じゃない……『その人がどうしたら一番幸せになれるか』だ……！！当然だろう？だって……友達なんだから……！！！」

ダークキバの気迫に押され、後ずさるグリズリーネオ。
彼は少しずつ前に進み始め、ザンバットソードをより強く握りしめていく。

「友達だから……僕はアインが一番幸せになれる選択をする……たとえ自分が犠牲になっても、彼女が幸せならそれでいい！！ただどお前は僕達を……彼女を裏切った！！絶対に許さない……ネオファンガイアに心売った罪人……隈森政人！！ありがたく思え……絶滅タイム大サービスだ！！！」

ドクンツ！！

ダークキバがそう言い放った瞬間、アインハルトの中で何かが起きた。

これは……昨日からのモヤモヤだ……。
オトヤにああ言われてから、ずっと気になっていたモヤモヤ……隈森とのデート中も消えなかったモヤモヤ……。
その正体を、彼女自身が自覚した。

（ああ……そうか……。）

最強を目指す霸王流の正統後継者として戦ってきたアインハルトの正体を知っても、それでも普通に接してくれたオトヤ。

どんな時も自分を守ろうと、どんなに無様でも……どんなにかっこ悪くても頑張ってくれたオトヤ。

不器用で口下手で、頼りないけど……それでも、世界中で誰よりもカッコ良く見えるオトヤ。

(そうだったんだ……私……オトヤ君の事……。)

「オトヤ君…コレを!!」

「ナイスタイミング!!!」

胸の前でギュッと拳を握り、自分の中の感情を自覚すると…アインハルトは何処か吹っ切れた様な表情になり、カバンの中から一枚のカードを取り出す。

それをダークキバに投げ渡すと彼はそれを見事にキャッチし、ザンバットソードのフェッスルと共にネオロットへと挿入した。

『ザンバット・フェニックス!!』

「はああああああああああああ!!!!!!!!」

『ウエイクアップ!!フェニックス!!!!!』

大きな紅蓮の翼を広げ、紅蓮の帝王仮面ライダーダークキバ フェニックスタイプがこの地に降臨。

彼は炎の翼を広げて大空へ舞い上がると…両足に赤い炎を宿し、必殺のライダーキック『キングスバーストエンド(フェニックスver)』を放った。

「うおりゃああああああああああああああああ!!!!!」

「!!」

『ぐああああああああああああああああああ!!!!!』

『!!』

巨大な爆発を巻き起こし……粉々に消滅するグリズリーネオ。
ハイパーウェイクアップでは無い為カードを残り、『サムライ』と
書かれたカードを拾い上げると、ダークキバはザンバットソードを
隈森へと突きつけた。

「ひい!？」

「二度と彼女に近づくな……わかったか!!！」

「は、はい!!！」

何とも情けない声をあげて逃げ出す隈森。

きつと今のシーンは彼にとって生涯のトラウマとなるだろう。

ダークキバは変身を解除してオトヤに戻ると、慌ててアインハルト
へと駆け寄った。

「アイン大丈夫!？つて、あ……ごめん……つい名前で……スト
ラトスさん……」

「……アインと呼んでください……」

「え?」

「苗字で呼ばないで下さい……名前……『アイン』つて呼んでくだ
さい……」

「あ……いいの?」

「お願いします……」

「じゃあ……アイン……?」

確かにこちらの方が呼びやすいので、ありがたいと言えはありがた
い。

とりあえず彼女が怪我をしていないかどうか確認し、どこにも怪我
をしていないとわかるとオトヤは胸をなでおろし、ホッと一息つい
た。

「あの……さっき……私の事『好き』つて……」

「うん、好きだよ!だって友達じゃないか!」

『私もハジメもシンもヤマト殿もルー嬢も、皆アイン嬢の事大好き

だぞ。』

「そ…そうですね…。」

何故アインハルトはガツカリしているのだろうか？

そう思っていると、ヤマトに肩を貸しながら歩いてきていたシンとハジメの姿が見えてきた。

オトヤはそつちに向けて大きく手を振ると、アインハルトの手を取り、彼女に笑いかける。

「それじゃあ仕切り直し！今度は『彼氏』じゃなくて、僕達『友達』と一緒に遊ぼう！」

「はい…是非！」

『それじゃあまずはメシだろう。私腹減り過ぎた。』

傷だらけで汗まみれだけど、優しく暖かいオトヤの手。

アインハルト・ストラトスが、自身の『初恋』を自覚した瞬間だった。

Re/birth・XXI 作戦

「アイン、僕…君の事が好きなんだ。僕と……付き合ってくれないかな……？」

アインハルトを前に、オトヤは笑顔でそう言ってきた。

彼女はその言葉にしばしの間面を喰らうが、徐々に目に涙が湧きあがってくる。

口元を抑えて涙を堪えながら、アインハルトも笑い……、

「はい……喜んで……！！！」

仮面ライダーダークキバへと変身したオトヤの胸の中に……ゆっくりと飛び込んだ……。

「……………むにゃ……………」

『にゃー。』

という夢を見た。

枕をがっちりと抱いて寝ていたアインハルトはまだまだ眠たい目を擦り、ゆっくりとベッドから起き上がる。

ゆらゆらと揺れながら窓のカーテンを開けると同時に…心の底から脱力し、はあとため息をついて肩を落とした。

「夢……ですか……。」

『にやーにやー。』

「うう…もう少し見てたかったです……。」

普段の彼女ならこういう夢は絶対に見ない。

いつも見る夢と言ったら、霸王クラウスと聖王オリヴィエ関係の過去の話か、最近あった事をそのままリプレイしたかのような夢ばかり。

それなのに今日見た夢はオトヤから告白されるという、今までに例を見ない物。

ギユツとカーテンを握りしめながら、アインハルトは今から約二日前の出来事を思い出した。

隈森という愛されない屑のグリズリーネオに襲われた時、土壇場で駆けつけてくれた友達…仮面ライダーダークキバこと登オトヤ。

その時の彼の放ったあの言葉。

『好きだよ！！好きだよ！！だから僕は……アインが一番幸せになれる選択をした……。もう、ネオファンガイアともレジェンドルガとも…それに仮面ライダーとも関わらないで良い、彼女が一番幸せになれる選択肢を…！！本当に好きだったら……本当にその人を想うなら…選ぶ選択肢は『その人と一緒になる事』じゃない……』
『その人がどうしたら一番幸せになれるか』だ……！！当然だろう？だって……友達なんだから！！！！』

あれを聞いた時、彼女は自分が今までオトヤに対して感じていた感情が『友情』では無い事に気が付いた。

つまり、自分がオトヤに対して恋愛感情を持っていたという事。

今になり嬉恥ずかしい気持ちがかみ上げ……アインハルトは顔を赤らめて再びベッドに倒れ込んだ。

『にゃーにゃー。』

「うう……どうしましょうテイオ……今日学校行ったらオトヤ君とどういふ顔で話せばいいんでしょうか……？ 普段通り……は、無理……ああどうしよう……。」

『にゃー、にゃー……』

「でも急に態度変わったら何かあったのかって聞かれますよね……あ、でもそうなれば心配してもらえる……って、私何言ってるの！」

「！」

『にゃー……！』

「どうしたんですかテイオさっきから？ 時計？……ってもう8時！？ え……？ ええええ！？」

テイオが先ほどから必死に指差していたのは時計。

時刻……現在8時。

あと30分で校門が閉まり、始業。

いつもなら4時から5時には起きて訓練をし、余裕を持って登校するアインハルトにとっては近年稀に見ぬ程盛大な寝坊だった。

慌てて制服に着替え、髪を結う。

どうしていつもあんな複雑なツインテールにしてるんだろう？

今日ほど自分の髪形が編みづらい事に怒りを覚えた日は無かったという。

「ぜえはあ……ぜえはあ……！！！」

「おーいストラトス、生きてるかー？」

「加藤、そっとしておいてやれ……。」

全速力で学校へ走って来たアインハルト。

限界まで飛ばして走って来たので、体力に自信のある彼女でもさすがに息切れを起こしている。

もう髪は結うのが煩わしくなり、素早くポニーテールにしてきた。

後で結えばいいだろうと思ひ、ポケットの中に入れてあるいつものリボンを取り出す。

その時…、

「間に合ったー！ー！ー！！！」

『ギリギリセーフだ！ー！！』

「！」

「おいーっすオトヤー。すげーな後1分だったぜ。」

「相変わらずお前は変なところで運がいいな…だから普段、運が悪いんだ。」

「ほっとけ！！！」

いつも通り、ギリギリの時間になってオトヤがやってきた。

遅刻寸前の時間にいつも彼はやって来る…ここで運を使うから普段あまり幸運じゃないというのがハジメの見解。

それでも本人は別にいいと思っただけでいいのだろう。

ハジメやシンと口喧嘩しているとオトヤは自分の隣の席でポーツと顔を赤くしてるアインハルトに気が付き、いつも通りの表情と口調で彼女に挨拶。

「あ、おはよアイン。」

「あ……お、おはようございます！！ほ、ほほ本日は大変お日柄もよくくくく……この上無い晴天の青空でででで！！！」

「？ ……今日、曇りだよ……？というか何でそんなに囁んでるの……？」

「アイン嬢顔赤いな？風邪でも引いたか？」

「い、いえご心配無く！！いつも通り健康そのものですから！！」

「それならいいけどさ……あれ？髪形変えたの？ポニーテール？」

「あ……はい…朝ちよつとバタバタしてて……その…結ってる暇が……。」

「へー、似合うね。なんかいつもと印象違ってて！」

「ふむ、確かにな。」

「そ、そうですね……へへへ……。」

「……。」

何か物凄くうれしそうな顔をしているアインハルト。

それにいつも通りの口調で話すオトヤ。

この2人の友人であるシンとハジメは何かを理解したかのように顔を見合わせると、ポンツ！と手を打った。

休み時間、オトヤが英語の時間にまたやらかした為職員室に呼ばれてからおよそ5分後…自分の席で静かに読書をしているアインハルトのところにシンとハジメがやって来た。

ハジメはいつも通りのクールな表情、シンは何故かやたらとニヤついており、彼女は頭の上に『？』を浮かべながら本を閉じる。

あと、その本を何故かティオが齧り始めた。

「加藤さんにハジメさん？どうしたんですか？」

「ん？いや別に？」

「？ 何ですか……？それにしてもオトヤ君遅いですね……。先生の話し長いんでしょうか？」

「ほうほう？そんなにオトヤの事が気になるか？ほうほう？」

「な……なんですかその少し気味の悪い笑い方……？ちよつと怖い

んですけど……?」

「ストラトス、お前登の事好きだろ?」

「!!!!」

「お、ちよつ、剣立お前馬鹿ストレート過ぎんだろ!? 色々からかって楽しむ作戦が台無しじゃねえか!？」

なんとという最低な作戦だろう。

非常に淡泊な表情でハジメがそう言うものだから、アインハルトは思わず頭を机にぶつけてしまった。

額に小さなコブができ、痛みあまりしばらくの間うずくまる。

少し時間を置きようやくアインハルトが落ち着くと、シンとハジメは彼女の席の近くの席を借りて座り、色々と聞いてきた。

「お前今朝から変だからなあ……それにオトヤに対する態度がいつもと違いすぎ。わかりやすすぎて思わず笑ったわ。」

「わ、私は別にオトヤ君の事……、」

「おーい、皆ー。ストラトスが……、」

「わー! わー!! すいません認めますから!!」

「で……いつからよ?」

「この前の……遊園地の時に助けてもらって……。」

「俺達が丁度戦ってた頃だな。」

それから彼女に色々聞き出す2人。

隈森のやった事と、その時のダークキバが放った言葉の事を全て聞き終えると、2人とも納得したような表情でうんうんと頷く。

どうやらアレは自覚するきっかけになっただけで、そう想い始めたのはよくよく考えると随分前らしいが。

思い返すと彼女が霸王を名乗り、ダークキバと戦い、その後で彼が用意してくれたヴィヴィオとの勝負の舞台。

あの時からオトヤの事を『いい人だな』と思い始めたらしく、春の合宿の後ぐらいから『もつと仲良くなりたい』と思い、最終的にこの間の遊園地。

自覚するともはや彼の顔を直視できず、今日一日まともにオトヤの

顔を見ていないらしい。

顔を真っ赤にしてうつむく友人を心の中で心底笑いながら、シンとハジメは必死に悩む（ふり）。

そうしていきついた結論は……、

「で、お前はオトヤと付き合いたいんだよね？」

「えー？い、いやあの…別にそういうわけでは……ああでも……ええっと……。」

「なら質問を変える。お前登の事が好きなんだろ？」

「……………はい…。でも、意識しすぎてまともにお話も……………」

「なら放課後にもヴィヴィオちゃんに相談してみる。あの子登の妹だし、俺達に相談するよりは同じ女子のヴィヴィオちゃんに相談した方が良いだろ？」

「あ…なるほど…。」

と、いうわけでヴィヴィオに相談する事決定。

小さくガッツポーズするアインハルトを見て、シンとハジメは小声で……、

「おい加藤、登もこいつの好きだと教えなくていいのか？」

「馬鹿野郎、そんな事したら面白く無いじゃんか。」

「それもそうだな。」

それで放課後…登家。

今日と明日はノーヴェが救助隊の訓練でいない為、ヴィヴィオ達の練習はお休み。

なので今日は皆でヴィヴィオの家で楽しくお喋りしようという事でリオ、コロナ、アインハルトといったいつもの練習メンバーは登家

に集合。

今までなら何の気無しにお邪魔していたこの家も、今のアインハルトにとっては少し足を踏み入れるだけでもかなりの勇気がある。

玄関先で固まっている彼女に対して、彼女と一緒にここまで来たヴィヴィオ、リオ、コロナはキョトンとした。

「アインハルトさん、何してるんですか？」

「へ？」

「いや、へ？じゃ無くてですね…早く入らないと寒いですよ？」

「何か今日のアインハルトさん変…。何かあったんですか？」

リオが首を傾げて聞いてくると同時に顔を赤に染めるアインハルト。何でも無いです！と叫んで急いで家の中に行くと、丁度洗濯を終えたのが部屋から出て来てアインハルトとぶつかった。

「きゃっ！」

「あ、す、すみません！大丈夫ですか！？」

「あー、うん、大丈夫だよ。それよりアインハルトちゃん今日顔赤いねー？熱でもあるの？」

「いえ、だ、大丈夫です！！！」

「それならいいけど、あんまり無理しちゃダメだよ？」

「はい！！！」

いつもよりも緊張した声に、ヴィヴィオ達は妙な違和感を覚えた。

3人で顔を見合わせると、アインハルトの腕をがっちり掴んでそのまま彼女をヴィヴィオの部屋へと連行。

無理やりベットに座らせ、何かあったのかを聞き出す。

当の本人も今日の目的はヴィヴィオ達への相談だったので、少し深呼吸をした後、今日ハジメ達と話したことをそのまま話し始めた。
すると……………、

「これからお姉ちゃんって呼んでもいいですか……………！？」

「えええ！？」

「いいなーヴィヴィオ。アインハルトさんがお姉ちゃんになるんだー。」

「あー、あたしも兄弟欲しいなー。1人っ子だから家じゃつまないもん。」

「お姉ちゃんが嫌ならお姉さま？それとも姉御？それともアイン姉？それとも……、」

「ちょ、ちょっと待って下さい！！あの……だからまだ告白も何もしてないですから……本当に気が付いたのつい最近ですし……。」

異常に高いテンションで目を輝かせるヴィヴィオ。
憧れの先輩が自分の義理の姉妹になると思うと興奮せずにはいられないようだ。

それに対するアインハルトも、口では『まだまだ』と言いながら満更でもない様子。

ヴィヴィオは急いで立ち上がると、本棚の所まで行き地球の少女マンガを手当たり次第手に取ると、それを床にばら撒いた。

どうやらこれを参考にしろという事らしい。

「この本なんておススメですよ！！主人公の女の子が幼馴染の男の子に恋する話なんですけど……、」

「あ、この漫画私も見た事あるよ。確かファンガイアハンターの女性と、バウンティハンターの最高な男性のジャスティスな恋愛ストーリーー！」

「これ面白いよー！探偵事務所の所長を自称する自己中心的な女の子と、いくら焼かれても全く死ぬ気配を見せないV3な運命を持つ全てを振り切る刑事の物語！」

「どれどれ……！！……／／／／……ヴい、ヴィヴィオさん達にこういうのは、ま、まだ早いと思いますー！！！」

ヴィヴィオ達は普通に読めるが、アインハルトには刺激が強すぎたらしい。

1話読むだけですでに頭がパンクしている。

それでものめり込んでるので、こういう事には興味はあるのだろう。読んでる最中にいちいち『え！？ここで告白！？』とか『振り切ったー！！』とか『753は最高です！！弟子にしてください！！』とか叫んでで見ているこっちが恥ずかしくなる。

「ヴィヴィオさん、この漫画貸してください！」

「いいですよ！で、本題戻りましょうか？」

『にやー。』

漫画にのめり込みすぎてすっかり本題から外れてしまった一同。

漫画>オトヤの法則、成立の瞬間だ。

今日は丁度リオが友達からファッシヨン誌を借りてきたところで、この雑誌の最初の方には恋愛特集なんかも載っている。

床に広げて4人で仲良くそれを熟読。

だがこういう雑誌に書いている事はたいがい大人向けで、中学生のアインハルトには到底出来そうに無い事ばかりなのであまりあてにはならない。

「書いてる事、どれもお金かかる事ばかりですねー……。ファッシヨンか……。私、あんまり種類持つて無いです……。」

「それ以外だと……。あ！コレですよ！！今は『肉食系』が流行ってるそうです！！」

「にくしよくけい？」

「良くわかんだけど……。肉食……。なんじゃないんですか……？」

「……なるほど、わかりました！さっそく明日試してみます！」

そんなこんなで翌日。

今日はなんとかいつも通り余裕を持って登校出来た。

そしてオトヤはいつも通り遅刻寸前でやってくる。いつもとなんら変わらぬ朝……決めるのなら今日しかない。むしろそれぐらいの意気込みで行こうと、アインハルトは昨日から決めていた。

シンとハジメに『今日こそは成功させます!』と豪語し、アインハルトは机の上で死にかけながらテイオに頭を齧られているオトヤの下へ。

「お、オトヤ君!!」

「あ、おはようアイン。昨日あんまり話さなかったけど…調子悪かった? 今日大丈夫?」

「え? あ、はい……。そ、それより!! あの!!」

「ん?」

「私、お肉が好きです!!」

「?」

そうオトヤに言って、彼としばらく話をする事数十秒。

彼女は嬉しそうな顔でシンとハジメのところに戻ってくると『やりました!』とで言わんばかりのガッツポーズを決めた。

「放課後に一緒にハンバーガー食べに行こうって誘われました!!」

「友人チョップ。」

「痛いッ!？」

いきなり自分の頭にチョップ（強め）を下す2人。

頭をさすっているとシンがやたらと怖い顔で腕を組んで足をとんと

んと踏んでいる。

「そうじゃねえだろ？なんだよ肉が好きって？何がどうなったらそうなるんだよ？どこから肉出て来たんだよ？お前昨日ヴィヴィオ達と何話したんだよ？」

「いや……今は肉食系女子が流行りだと……。」

「意味がちげえよ！！肉食系って肉が好きなんじゃねえよ！！それじゃただのメシ好きだろう！？」

「ストラトス、ハンバーガー食べに行くぐらいなら『ACE』でハンバーグ定食を食べる。美味しい早い…文句なしの逸品だ。」

「知らねえよ！？何テメエ自分の家の宣伝してんだよ！？お前ら俺をツッコミ殺すつもりか！？」

「つ……ツッコミ殺す……？」

「加藤、お前面白い事言うな。」

「面白くねえよ！！俺的には全然面白くネエよ！！オトヤの成績並みに面白くネエよ！！」

シンがあんまり怒るので、ハジメとアインハルトはその凄味に圧倒されてしまった。

しばらくすると彼も冷静さを取り戻し、コホンと咳払いをする。

さすがはヤマトの弟…持ち直すのが速い。

伊達にヤマトやルーテシアの相手をやってない。

「で、まあ本題に戻すが……お前、オトヤよりは積極的だが、言い方がいまいちおかしい。もうここは直球でアイツに言った方が良さぞ。」

「ええ！？それは……恥ずかしいというか……。」

「安心しろストラトス、お前もうこれ以上恥ずかしがる要素無いから。」

「どついう意味ですかそれは！？」

「とにかく今日の昼休み、オトヤのヤツ屋上に呼び出しておいてやるから、そこで決める。でない……いい加減俺等の身が持たない

……！！！」

そんな事ならオトヤもアインハルトの事好きだと教えてやれよ。
シンに対してそう思ったハジメだが、さっきからツッコミすぎて
可哀想な友人を哀れだと思ったのか…彼はそんな言葉を胸の奥にソ
ツとしまった。

シンに『屋上で昼飯喰おうぜ』と言われて屋上に来てみたオトヤ。
しかしまだ誰も来ておらず、どうやら一番乗りだったらしい。

仕方なく彼は日陰に座って弁当箱を隣に置くと、ふあ〜と大きな欠
伸をした。

次の授業は英語…という事は寝ても大丈夫。

何しろ授業受けても受けなくても、さっぱりわからないのだから一
緒だろうと、学生にあるまじき考えを持ちながらダキバットを弄り
ながら遊ぶ。

「にしても皆遅いなー…何してんだ…？」

『オトヤ、私はスライムでは無いぞ。』

「あー、ダキバットの手触りいいわー。」

『噛むぞおいコラ。』

まだ来ないのかなと再び立ち上がり、何となく屋上から外を見てみ
る。

さすがは私立校…眺めは最高だ。

しばし眺めを堪能すると後ろを振り返る。

そこには……、

「アイン？」

「あ………どうも……。」

アインハルトの姿が。

足音も何も聞こえなかったが…？

そして、オトヤは気付いてはいないが屋上の貯水タンクから2人の様子をじーっと眺めるシンとハジメが。

ようやくこのじれったい空気から解放されるのかと、2人ともワクワクしている。

胸の前でギュっと手を握るアインハルトは顔を真っ赤にし、少しずつ口を開いた。

「あの……この間は助けてくれて……ありがとうございました……。」

「この間？ああ、遊園地？うん、当たり前だよ。友達だしね。」

「友達……。あ、あの私……その……お、オトヤ君とお友達になれてとても嬉しいです！ですが……あの……えっと……。」

『歯切れが悪いぞアイン嬢。』

「それでも、やっぱり私とあなたはただの友達で……。うん、単刀直入に言います……！」

「う、うん……？」

「私……オトヤ君とお友達したく無いです……！！！」

「」

『』

() (あの馬鹿……………！！！！！！！！！！)

茫然とするオトヤとダキバット。

心の中でアインハルトに対して物凄い罵声を浴びせているシンとハジメ。

アインハルトは目の前でオトヤが何故こんなにショックを受けた様な顔をしているのか理解できずに数秒考え…自分が言った言葉をもう一度思い出してみた。

その瞬間彼女の顔をから血の気が引いて行き、気づいた時にはすでにオトヤが屋上から出て行こうとしていた。

「あ、ま、待って下さい！！」

「…………昨日からあんまり喋らなかつたのってそう言うわけだったんだ……。そりゃそうだよな…デート中に邪魔してくるようなヤツ、友達にしたくないよね…………。」

『すまんアイン嬢。私の責任だ。これからはなるべくお前に近寄らないようにするよ。』

「本当にごめんね。あ、でも僕の事嫌いになっても…ヴィヴィオとは仲良くしてやってほしいんだ。アイツ、君の事大好きだからさ…………。」

『テイオにも謝っておいてくれ。やつめ、何故か我々の事を目の敵にしているからな。もしやどこかで奴に何かしたかもしれん。今回の様にな。』

「じゃあ、またね。」

死んだ魚の様な目をしながら去って行こうとするオトヤ。

このままでは失恋どころか友情すら失われてしまう…………。

無意識のままアインハルトは去っていく彼の手を掴み、彼を引き留めた。

「ち、違つんです！友達したくないというのは…………絶交とかそういう意味じゃなくて…………むしろ逆と言うか…………霸王とか帝王とか関係無い様な関係と言うか…………友達以上の関係になりたいというか…………。」

な形相をしたシンと、何故かカリスに変身したハジメが出現。
登場するや否や、2人でオトヤの事をボコボコにし始めた。

チャームが鳴るまでの約20分間……まさにオトヤの絶滅タイム。

「お前どこまで草食系なんだよ！？気づけよ！！今ので気付けよ！！！」

「登、貴様『ACE』を差し置いてどこぞのマツ やロツテ アに寝返る気か？そんなの俺が許さない……！！さあ、お前の罪を数えろ！！！」

「お前らげごつ！？言ってる意味があああ！！！！わかなひめつ！？わかんねえぞおい！！！」

『オトヤああああ！！！！？？』

必死にオトヤを助けようと頑張るダキバットだが、勿論カリス達にかなうはずなどない。

その光景を見ていたインハルトは……不覚にも、少し笑ってしまった。

告白したけど、成功も失恋もしていない。

彼ならではの答えで、今までの関係をより深めていく事が出来る。

現にこうして今まで通り4人でわいわい騒いでいる……きつとこれにヴィヴィオ達やヤマト達も加わればもつと楽しいだろう。

今はまだいい、いつかまたもう一度。

そう決意すると、インハルトは今までに無いほど清々しい表情になり、3人の親友達を見守った。

R e / b i r t h ・ X X I 作戦（後書き）

次回からとうとうダキバ核心編突入！！

それに伴い、ワタル達旧レギュラーがほぼ削られる……！！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3544v/>

仮面ライダーダークキバViVid-Re/birth-

2012年1月10日00時05分発行